第５章　古墳時代の調査成果

第１節　古墳時代調査の概要

古墳時代の遺構には、竪穴建物跡51基、掘立柱建物跡４基、土坑５基、段状遺構２基、横穴式石室を内包する古墳（笠見３号墳）１基、ピットがある。

この時代は、弥生時代以降の集落が前期で一旦途絶え、空白時期を挟んで中期前半から再び集落が営まれ、後期中葉ごろまで２棟から８棟前後の小規模な集落が形成され続けている。住居跡に付属する掘立柱建物跡は、前期にのみ確認できた。土壙墓と考えられるSK35・95等も集落内に認められる。

笠見３号墳は、東伯域で通有の狭長な横穴式石室を内包するもので、TK209併行期ごろのものと考えられる。墳丘盛土内で移動式竈、鐙金具が出土しており、墳丘築造にかかわる祭祀的な遺物である可能性がある。（牧本）

第２節　竪穴建物

SI3（第371・372図、PL. 13・145・152）

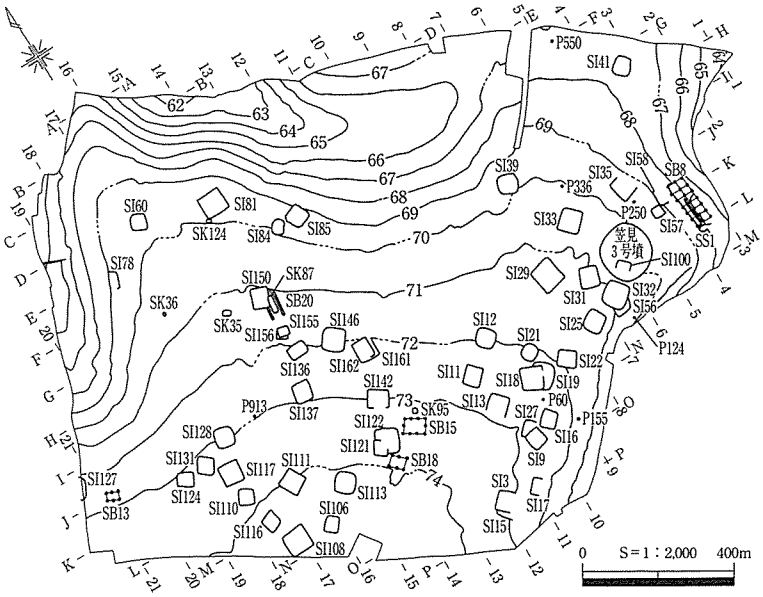
O11、O12グリッドの標高73.4～73.7mの緩斜面に立地する。SI15と重複するが、SI3がSI15の埋土を掘り込んでいる。

すでに東南側の壁は失われているが、長軸5.0m、短軸4.2mの方形プランの竪穴住居跡とみられる。床面積は、推定18.6㎡である。住居の東南部は削平が顕著で攪乱坑が床面付近まで及んでいたが、北東側の壁は比較的遺存状況が良好で、最大で54cmを測る。残存範囲内では壁際に幅10～20cm、深さ３～６cmの壁溝が全周する。

検出したピットは10基であるが、SI15と重複するため、それぞれのピットの帰属が不明である。柱位置などを勘案し、当住居跡に伴う主柱穴とみられるものはP1～P3で、本来は４基と考えられるが検出できなかった。主柱穴間距離はP1-P2間から順に4.2m、2.8mである。P1-P2間が広すぎ、補助柱穴があったと考えられるが検出できなかった。P6は、主柱穴より深く構造柱穴の可能性がある。

ところで、P8は80×55cmの隅丸長方形と円形土坑が複合した形状を示すが、SI3の南壁中央部に位置し、土坑の長軸とほぼ平行することから、当住居跡に伴う特殊ピットとみられる。

埋土は４層に分かれ、最上層は現代の耕作土であり、埋土の大半を占



第370図　笠見第３遺跡古墳時代遺構配置図

表110　笠見第３遺跡遺構一覧表

遺構名	地区名	規模(長軸×短軸−深さ)m	平面形	床面積(㎡)	時期	備考
SI3	C区	5.0×4.2−0.54	方形	18.6	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	焼失住居
SI9	C区	4.0×3.8−0.54	方形	15.1	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI11	C区	4.77×3.9−0.17	方形	18.7	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SI12	C区	4.76×4.53−0.72	隅丸方形	19.1	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI13	C区	5.3×4.77−0.23	方形	25.3	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SI15	C区	6.0×6.0−0.37	方形	31.2	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI16	C区	4.2×3.36−0.51	方形	14.7	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SI17	C区	4.4×　−0.19	方形	9.9	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI18	C区	5.5×5.2−0.46	方形	28.4	古墳時代中期中葉(天神川Ⅶ)	
SI19	C区	6.7×6.2−0.5	隅丸方形	37.5	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI21	C区	4.34×3.83−0.2	隅丸方形	9.9↑	古墳時代前期前半(天神川Ⅱ)	建て替え
SI22	C区	4.82×4.18−0.34	隅丸方形?	16.9	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI25	C区	5.52×4.96−0.54	隅丸方形	20.9	古墳時代前期前半(天神川Ⅱ)	
SI27	C区	4.06×3.04−0.51	長方形	5.8↑	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI29	C区	7.1×6.3−0.52	方形	40.1	古墳時代後期初頭(天神川Ⅹ)	
SI31	C区	5.6×5.1−0.43	方形	23.3	古墳時代後期中葉(TK10)	
SI32	C区	5.94×5.80−0.5	方形	33.5	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI33	C区	5.9×5.5−0.54	方形	27.7	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI35	C区	5.9×5.0↑−0.39	方形	18.7	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI39	C区	4.8×4.7−1.0	円形	20.1	古墳時代前期前半(天神川Ⅱ)	
SI41	C区	4.9×4.4−0.8	方形	13.3	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI56	C区	4.2×3.8−0.31	長方形	15.0	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI57	C区	2.4×2.3−0.37	方形	5.6	古墳時代中期中葉(天神川Ⅵ)	
SI58	C区	3.3×2.4↑−0.2	方形	6.7↑	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI60	A区	4.35×4.15−0.6	隅丸方形	13.1	古墳時代前期前半(天神川Ⅰ)	
SI78	A区	4.3×2.1↑−0.1	方形	7.7↑	古墳時代後期初頭(天神川Ⅹ)	
SI81	A区	5.63×5.3−0.68	方形	30.2	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI84	A区	3.2×2.1−0.47	長方形	6.8	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SI85	A区	4.0×4.0−0.66	方形	16.8	古墳時代中期中葉(天神川Ⅶ)	
SI100	C区	3.7×2.8↑−0.26	方形	9.4↑	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SI102	C区	不明	不明	不明	古墳時代か	
SI104	A区	不明	不明	不明	不明	
SI106	A区	4.23×3.42−0.17	長方形	12.5	古墳時代中期	
SI108	A区	6.55×6.26−0.28	方形	35.2	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI110	A区	4.3×4.07−0.15	方形	13※	古墳時代中期	
SI111	A区	5.6×5.2−0.3	方形	23.3	古墳時代後期初頭(天神川Ⅹ)	
SI113	A区	5.6×5.2−0.48	隅丸方形	22.5	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI116	A区	4.2×4.0−0.35	方形	11.8※	古墳時代後期中葉(TK10)	
SI117	A区	5.2×5.2−0.56	方形	26.2	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI121	A区	4.0×3.5−0.56	方形	11.2※	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI122	A区	6.6×6.5−0.8	隅丸方形	32.8	古墳時代前期前半(天神川Ⅱ)	
SI124	A区	4.4×3.8−0.68	長方形	11.6	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI127	A区	5.95×2.65↑−1.03	隅丸方形	7.3↑	古墳時代前期前葉(天神川Ⅰ)	
SI128	A区	5.0×4.6−0.7	隅丸方形	20	古墳時代前期前半(天神川Ⅱ)	
SI131	A区	4.2×4.2−0.3	隅丸方形	17.2	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SI136	A区	4.8×3.5−0.65	隅丸長方形	12.3	古墳時代中期前葉(天神川Ⅴ)	
SI137	A区	5.3×4.6−0.47	隅丸長方形	21.1	古墳時代後期中葉(TK10)	
SI142	A区	5.9×4.7−0.35	方形	23.6※	古墳時代中期中葉(天神川Ⅵ)	
SI146	A区	6.3×6.1−0.39	方形	28.2	古墳時代前期前半(天神川Ⅱ)	
SI150	A区	5.5×4.6−0.41	長方形	20.3	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI155	A区	3.3×2.9−0.18	不整方形	8.5	古墳時代中期	
SI161	A区	6.0×5.4−0.55	長方形	27.2※	古墳時代中期末(天神川Ⅸ)	
SI162	A区	5.0×4.2−0.2	長方形	17.3※	古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
SB8	C区	12.4×4.4	6間×2間		古墳時代中期後半(天神川Ⅶ～Ⅸ)	
SB13	A区	3.6×2.35	2間×1間		古墳時代前期	
SB15	A区	5.6×4.1	3間×2間		古墳時代前期	
SB18	A区	4.0×3.1	2間×1間		古墳時代前期	
SB20	A区	6.8×3.1	3間×1間		古墳時代前期前葉(天神川Ⅱ)	
SK35	A区	2.3×1.8−0.52			古墳時代前期初頭(天神川Ⅰ)	土壙墓？
SK36	A区	0.97×0.96−0.37			TK43以降	土壙墓？
SK87	A区	4.8×1.6−0.5			古墳時代前期前葉(天神川Ⅱ)	
SK95	A区	1.5×1.5−0.3			古墳時代前期初頭(天神川Ⅰ)	土壙墓？
SK124	A区	1.38×1.05−0.2			古墳時代前期初頭(天神川Ⅰ)	土壙墓？
SS1	C区	13×1.3−0.5			古墳時代中期、弥生時代後期前葉(V-1)	SB8伴う。玉作工房
SS4	C区	16.6×3.2−0.36			古墳時代中期後葉(天神川Ⅷ)	
笠見3号墳	C区	12.7×12.5−1.1m	円墳		古墳時代終末(TK209)	

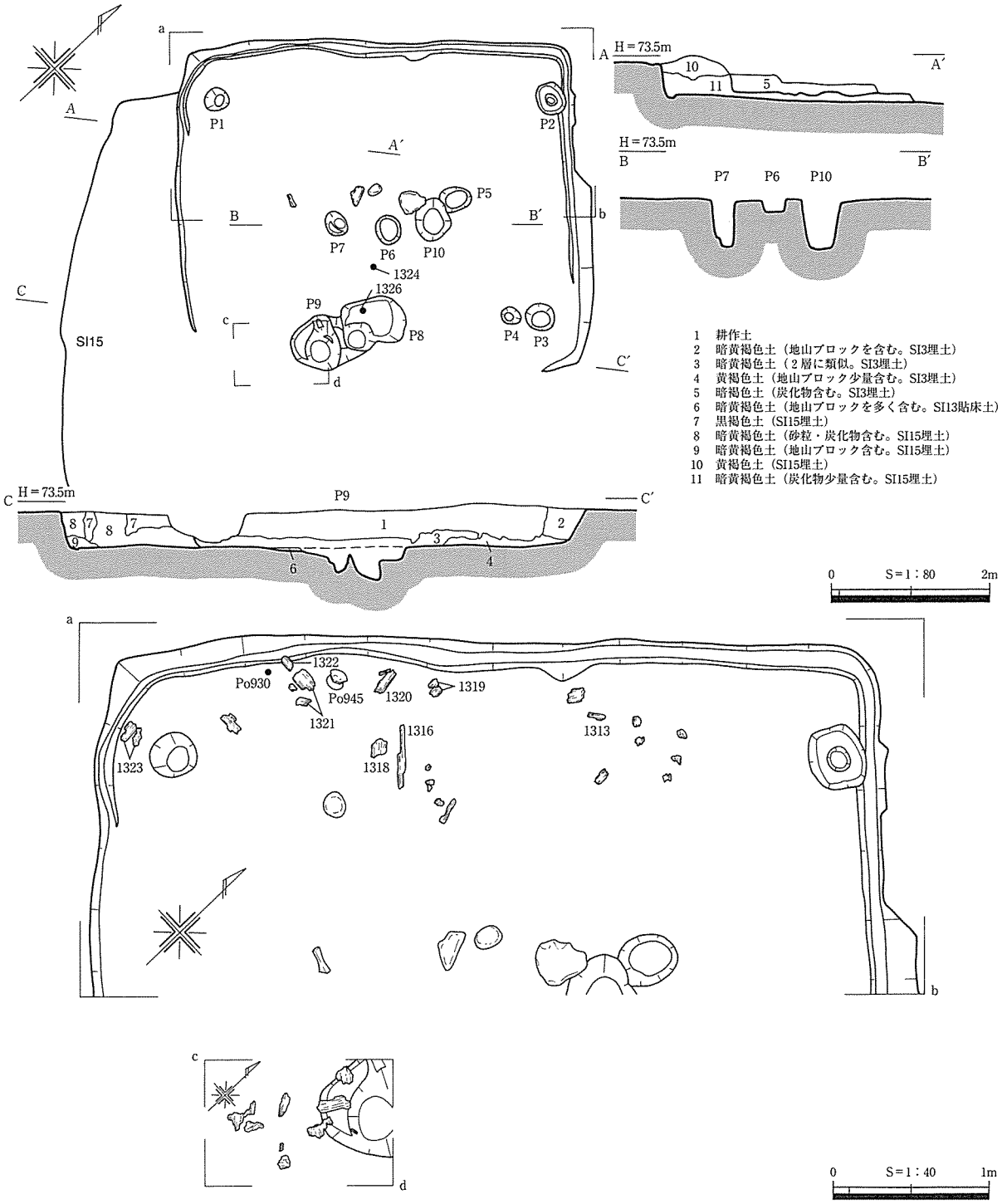
↑は数値以上　　※は復元値

める。その下層は炭化材を多く含む層である。また住居の中央部、現耕作土直下で焼土面を検出した。検出範囲は約20cm四方である。このことから当住居跡は焼失住居と考えられる。

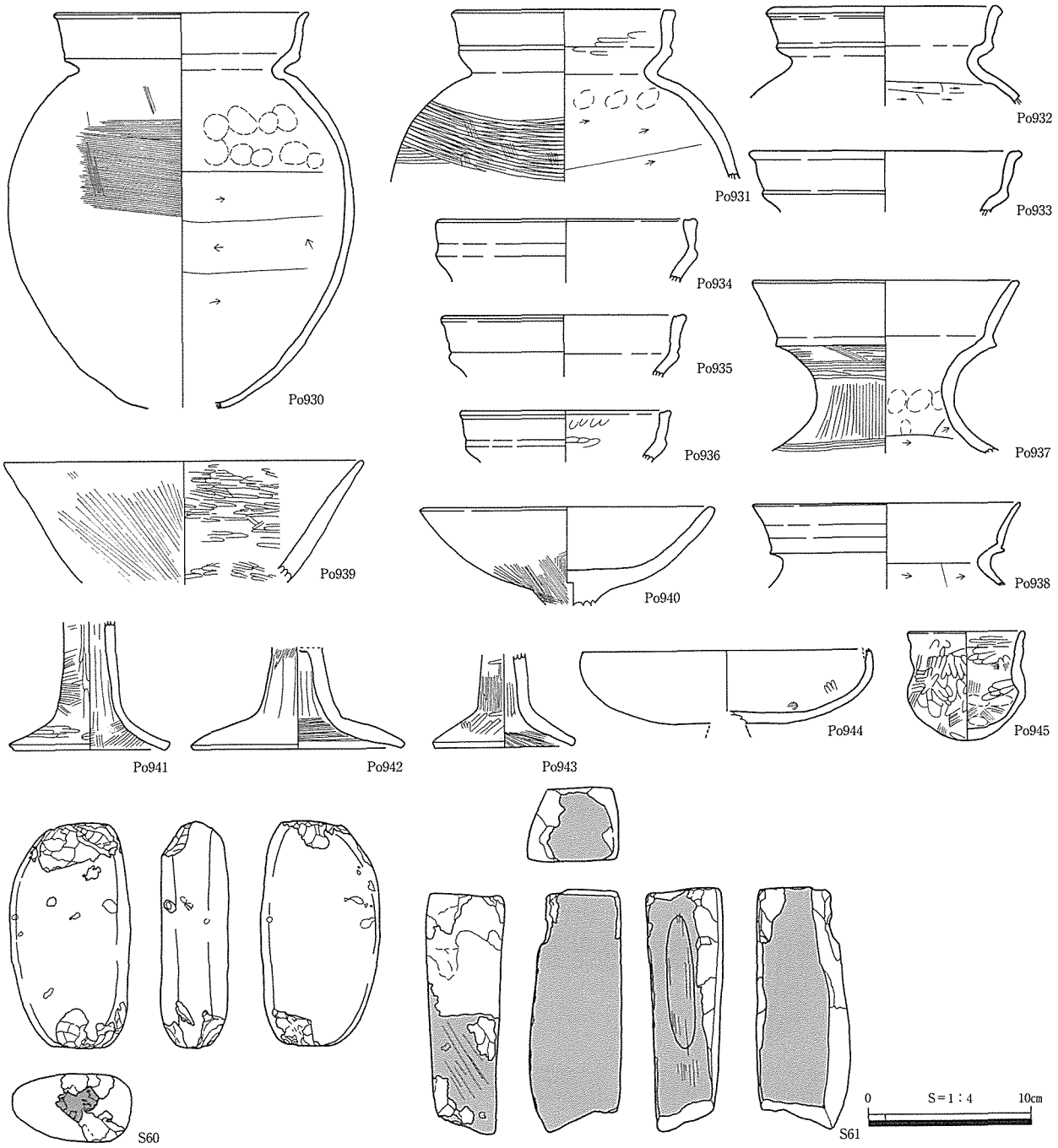
炭化材の出土レベルは床面付近に集中し、平面的には北西側の壁際からの出土が多い。炭化材の遺存状況は細片が多く出土分布も偏っており、良好とはいえない。壁に直交した方向で床面に落ち込んで出土する材は、本来垂木として使用されたものとみられる。樹種同定の結果、ヤブツバキ、スダジイ、スギ、カシ類など雑多な樹種が使用されていた。

南西側から南側にかけての床面には、部分的に貼床層が認められた。層厚は最大５cmであった。

出土遺物は埋土中から土器片が出土したほか、床面付近からも比較的多くの遺物が出土した。図化



第371図　笠見第３遺跡SI3遺構図



第372図　笠見第3遺跡SI3出土遺物実測図

したものは、土師器甕Po930～936・938、壺Po937、高杯Po939～943、椀Po944、小型丸底壺Po945、敲石S60、砥石S61である。住居中央部床面直上には台石に使用したとみられる扁平な石が据え置かれていた。またそのやや南西のほぼ同レベルから研ぎ減りが顕著なS61が出土した。住居西隅付近の壁溝際からはPo930やPo945などが出土した。

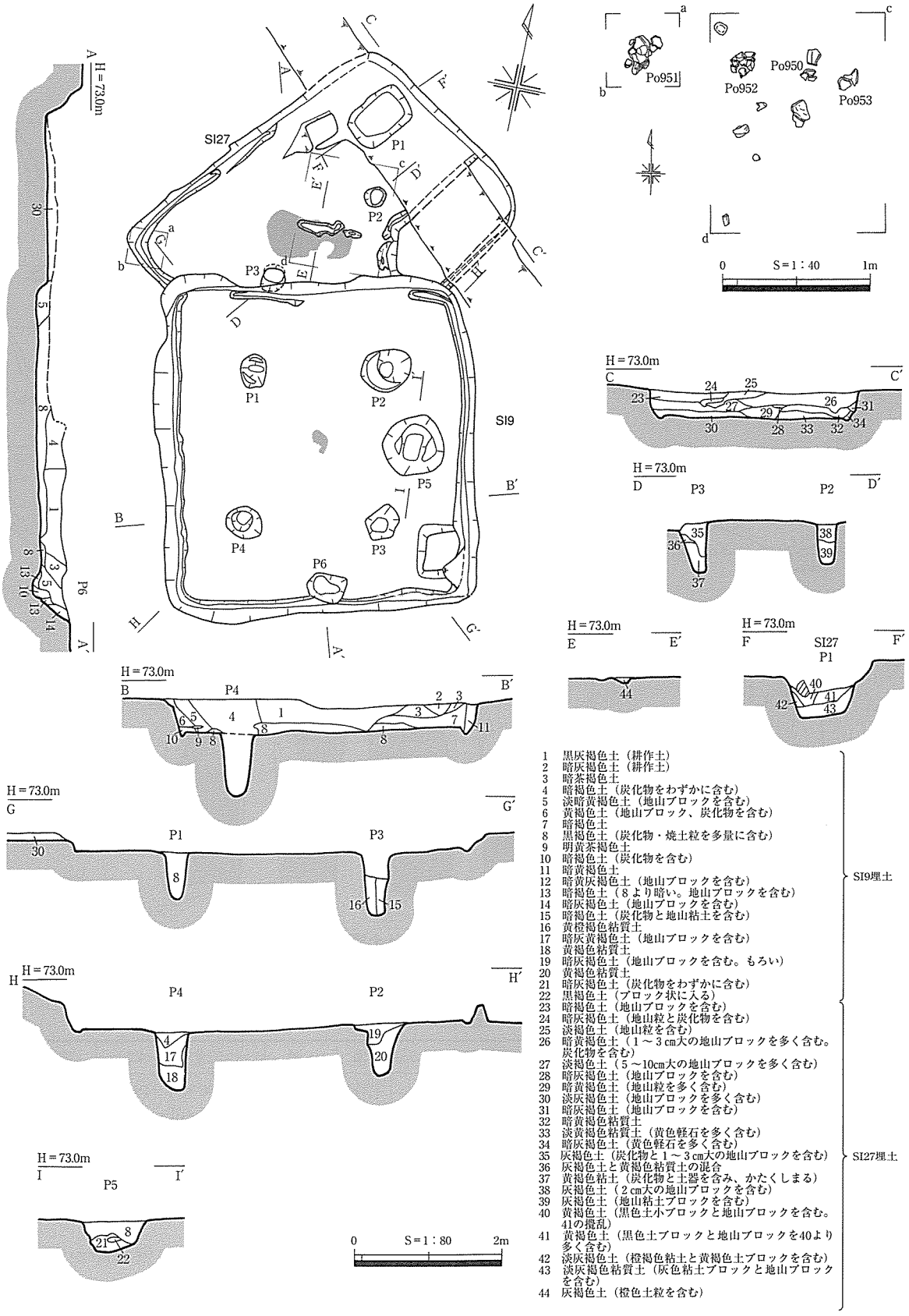
表111　笠見第3遺跡SI3ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	30×30－21	主柱穴	P5	36×34－19	
P2	41×37－14	主柱穴	P6	38×32－13	構造柱
P3	36×36－26	主柱穴	P7	30×26－58	
P4	24×20－12		P8	83×61－46	特殊ピット

出土した土器からみて、天神川Ⅸ期、古墳時代中期末葉の竪穴住居跡とみられる。（小山）

SI9・27（第373～375図、PL. 68・73・152・157）

調査区南東側、N10グリッドの標高72.6～72.9mのわずかに東側へ傾斜する斜面に立地する。北東側約１mにSI16がある。SI9・27が切り合うように検出されたが、土層断面観察により、北側はSI27を



第373図　笠見第３遺跡SI9・27遺構図

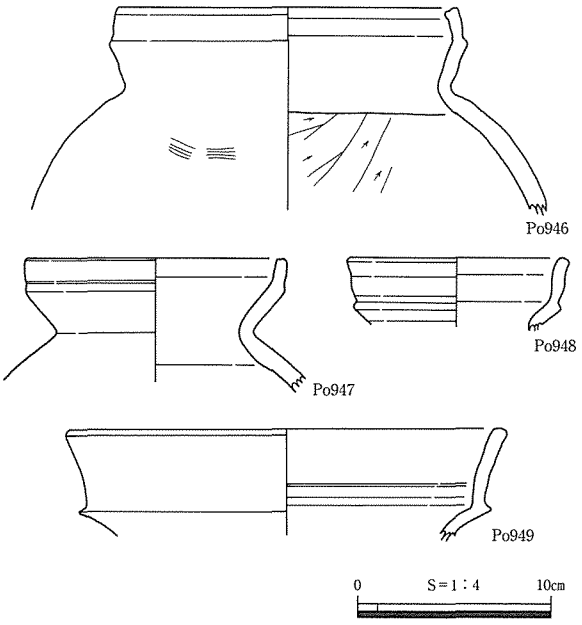
掘り込んでいることが判明した。

SI9は、平面長方形を呈し、長軸4.0m、短軸3.8m、床面積15.1㎡を測る。壁高は、北西側で最大54cmである。壁際に幅10cm、深さ5cm程度の壁溝が全周する。南西隅に、地山を削り残した0.5m四方、高さ6cmの台状の高まりがある。主柱穴はP1～P4の4基で、柱間距離はP1-P2間から順に1.8m、2.1m、1.8m、2.1mである。東側の主柱穴間の、やや壁に寄る位置に特殊ピットP5がある。また、南壁際の中央部に浅いP6がある。建物中央で焼土面を検出した。

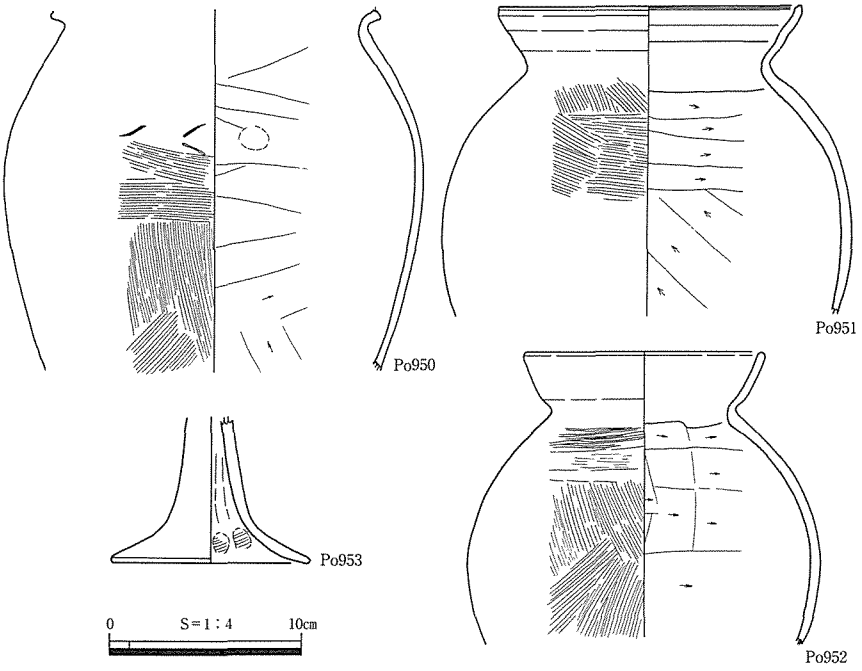
埋土下層は、炭化物と焼土粒を多量に含む層であることから、焼失住居の可能性がある。特殊ピット内も同様に炭化物を含む埋土が堆積している。P6の埋土は埋め戻されたような土質であり、この建物より前からあったピットの痕跡ではないかと考える。

出土遺物には、埋土中から出土した土師器甕Po946～949がある。

SI27は、平面長方形を呈し、長軸4.06m、短軸3.04m、床面積5.8㎡以上を測る。壁高は、北西側で最大51cmである。壁際には幅10



第374図　笠見第3遺跡SI9出土遺物実測図



第375図　笠見第3遺跡SI27出土遺物実測図

表112　笠見第3遺跡SI9・27ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
SI9 P1	43×36－66	主柱穴	SI27 P1	82×60－55	
SI9 P2	69×57－70	主柱穴	SI27 P2	27×27－60	主柱穴
SI9 P3	52×40－89	主柱穴	SI27 P3	34×30－70	主柱穴
SI9 P4	50×45－82	主柱穴			
SI9 P5	85×82－43	特殊ピット			
SI9 P6	50×38－18				

cmの壁溝が廻る。

主柱穴は２基（P2・P3）で、柱間距離は1.7mである。北隅には方形の特殊ピットP1がある。このピットは攪乱内のため、検出面は床面よりも低かったが、位置関係からこの住居跡に伴うものと考えた。

東隅に長辺２m、短辺１m、高さ0.2mのベッド状遺構を、地山土を盛って作り付けている。ベッド状遺構の壁際周りに溝をめぐらすが、床面側にはない。

床面の中央に長径0.6m、短径0.3mの隅円方形の範囲で焼土面を検出した。色調は橙色である。焼土面の長軸は建物の主軸とは異なり、東西方向を向く。焼土面内の北寄りに、長さ55cm、幅13cmの溝を検出した。この溝の埋土中より、鉄滓が１点出土している。特殊ピット埋土中から、攪乱層ではあるが、鞴羽口が出土している。攪乱層とはいえ、この建物に伴う遺物であると考えられるものである。焼土面の形状と遺物の性格から、建物中央に鍛冶炉が設置されていた可能性を考える。

床面付近の埋土中から炭の小片が多く出土していたが、土層の断面観察によれば、火災によるものではない。

床面で、土師器甕Po950～952、高杯脚部Po953が出土している。

出土遺物等から、SI9は天神川Ⅸ期、古墳時代中期末葉ごろの竪穴住居跡、SI27は天神川Ⅰ期、古墳時代初頭ごろの竪穴住居跡で、鉄器製作に関わるものと考えられる。（家塚）

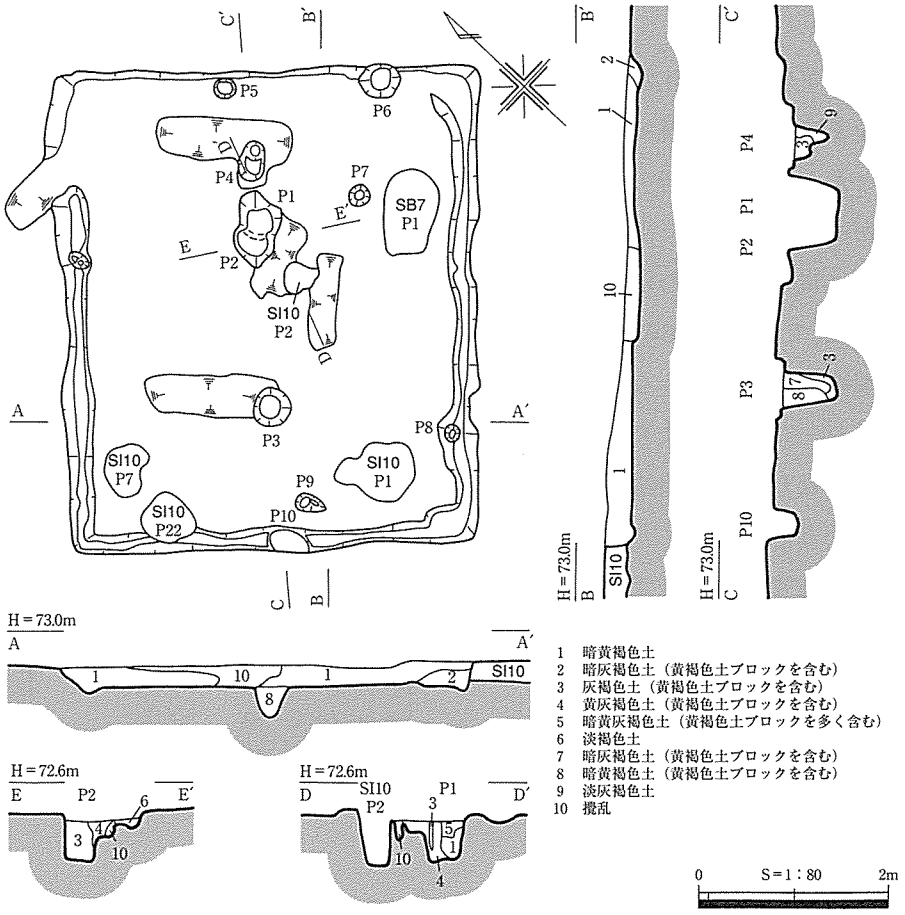
SI11（第83・376・377図、PL. 68・145・152）

調査区南東側、L10・11グリッドの標高約72.5m付近のほぼ平坦面に位置する。南側でSI10を掘り込む。後世の攪乱のため、遺存状態は悪い。

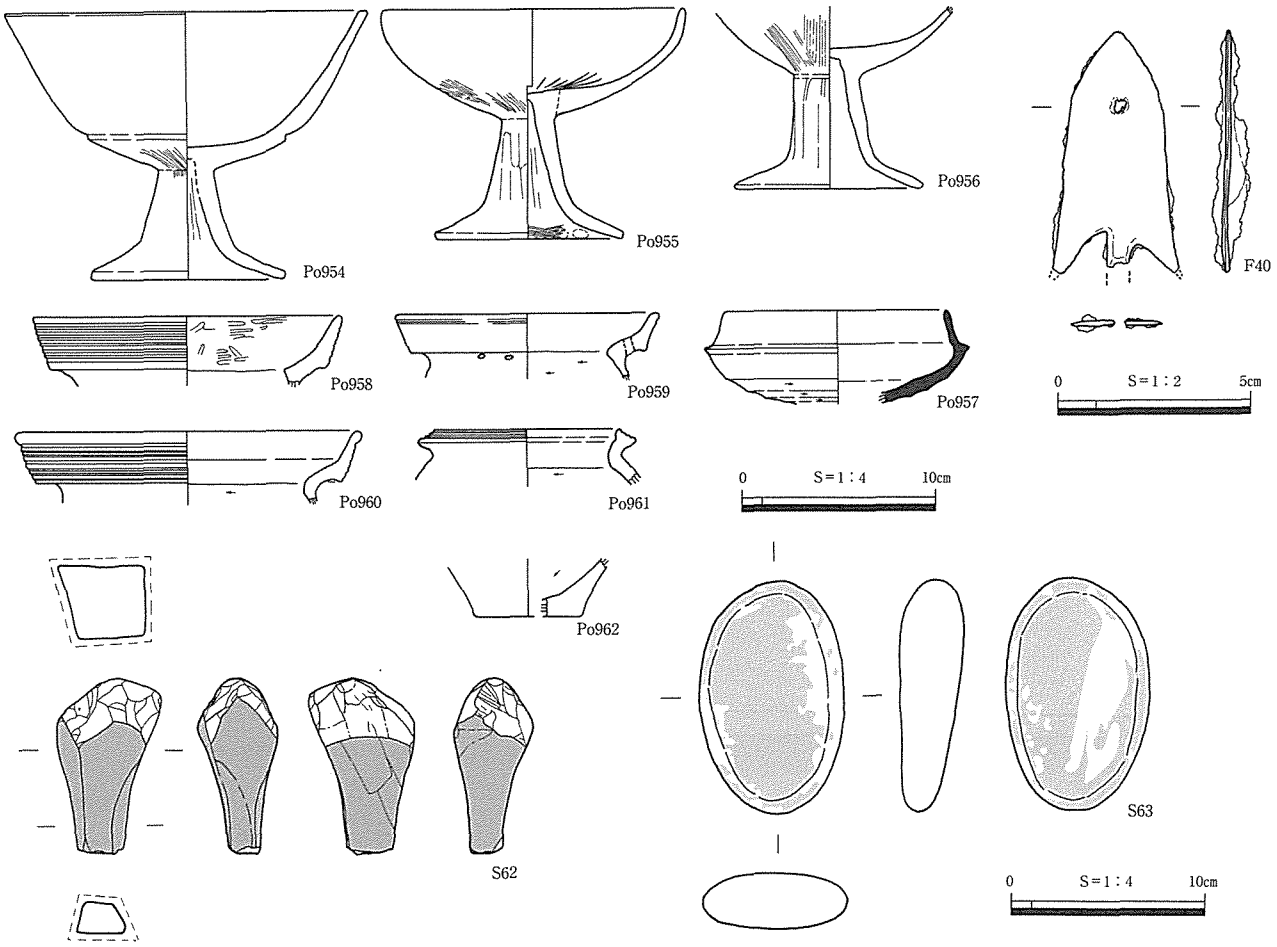
平面長方形を呈し、長軸4.77m、短軸3.9m、床面積18.7m²を測る。壁高は、北西側で最大17cmである。壁際には、幅８～19cmの壁溝が東側を除いてめぐっている。

主柱穴はP1・P3で、主柱穴間距離は、1.9mである。P1・P2は切り合うように検出されている。

埋土はほぼ第１層単層である。



第376図　笠見第３遺跡SI11遺構図



第377図　笠見第3遺跡SI11出土遺物実測図

出土遺物には、図化したものに土師器高杯Po954～956、須恵器杯身Po957、弥生土器甕Po958～961、底部Po962、鉄鏃F40、砥石S62、赤色塗彩された磨石S63がある。このうち、P1内からPo959・962が出土しているが、これらはSI10に伴う遺物が混入したものと考える。その他は、埋土中からの出土である。

表113　笠見第3遺跡SI11ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	44×40－56	主柱穴	P7	21×20－25	
P2	43×37－62		P8	15×15－19	
P3	43×39－65	主柱穴	P9	30×17－36	
P4	41×29－38		P10	45×29－22	
P5	21×21－9		P11	25×14－44	
P6	43×37－35				

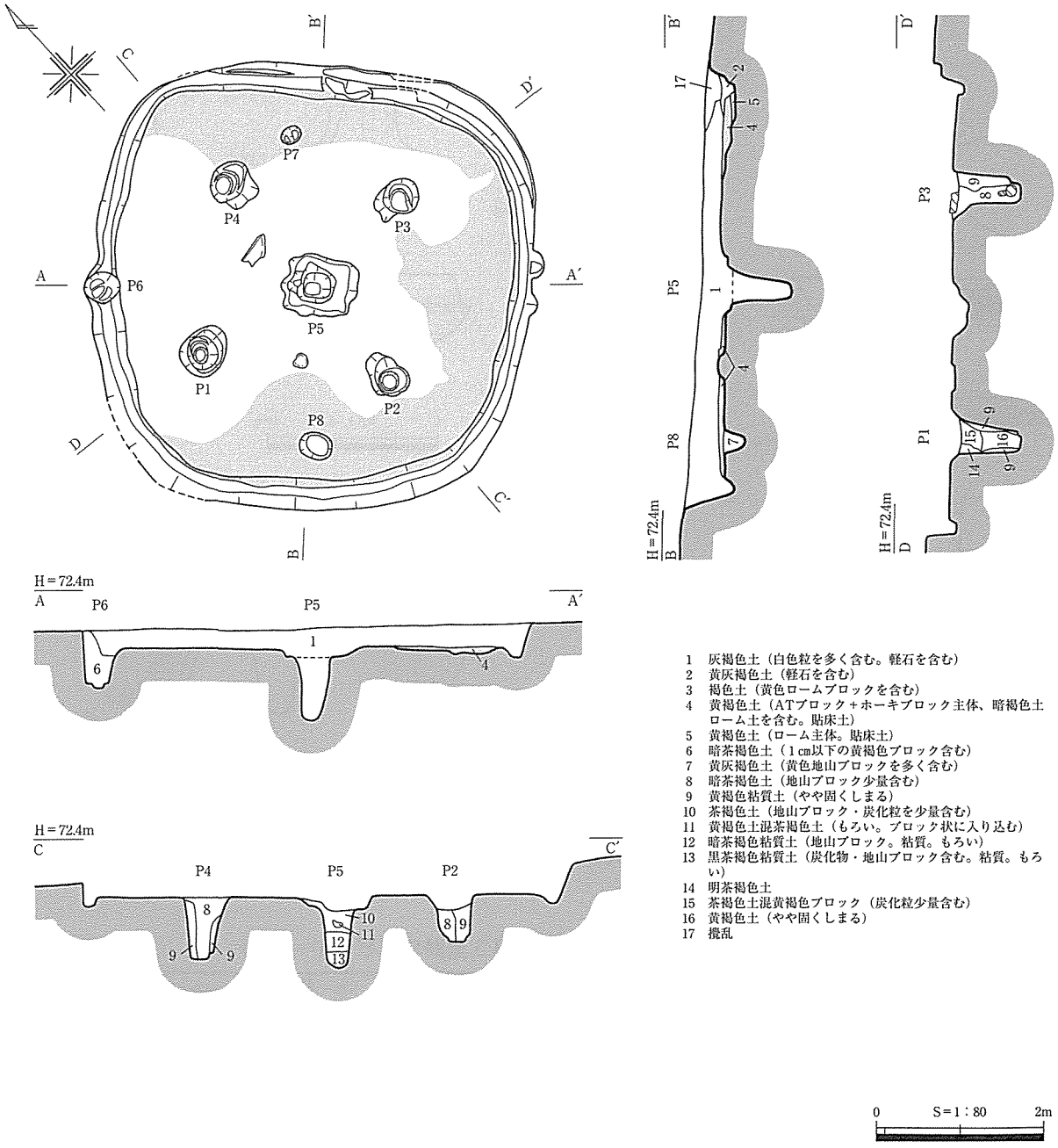
出土遺物等から、天神川Ⅸ期、古墳時代中期末葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI12（第378～380図、PL. 69・145・153）

調査区中央やや南東側、K9・10グリッドの標高約71.9mのほぼ平坦面に立地する。東側約1mにはSI14がある。

平面隅丸方形を呈し、長軸4.76m、短軸4.53m、床面積19.1m²を測る。壁高は、南側で最大72cmである。壁際には、幅は15～20cmの壁溝が全周する。

主柱穴はP1～P4で、主柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.1m、2.2m、2.1m、2.1mである。中央ピットP5は二段掘りを呈す。上部深さ10cmまでは70×80cmの方形で、下部深さ70cmは直径45cmの円形



第378図　笠見第３遺跡SI12遺構図

表114　笠見第３遺跡SI12ピット一覧表

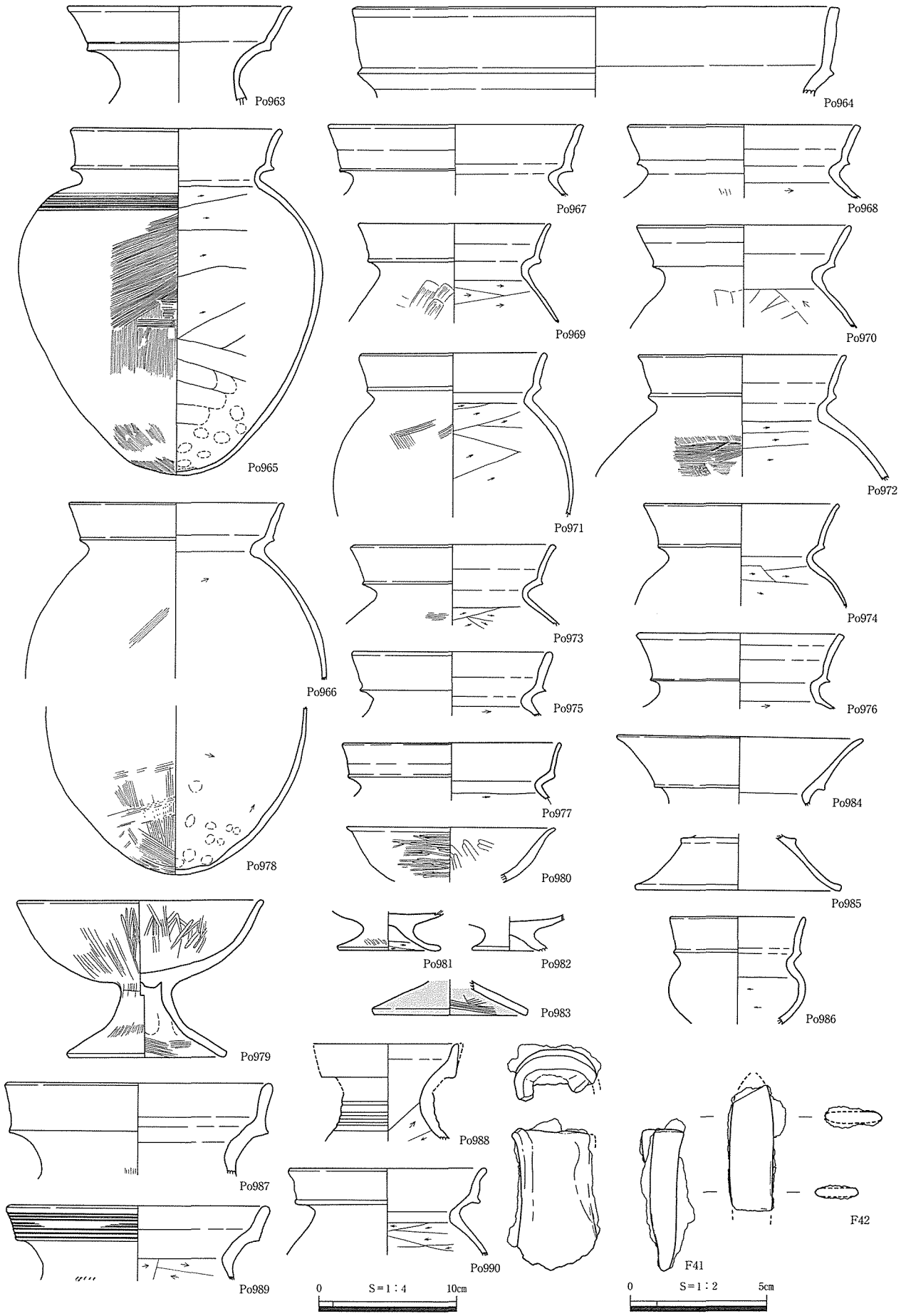
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	69×53－74	主柱穴	P5	44×43－64	中央ピット
P2	46×44－57	主柱穴	P6	42×37－48	
P3	43×39－79	主柱穴	P7	25×19－18	
P4	53×41－75	主柱穴	P8	40×32－24	

である。

中央ピットの北側と南側の２箇所で焼土面を検出した。その範囲は直径５cmと狭い。

北西側を除き、壁際から0.5～１mの範囲の床面は貼床が施されている。貼床の下から掘立柱建物跡SB6の柱穴が出土したことから、SI12はSB6の廃棄後に構築されたことが判明した。

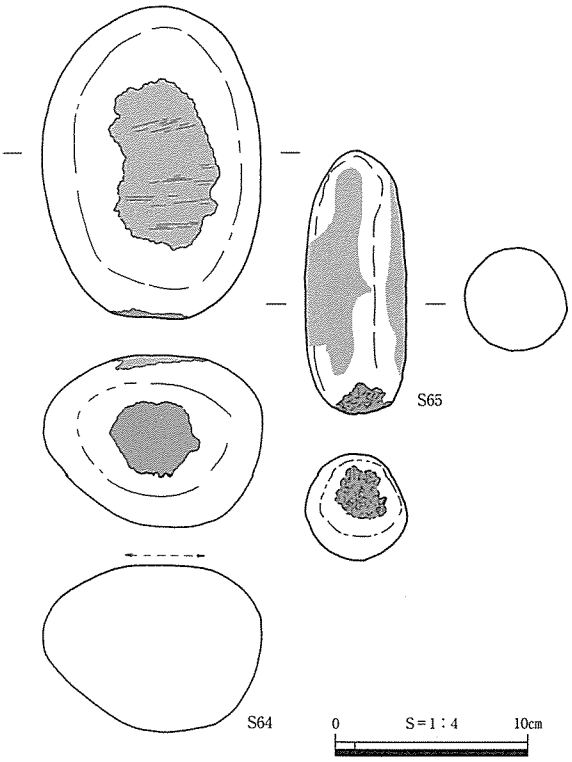
掘方埋土は単層で、土器片を多く含んでいる。中央ピットの埋土上層から、土器片が折り重なるようにまとまって出土している。そして下層からは炭化物が出土している。中層以下は上層に比べても



第379図　笠見第３遺跡SI12出土遺物実測図(1)

ろい。このことから、中央ピット上面が板で蓋をされていて、経年とともに徐々に中央ピット内に土が流入し、板が腐食したときに蓋の上に置かれていた土器が落ち込んだという推測ができる。

出土遺物には、図化したものに土師器壺Po963、甕Po964～977、底部Po978、高杯Po979・980、低脚杯Po981・982、裾部Po983、鼓形器台Po984・985、小型甕Po986、弥生土器壺Po987・988、甕Po989・990、小型袋状鉄斧F41、鉇F42、敲石S64・65がある。大半のものは埋土中からの出土であるが、このうち、床面上でF42が、P1内でPo971、P5内でPo974が出土した。また台石が２点出土している。１点は中央ピットの北側、もう１点は主柱穴P3の柱痕を半分覆った状態で出土した。後者は住居の廃棄後に置かれたものであるといえる。P3の底面で大小の礫が上下に重なって出土している。下側の大きな礫は縦に置かれていたことから、柱材が抜かれた後に落ち込んだものではないかと推定される。



第380図　笠見第３遺跡SI12出土遺物実測図(2)

出土遺物等から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

SI13（第381・382図、PL. 69・70・153）

調査区南東側、M10グリッドの標高約72.8mのほぼ平坦面に立地する。約北東側２mにはSI10がある。南西辺は、後世の攪乱によって掘り込まれている。

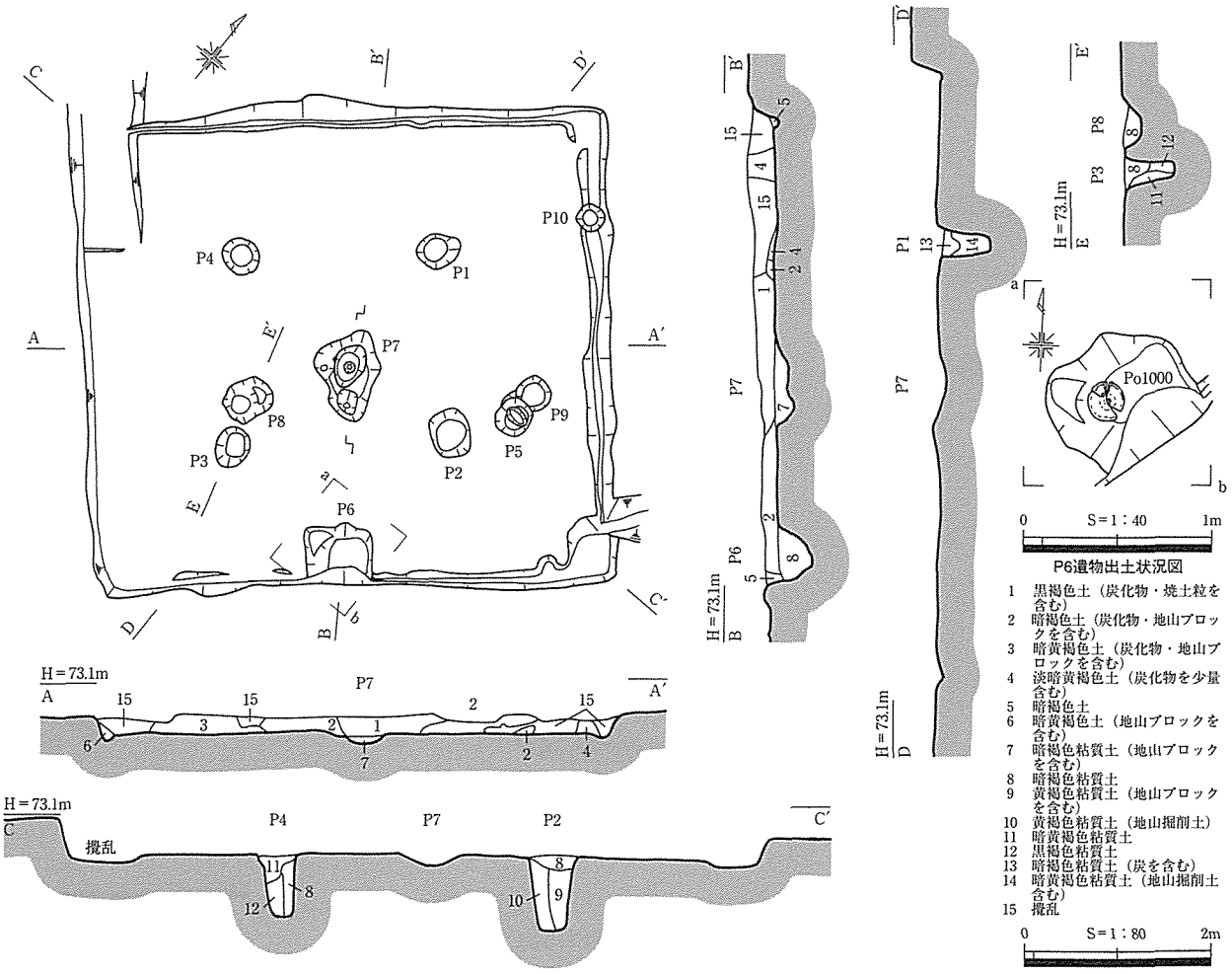
平面長方形を呈し、長軸5.3m、短軸4.77m、床面積25.3㎡を測る。壁高は、北側で最大23㎝である。壁際には、幅４～20㎝の壁溝が全周するものと考えられる。

主柱穴はP1～P4で、主柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.0m、2.3m、2.0m、2.1mである。P2・４では柱痕が認められ、柱径は約13～20㎝と推定される。中央ピットP7は、極浅い平面不整形で二段掘りを呈す。東側壁際中央部に特殊ピットP6が掘り込まれる。平面方形で、土師器高杯杯部Po996、椀Po1000が出土している。また、P8内に炭化材が落ち込んでいる。その他にピットを検出しているが、用途は不明である。

埋土は６層に分層でき、ほとんどに炭化物を含んでいる。第５・６層は、堰板痕跡の可能性がある。炭化材の出土と埋土の状況を考えると、焼失住居の可能性もある。

出土遺物には、図化したものに土師器甕Po991～994、直口壺Po995、高杯Po996～999、椀Po1000・1001、須恵器杯身Po1002、須恵器甕Po1003がある。大半のものは埋土中からの出土であるが、このうち、P6内で上述したように土器が出土している。

出土遺物等から、天神川Ⅷ期、古墳時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）



第381図　笠見第３遺跡SI13遺構図

表115　笠見第３遺跡SI13ピット一覧表

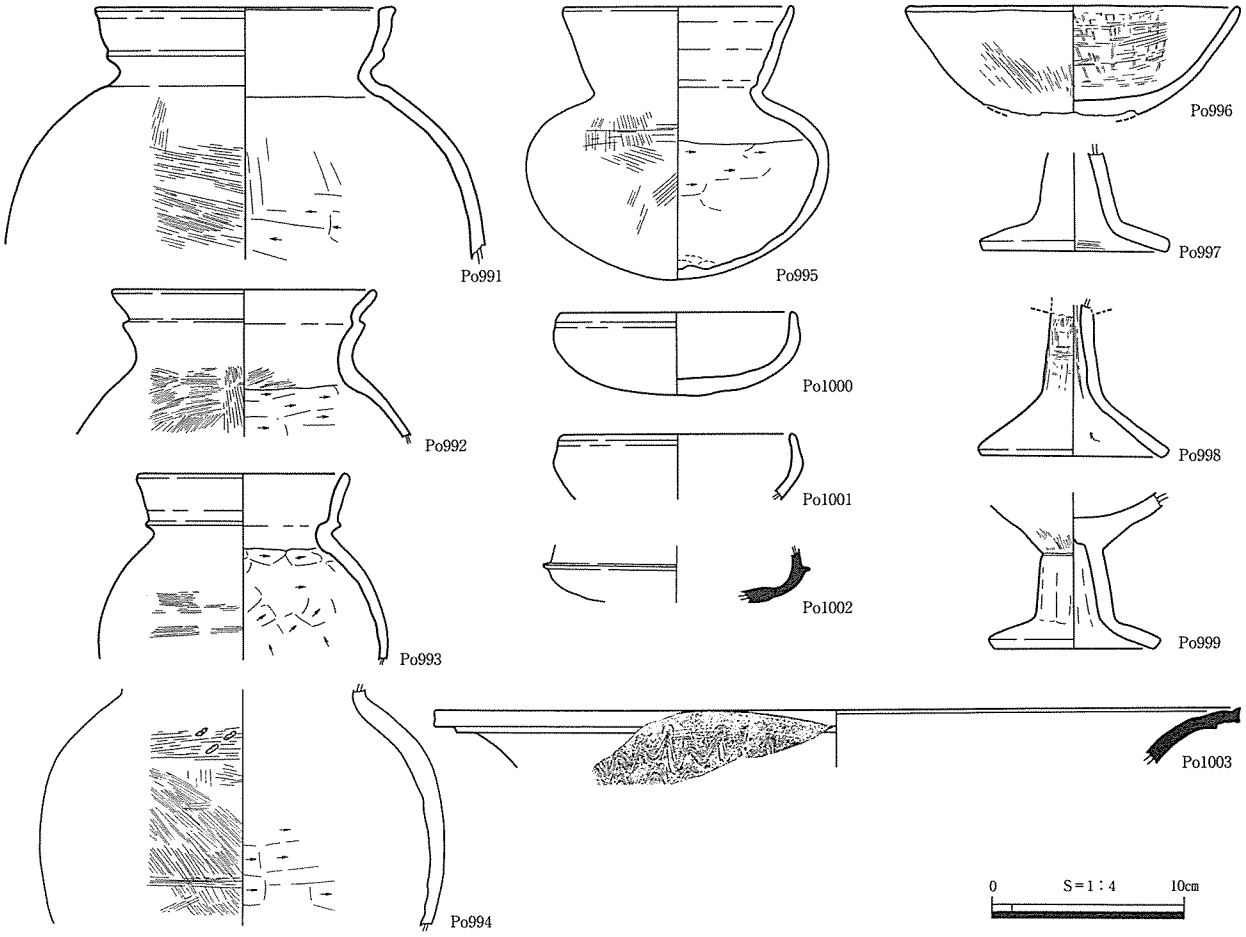
ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	42×35－53	主柱穴	P6	72×56－47	特殊ピット
P2	52×42－77	主柱穴	P7	97×71－ 6	中央ピット
P3	43×35－56	主柱穴	P8	51×42－19	
P4	42×36－67	主柱穴	P9	37×30－26	
P5	38×37－33		P10	30×28－36	

SI15（第383・384図、PL. 13・145・152）

調査区南東側、O11、O12グリッドの標高73.4～73.7mの緩斜面に立地する竪穴住居跡である。SI3と重複するが、SI3が当住居跡の埋土を切り込んでいるのでSI3が新しい。

住居の規模は一辺６mの隅丸方形プランの住居跡とみられる。遺存状況は東壁がすでに失われるなどかなり悪く、壁高は、最も残りが良い西壁で37cmを測る。壁溝は幅10～25cm、深さ３～６cm、西壁の一部で途切れるが、遺存する範囲内では全周する。

ピットを多数検出したが、SI3と重複するため、SI3に伴うピットとの弁別が困難なものもあった。主柱穴と考えられるのは、P10～P13の４基である。P10は形がややいびつなことから、２基のピットが重なったものと考えられ、両住居跡の主柱穴が重なったものとみられる。主柱穴間の距離は各々３



第382図　笠見第３遺跡SI13出土遺物実測図

mである。またP9は主柱穴に囲まれた中央やや南寄りに位置することから、SI15の中央ピットとみられる。

埋土は３層に分層可能で、いずれも自然堆積によるものとみられる。

床面直上南側隅付近で土師器甕Po1005・1006・1008、P9西側で土師器甕Po1004が潰れた状態で出土している。その他埋土中で、土師器甕Po1007、高杯Po1010、低脚杯Po1011、弥生土器底部Po1009などが出土している。

出土した土器から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭ごろのものとみられる。（小山）

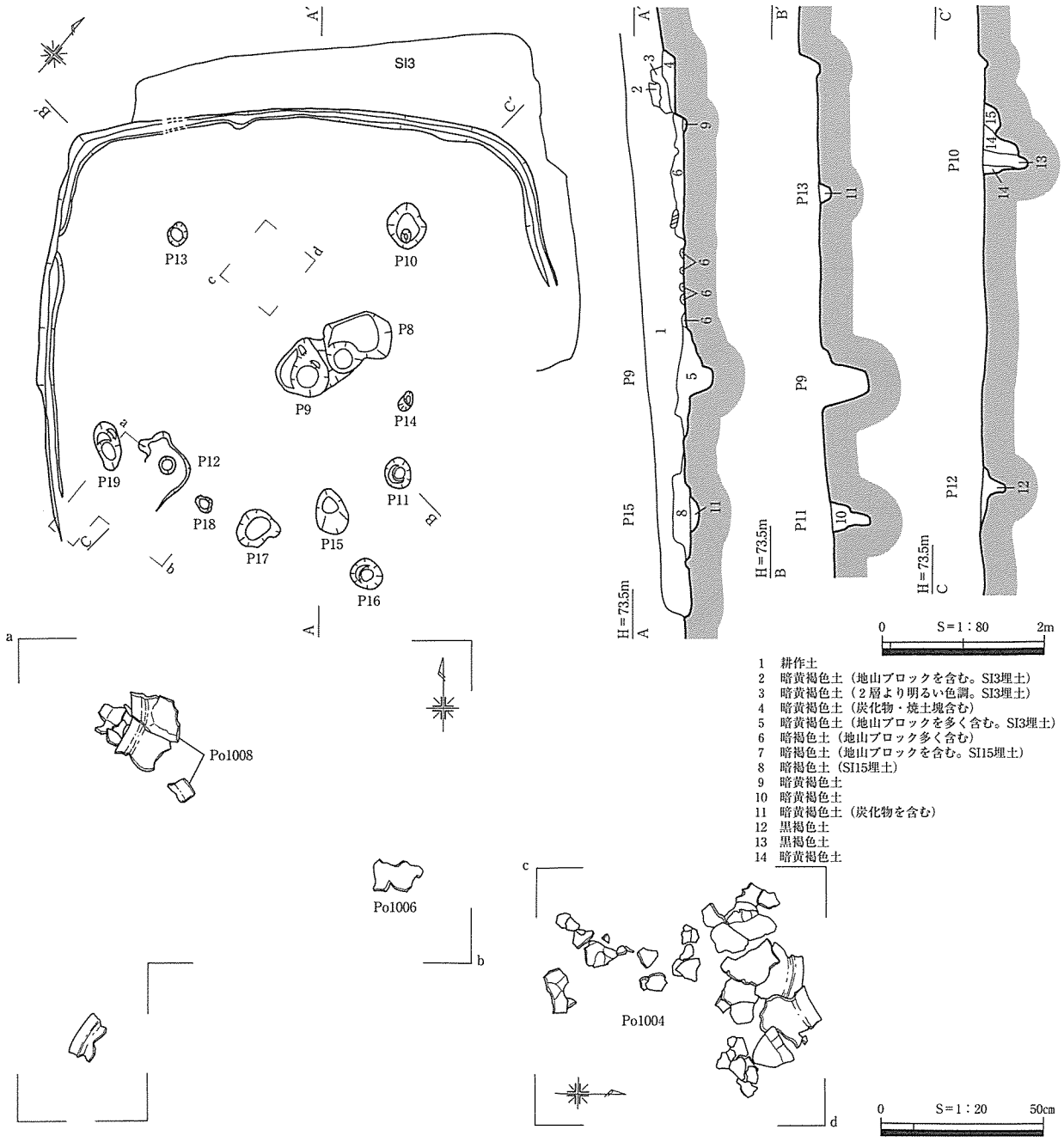
SI16（第385・386図、PL. 70・154）

調査区南西側、N9グリッドの標高72.2～72.6mの緩やかに東側に傾斜する斜面部に立地する。西側１mにSI9、東側２mにSB3がある。

南西壁は耕作溝によって削り取られている。平面は長方形を呈し、長軸4.2m、短軸3.36m、床面積14.7m²を測る。壁高は、最も遺存状態がよい南西壁で最大51cmを測る。壁際には、幅５～16cm、深さ５～11cmの壁溝が全周する。

主柱穴はP1・P2で、柱穴間距離は2.8mである。

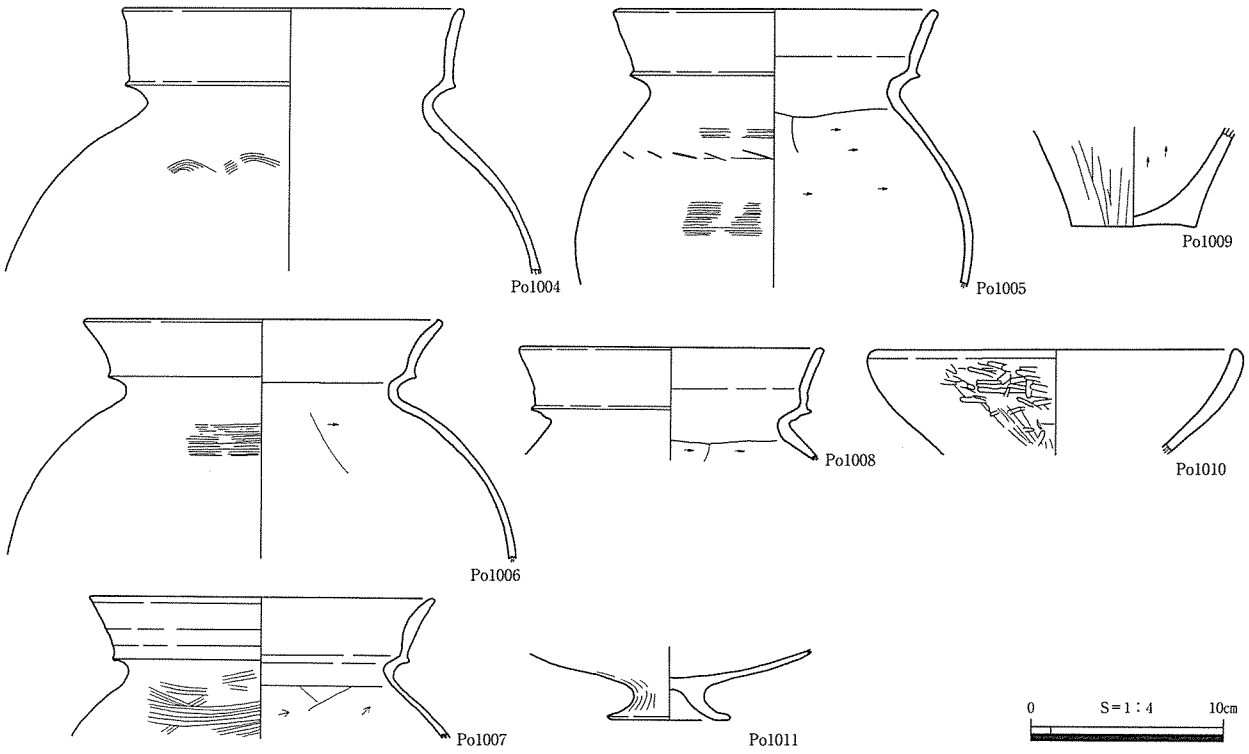
中央ピットP3は平面円形、深さは14cmである。側面が被熱し、埋土は炭化物・焼土粒を多く含んでいたことから、炉跡である可能性がある。なお、埋土は建物下層埋土と同様であることから、廃絶時にはP3は、開口していたものと思われる。



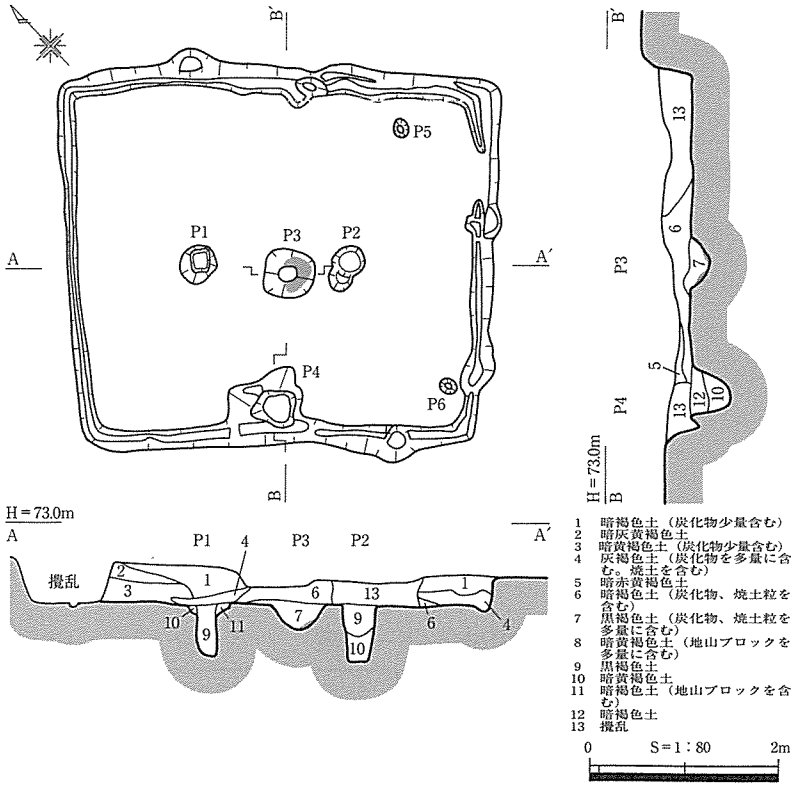
第383図　笠見第３遺跡SI15遺構図

表116　笠見第３遺跡SI15ピット一覧表　　△は残存値

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P9	71×48－59	中央ピット	P15	58×39－50	
P10	57×48－59	主柱穴	P16	39×33－31	
P11	36△×32－19	主柱穴	P17	52×45－30	
P12	23×21－48	主柱穴	P18	23×18－ 7	
P13	27×24－18	主柱穴	P19	58×28－56	
P14	25×16－13				



第384図　笠見第３遺跡SI15出土遺物実測図



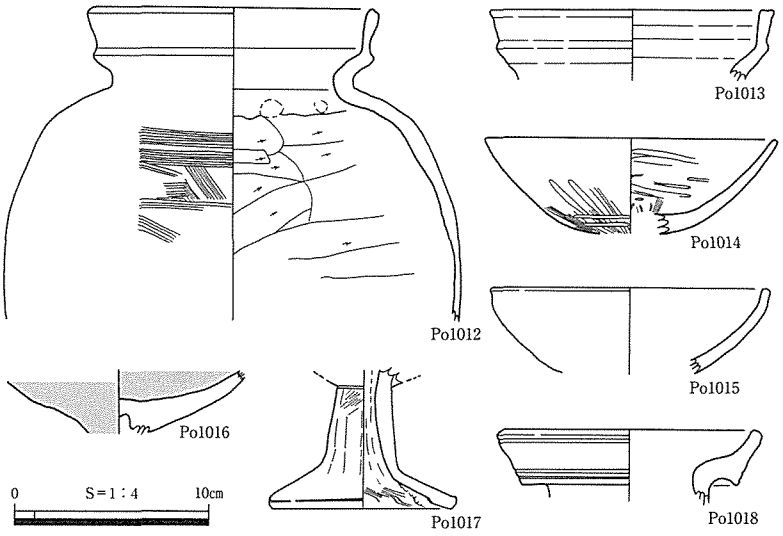
第385図　笠見第３遺跡SI16遺構図

表117　笠見第３遺跡SI16ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	40×38－46	主柱穴	P4	76×43－55	特殊ピット
P2	34×31－45	主柱穴	P5	16×15－ 9	
P3	55×51－14	中央ピット、炉跡	P6	17×14－10	

南壁際には、平面不整方形を呈す特殊ピットP4がある。特殊ピット内からは、遺物は出土していない。

埋土は、６層に分層できた。ほとんどの層に炭化物・焼土粒を含んでいる。埋土下層は中央部が盛り上がるように堆積しており、自然堆積したような状況ではないと考える。炭化材等は明確に出土していないが、焼失した可能性がある。



第386図　笠見第３遺跡SI16出土遺物実測図

出土遺物には、図化できたものに土師器甕Po1012・1013、高杯Po1014～1017、弥生土器甕Po1018がある。いずれも、埋土中からの出土である。

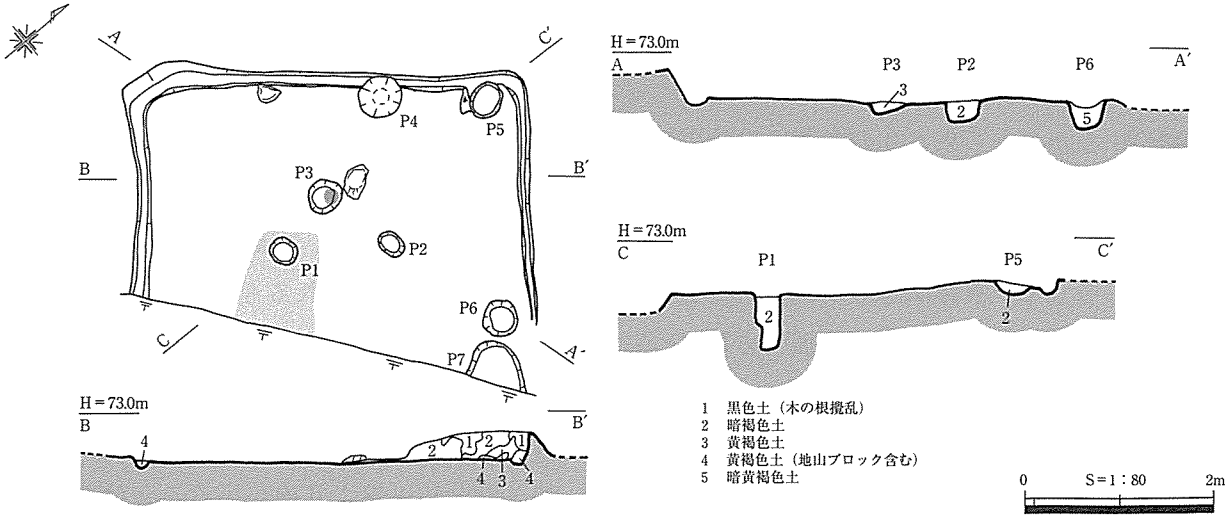
出土遺物等から、天神川Ⅷ期、古墳時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI17（第387・388図、PL. 70・154）

調査区南東側、O10・11グリッドの標高72.5～72.8mの斜面地で検出した竪穴住居跡である。残りが悪く、検出時すでに埋土の大半が失われ、西半分しか遺存しなかった。SB2の柱穴と重複関係にあるが、SB17の埋土がほとんど残っていなかったため、前後関係を層位的に確認することは困難であった。

一辺4.4mの方形プランの住居と見られる。床面積は、9.9m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい西側で最大19cmである。壁際には、幅10～20cm、深さ２～６cmの壁溝がめぐる。

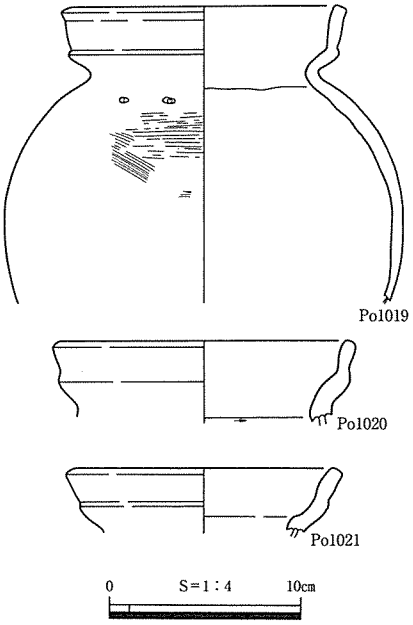
主柱穴はP1、P2の２基のみで、２本柱の建物とみられる。柱間は1.2mである。P3は被熱により赤変しており、炉跡とみられる。P7はこの住居に伴う土坑である可能性が高い。その他のピットは、



第387図　笠見第３遺跡SI17遺構図

表118　笠見第３遺跡SI17ピット一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	30×27－48	主柱穴	P5	40×32－15	
P2	30×22－43	主柱穴	P6	38×36－31	
P3	38×33－13	炉跡	P7	60△×44△－14	
P4	45×44－不明				



第388図　笠見第３遺跡SI17出土遺物実測図

この住居に伴うものか否か不明である。

埋土は、残りがよいところで30cmの厚さで４層に分層が可能である。初期の流入土は黄褐色系の土で、住居外側からの自然堆積土とみられる。

床面直上から出土した遺物は台石２点のみで、土器はほとんどが床面から若干浮いて出土した。図化できたものは、土師器甕Po1019～1021である。P7内からはPo1019が出土している。

出土遺物から、天神川Ⅷ～Ⅸ期、古墳時代中期後半ごろのものとみられる。（小山）

SI18（第389～392図、PL. 71・146・155）

調査区南東側のL9～M10グリッドの標高72m付近のほぼ平坦面に立地する。SI19の西半分の埋土を掘り込んでいる。西側約5mにSI13が位置する。

平面は方形を呈し、南北5.5m、東西5.2m、床面積28.4㎡を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい南側で最大46cmである。壁際には、幅８～25cm、深さ３～13cmの壁溝がほぼ全周する。主柱穴はP1～P4の４基で、主柱穴間距離はP1-P2間から順に1.6m、1.6m、1.5m、1.6mである。P3-P4間にP9があるが、補助柱穴の可能性がある。P1～P4の外側を囲むP5～P8は上面が貼床と同じ土で塞がれていたことから、建て替え前の主柱穴であったと考えられる。北東側のP14は尖底で、補助柱穴かあるいはSI18以降のものである。

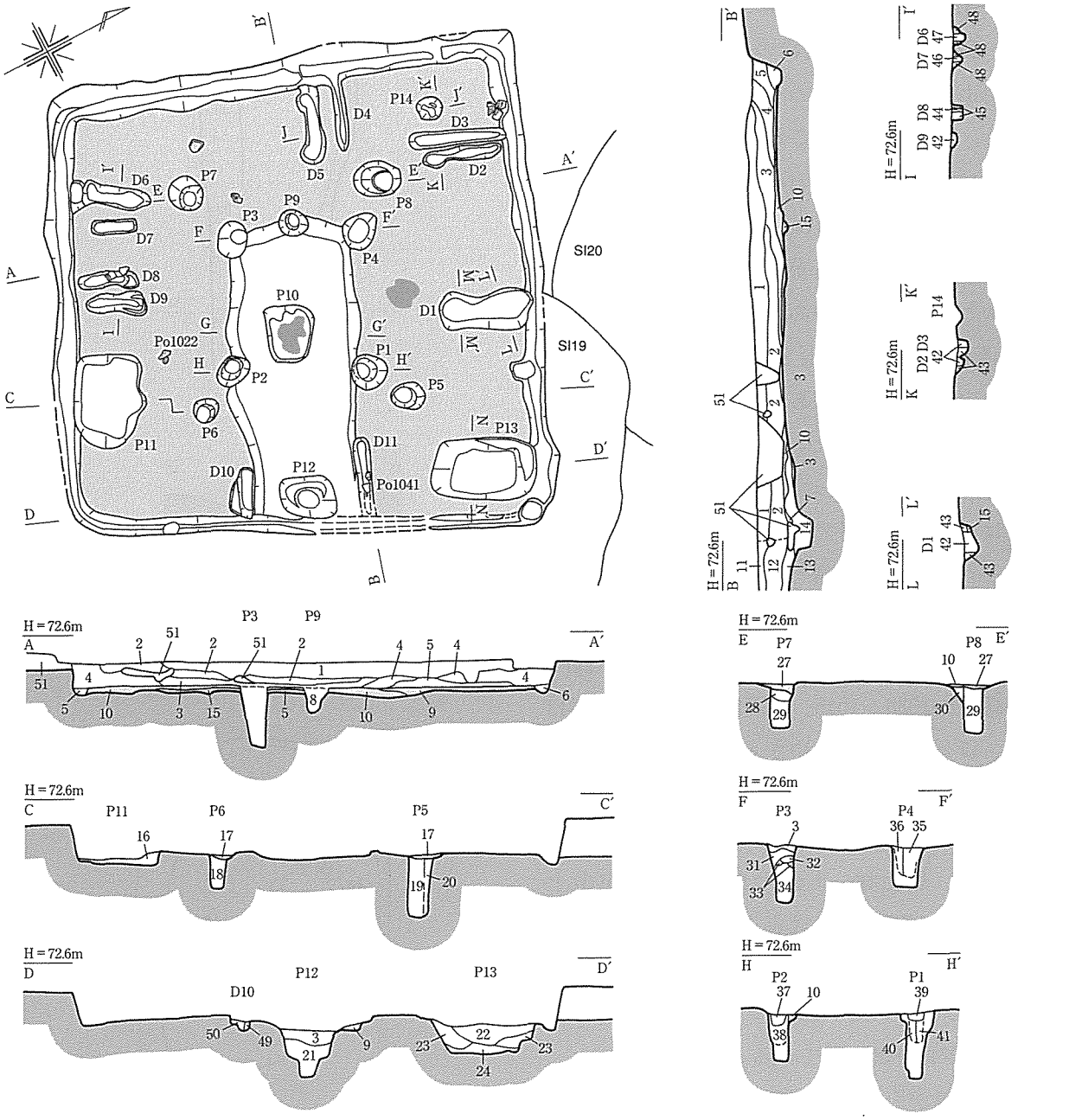
P1～P4、P9に取り囲まれる建物中央部分に、幅1.5m、長さ3.5mを測り東壁に接する帯状の範囲は、周囲より10cmほど低くなっている。床面は、東側が開口するコの字状に１段高くなっていることになる。床面には、全面に貼床が施されている。貼床土の下は凹凸が激しく、とくにSI19と切りあう範囲は、地山面まで掘削されていた。

建物の中心から少し東寄りの床面は皿状に浅く掘り窪められたP10があり、焼土面を検出した。焼土面はP5-P8間の高床面でもう１箇所検出した。

低い部分の東壁寄りにあるP12は上段方形、下段円形の二段掘りである。内部は流入土で満たされており、柱を立てた痕跡は認められなかった。いわゆる特殊ピットと呼ばれるものである。

その他に、建物北東隅にある平面長方形のP13、南壁際には平面方形で浅く、底面が凹凸のあるP11がある。

高床面上には、壁溝に直交する短い溝D1～D11を検出した。長さ、幅ともまちまちで、端が壁溝と接するものと離れたものがあるが、その反対の端は、P5～P8を結ぶ線より内に入ることはない。埋土はD1を除いて、一見して床面の土と区別し難いほどに類似し、硬くしまっていた。遺物も小さな



1　暗灰褐色土（黄褐色土粒と白色軽石粒を含む）
2　灰褐色土（黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物を含む）
3　灰褐色土（黄褐色土ブロックと炭化物を含む）
4　灰褐色土（黄褐色土ブロックを多く含む）
5　暗灰褐色土（黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物を含む）
6　淡灰褐色粘質土（黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物を含む）
7　暗灰褐色土（黄色土粒を含む）
8　灰褐色土（黄褐色土ブロックと炭化物を含む）
9　黄色土ブロック（貼床土）
10　黄色パミス（貼床土）
11　暗灰褐色土（白色粒を含む）
12　暗黄褐色土（黄色土ブロックを多く含む）
13　淡灰褐色土（黄色土ブロックを多く含む）
14　淡灰褐色土（黄色土粒と炭化物を多く含む）
15　灰褐色土（黄色土ブロックを含む）
16　淡褐色土（黄色土ブロックを含む）
17　淡灰褐色土（黄色土ブロックを多く含む。貼床土）
18　淡橙褐色粘質土（灰褐色土ブロックを含む）
19　黄褐色土（黒灰色土ブロックを含む。しまりが悪い）
20　橙褐色粘質土（かたくしまる）
21　黄灰褐色土（黄色土ブロックと炭化物を含む）
22　暗灰褐色土（10cm大の黄色土ブロックを含む。炭化物を多く含む）
23　灰褐色土（２cm大の黄色土ブロックと炭化物を含む）
24　淡灰褐色粘質土（黄色土ブロックを多く含む。炭化物粒と焼土粒を含む）
25　灰褐色土（黄褐色土ブロックを多く含む）
26　淡黄灰色粘質土
27　橙灰褐色土粘土（貼床土）
28　淡黄褐色粘土ブロック
29　淡黄褐色粘土ブロック（灰褐色土を含む）
30　黄色土ブロック（橙褐色粘土ブロックを含む）
31　暗黄褐色粘土ブロック
32　暗灰褐色土（炭化物を含む）
33　暗黄褐色粘土ブロック
34　暗灰褐色土
35　暗灰褐色土（黄色パミスを含む）
36　灰褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
37　灰褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
38　灰褐色土
39　灰褐色土
40　淡灰褐色土（暗黄褐色土ブロックを含む）
41　暗黄褐色土ブロック
42　黄色土ブロック
43　淡灰褐色土（黄色土ブロックを含む）
44　淡灰褐色粘質土
45　淡黄褐色粘質土
46　淡褐色土
47　淡黄灰褐色土粘質土
48　淡褐色粘質土（黄色土ブロックを含む）
49　淡灰褐色土
50　淡灰褐色土（黄色土ブロックを含む）
51　攪乱

第389図　笠見第３遺跡SI18遺構図

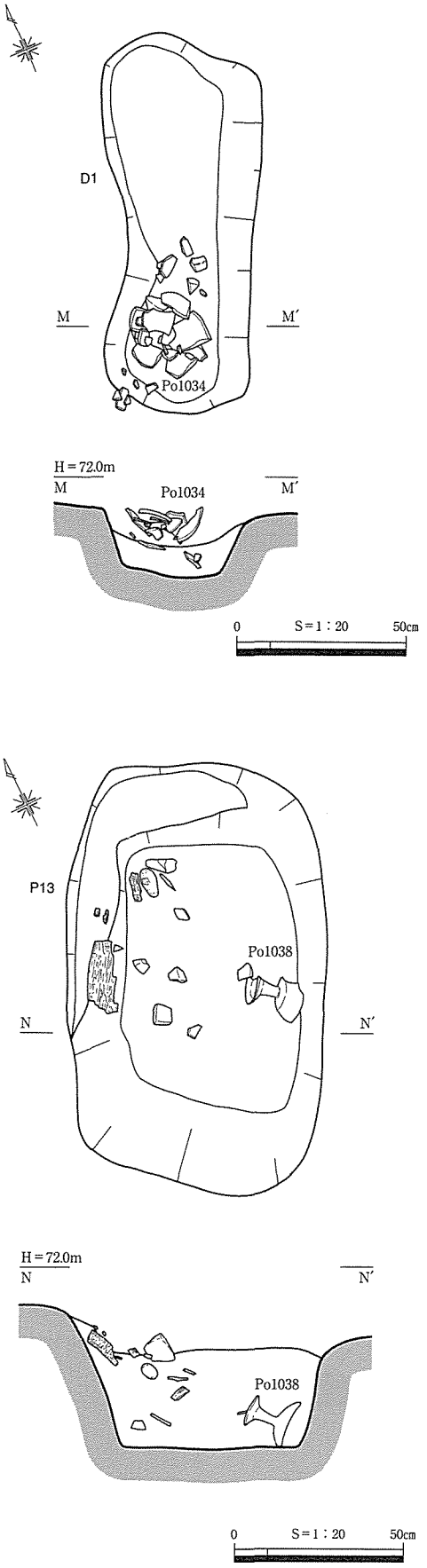
土器片が僅かに出土するのみである。土層断面では、４～10cmの厚さの板状のものを溝の中に立て、地山土を使って根固めをしたような痕跡が認められる。このことからこれらの溝は建物空間の間仕切りに関連するものと考えられる。D2とD3、D4とD5、D6とD7、D8とD9はそれぞれ対であるかのように近接しているが、すべてが同時に使われたのかどうかは不明である。

D1も溝幅の両側を地山土で固めた痕跡があるが、中央の幅は20cm以上あり、その中から土器片が折り重なって出土した。このことから他とは異なる用途を持つ溝であったといえる。

埋土は、５層に分層できた。Ⅲ状の堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は多量に出土している。図化したものは土師器甕Po1022～1035、小型丸底壺Po1036、椀Po1037、高杯Po1038～1045、砥石S66、鉄器茎部F43がある。ほとんどは埋土中からの出土であるが、床面P11北側でPo1022、D11上でPo1041が出土している。また、P13内からは、底面付近で高杯Po1038のほか、炭化材、土器片などの遺物が出土し、その多くが西側から流れ込んだ状況を示している。D1内では、上述のようにPo1034が潰れた状態で出土している。P1内ではS66、P11内の埋土中からはF43が出土している。

出土遺物等から、天神川Ⅶ～Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

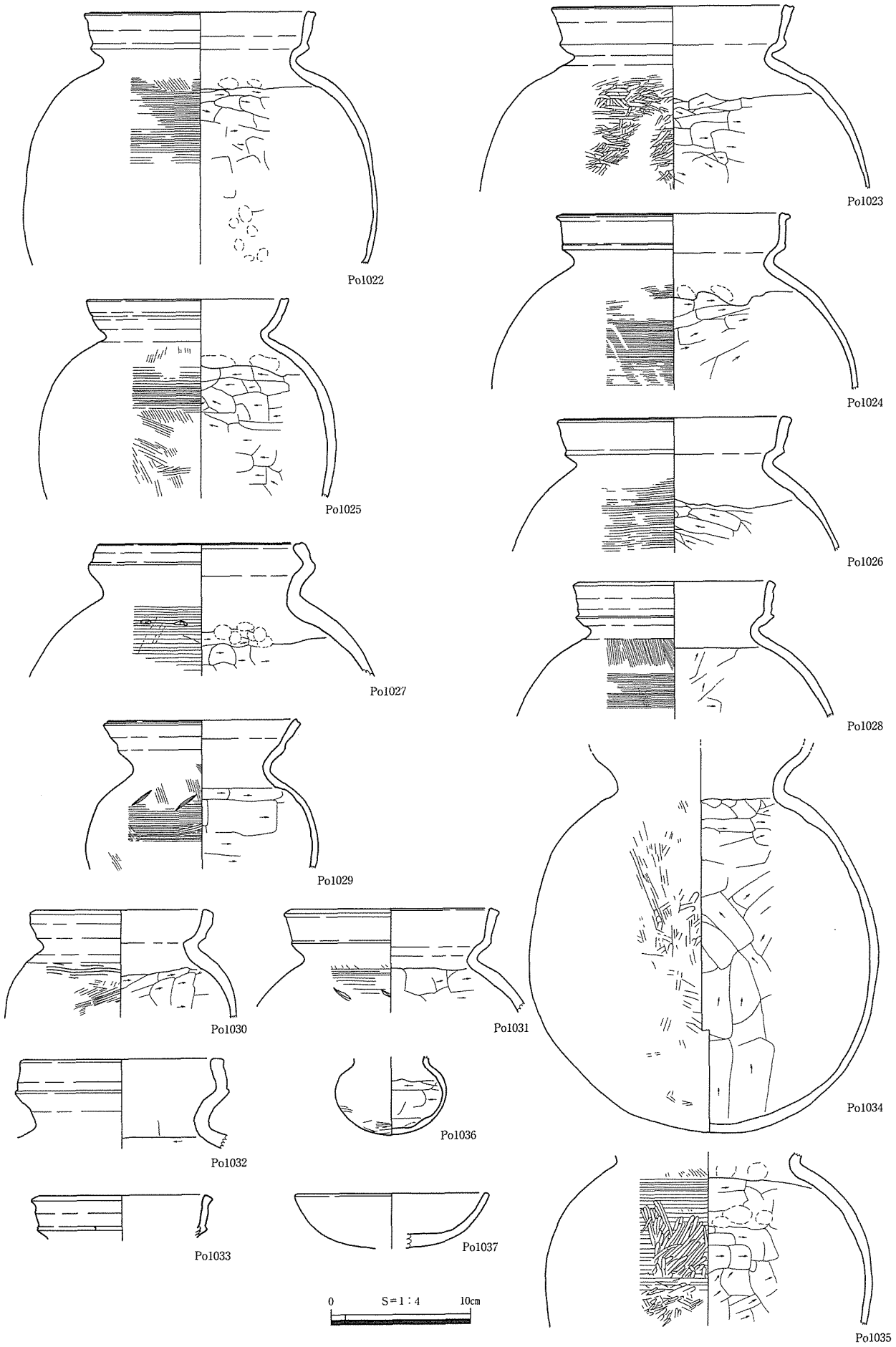


第390図　笠見第３遺跡SI18内D1・P13内遺物出土状況

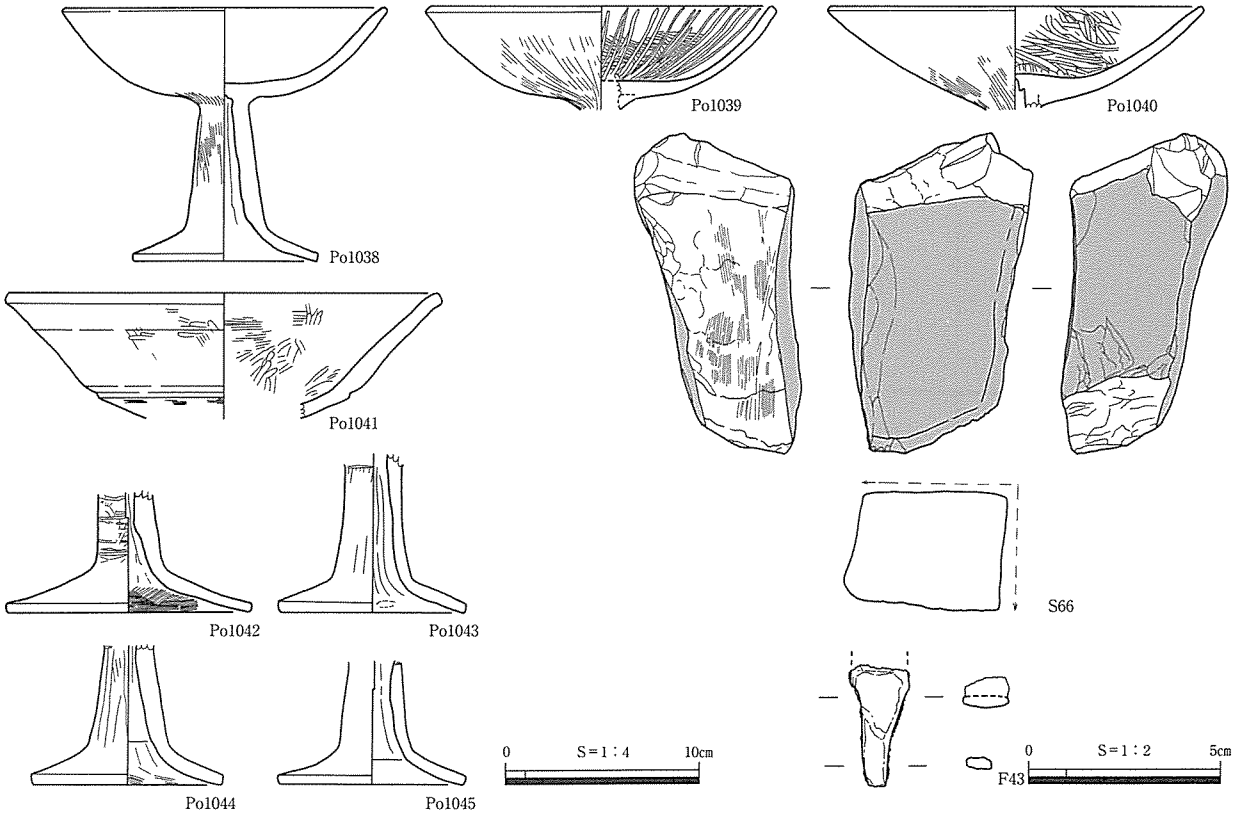
SI19（第393・394図、PL. 71・146・154）

調査区南東側、L9～M10グリッドの標高約71.1mのほぼ平坦面に立地する。西半分はSI18に掘り込まれる。北側隅はSI20を切る。北側約1mにSI21が位置する。

平面は隅丸方形を呈し、長軸6.7m、短軸6.2m、床面積37.5m²を測る。壁高は最大50cmである。壁溝は、幅５～17cm、深さ４～８cmを測り、攪乱を受けているが全周していたものと推測される。北西側のみ、SI18の貼床埋土下から、50cm内



第391図　笠見第３遺跡SI18出土遺物実測図(1)



第392図　笠見第３遺跡SI18出土遺物実測図(2)

側にもう１本壁溝を検出したことから、建て替えがあったものと考えられる。床面中央の直径2.5～３mの範囲が、皿状に浅く掘り窪められている。SI18と切り合う範囲の床面は、著しく破壊されている。

主柱穴はP2～6の５基で、P5とP6はSI18の貼床土の下から検出した。主柱穴間距離は、P2-３間から順に2.5m、2.4m、2.9m、2.8m、3.0mである。その他に、P7～９があるが、用途は不明である。P9は掘方の上面は大きいが、深くなる部分は直径10cm程度である。その小穴に落ち込んだ状態で土器が出土した。

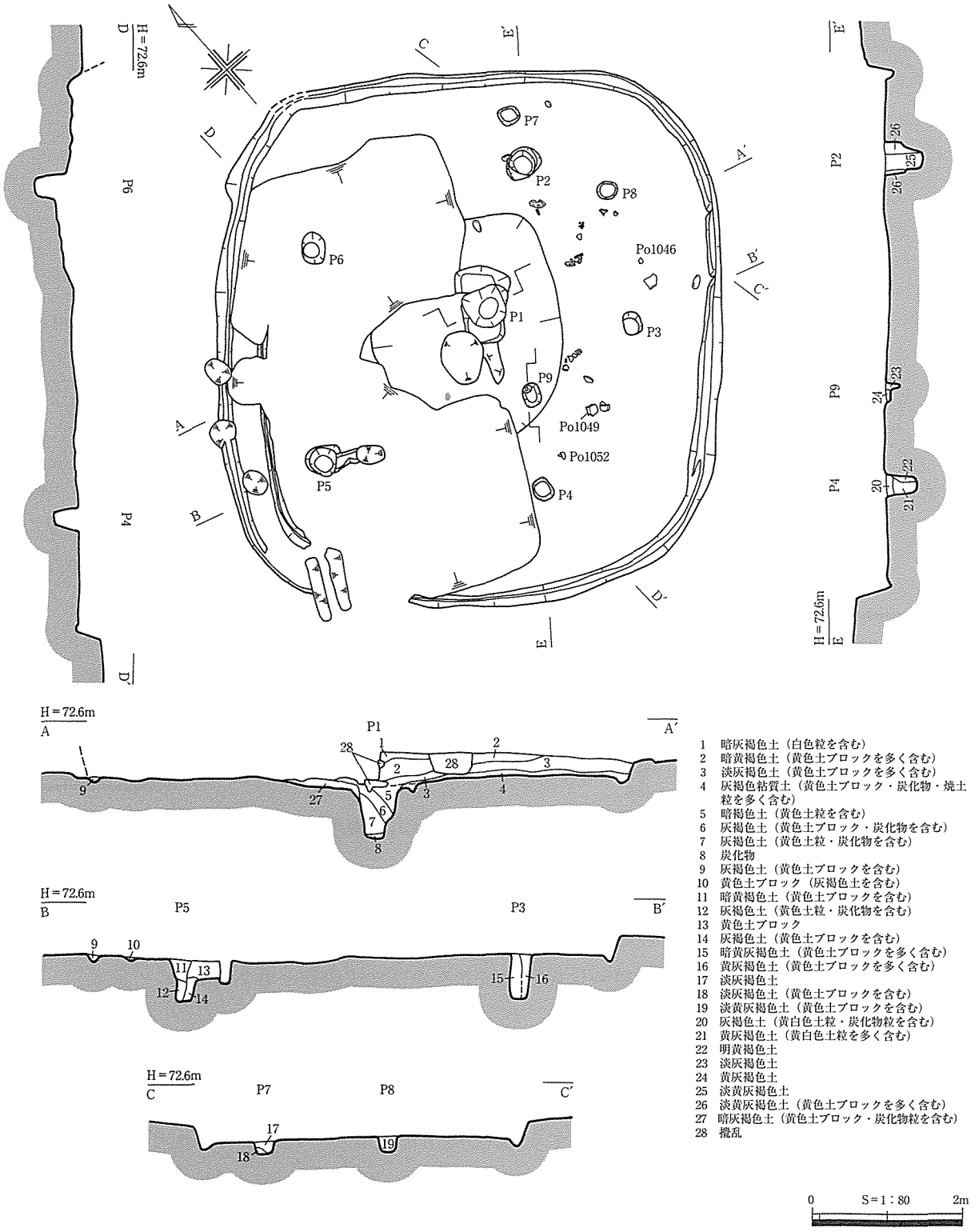
建物の中心からやや北東寄りに位置する中央ピットP1は、上段長方形、下段円形の二段掘りで、上段の深さは約10cm、下段の深さは約60cmである、埋土は流入土で、底面に炭

表119　笠見第３遺跡SI18ピット・溝一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	溝番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	42×40－83	主柱穴	D1	113×45－23	
P2	40×31－62	主柱穴	D2	95×19－18	
P3	45×35－77	主柱穴	D3	115×20－19	
P4	48×37－50	主柱穴	D4	90×15－12	
P5	40×32－78	建て替え前主柱	D5	90×25－10	
P6	29×28－46	建て替え前主柱	D6	95×25－12	
P7	45×41－56	建て替え前主柱	D7	56×15－13	
P8	45×38－63	建て替え前主柱	D8	75×20－12	
P9	35×30－31	穴	D9	75×28－16	
P10	70×55－ 9		D10	62×27－15	
P11	114×80－13	貯蔵穴か	D11	85×18－ 8	
P12	70×52－64	特殊ピット			
P13	125×78－44	貯蔵穴か			
P14	32×28－44				

表120　笠見第３遺跡SI19ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	102×75－73	中央ピット	P6	42×30－39	主柱穴
P2	49×39－51	主柱穴	P7	35×33－49	
P3	31×24－60	主柱穴	P8	24×23－17	
P4	30×25－43	主柱穴	P9	31×22－82	
P5	70×40－53	主柱穴			

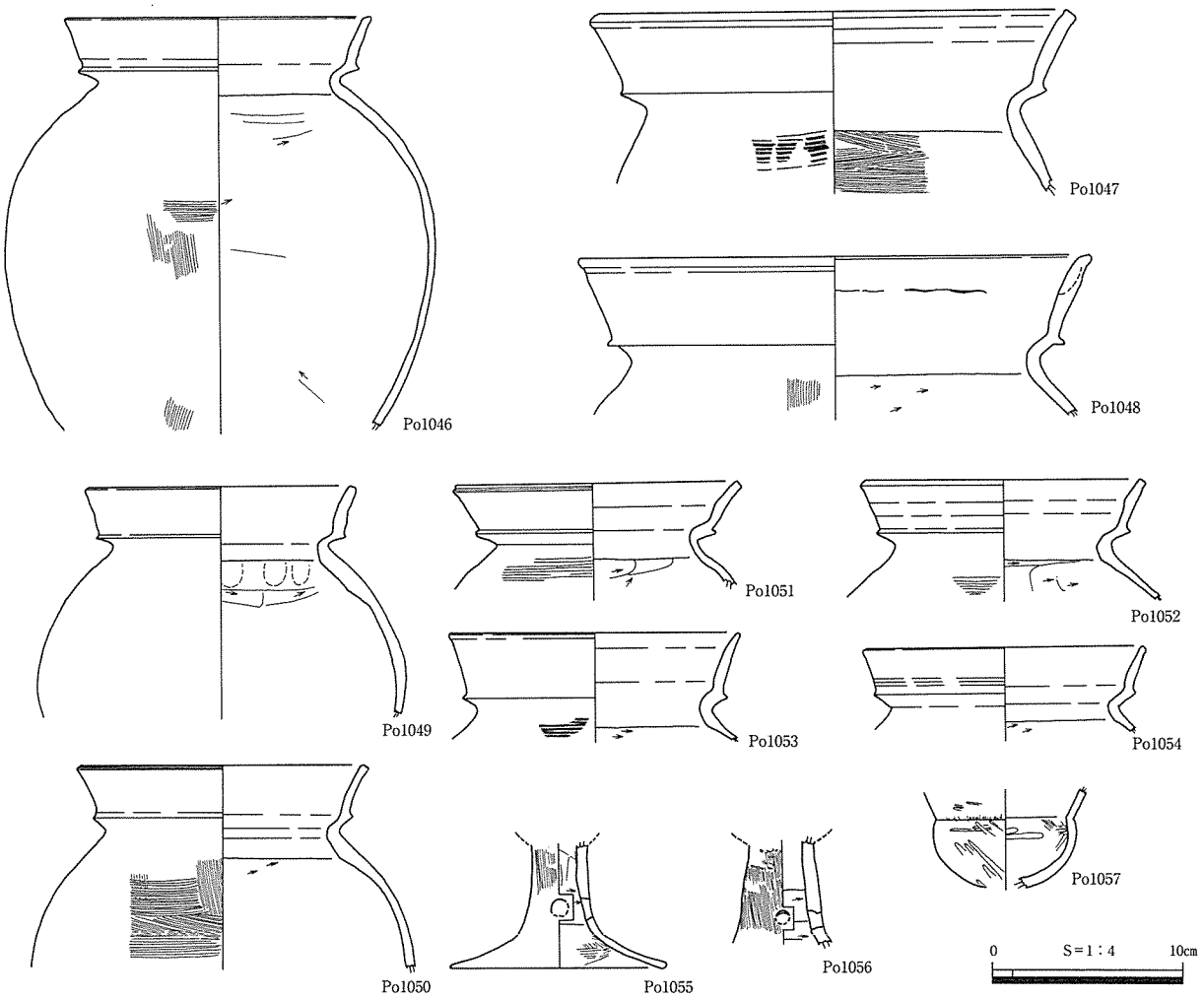


第393図　笠見第３遺跡SI19遺構図

化物が堆積していた。中央ピットP1の南西側で、直径10cmに満たない焼土痕を検出した。

埋土は、３層に分層できたが、床面付近から炭化した板材や丸太材の小片が出土していることと、埋土最下層に炭化物や焼土粒、地山土ブロックが多く含まれていたことから、焼失した可能性がある。

出土遺物には、図化できたものに土師器甕Po1046～1054、高杯Po1055・1056、小型丸底鉢Po1057な



第394図　笠見第３遺跡SI19出土遺物実測図

どがある。このうち、床面東半分でPo1046・1049・1052がばらばらの状態で出土している。また、貼床中でPo1054が出土している。その他は、埋土中からの出土である。

出土遺物等から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

SI21（第87・395～397図、PL. 14・146・156）

調査区南東側、L9グリッドの標高約72.1mの平坦な地形上に立地する。SI20とSK3を掘り込む。北側にSI14、南側にSI19がある。北側は先行するSK3と埋土が類似していたために掘り込んでしまい、正確な掘方を検出できていない。

床面で二重に検出した壁溝のうち、内側の溝が埋め戻されていたことから、拡張を伴う建て替えが１度行われていることが判明した。建て替え後をSI21－１、建て替え前をSI21－２と呼称する。

SI21－１の平面は隅丸長方形を呈し、長軸4.34m、短軸3.83m、床面積12.9m²を測る。壁高は約20cmである。壁溝の幅は10～15cm、深さ３～５cmで、北側、南側、西側で途切れる。主柱穴はP1、P2の２基で、柱穴間距離は1.4mである。主柱穴間の床面上に径40～50cmの範囲で炭片が散らばっていたが、その下及び周辺でも焼土面は検出していない。

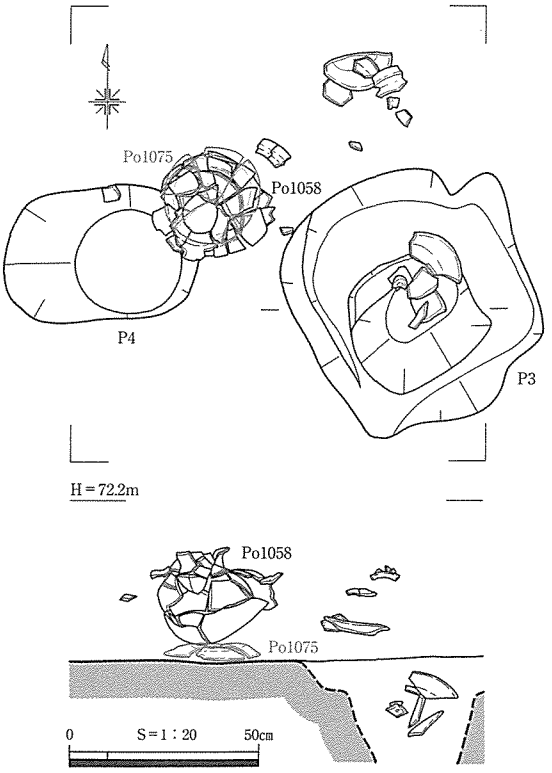
主柱穴を結ぶ線と南東側の壁溝との間に特殊ピットP3がある。平面形が隅丸方形の二段掘りで、上段が（67×62－10）cm、下段が（35×34－30）cmである。埋土は炭化物粒と地山土ブロックを含む

単一層であった。ピットの上端から中位まで、土師器高杯Po1076が落ち込んだような状態で出土した。

P1・P2の南東側にそれぞれP5・P4、北西隅にP9、SI21－２の壁溝を切るP6・P7・P8、炭片散布範囲を切るP11、P12がある。このうちP4・P8・P10は比較的深く、補助柱穴であろう。その他の用途は不明である。拡張後のSI21－１の範囲は、貼床を施されていない。

SI21－２は、平面隅丸長方形を呈し、長軸3.5m、短軸３m、床面積9.6㎡を測る。壁溝は幅10㎝、深さ４㎝である。SK3の埋土にかかる範囲に、地山土を用いた貼床が施されており、厚いところで30㎝以上あった。この貼床土の下層面で、SI20の主柱穴を検出した。

埋土は埋め戻されたものではなく、自然堆積と考えられる。土器の破損が上にいくほど大きいのもそのためであろう。



第395図　笠見第３遺跡SI21遺物出土状況図

表121　笠見第３遺跡S21ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P1	57×55－44	主柱穴	P7	37×31－15	
P2	33×28－29	主柱穴	P8	26×23－29	補助柱穴？
P3	67×62－41	特殊ピット	P9	18×18－11	
P4	52×35－20	補助柱穴？	P10	24×18－20	補助柱穴？
P5	32×26－ 9		P11	23×19－ 9	
P6	44×34－10.		P12	19×13－11	

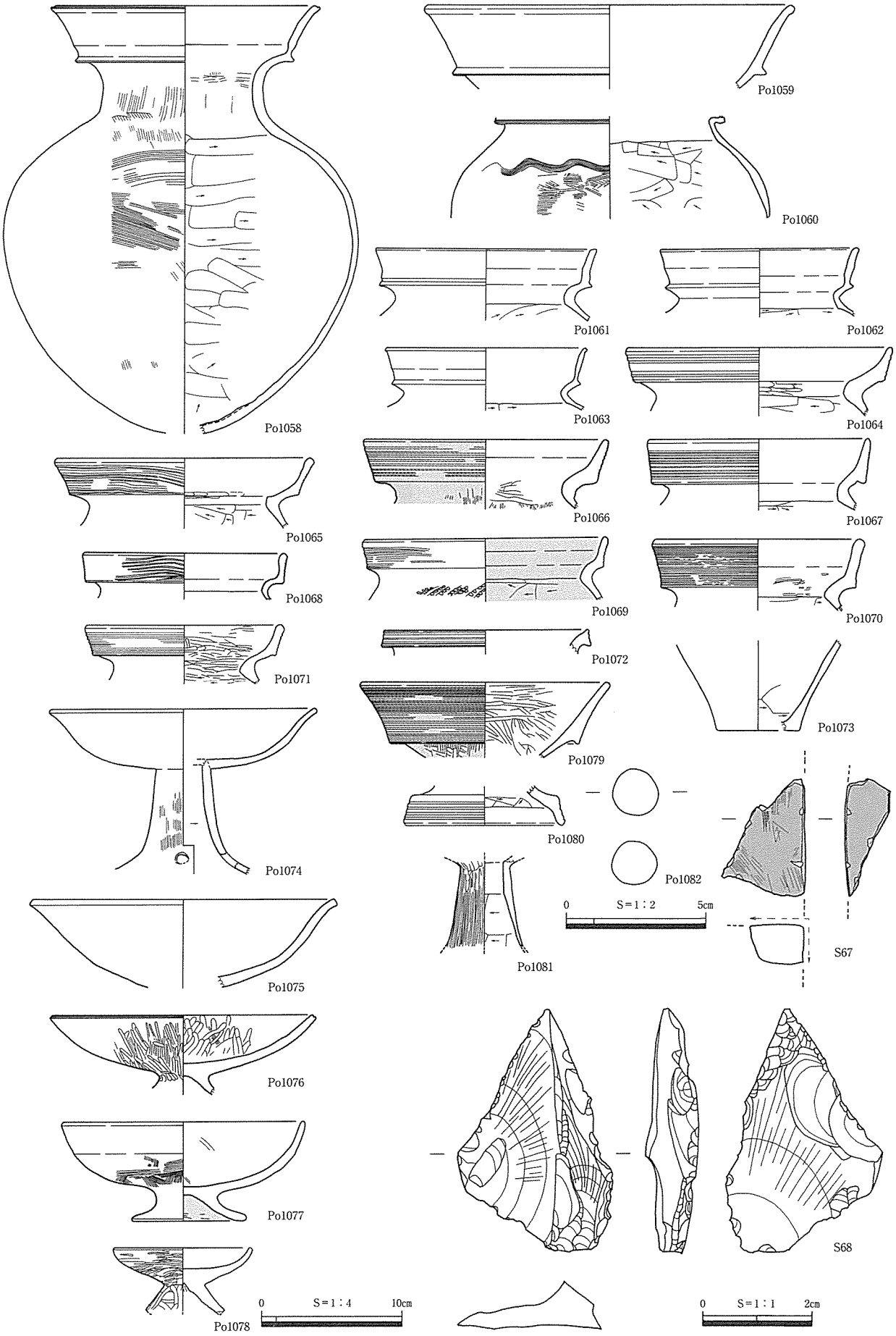
出土遺物は、埋土及び床面から土器片を中心に多量に出土したが、図化したものは土師器壺Po1058・1059、甕Po1060～1063、高杯Po1074・1075・1081、低脚杯Po1076・1077、小型高杯器台Po1078、弥生土器甕Po1064～1072、底部Po1073、鼓形器台Po1079・1080、小型無穿孔土玉Po1082、砥石片S67、ドリル状石器S68、敲石S69がある。このうち、建物中央やや南側の地点で、床面に伏せられ脚部の外れた高杯Po1075の上に、甕Po1058が直立した状態で出土した。建物の埋没後に穴を掘って埋めた可能性も考えたが、土層断面にそれらしい痕跡は認められず、何よりも高杯を伏せた床面が荒らされていなかったので、建物の廃絶時に意図的に置き残したものと判断した。その他、床面からPo1082、東壁際でS69が出土している。その他は、埋土中からの出土である。

出土遺物等から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

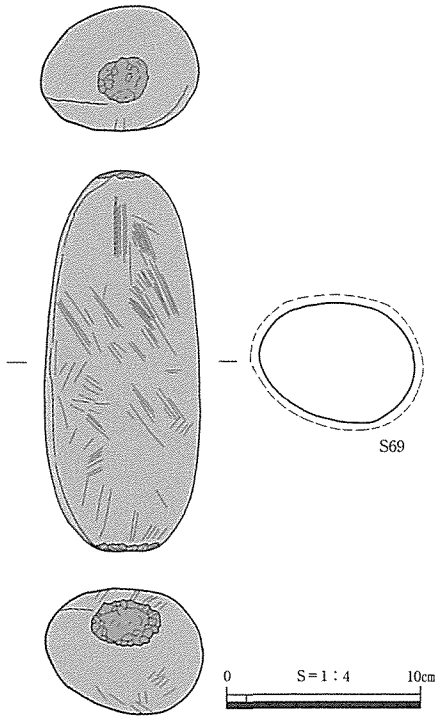
SI22（第398・399図、PL. 71・147・156）

調査区南東側、M8グリッドに位置し、標高71.8～72.0mのほぼ平坦面に立地する。

平面は隅丸長方形である。長軸4.82m、短軸4.18mを測り、面積は約16.9㎡である。周溝は幅10～15㎝、深さ１～７㎝程度で、ほぼ全周する。壁高は、最も残りのよい北西部で最大34㎝である。



第396図　笠見第３遺跡SI21出土遺物実測図(1)



第397図　笠見第３遺跡SI21出土遺物実測図(2)

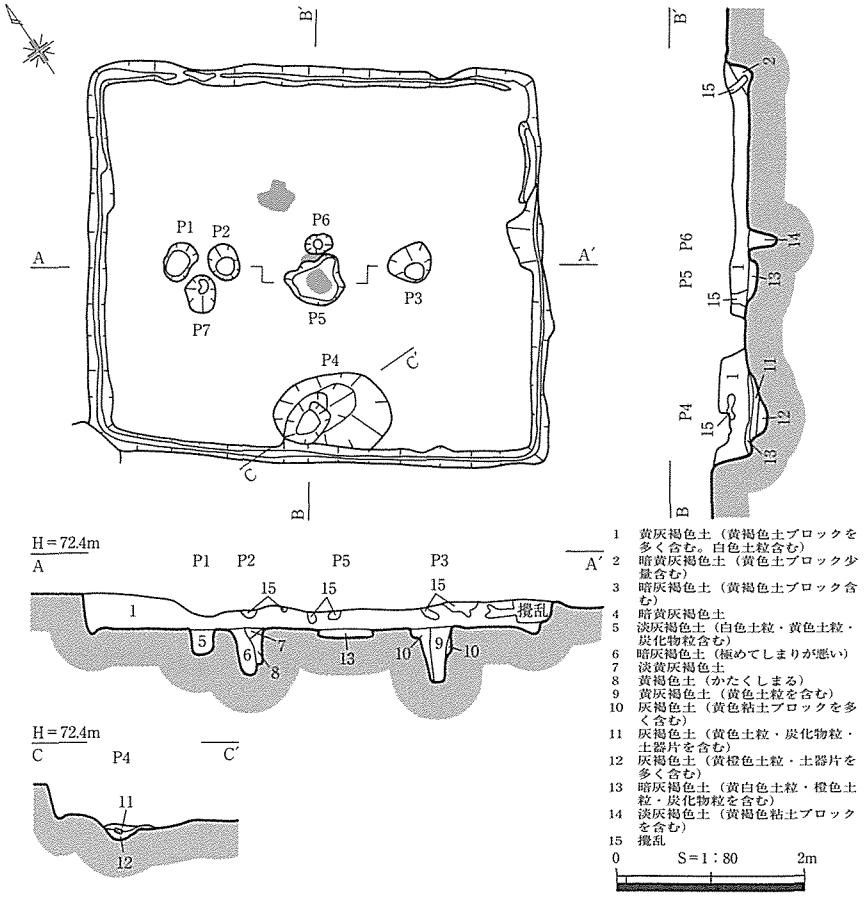
ピットは７基検出した。主柱穴はP2、P3の２本柱であると考えられる。主柱間距離は約２mである。P2の第６層は柱痕で、推定される柱の直径は約30cmである。

中央ピットはP5で、ピット内の底面中央及び肩部には被熱による焼土が認められる。埋土中にも多く炭化物粒を含んでいるため、火を使用した炉跡と考えられる。焼土面は、他にP6の北側にも不整形なものが１箇所認められる。

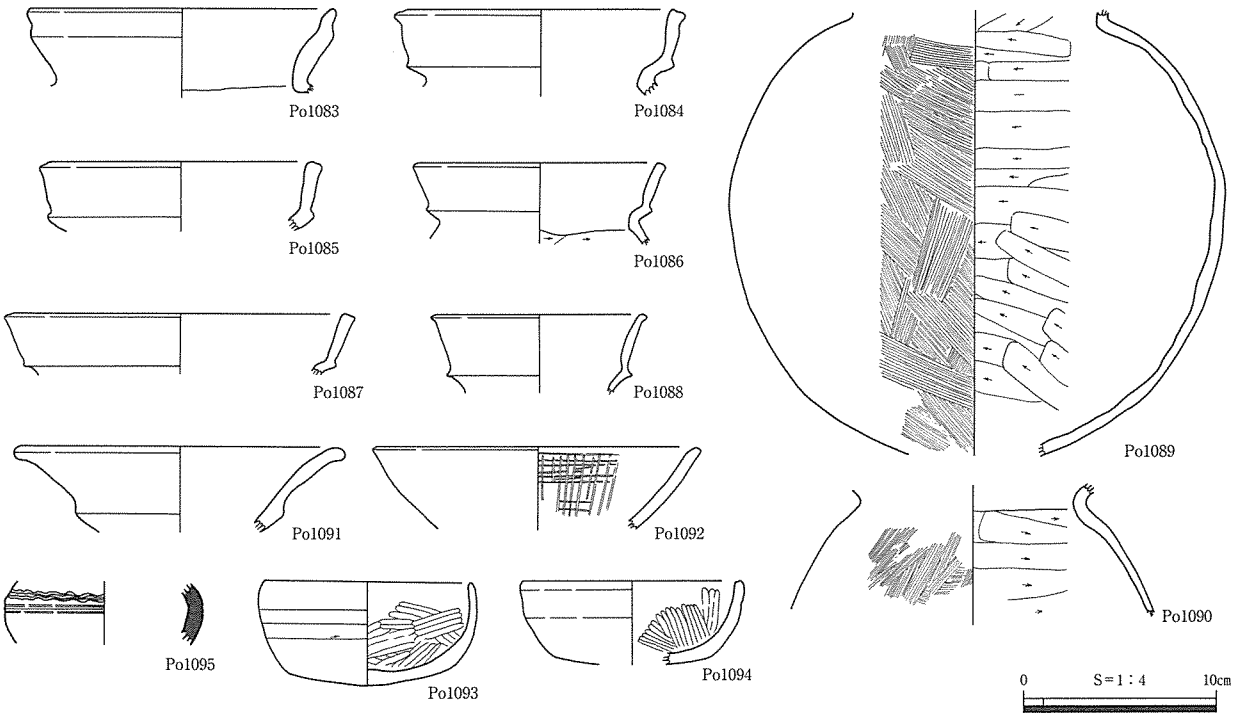
P4はいわゆる特殊ピットで、埋土中から土器細片が多く出土し、このうち、後述するPo1092が出土している。埋土中層からは、10cm大の礫も確認された。埋土は黄色土粒を含む

表122　笠見第３遺跡SI22ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	40×29－27		P5	53×50－７	中央ピット、炉跡
P2	38×32－65	主柱穴	P6	29×21－30	
P3	47×39－70	主柱穴	P7	37×30－10	
P4	121×77－24	特殊ピット			



第398図　笠見第３遺跡SI22遺構図



第399図　笠見第３遺跡SI22出土遺物実測図

灰褐色土主体であり、上層には炭化物粒も含まれている。

その他にもピットが検出されているが、用途は不明である。

建物埋土は２層に分層でき、黄灰褐色土主体である。自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、図化できたものに土師器甕Po1083～1090、高杯Po1091・1092、椀Po1093・1094、須恵器瑳Po1095がある。Po1092がP4内から出土した他は、いずれも埋土中からの出土である。

出土遺物等から天神川Ｘ期、古墳時代後期初頭ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小谷）

SI25・47（第400・401図、PL. 21・72・156）

調査区東側のL7・８グリッドに位置し、南東部の谷側へ緩やかに傾斜する標高71.1～71.5mの緩斜面上に立地する。SI25は、北側のSI47を掘り込んでいる。

SI25は、遺存状態は比較的よく、平面は隅丸長方形を呈し、長軸5.52m、短軸4.96m、床面積は約20.9㎡を測る。壁高は、最も遺存状態のよい南西部で54cmを測る。壁際には、幅９～17cm、深さ５cm程度の壁溝が全周する。

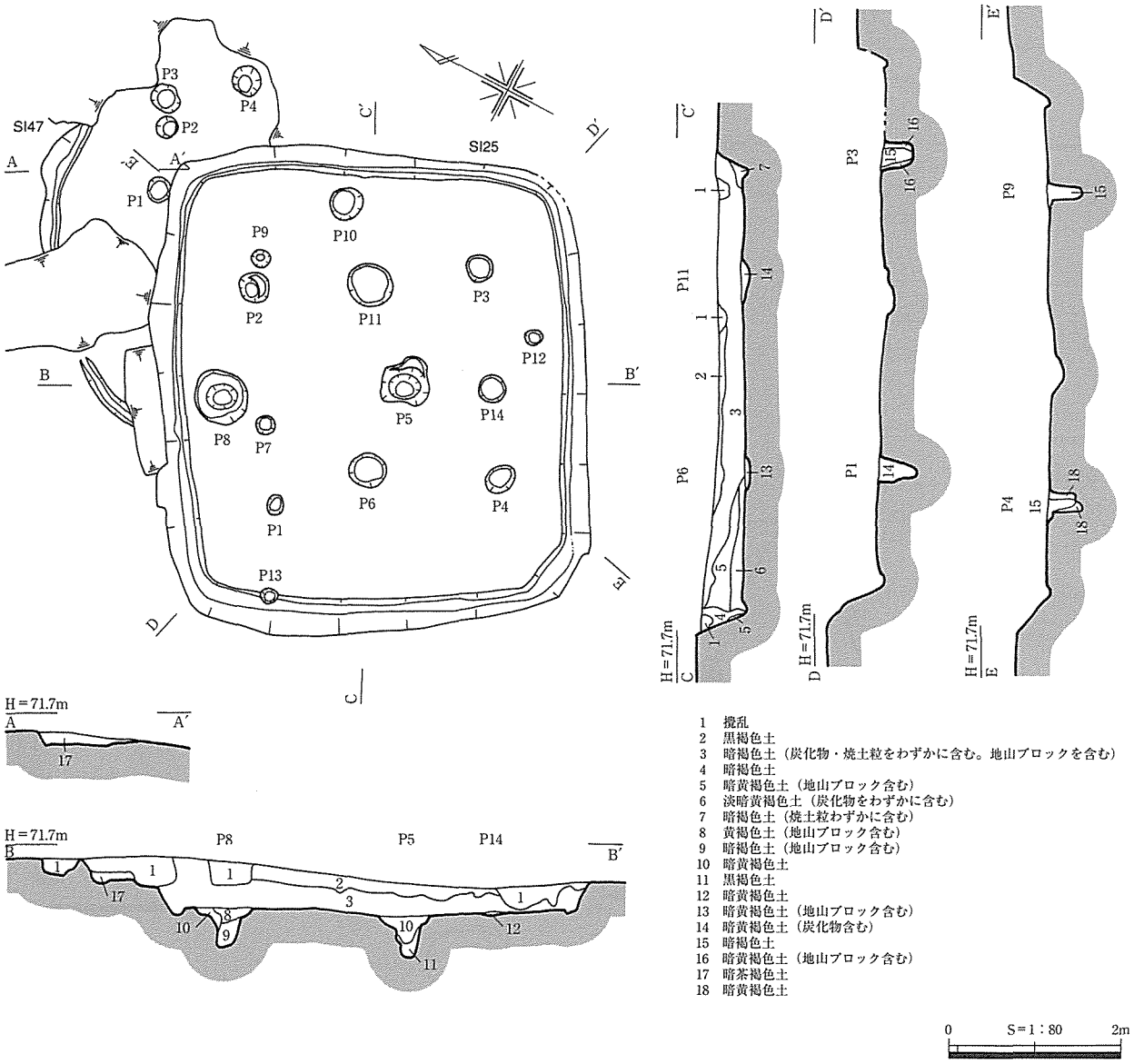
ピットは全部で14基検出した。主柱穴はP1・９・３・４である。主柱穴間距離は、P1-P9間からそれぞれ2.9m、2.7m、2.5m、2.7mである。P6・11・14は非常に浅いものであるが、位置的に補助柱穴の可能性がある。

床面中央やや東寄りに、中央ピットP5がある。主柱穴に比べて浅い。また、西側壁寄りに、平面円形で二段に掘り込まれるP8がある。初期的な特殊ピットと考えられる。

その他ピットを検出したが、P2・10はSI47の柱穴の可能性がある。

埋土は９層に分層できた。埋土から判断して概ね自然堆積による流れ込みであると考えられる。

遺物は、図化したものに土師器甕Po1096～1108、高杯Po1109～1111、鼓形器台Po1112・1113、小型甕Po1114、敲石S70、鉄鏃F47がある。このうち、北側床面の３cm程度上からF47が出土している。そ



第400図　笠見第３遺跡SI25・47遺構図

の他は、埋土中からの出土である。

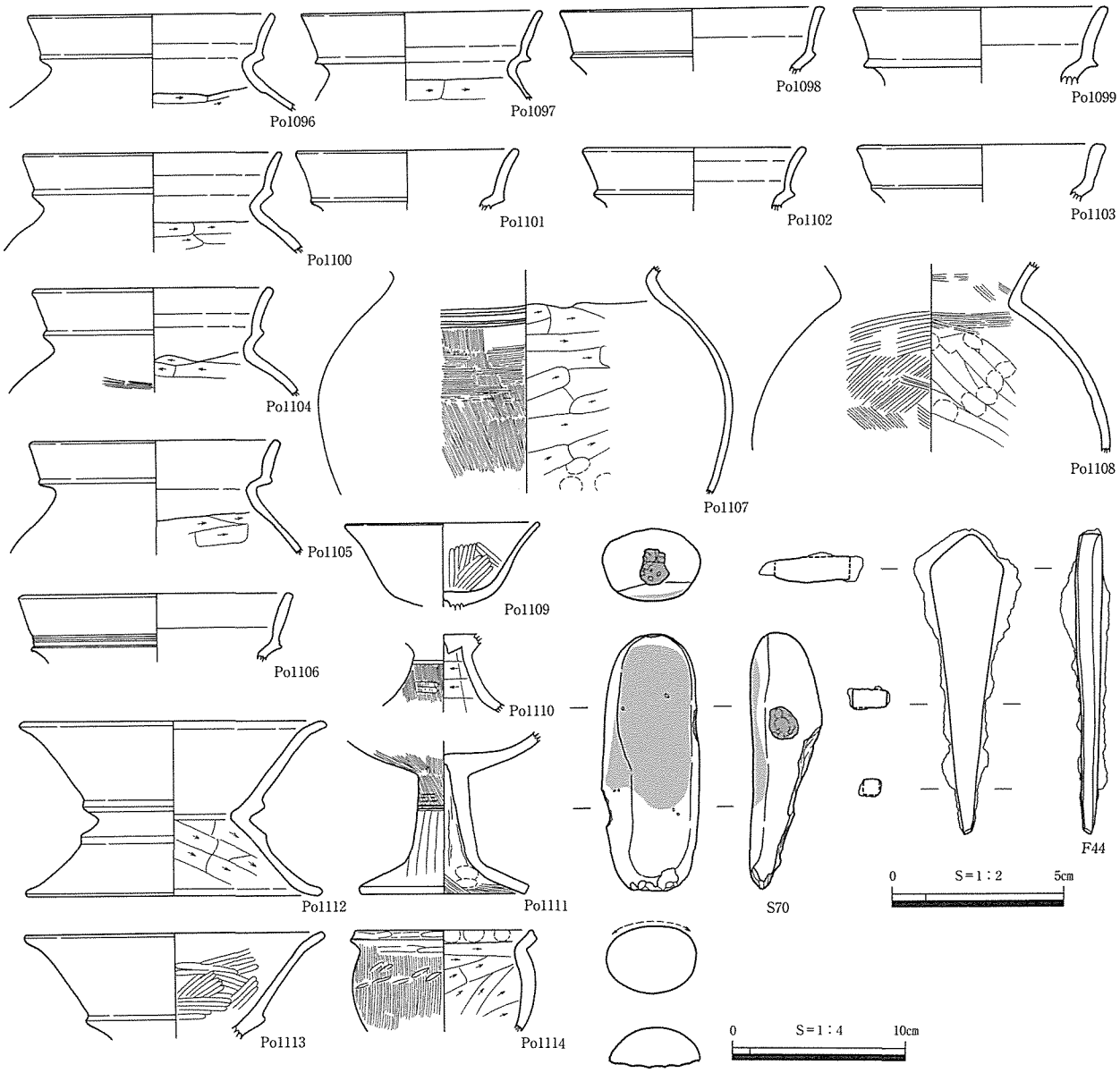
出土遺物から、天神川Ⅱ～Ⅲ期、古墳時代前期前葉から中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。

表123　笠見第３遺跡SI25・47ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
SI25 P1	27×19－45	主柱穴	SI25 P10	38×37－26	SI47主柱穴
SI25 P2	35×34－55	SI47主柱穴	SI25 P11	54×50－ 6	
SI25 P3	33×30－36	主柱穴	SI25 P12	18×15－ 8	
SI25 P4	29×21－49	主柱穴	SI25 P13	18×16－22	
SI25 P5	66×56－49	主柱穴	SI25 P14	31×30－ 5	
SI25 P6	42×40－ 7		SI47 P1	28×27－36	主柱穴
SI25 P7	23×21－23		SI47 P2	24×22－20	
SI25 P8	62×62－47		SI47 P3	37×33－51	
SI25 P9	23×20－35	主柱穴	SI47 P4	35×33－71	主柱穴

SI47は、中央部から南側にかけてはSI25に掘り込まれているため、平面形は定かではないが、現存する部分から判断して円形を呈するものと考えられる。残存床面積は約5.2㎡である。周溝は残存する部分で検出され、幅10～17cm、深さ３～６cmを測る。壁高は残りの良い北側で約22cmを測る。

床面上でピットを４基検出した。その内、柱穴と考えられるものはP1、P4である。SI25で検出されたP2、P10もこの住居に伴う可能性がある。また、P3も比較的大きなピットであるが、用途は不明で



第401図　笠見第３遺跡SI25出土遺物実測図

ある。それぞれの埋土は暗褐色系土である。

埋土は単層である。

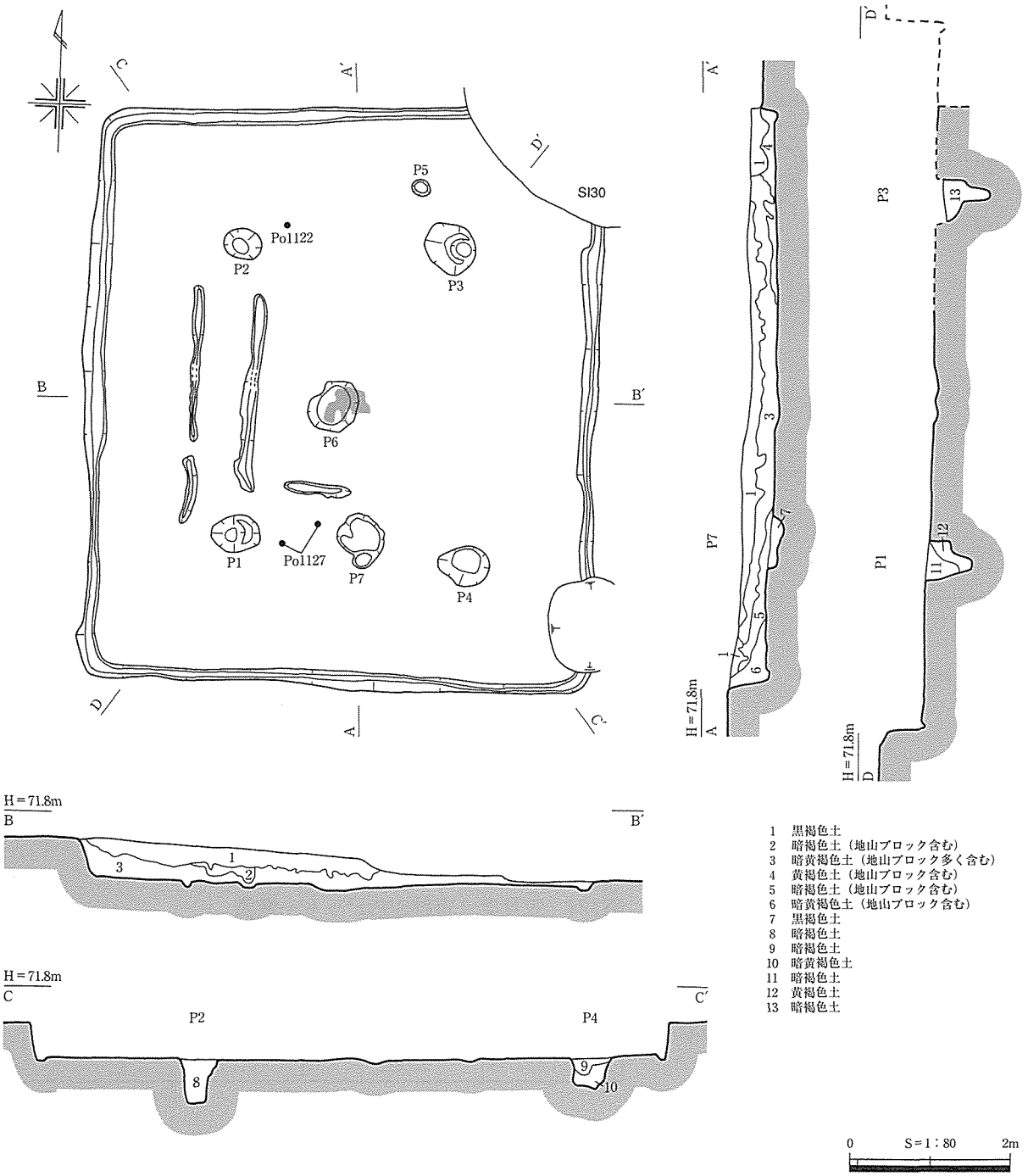
遺物は出土していないが、形態的特徴から弥生時代の竪穴住居跡と考えられる。（小谷）

SI29（第402・403図、PL. 73・74・147・157）

調査区東寄りのK8グリッド周辺、標高71.4m付近の緩斜面に立地する。北東隅はSI30と重複関係にあり、当遺構が、SI30の埋土を掘り込む。

平面長方形を呈す竪穴住居跡である。長軸7.1m、短軸6.3mで床面積が40.1㎡と当遺跡では最大の住居跡である。遺存状況は西側と東側が良好で、壁高は最深部で52㎝である。壁溝は幅７～28㎝、深さ2.9～10.5㎝の溝が全周する。

床面で７基のピットを検出した。このうち主柱穴と考えられるのは、P1、P2、P4、P5で、４本柱の構造とみられる。柱間はP1-P2間から順に3.7m、2.75m、3.9m、3.0mである。柱間の距離が長いことから、支柱穴の検出に努めたが、ピットは検出されなかった。



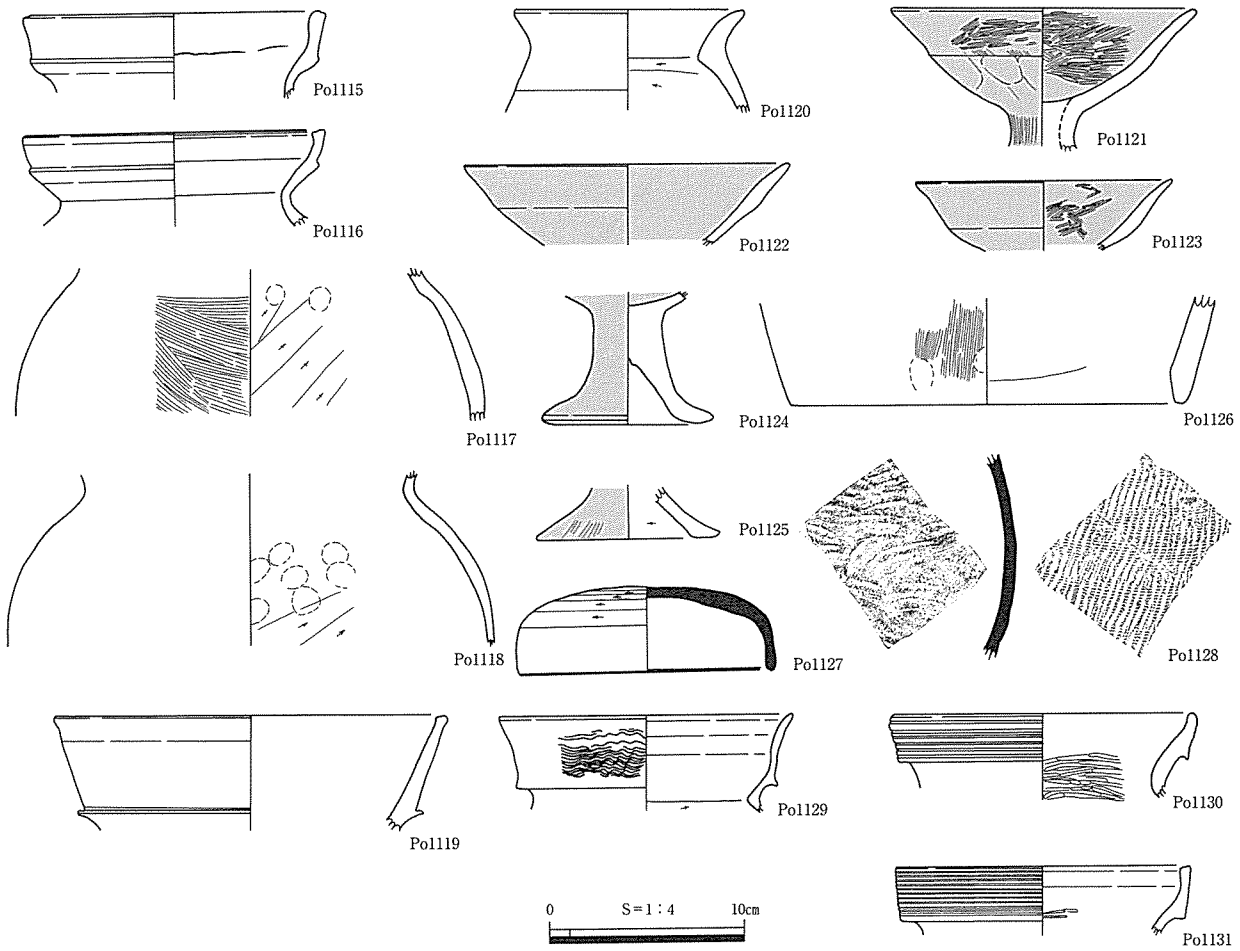
第402図　笠見第３遺跡SI29遺構図

中央には浅く皿状にくぼむ炉跡P6があり、底面から肩部にかけ焼土面が認められた。炉跡内の埋土は住居埋土と同じで、灰や焼土は認められなかった。その他のピットは浅く、柱穴とは考え難い。

P1～P2の間とP1～P5の間で浅い小溝を検出した。溝幅は10～18cm、深さ3.4～8.6cmと浅く、埋土は住居埋土と類似する。西側は２条で、南側は１条のみである。主柱穴間にて検出した溝の性格については、主柱穴との位置関係からみて、住居の拡張とは考え難く、広い屋内を区画するための仕切り溝の可能性が考えられる。

埋土は６層に分層が可能で、壁際から徐々に埋没していることから、自然堆積土とみられる。

出土遺物には、図化したものに土師器甕Po1115～1120、高杯Po1121～1125、竈片Po1126、須恵器杯



第403図　笠見第３遺跡SI29出土遺物実測図

蓋Po1127、甕片Po1128、弥生土器甕Po1129～1130がある。大半の遺物は床面より上のレベルで出土しているが、床面直上P1-P7の間でPo1127が、P2の脇でPo1122が出土している。

表124　笠見第３遺跡SI29ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	61×45－55	主柱穴	P5	27×22－20	主柱穴
P2	48×38－79	主柱穴	P6	70×55－８	炉跡
P3	66×61－65		P7	70×50－16	
P4	64×52－33	主柱穴			

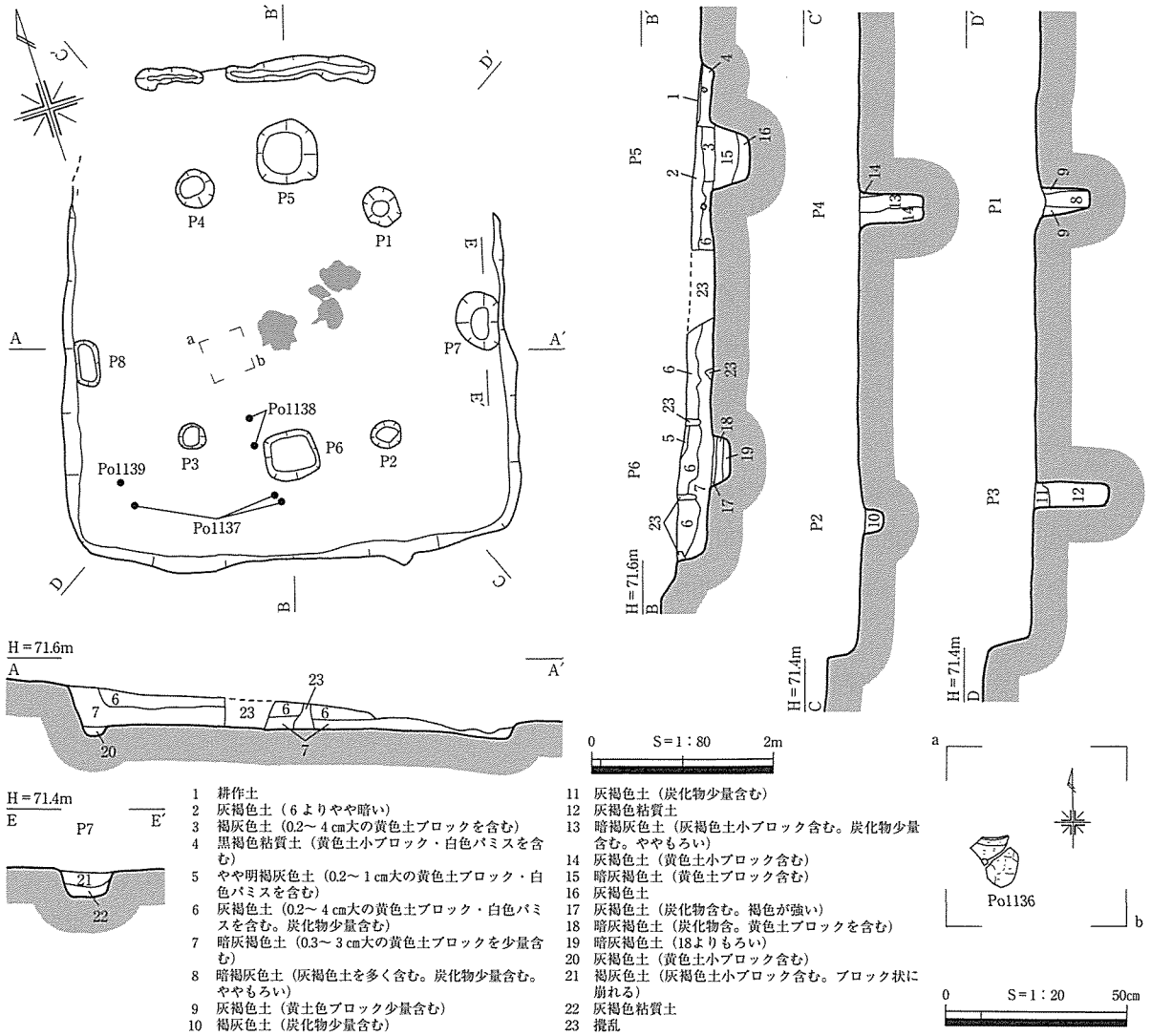
出土した須恵器から、TK10併行期、古墳時代後期中葉ごろの竪穴住居跡とみられる。（小山）

SI31（第404・405図、PL. 74・75・147・157）

調査区中央東側のK6・７グリッドに位置する。標高約70.9～71.3mの南西から北東に緩やかに傾斜する斜面に立地し、南側約2mにはSI32がある。

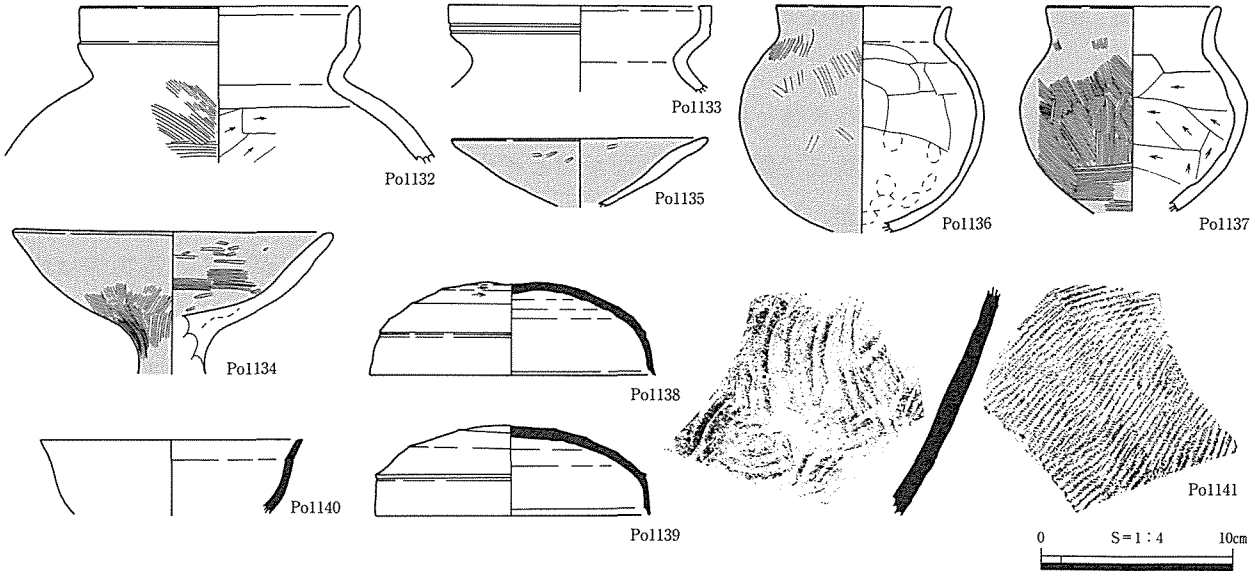
北側及び東側は耕作のため、部分的に掘削されている。現存する部分から判断して方形を呈するものと考えられる。規模は、北東から南西長軸5.6m、北西から南東短軸5.1m、床面積は推定23.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態がよい南西壁で最大43cmを測る。北側のみに幅20cm前後、深さ８～15cmを測る壁溝が検出された。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.5m、2.18m、2.3m、2.1mである。P1、P4には柱痕があり、復元される柱径は約18cmである。



1　耕作土
2　灰褐色土（６よりやや暗い）
3　褐灰色土（0.2～４㎝大の黄色土ブロックを含む）
4　黒褐色粘質土（黄色土小ブロック・白色パミスを含む）
5　やや明褐灰色土（0.2～１㎝大の黄色土ブロック・白色パミスを含む）
6　灰褐色土（0.2～４㎝大の黄色土ブロック・白色パミスを含む。炭化物少量含む）
7　暗灰褐色土（0.3～３㎝大の黄色土ブロックを少量含む）
8　暗褐灰色土（灰褐色土を多く含む。炭化物少量含む。ややもろい）
9　灰褐色土（黄土色ブロック少量含む）
10　褐灰色土（炭化物少量含む）
11　灰褐色土（炭化物少量含む）
12　灰褐色粘質土
13　暗褐灰色土（灰褐色土小ブロック含む。炭化物少量含む。ややもろい）
14　灰褐色土（黄色土小ブロック含む）
15　暗灰褐色土（黄色土ブロック含む）
16　灰褐色土
17　灰褐色土（炭化物含む。褐色が強い）
18　暗灰褐色土（炭化物含。黄色土ブロックを含む）
19　暗灰褐色土（18よりもろい）
20　灰褐色土（黄色土小ブロック含む）
21　褐灰色土（灰褐色土小ブロック含む。ブロック状に崩れる）
22　灰褐色粘質土
23　撹乱

第404図　笠見第３遺跡SI31遺構図



第405図　笠見第３遺跡SI31出土遺物実測図

４つの主柱穴以外に用途不明の４つのピットを検出した。P5・６は相対する位置関係で、構造柱の可能性もあるが、P6の中層～下層には炭化物が混じり、土器細片も数点出土し、他の柱穴とは埋土の堆積状況が異なる。P7、P8はその位置等から判断し、特殊ピットと考えられる。中央ピットは存在しないが、中央付近に不整形の焼土跡を３カ所検出した。

表125　笠見第３遺跡SI31ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	46×38－65	主柱穴	P5	73×67－45	
P2	36×31－24	主柱穴	P6	58×55－23	
P3	32×29－80	主柱穴	P7	65×47－35	
P4	42×42－76	主柱穴	P8	52×26－12	

埋土は、後世の耕作により攪乱を受けている部分もあるが、概ね南からの流入による自然堆積であると考えられる。

出土遺物のうち、図化したものは土師器甕Po1132・1133、高杯Po1134・1135、短頸壺Po1136・1137、須恵器杯蓋Po1138・1139、高杯Po1140、甕片Po1141である。このうち、床面では中央やや西側からPo1136、P6脇でPo1138、南西隅付近でPo1139、Po1137は離れた状態で、また、P8内でPo1135が出土した。

出土須恵器から、TK10併行期、古墳時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小谷）

SI32・56（第406～408図、PL. 75・147・158）

調査区東側のL6グリッドにあり、標高70.6～70.8mの緩やかに南側へ傾斜する斜面部に立地する、２棟重複して検出された竪穴住居跡である。SI32北東側は、笠見３号墳により掘削されている。

SI32は、SI56に切られている。比較的遺存状態はよく、平面は、方形を呈す。規模は、南北5.8m、東西5.94m、床面積33.5㎡である。残存壁高は、最も遺存状態がよい北西壁で最大0.5mを測る。壁際には幅14～23cm、深さ５～９cm前後の壁溝がほぼ全周している。

主柱穴はP1からP4で、主柱穴間距離は、P1-P2間から順に、3.4m、3.4m、3.5m、3.4mである。

また、主柱穴間には、やや規模が小さいP6からP9がある。配置から、補助柱穴と考えられる。

住居中央には、不整楕円形の中央ピットP5が掘り込まれている。主柱穴同様に深く掘りこまれている。

埋土は、炭化物をわずかに含む８層と地山粘質土を含む18層からなる。断面から推定すると、下部は粘質土で埋め戻し、住居廃絶時まで開口していたものと考えられる。

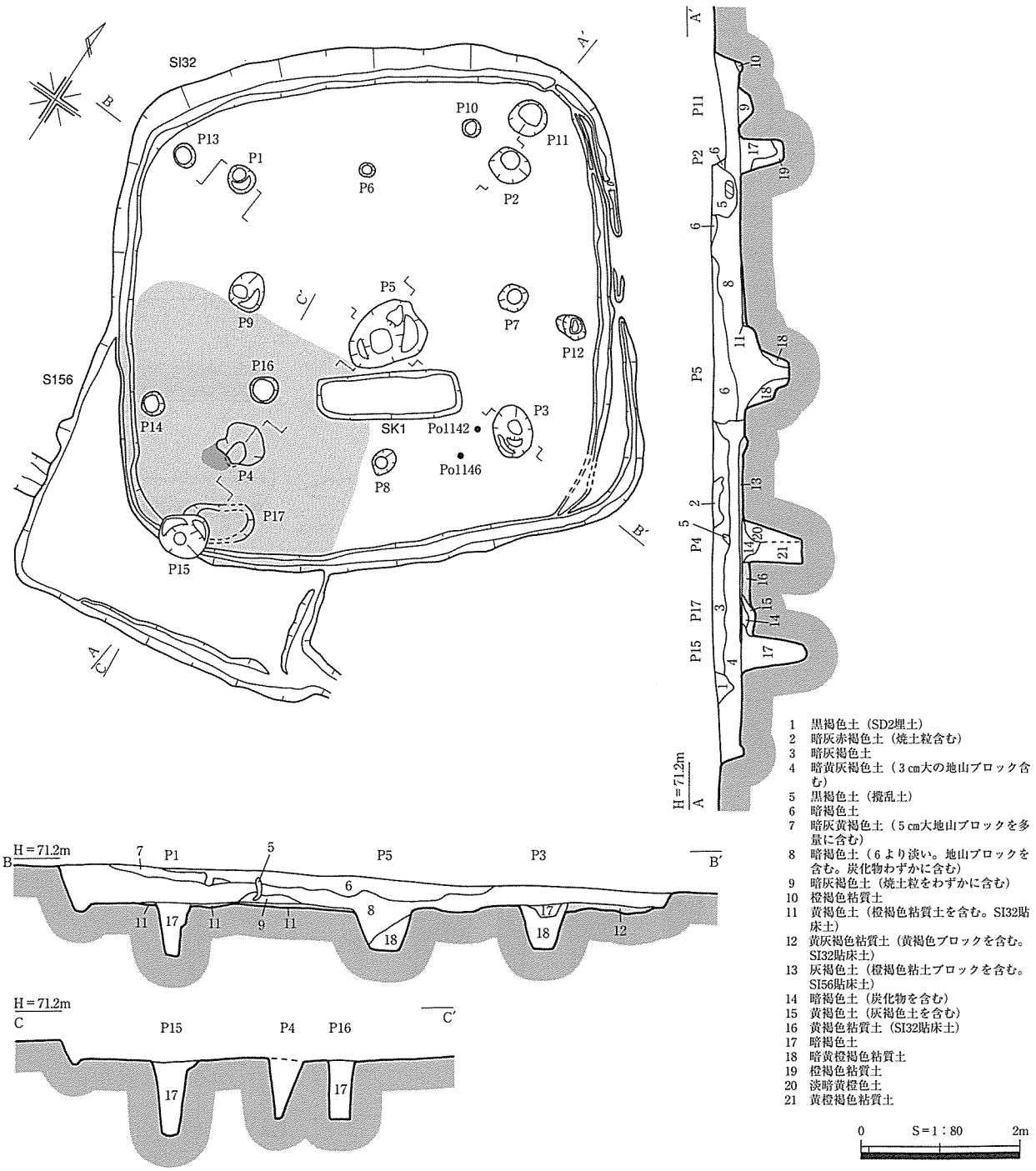
その他に、P10からP14があるが、用途は不明である。

中央ピット東側には、（180×61－６）cmを測る平面長方形の住居内土坑SK1がある。遺物等は出土しておらず、用途は不明である。

床面の南側を中心に、11、12、16層の貼床が認められたが、範囲は明確ではない。焼土面は認められなかった。

埋土は計２層で、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、図化できたものに土師器壺Po1142・1143、甕Po1144～1148、高杯Po1155・1156・1158、小型高杯型器台Po1157・1163、鼓形器台Po1160、小型丸底壺Po1162、低脚杯Po1164・1165、弥生土器甕Po1149～1154、高杯Po1159、器台Po1161、砥石S71、鉈F45、不明鉄器F46、茎部F47がある。大半は埋土中からの出土であるが、床面南東側でPo1142・1146が、P2内でPo1147が、P13内でPo1145



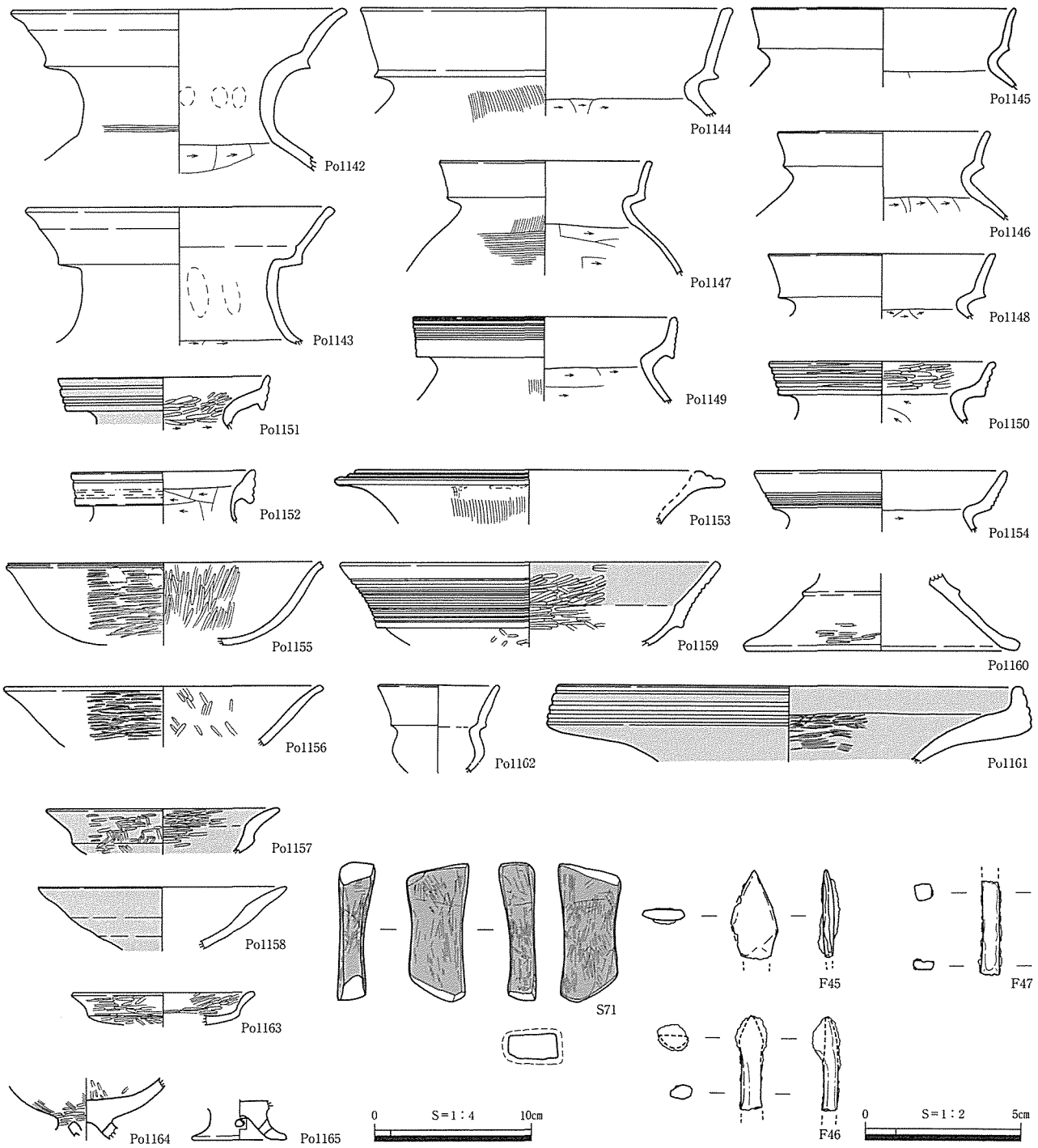
第406図　笠見第３遺跡SI32・56遺構図

が出土している。

出土遺物から天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろと考えられる。

SI56は、土層断面でSI32に先行するものとわかったが、平面的には掘方を検出することができず、北側壁を掘りとばしてしまった。平面は、方形と推定される竪穴住居跡である。推定される規模は、南北4.2m、東西3.6m、床面積15.0㎡である。残存壁溝は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.31mを測る。南・東壁際で幅10～30cm、深さ９cm程度の壁溝が認められた。

主柱穴はP15、P16の２個で、主柱穴間距離は、2.2mである。中央ピットはなく、住居中央部に焼土面が１箇所検出された。



第407図　笠見第３遺跡SI32出土遺物実測図

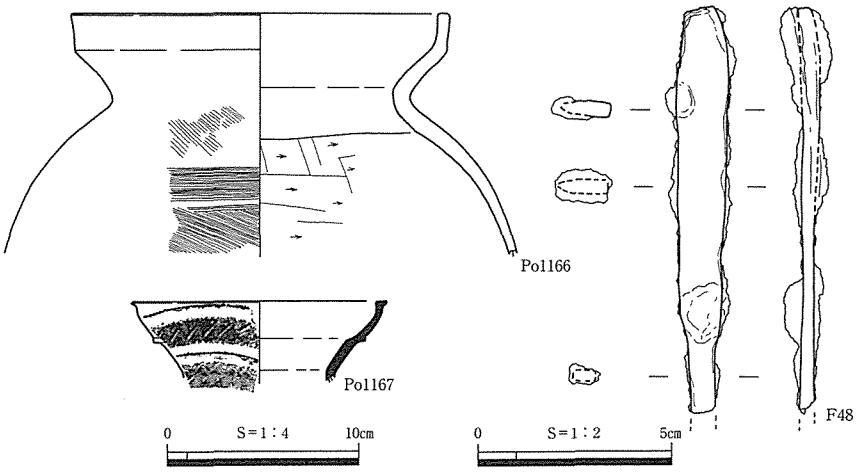
表126　笠見第３遺跡SI32・56ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	54×48－78	SI32主柱穴	P9	24×24－26	SI32補助柱穴
P2	50×43－57	SI32主柱穴	P10	49×49－50	
P3	67×51－60	SI32主柱穴	P11	47×44－19	
P4	57×50－79	SI32主柱穴	P12	33×30－38	
P5	100×75－56	SI32中央ピット	P13	30×28－11	
P6	19×18－35	SI32補助柱穴	P14	30×28－14	
P7	40×35－32	SI32補助柱穴	P15	66×59－96	SI56主柱穴
P8	32×30－40	SI32補助柱穴	P16	35×34－79	SI56主柱穴

床面のほぼ全域に、厚さ2～4cmを測る13層による貼床が認められた。

埋土は計3層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、図化できたものに土師器甕Po1166、須恵器瑳Po1167、刀子F48がある。いずれも埋土中からの出土である。



第408図　笠見第3遺跡SI56出土遺物実測図

時期は、出土遺物から天神川Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。(牧本)

SI33（第409・410図、PL. 75・158）

調査区東側、I・J6グリッドの標高70.2～70.7m付近の緩斜面に立地する。南西側約10mにSI29がある。北側は、SI34を掘り込んでいる。

平面方形を呈し、長軸5.9m、短軸5.5m、床面積27.7㎡を測る竪穴住居跡である。遺存状況は比較的良好で、壁高は最も残りが良い西壁で54cmを測る。壁際には幅12～24cm、深さ3～7cmを測る壁溝が、途中で途切れはするが、ほぼ全周する。

住居床面にて16基のピットを検出した。このうちP1～P4が主柱穴で、柱間はP1からP4までは、P1-P2間から順に2.6m、3.15m、2.6m、3.15mである。P5～P6は2.1mである。中央のP5とP6で棟木を支え、P1～P4が梁や桁を支持する構造とみられる。またP3とP4の間にある深さ57cmのP9も梁を支える支柱穴と考えられる。P7は中央ピットとみられ、東側壁際のP14がいわゆる特殊ピットと考えられる。その他のピットは比較的浅く、用途不明のピットである。

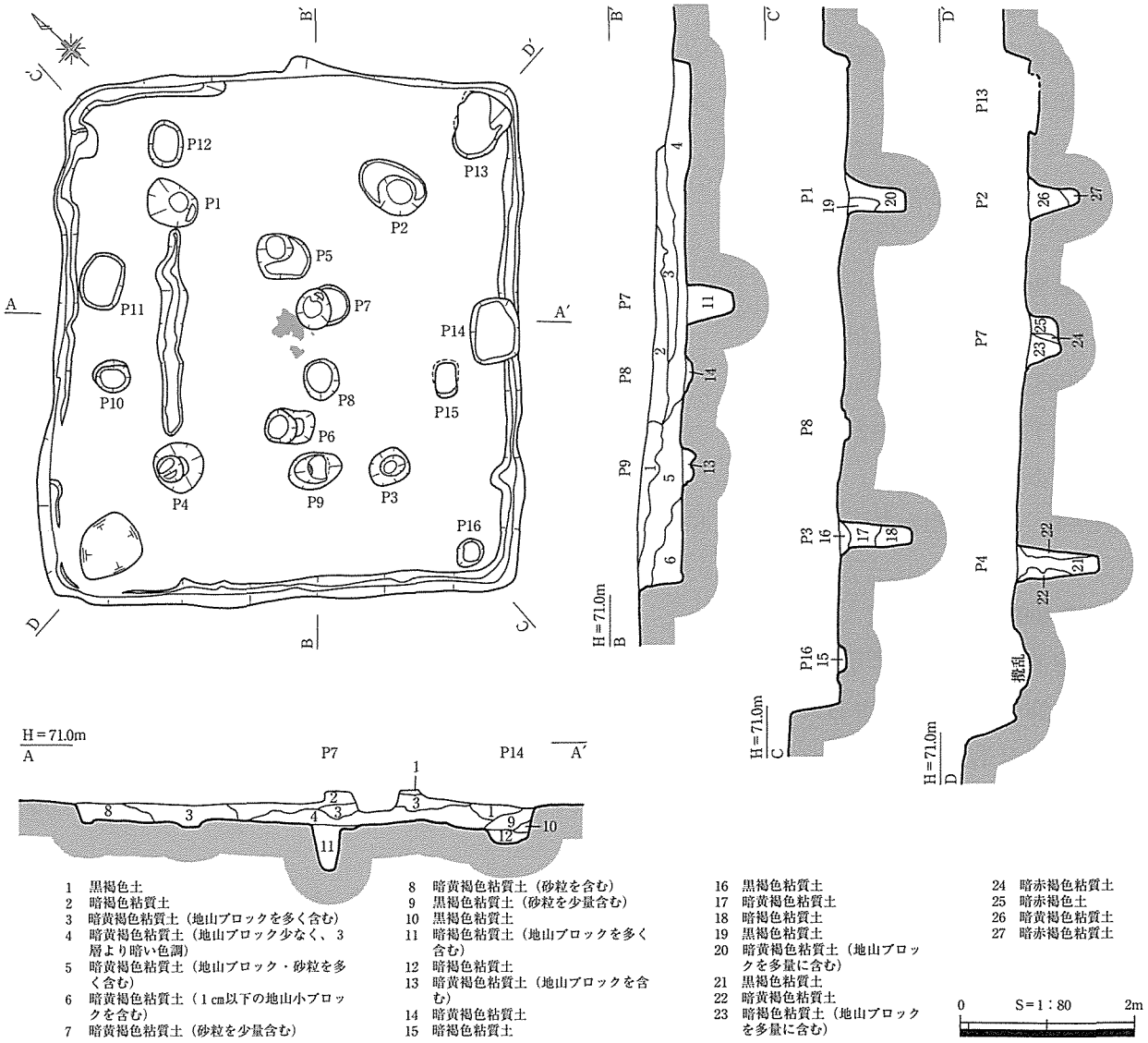
このほか主柱穴であるP1とP4の間に幅12～29cm、深さ5～14cmの直線状の溝がある。詳しい用途は不明であるが、間仕切りのための溝と考えられる。床面には中央ピットに接して焼土面が認められた。しかし中央ピット内には炭や焼土もなく、被熱の痕跡は認められなかった。また床面には所々に貼床層があり、住居の北東壁際の中央部下層にSK19とした縄文時代と考えられる落し穴があり、その上面にも貼り床を施し、床面としていた。

埋土は10層に分層可能である。まず暗黄褐色系の土によって住居壁際で堆積が始まり、黒褐色土ないしは暗褐色土が最終埋没土である。これらの住居埋土は自然堆積土とみられる。

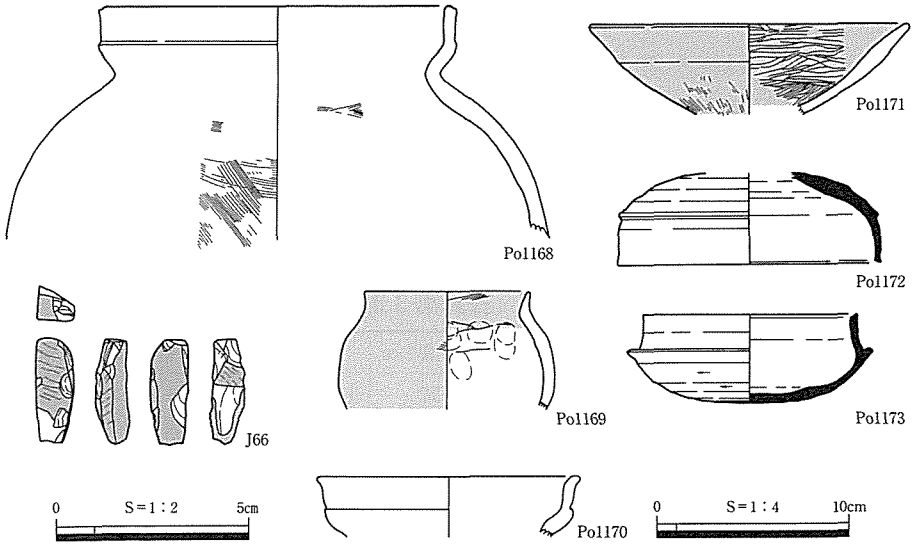
出土遺物は、図化したものが土師器甕Po1168・1170、短頸壺Po1169、高杯Po1171、須恵器杯蓋Po1172、杯身Po1173、緑色凝灰岩管玉素材片J66がある。いずれも、埋土中からの

表127　笠見第3遺跡SI33ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	58×50－72	主柱穴	P9	61×42－58	
P2	79×53－63	主柱穴	P10	43×36－39	
P3	49×40－84	主柱穴	P11	64×49－13	
P4	59×58－99	主柱穴	P12	52×40－12	
P5	60×53－68	棟持柱穴	P13	76×62－18	
P6	57×38－67	棟持柱穴	P14	73×55－26	特殊ピット
P7	64×46－55		P15	40×26－23	
P8	46×41－28		P16	36×31－9	



第409図　笠見第３遺跡SI33遺構図



第410図　笠見第3遺跡SI33出土遺物実測図

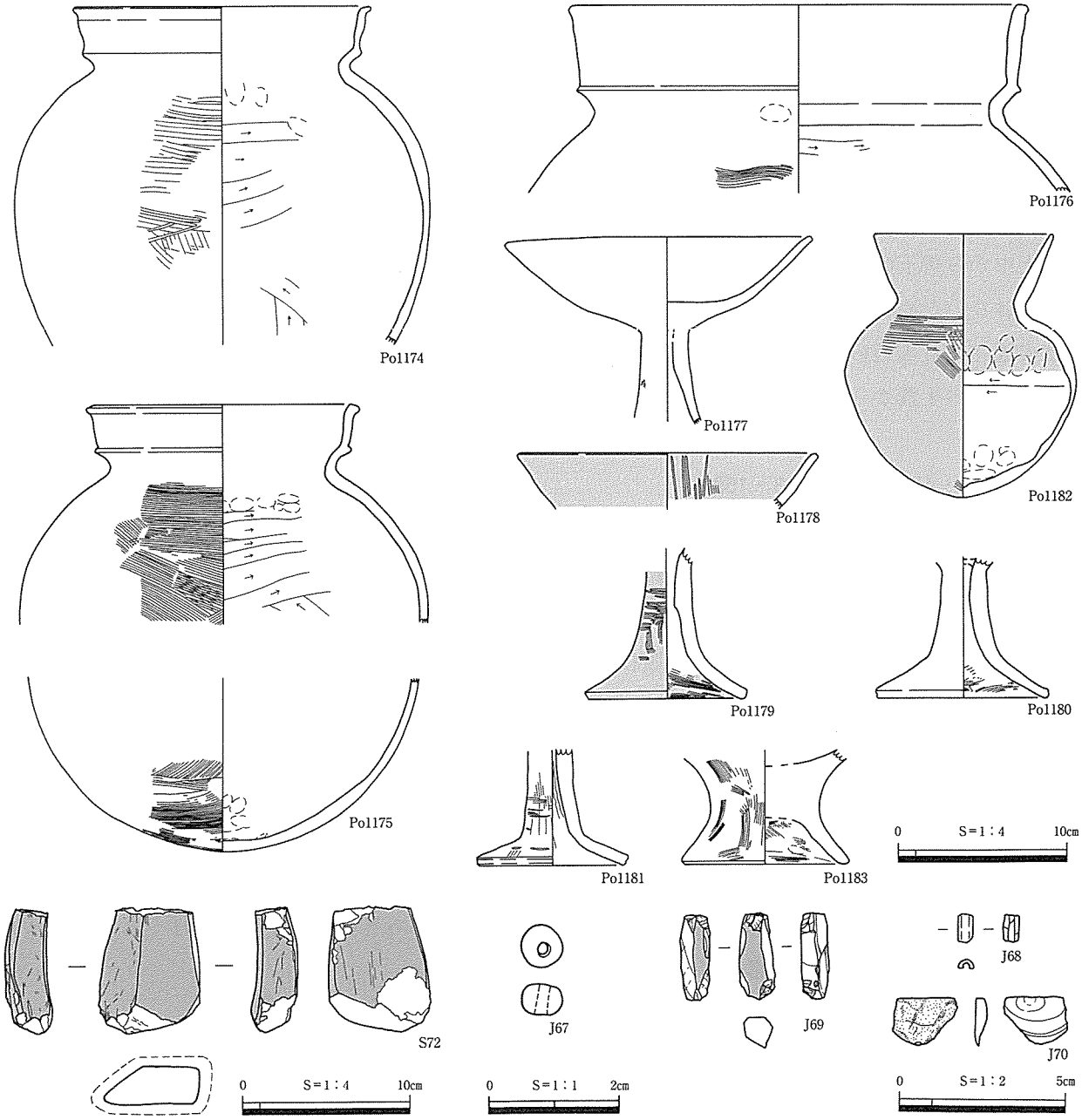
出土である。

出土遺物から、天神川Ⅸ期、古墳時代中期末葉ごろとみられる。須恵器は、TK47併行期ごろと考えられる。この他、管玉未成品をはじめとする玉生産関連の遺物も出土したが、隣接するSI34が弥生時代後期の玉作工房であることから、ここからの混入品と考えられる。（小山）

SI35（第117・411図、PL. 20・147・159）

調査区北東側、J5杭周辺の標高69.0～69.4m付近の緩斜面に立地する。住居跡の東半は削平によりすでに失われている。

平面は長方形を呈すと見られ、長軸5.9m、短軸5m以上、床面積18.7㎡以上を測る。壁高は最も残存する南西隅で39㎝であるが、全般的に遺存状況は良好とはいえない。壁際には幅８～20㎝、深さ



第411図　笠見第３遺跡SI35出土遺物実測図

3.2～15.2cmの壁溝が北壁と西壁沿いには全周し、南壁際には断片的に認められる。

床面でピットを数基検出したが、このうちP15～P18が主柱穴とみられる。主柱穴間距離はP15-P16間から以下順に2.4m、2.8m、2.4m、2.8mである。SI45との重複部分のピットは当住居跡にともなうものか、SI45に伴うものか、その弁別が困難である。またこのほか、主柱穴であるP17とP18の間には幅30cm、深さ４～６cmの溝が検出された。同様の溝は古墳時代後期の住居跡であるSI29においても認められた。この他、西壁際から直交して主柱穴の手前まで延びる溝が２条認められた。溝の幅は12～18cm、深さ３～９cmである。この溝は桁の延長上に位置する。

表128　笠見第３遺跡SI35ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P15	28×24－43	主柱穴	P20	26×20－24	
P16	42×39－59	主柱穴	P21	27×19－14	
P17	42×41－74	主柱穴	P22	17×14－10	
P18	42×39－59	主柱穴	P23	32×24－33	
P19	30×25－10		P24	35×34－45	

埋土は遺存良好な箇所で、厚さ20cmであるが、住居跡東半の埋土は失われ、貼床が露出する状況であった。

出土遺物は、埋土中から多くの土器片とともに碧玉の原石や剥片が出土した。図化したものは、土師器甕Po1174～1176、高杯Po1177～1181・1183、直口壺Po1182、砥石S72、ガラス小玉J67、碧玉製管玉未成品J68、硬質緑色凝灰岩製管玉素材片J69、緑色凝灰岩剥片J70である。このうち、南西隅の床面からはPo1177が伏せられた状態で出土した。

埋土中から碧玉の原石や剥片が出土する点で特異であるが、床面直上からの玉生産に関連する遺物の出土はないため、当住居跡内での玉生産は考えにくい。このため埋土中出土のものは、例えばSI34などの近在する周辺の玉生産に関連する遺構からの流れ込みと考えられる。

床面出土の土器からみて、天神川Ⅴ期、古墳時代中期前葉ごろの竪穴住居跡とみられる。（小山）

SI39（第412・413図、PL. 18・159）

調査区やや北東側、H7グリッドの標高70m付近の緩斜面に立地する竪穴住居跡である。南端はSI40と重複するが、当住居がSI40の埋土を切り込んで掘削されていることから、層位的にみてSI39が新しい。

平面隅丸方形を呈し、南北4.8m、東西4.7m、床面積20.1㎡を測る。壁高は、最も遺存状況が良好な住居の南隅で約１mと良好である。壁際には幅11～24cm、深さ５～10cmの壁溝が、北側壁で途切れるがほぼ全周する。床面は地山をそのまま利用し、貼床などは認められなかった。

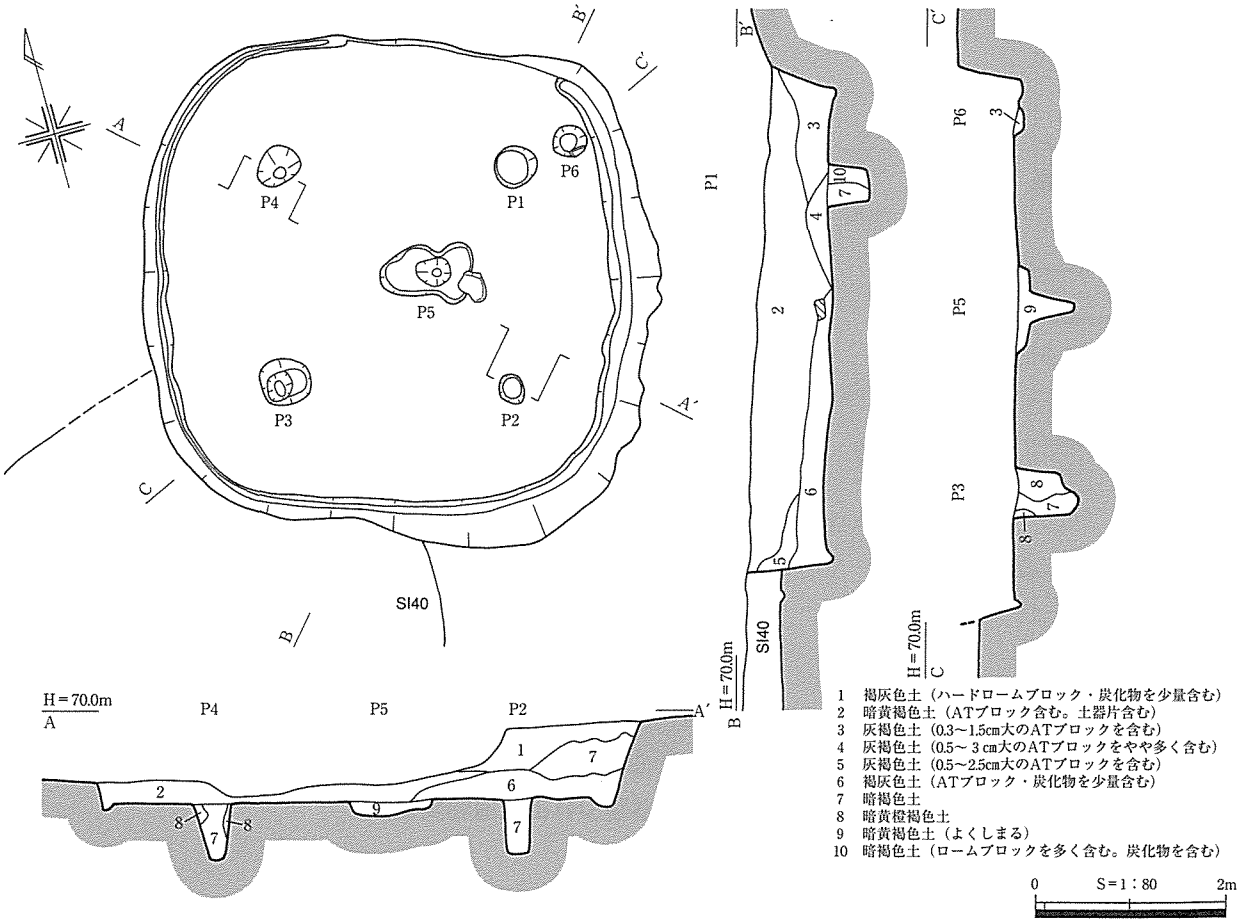
主柱穴はP1～P4で、主柱穴間距離はP1-P2間から順に2.3m、2.5m、2.3m、2.5mである。P1・３・４で柱痕を確認することができ、柱径は15cm前後である。

住居中央やや東寄りに、上縁部を長軸100cm、短軸55cm、深さ８cmに掘り、更に中央部を長軸37cm、短軸31cm、深さ48cm掘り下げる二段掘りを呈す中央ピットP5がある。埋土が、建物埋土と類似する炭化物を含む層で、廃絶時には開口していた可能性がある。

表129　笠見第３遺跡SI39ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	43×43－40	主柱穴	P4	48×40－58	主柱穴
P2	32×25－56	主柱穴	P5	100×55－56	中央ピット
P3	55×48－68	主柱穴	P6	36×35－７	

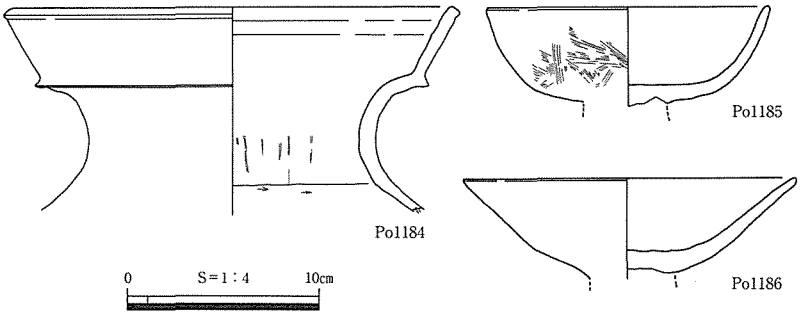
埋土は11層に分層可能であった。初期の段階で住居内に流入した埋土は北西と南西側に厚く、住居の中央



第412図　笠見第3遺跡SI39遺構図

部に薄く堆積する。こうした状況からみて自然堆積によって埋没したものとみられる。

出土遺物は、図化したものに土師器壺Po1184、高杯杯部Po1185・1186がある。いずれも埋土下層からの出土である。その他、住居中央部P5脇の床面直上から台石が出土した。



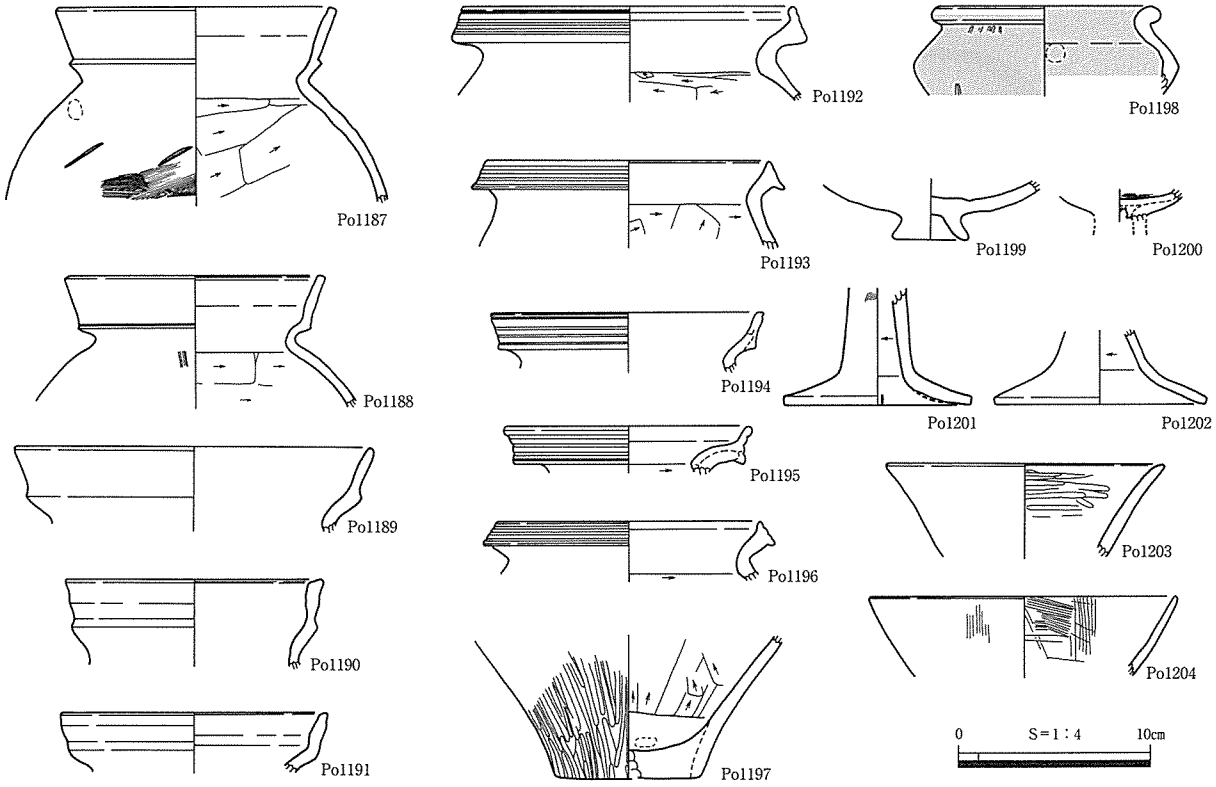
第413図　笠見第3遺跡SI39出土遺物実測図

出土遺物から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろものと考えられる。（小山・牧本）

SI41（第111・414図、PL. 76・159）

調査区北東側、G3グリッドの標高66.5～66.7mの緩斜面に位置する竪穴住居跡である。SI42と重複関係にあるが、当住居跡がSI42埋土を切り込んでいることから、当住居跡が古い。また住居東南側、北東よりの壁際にてSK22を検出した。床面にて検出したものであるが、当住居跡に伴う可能性も否定できないが、その形状からみて、当住居跡より古い遺構であると考えられる。

平面は、やや東西に長い隅丸方形を呈し、長辺4.9m、短辺4.4m、床面積13.3m²を測る。遺存状況



第414図　笠見第３遺跡SI41出土遺物実測図

は比較的良好で、壁高は最も残りが良い北西隅で80cmを測る。壁際には、幅５～27cm、深さ２～９cmの壁溝がめぐる。一部途切れはするもののほぼ全周する。

表130　笠見第３遺跡SI41ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	53×40－56	主柱穴
P2	50×40－50	主柱穴
P3	20×16－3	
P4	30×26－13	

床面から５基のピットを検出したが、このうちP1、P2が主柱穴と考えられ、２本柱構造の建物とみられる。柱間は1.7mを測る。P1の底面には直径約７cm、深さ約４cmのくぼみが認められ、柱痕跡と考えられる。主柱穴の間でP3を検出した。後述する貼り床層の上面にて検出した浅い小ピットであるが、住居の中央部に位置することから、支柱穴の可能性がある。

床面中央部にはごく小規模な範囲ではあるが、焼土面が１箇所認められた。また床面の西半には貼床層が認められた。これは住居の掘方の底面のレベルが東と西で最大約８cmの高低差があるため、その高低差を解消するためとみられる。

埋土は11層に分層が可能であった。埋没の初期段階でまず壁際が埋没し、次第に中央部が埋没していく状況がうかがえる。特に地形的に高所側に当たる西側からの土砂の流入が顕著である。これらのことから自然堆積によって埋没したとみるのが妥当とみられる。また住居の北辺と東辺には壁際より30cm内側にも同様の溝がめぐる他、南壁際の一部にも２重となる箇所がある。

出土遺物は、床面からかなり浮いた状態で若干の土器が出土した。図化したものは、土師器甕Po1187～1191、低脚杯Po1199、小型高杯型器台Po1200、高杯Po1201～1203、直口壺Po1204、弥生土器甕Po1192～1196、底部Po1197、小型甕Po1198がある。弥生土器は、SI40のものが混入したものと考えられる。

出土遺物からみて、天神川Ⅸ期、古墳時代中期末葉ごろのものとみられる。（小山）

SI57（第415・416図、PL. 76・148・160）

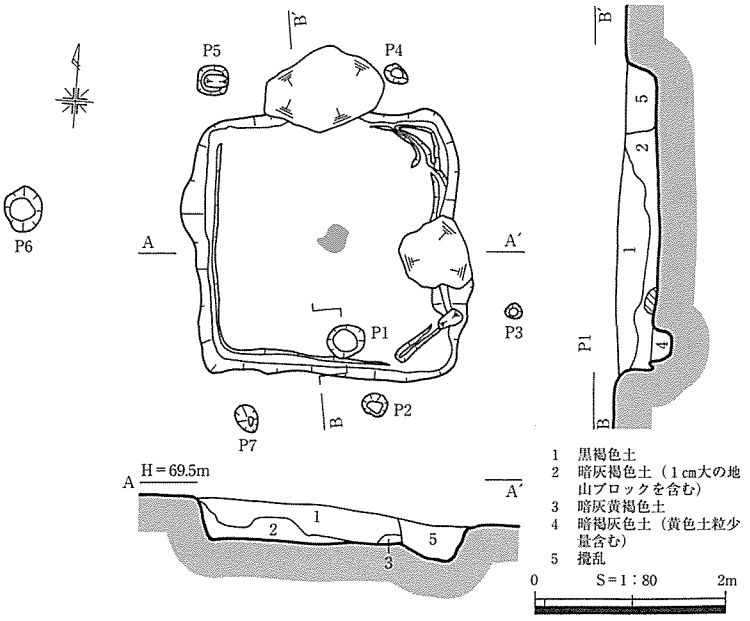
調査区東側のK4グリッドにあり、標高69.1～69.3mの緩やかに東側に傾斜する斜面に立地する竪穴建物である。北東にはSI58が接している。

遺存状態はよく、平面は方形を呈す。規模は、東西2.3m、南北2.4m、床面積は5.6m²を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大37cmを測る。壁際には、本来幅８～15cm、深さ２cm程度の壁溝がめぐっていたと考えられる。

主柱穴に相当するものは検出されなかったが、南側壁際でP1が検出された。位置的には特殊ピットの可能性がある。

床面中央部で、焼土面が１箇所検出されている。

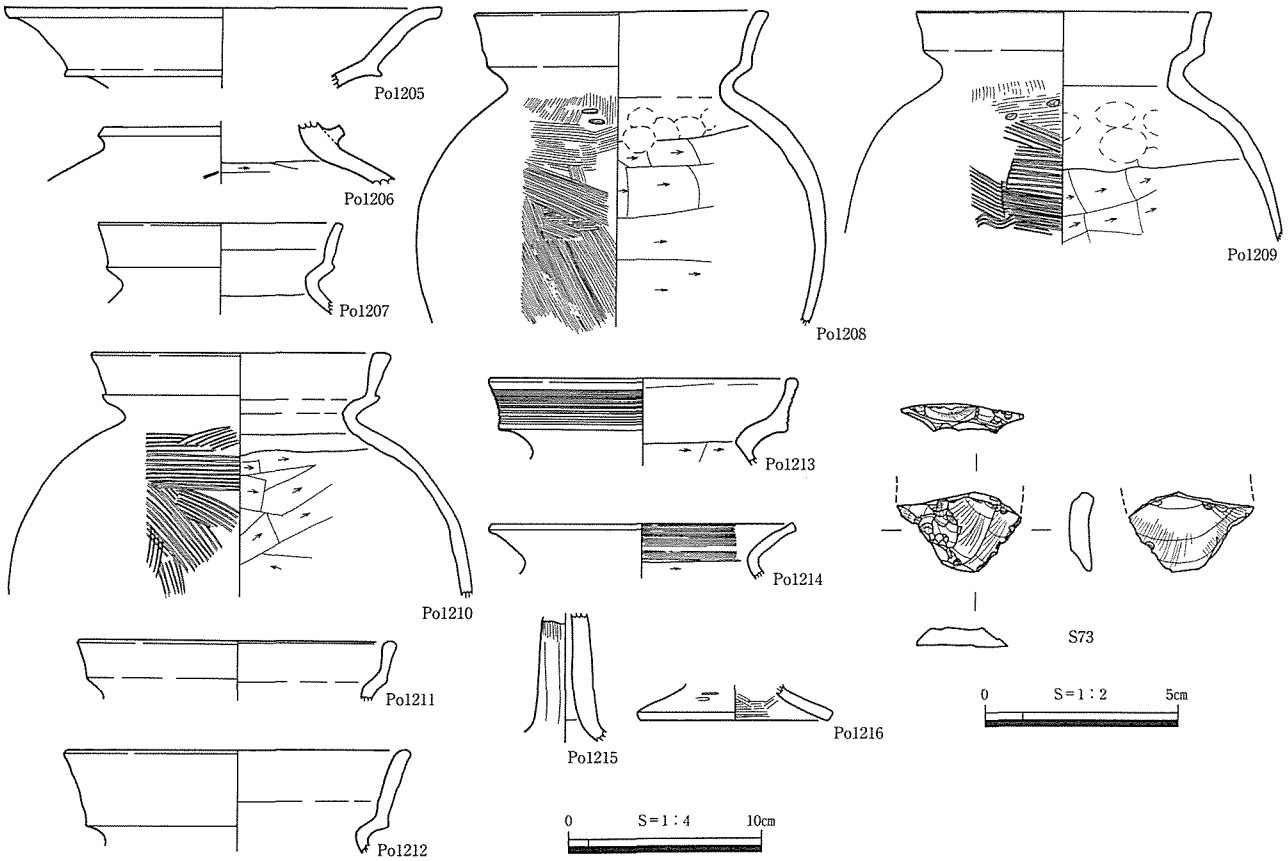
埋土は３層に分層できた。自然堆



第415図　笠見第３遺跡SI57遺構図

表131　笠見第３遺跡SI57ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	40×37－23	特殊ピット



第416図　笠見第３遺跡SI57出土遺物実測図

積したものと考えられる。

出土遺物のうち、図化したものは土師器壺Po1205・1206、甕Po1207～1212、高杯Po1215・1216、弥生土器甕Po1213・1214、黒曜石調整剥片S73がある。いずれも埋土下層からの出土である。

出土遺物から、天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろのものと考えられ、小規模なことから通常の竪穴住居跡とは異なる用途である可能性がある。（牧本）

SI58（第417・418図、PL. 77・148・160）

調査区東側のJ4グリッドにあり、標高68.6～69.0mの緩やかに東側に傾斜する斜面に立地する。南西にはSI57が接している。

東側が流失しているが、平面は長方形又は方形を呈す。主軸がほぼ東西南北にあり、規模は、東西2.3m以上、南北3.3m、床面積は6.7㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態はよい西壁で最大20cmを測る。壁際には、本来幅６～12cm、深さ５cm程度の壁溝がめぐっていたと考えられる。

主柱穴に相当するものは検出されなかった。床面中央部で、大きく広がる焼土面が１箇所検出されている。

埋土は３層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。第１・２層には炭化物が含まれている。

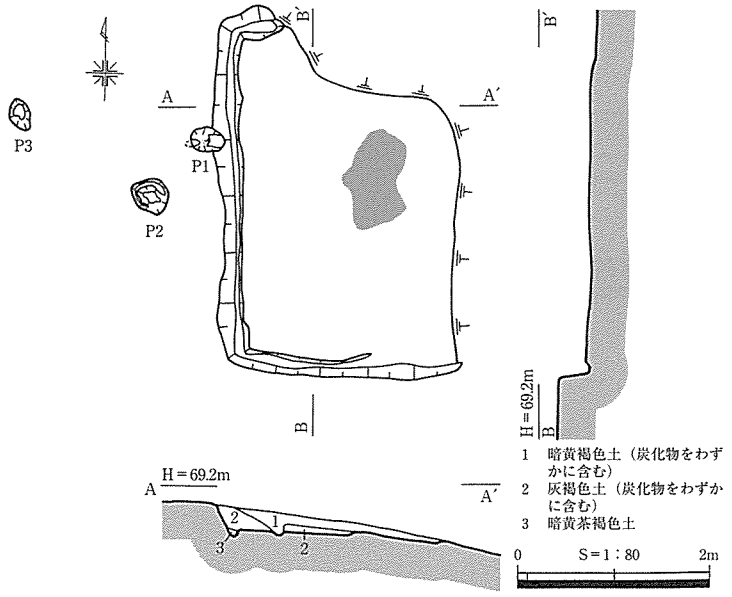
出土遺物のうち、埋土下層での土師器甕Po1217、床面での鼓形器台Po1218を図化した。

出土遺物から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭ごろのものと考えられる。主柱穴がなく小規模なことから、通常の竪穴住居とは考えられない。（牧本）

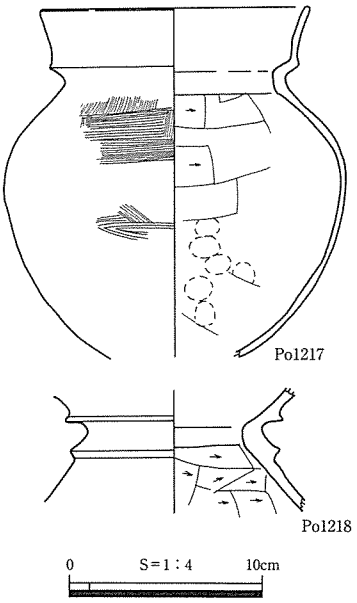
SI60（第419・420図、PL. 77・148・160）

調査区北西側のD16グリッドにあり、標高70.6mのほぼ平坦面に立地する竪穴住居跡である。南東側約３mには、SI72がある。

遺存状態はよく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、南北4.35m、東西4.15mを測る。壁高は、最も遺存状態がよい東側で最大60cmを



第417図　笠見第３遺跡SI58遺構図



第418図　笠見第３遺跡SI58出土遺物実測図

表132　笠見第３遺跡SI60ピット一覧表

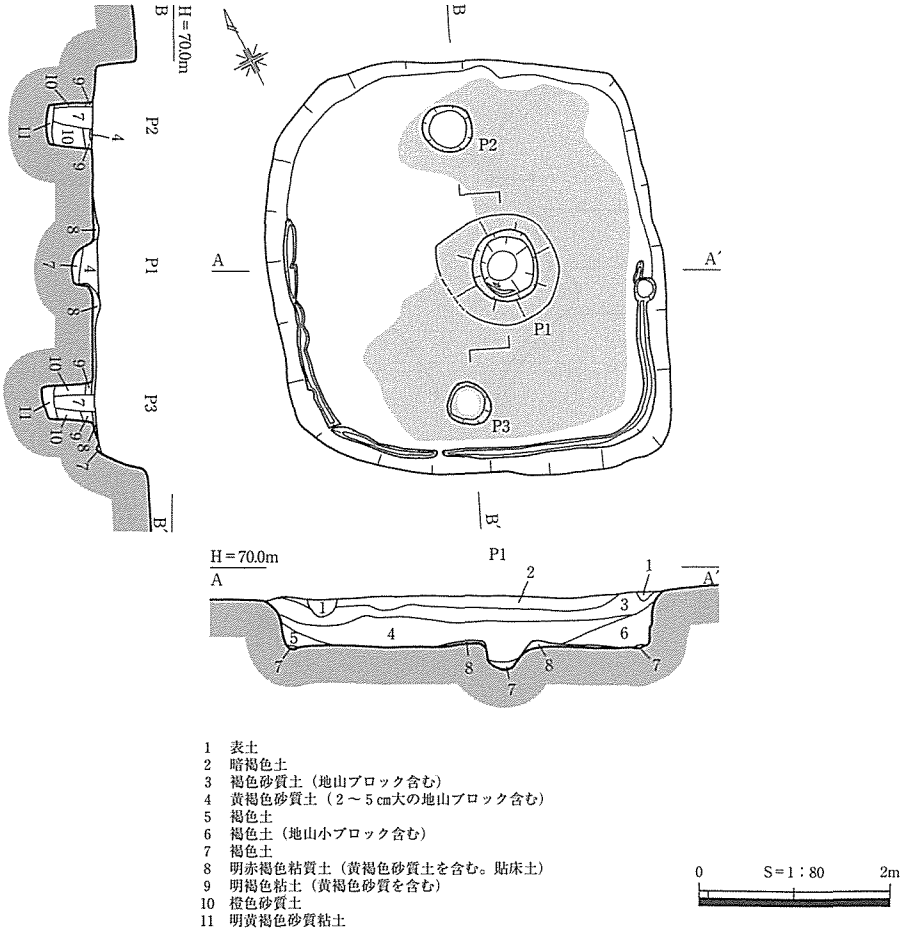
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	45×43－43	主柱穴
P2	55×50－40	主柱穴
P3	111×106－60	中央ピット

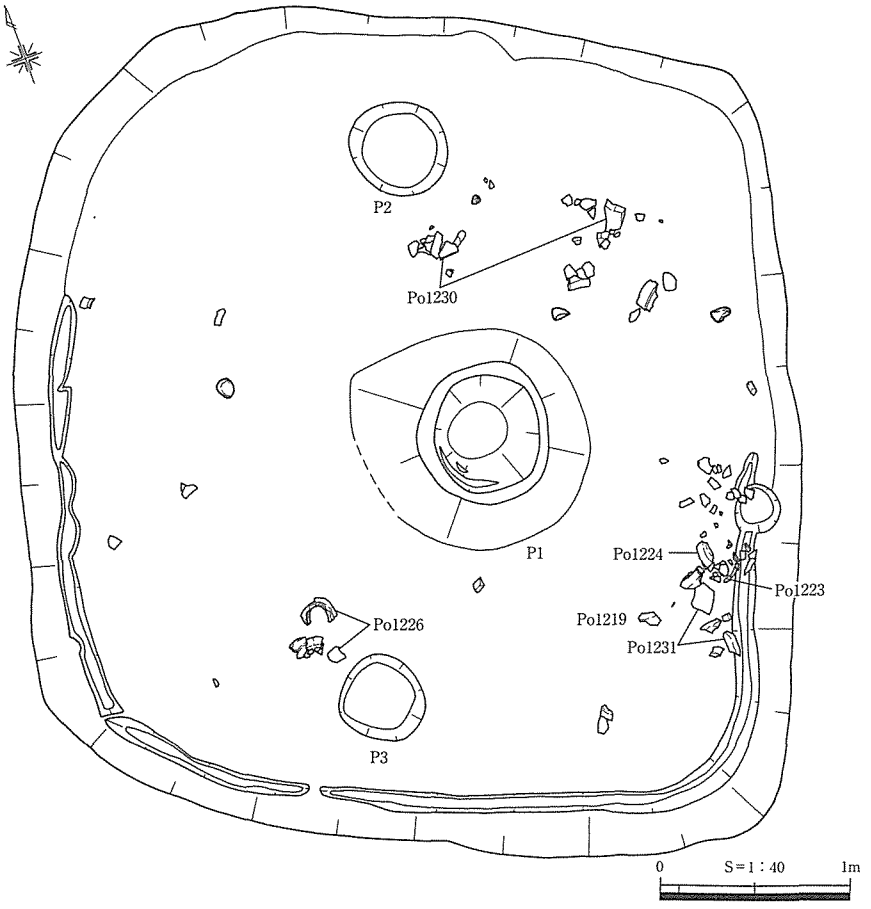
測る。南側半分の壁際には、幅10cm、深さ10cm程度の断面皿状の周壁溝が確認できたが、北側では確認できなかった。

主柱穴はP1、P2の２個である。いずれもややいびつな円形で、穴を掘った後で10cm程度粘土を叩き締めて敷き、その上に柱を据えて２回に分けて埋め戻したことが確認できた。いずれからも柱痕が確認されており、推定される柱の直径は、20cm程度と考えられる。主柱穴間距離は3.0mである。

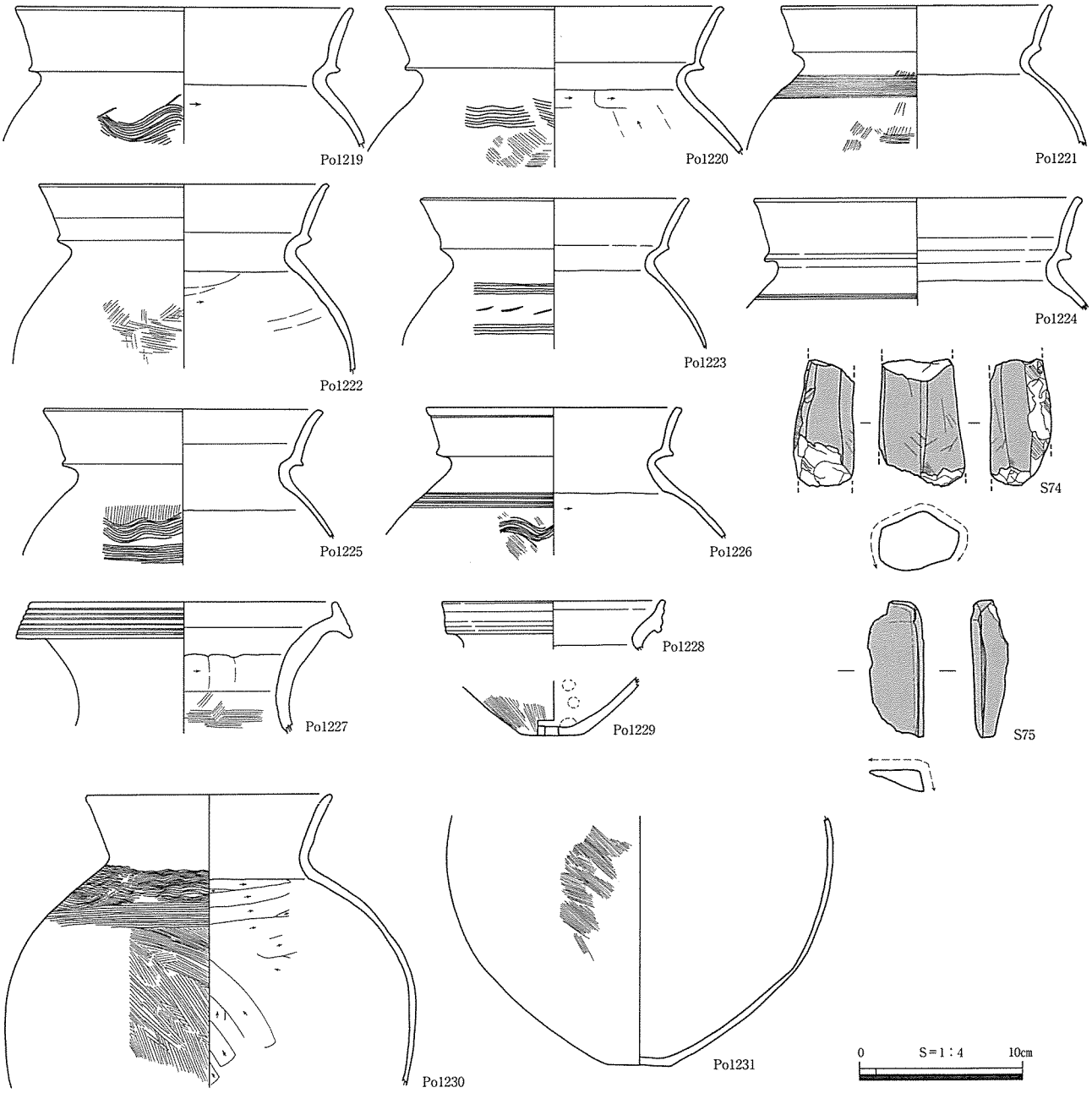
中央よりやや東側に円形の中央ピットP3がある。周囲には高さ２cmの低い土手があり、貼床の際に造り付けたものである。中央ピットの埋土は黄褐色土で、住居下層埋土を同一であることから、住居が破棄されるまでは開口した状態だったと考えられる。ピット内からは、遺物は出土していない。

住居の東側半分で明赤褐色粘土の貼床が認められた。焼土面は確認できなかった。





第419図　笠見第３遺跡SI60遺構図



第420図　笠見第３遺跡SI60出土遺物実測図

埋土は４層に大別でき、皿状堆積していることから自然堆積したものと考えられる。

遺物は、図化できたものには、土師器甕Po1219～1226、直口壺Po1230、底部Po1231、弥生土器壺Po1227、甕Po1228、底部Po1229、砥石S74・75がある。床面南東隅付近からPo1219・1223・1224・1231、北東側でPo1230が離れて、中央西寄りでPo1226が出土している。その他は、埋土下層から多く見つかっている。また、貼床層から弥生時代後期の土器片が出土しているが、伴うものではない。

出土遺物から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期前葉のものと考えられる。（田中・東方・牧本）

SI78（第421・422図、PL. 78・148・160）

調査区北西側のE17グリッドにあり、標高69.0～69.4mの緩やかに西側に傾斜する斜面に立地する。東側はSI75を掘り込んでいる。

斜面側は流失している。平面は方形ないし長方形を呈し、東西2.1m以上、南北4.3m、床面積7.7m²以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大10cmである。壁溝は検出されなかった。

床面で６基のピットを検出したが、このうち主柱穴に相当するものはP1・P4と考えられる。主柱穴間距離は1.8mである。P6は位置的に特殊ピットの可能性がある。床面南東側で、焼土面が１箇所検出されている。

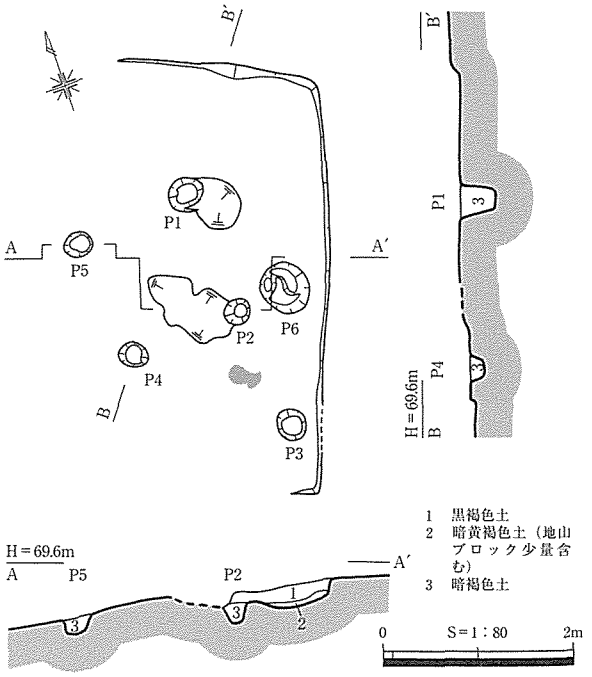
埋土は２層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

出土遺物のうち、図化したものは土師器甕Po1234、須恵器杯身Po1235・1236、弥生土器壺Po1232・1233がある。いずれも、埋土中からの出土である。弥生土器は、SI75からの混入と考えられる。

出土遺物から、天神川Ｘ期、古墳時代後期初頭ごろのものと考えられ、小規模なことから通常の竪穴住居跡とは異なる用途である可能性がある。（牧本）

表133　笠見第３遺跡SI78ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	37×31－37	主柱穴
P2	27×25－22	
P3	33×31－34	
P4	28×26－18	主柱穴
P5	28×28－22	
P6	51×51－16	特殊ピット



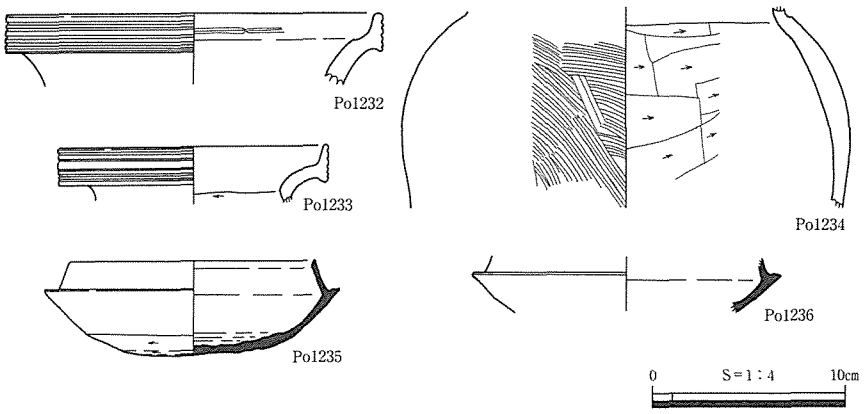
第421図　笠見第３遺跡SI78遺構図

SI81（第423・424図、PL. 78・148・161）

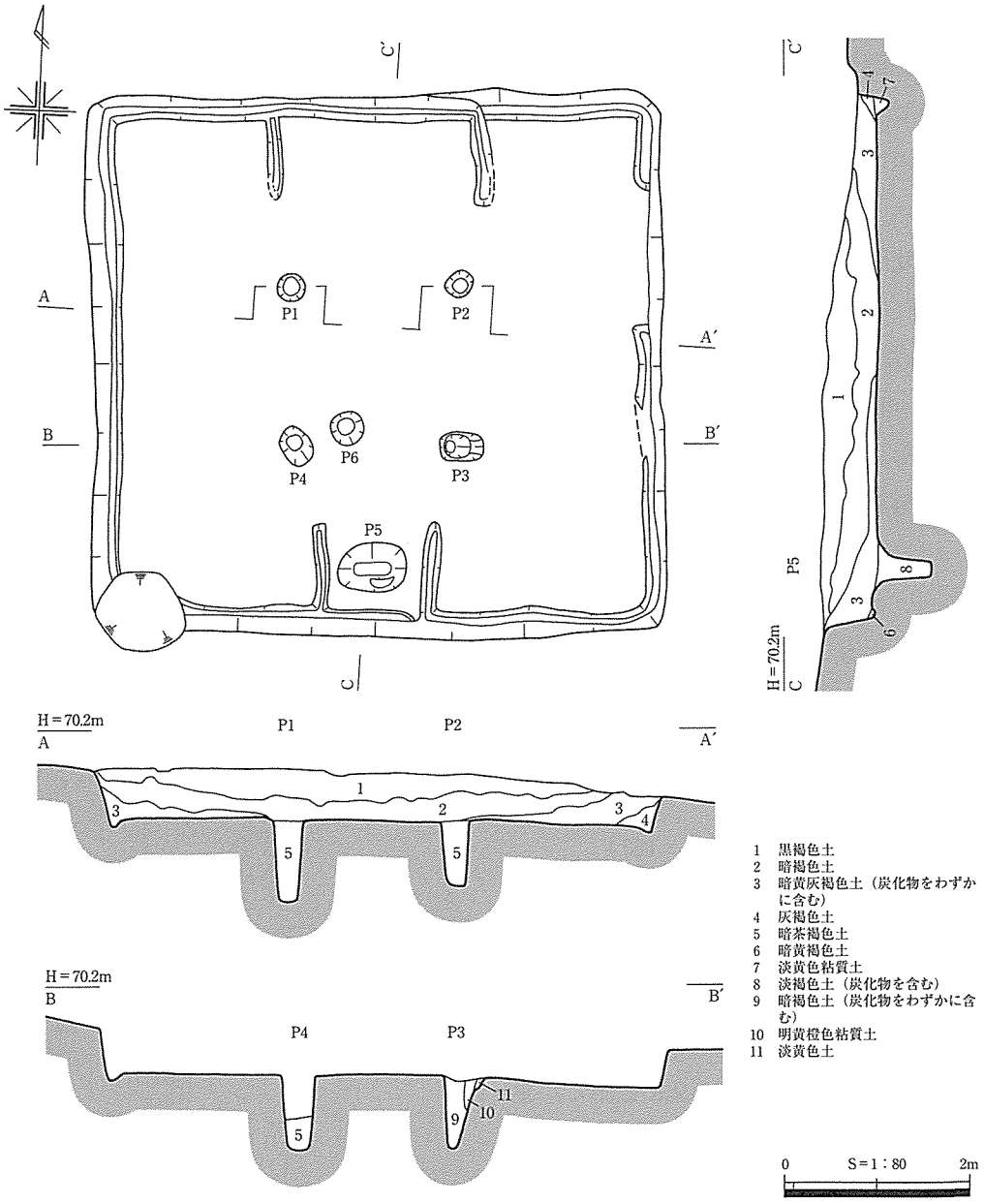
調査区北西側、J5杭周辺の標高69.4～70m付近の緩やかな北側緩斜面に立地する。北西側には、SI87・88が接し、南側約２mにはSI82がある。

遺存状況は比較的良好で、平面は方形を呈し、南北5.3m、東西5.63m、床面積30.2m²を測る。壁高は最も残存する南西隅で68cmである。壁際には幅10～17cm、深さ６～10cmの壁溝がほぼ全周する。

主柱穴はP1～P4で、主柱穴間距離はP1-P2間から以下順に1.9m、1.7m、1.7m、1.7mである。



第422図　笠見第３遺跡SI78出土遺物実測図



第423図　笠見第３遺跡SI81遺構図

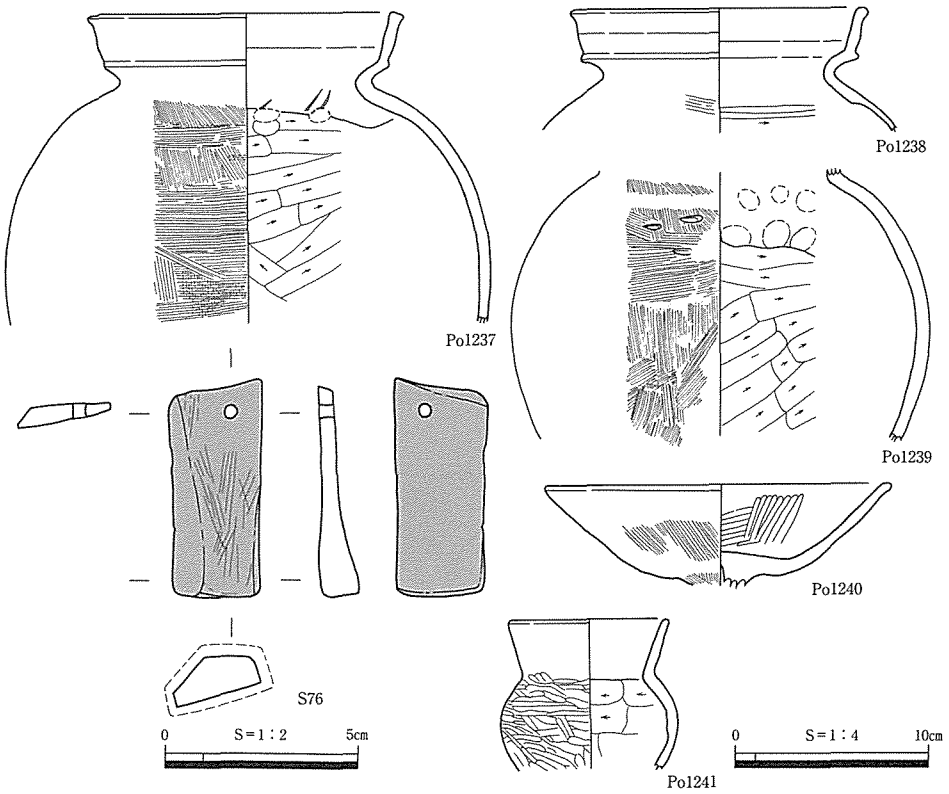
また、南壁際には、幅15cm前後、深さ５cm前後、長さ90cm程度の２本の平行する溝に囲まれた特殊ピットP5がある。埋土には炭化物を含み、遺構下層埋土とは異なることから、廃絶時にはすでに埋まっていた可能性がある。なお、北側壁にはほぼ対応するように同規模の平行する溝が中央に向かって延びている。これらの溝は、仕切り溝と考えられる。床面上では焼土面、貼床は検出されなかった。

表134　笠見第３遺跡SI81ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	31×31－89	主柱穴	P4	42×31－83	主柱穴
P2	31×27－71	主柱穴	P5	75×54－62	特殊ピット
P3	48×31－79	主柱穴	P6	38×36－31	

埋土は３層に分層でき、皿状堆積を呈すことから、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から出土した土師器甕Po1237～1239、高杯Po1240、小型丸底壺Po1241、小型携帯用の砥石S76を図化した。



第424図　笠見第３遺跡SI81出土遺物実測図

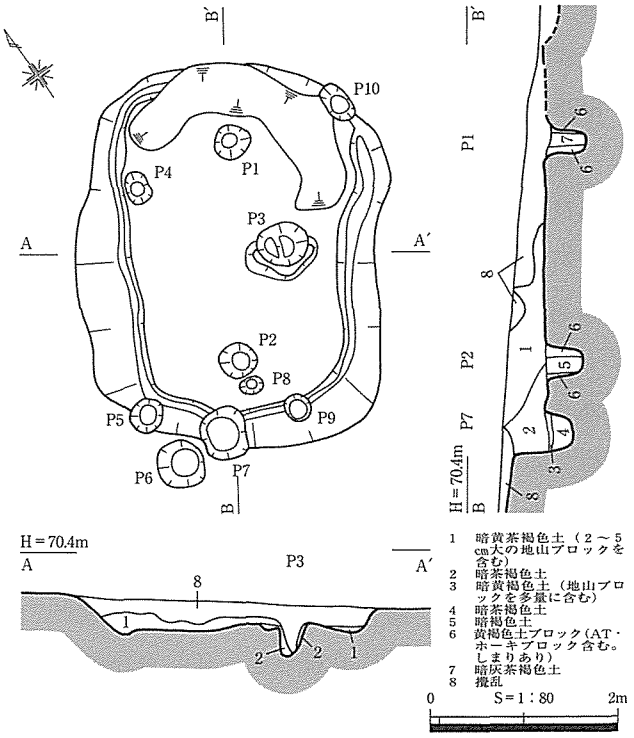
出土遺物等から、天神川Ⅴ期、古墳時代中期前葉の竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI84（第425・426図、PL. 78・148・160）

調査区中央やや北西側、F13グリッドの標高69.4～70m付近の緩やかな北側緩斜面に立地する。東側約１mには、SI85がある。

耕作による攪乱を受けており遺存状況は悪い。平面は長方形を呈し、長軸3.2m、短軸2.1m、床面積6.8m²を測る。壁高は最も残存する南西隅で47cmである。壁際には、幅11～23cm、深さ３～８cmの壁溝がほぼ全周するとみられる。

主柱穴はP1・P2で、主柱穴間距離は2.3mである。また、床面中央東寄りにはP3がある。特殊ピット的な性格が与えられよう。建物下層埋土が入り込んでおり、廃絶時には開口していたと考えられる。その他、床面及び周辺でピットが検出されているが用途は不明である。床面上では焼土面、貼床は検出され



第425図　笠見第３遺跡SI84遺構図

なかった。

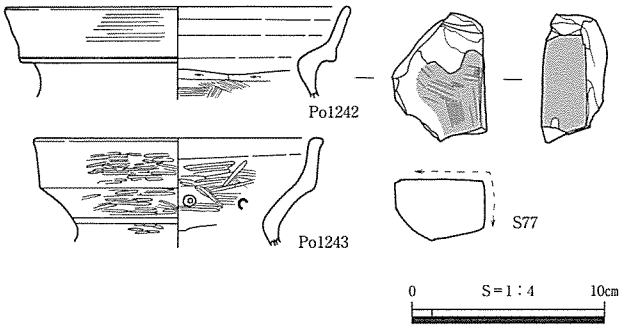
埋土は２層に分層でき、Ⅲ状堆積を呈すことから、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po1242・1243を図化した。その他に、図化できなかったが土師器が含まれており、時期は古墳時代中期ごろのものと考える。

出土遺物、形態的特徴から、古墳時代中期ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

表135　笠見第３遺跡SI84ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	37×37－42	主柱穴	P6	55×55－52	
P2	42×39－40	主柱穴	P7	55×50－60	
P3	54×45－30	特殊ピット	P8	25×19－ 5	
P4	35×25－25		P9	30×30－13	
P5	35×33－60		P10	33×29－35	



第426図　笠見第３遺跡SI84出土遺物実測図

SI85・104（第427～429図、PL. 38）

調査区中央やや北西側、F12グリッドの標高69～69.5m付近の緩やかな北側緩斜面に立地する。SI85・104の２棟が切り合って検出された。土層による切り合い関係は確認できなかったが、おそらくSI104をSI85が掘り込んでいるものと思われる。SI85の南東側は、SI86を掘り込む。

表136　笠見第３遺跡SI85・104ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	62×58－22		P6	27×15－ 7	
P2	45×40－47	主柱穴	P7	28×27－61	主柱穴
P3	31×27－22		P8	33×32－60	
P4	42×36－41		P9	23×13－15	
P5	76×65－56	特殊ピット	P10	25×20－14	

SI85は、平面方形を呈し、一辺4.0m、床面積16.8m²を測る。壁高は最も残存する南西隅で66cmである。壁際には、幅10～20cm、深さ３～８cmを測る壁溝がほぼ全周する。

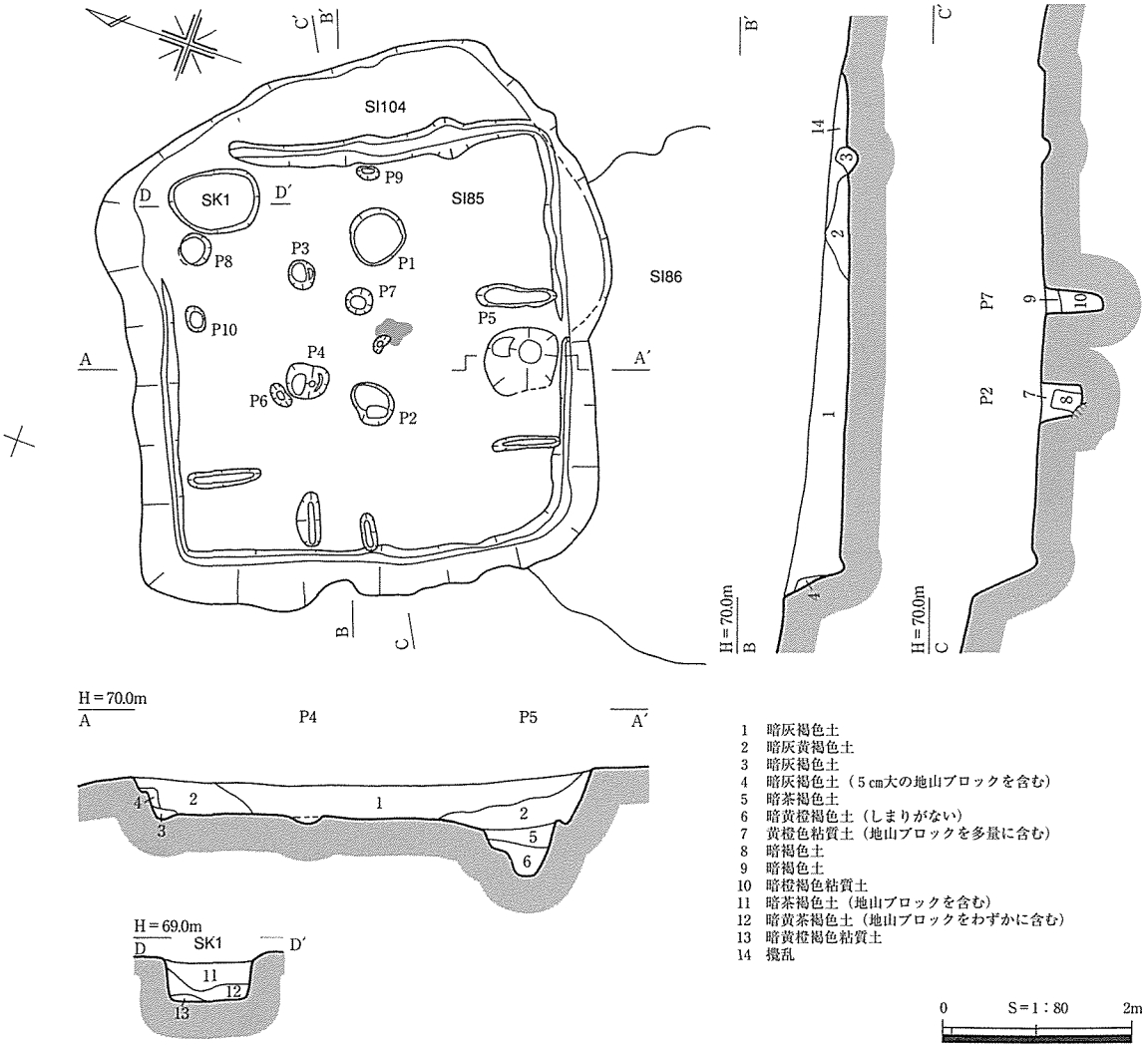
主柱穴はP1・P2で、主柱穴間距離は1.0mと狭い。P2では柱痕が認められ、推定される柱径は約18cmである。底面には、川原石が据えられており、礎板石として機能した可能性がある。また、南壁際中央には、幅10～20cm前後、深さ３～19cm前後、長さ70cm程度の２本の平行する溝に囲まれた特殊ピットP3がある。埋土は、建物下層埋土とは異なることから、廃絶時には既に埋まっていた可能性がある。また、北側壁にはほぼ対応するように同規模の溝が１本、西側にも壁に接するように２本の平行する溝が中央に向かって延びている。これらの溝は、仕切り溝と考えられる。P1-P2間で焼土面が１箇所検出された。

また、北側隅でSK1が検出された。平面楕円形を呈し、長軸95cm、短軸68cm、深さ30cmを測る。埋土は、建物埋土下層とは異なり、P3同様廃絶時には既に埋まっていた可能性がある。

埋土は大きく２層に分層でき、Ⅲ状堆積を呈すことから、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、土師器甕Po1244～1249、高杯Po1255～1257、小型丸底壺Po1254、弥生土器甕Po1250～1252、底部Po1253、器台Po1258を図化した。大半は埋土中から出土したが、Po1255はP1内で出土した。

出土遺物等から、天神川Ⅶ～Ⅷ期、古墳時代中期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。



第427図　笠見第３遺跡SI85・104遺構図

SI104は、SI85によって掘り込まれており、規模の詳細は不明であるが、平面方形を呈すと思われる。伴う柱穴等の詳細は不明である。出土遺物には、床面上で弥生時代的な特徴を持つ石鏃S78が出土している。時期は不明である。（牧本）

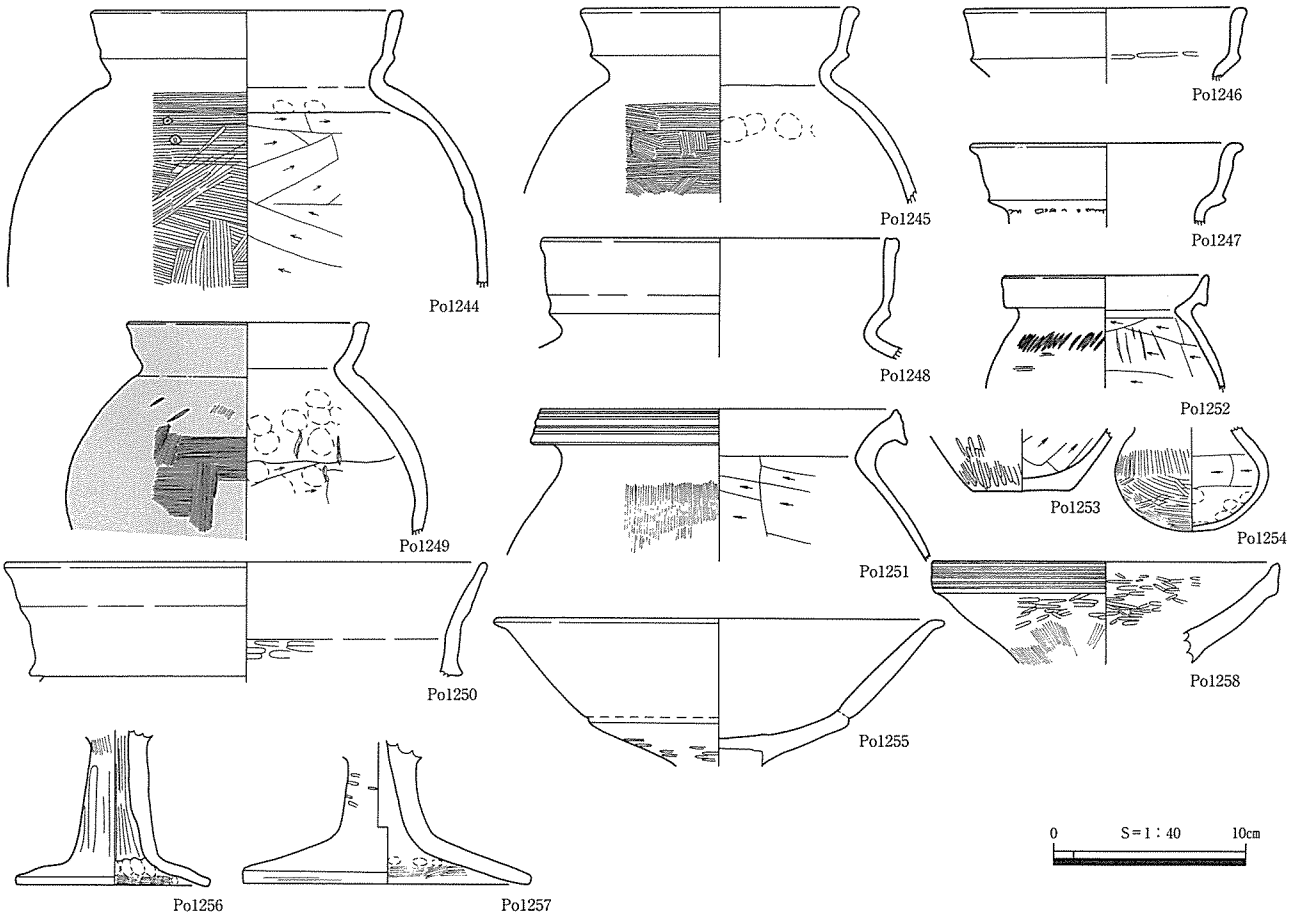
SI100・102（第430・431図、PL. 38・162）

調査区中央東側のK5・６、L5・６グリッドにあり、標高70.6mのほぼ平坦面に立地する。笠見３号墳の旧表土下でSI101・102とともに検出された。南側は、同古墳により掘削を受けている。古いものからSI101→SI102→SI100となる。

SI100は、遺存状態は悪いが、平面は方形を呈す竪穴住居跡である。規模は、北東―南西2.8m以上、北西―南東3.7m、床面積9.4㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態がよい東壁で最大0.26mを測る。西・北側壁際には部分的に幅６～13cm、深さ２～５cm前後の壁溝が検出された。本来は、全周していたものと考えられる。

主柱穴は、P1～P4である。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に、2.3m、2.3m、2.5m、2.1mである。柱痕は確認されなかった。

主柱穴以外にもピットが検出されたが、当住居に伴うものはP5、P6である。用途は不明である。



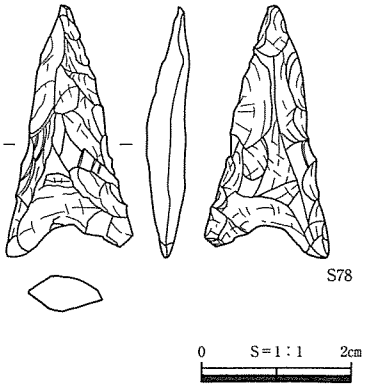
第428図　笠見第３遺跡SI85出土遺物実測図

その他のものは、SI101に伴うものと考えられる。中央ピットに相当するものは検出されなかった。

床面には、中央部とP1-P2間で焼土面が２箇所検出された。また、住居中央部分に暗灰褐色粘質土による貼床が施されている。

埋土は、４層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は、図化したものに土師器甕Po1259～1267、高杯Po1270～1273、椀Po1275、小型丸底壺Po1274、須恵器杯身Po1276、瓶Po1277、弥生土器甕Po1268、底部Po1269、緑色凝灰岩管玉素材片J71がある。大半は埋土中からの出土であるが、床面上でPo1265が出土している。



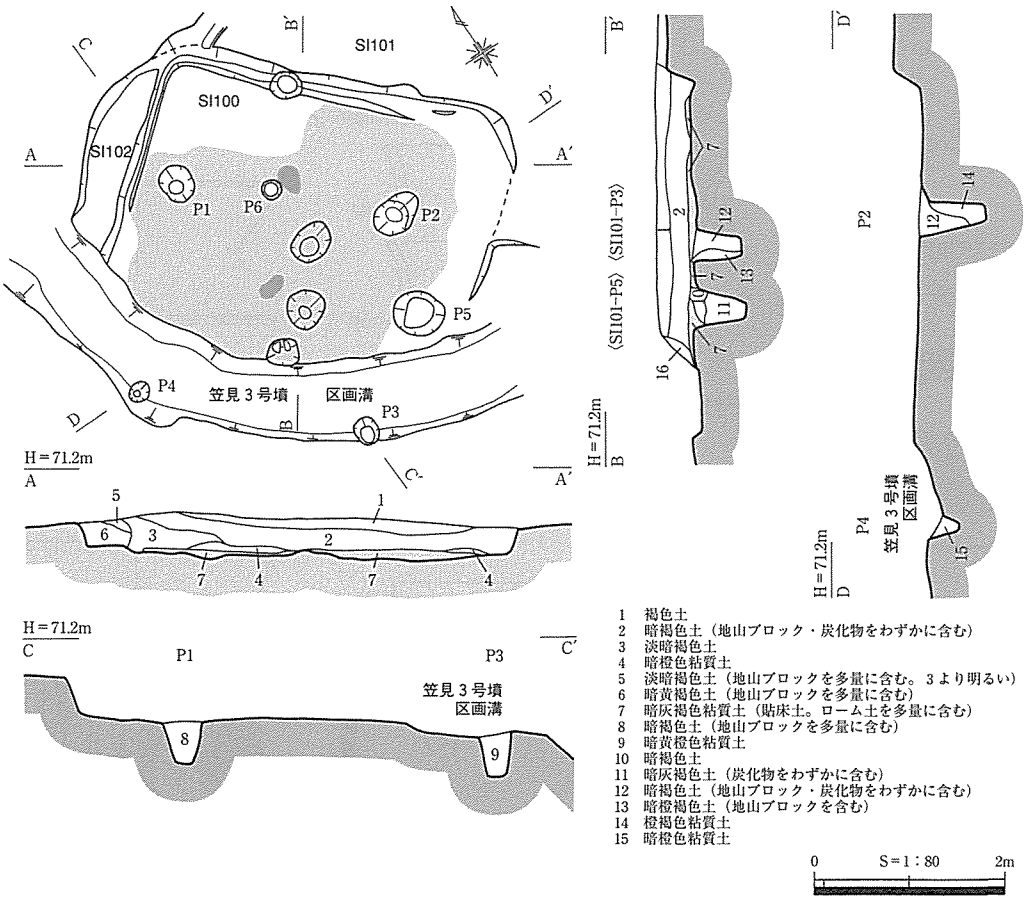
第429図　笠見第３遺跡SI104出土遺物実測図

出土遺物から天神川Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろと考えられる。

SI102は、SI100によって掘削されている。平面形、規模ともに不明である。主柱穴と考えられるものはSI100上でも検出できなかった。

埋土は、２層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

出土遺物はなく時期不明であるが、SI100に掘り込まれることから、やや遡るものと考えられる。（牧本）



第430図　笠見第３遺跡SI100・102遺構図

表137　笠見第３遺跡SI100・102ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸−深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸−深さ(cm)	備　　考
P1	40×35−53	主柱穴	P4	24×20−30	主柱穴
P2	52×40−59	主柱穴	P5	54×45−16	用途不明
P3	30×26−48	主柱穴	P6	21×20−11	用途不明

SI106（第432・433図、PL. 39）

調査区南側M15・16グリッド内にあり、標高74.5m付近の平坦面に立地する。調査区内で最も標高の高い場所にある。東側でSI107を掘り込んでいる。

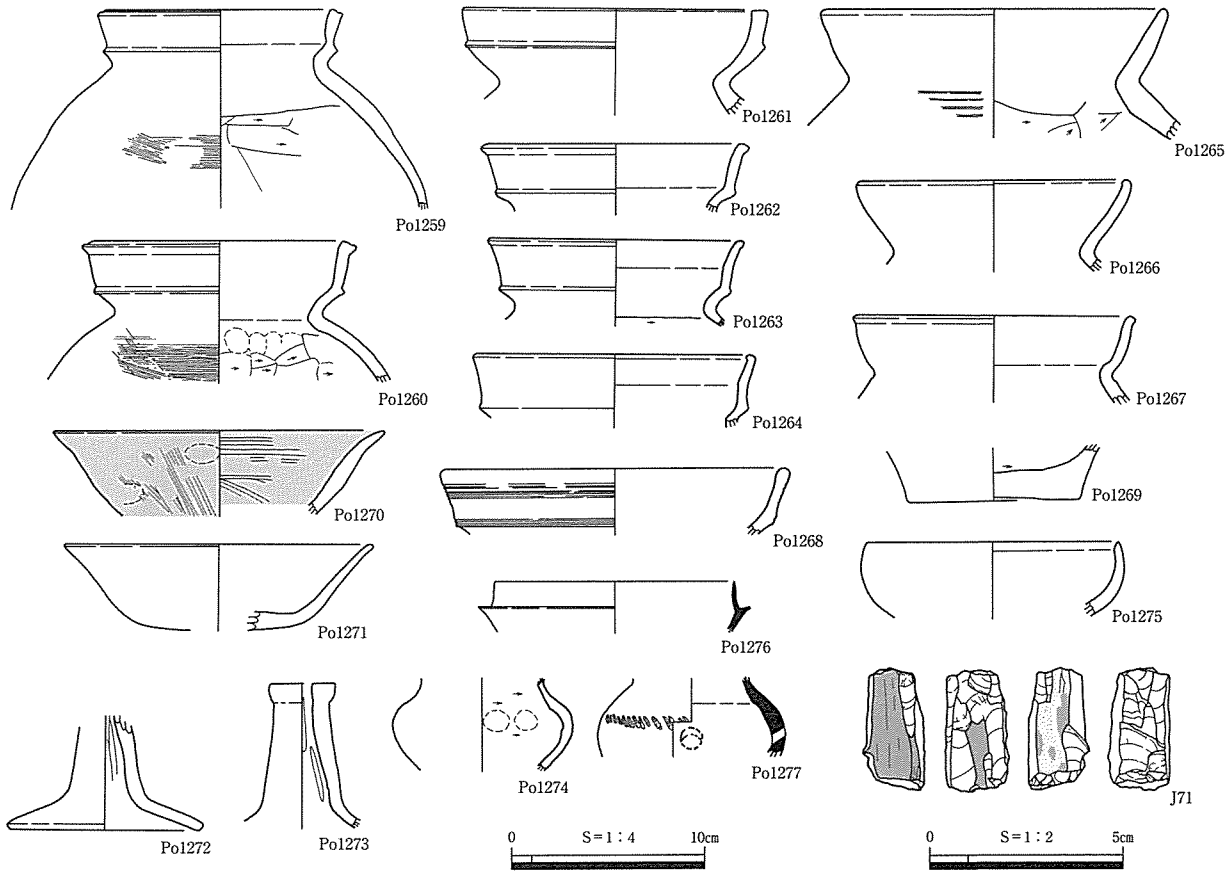
遺存状態はよい。平面形は長方形を呈する。規模は、長軸4.23m、短軸3.42m、床面積は12.5㎡を測る。残存壁高は南側で最大17cmを測る。壁溝は部分的に攪乱により壊されているが、全周すると考えられる。幅８～24cm、深さ４～８cmほどで断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1・P2の２基で、主柱間距離は1.6mになる。P3は中央ピットと考えられ、浅い窪み状を呈する。埋土中に炭化物は認められなかった。P4は壁際にあり、特殊ピットと考えられる。埋土中に土器片や炭化物が認められた。その他のピットは用途不明である。

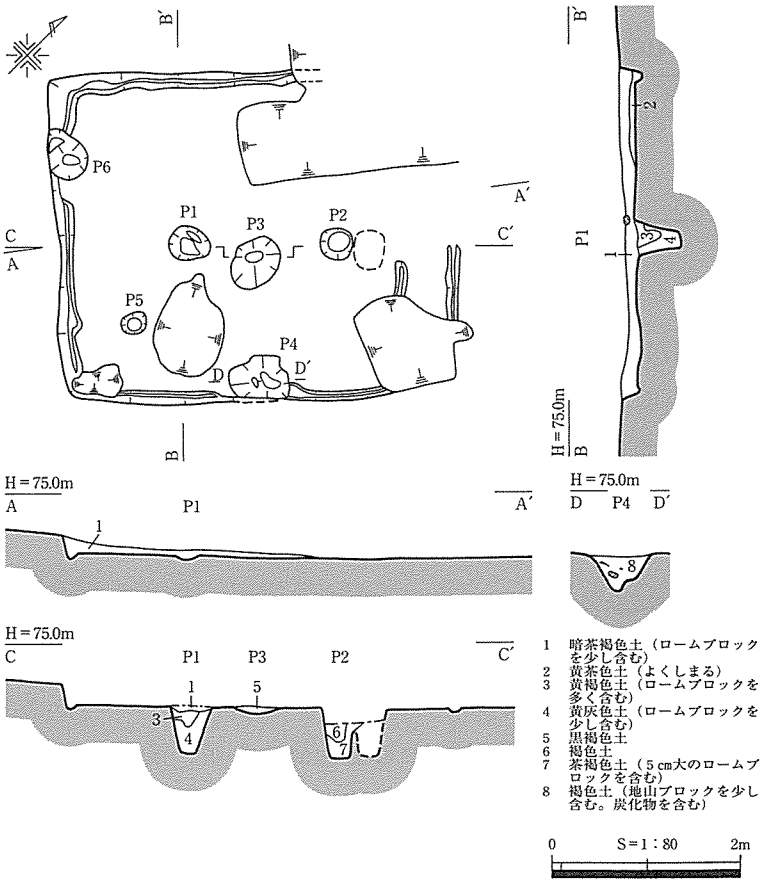
床面検出中でSI107の壁溝が露出しており、部分的に貼床のあった可能性はあるが、検出には至らなかった。

埋土は２層に分層でき、自然堆積と考えられる。

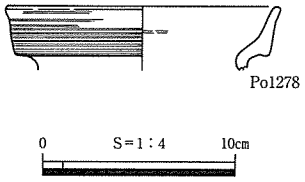
出土遺物は、弥生土器甕Po1278を図化したが、伴うものではない。埋土中で古墳時代中期ごろの土



第431図　笠見第３遺跡SI100出土遺物実測図



第432図　笠見第３遺跡SI106遺構図



第433図　笠見第３遺跡SI106出土遺物実測図

表138　笠見第３遺跡SI106ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	45×37-46	主柱穴
P2	35×33-52	主柱穴
P3	60×45-4	中央ピット
P4	62×45-41	特殊ピット
P5	28×23-18	
P6	42×40-39	

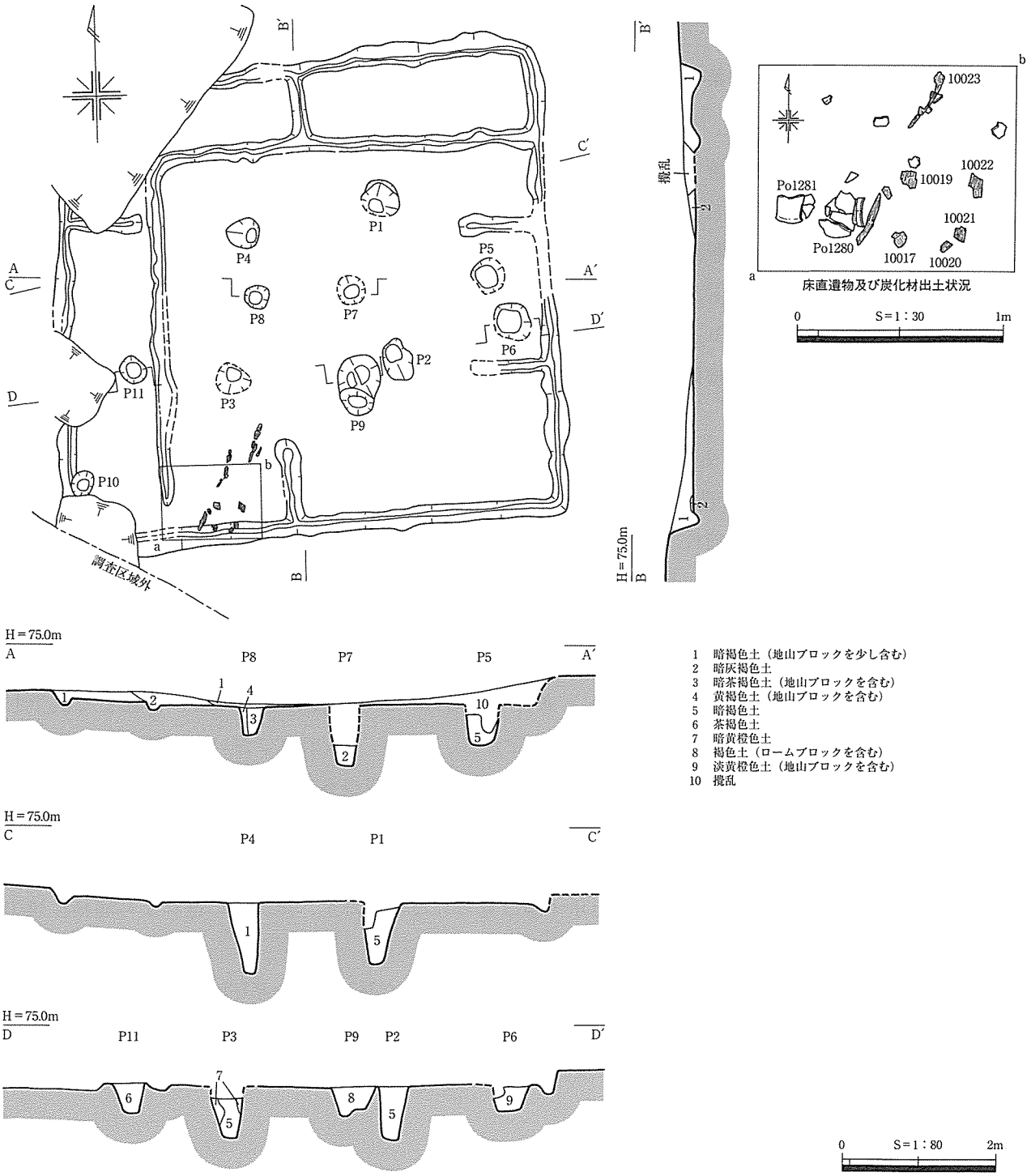
器片が出土している。

出土遺物と形態的特徴から、古墳時代中期ごろに属する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

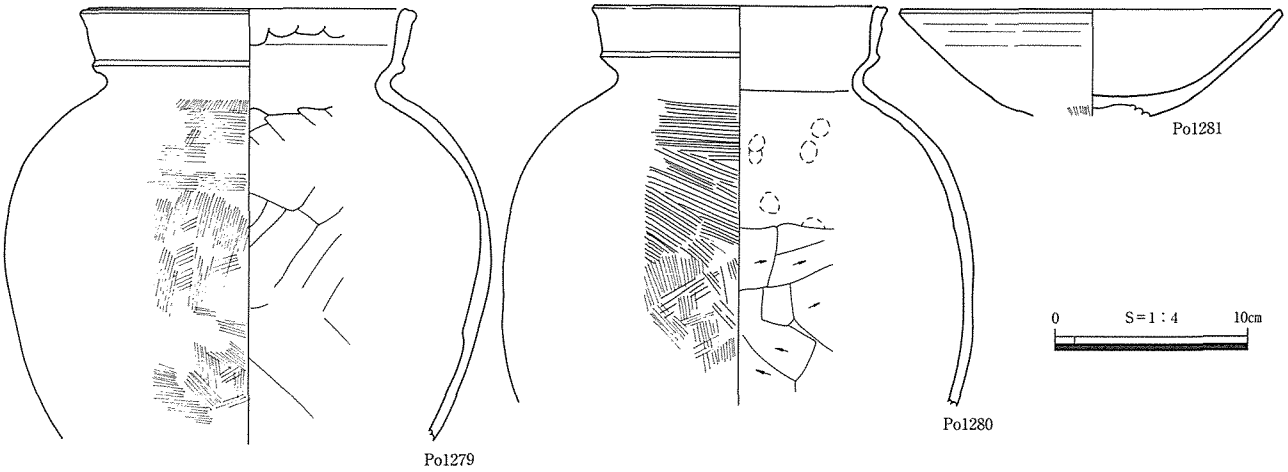
SI108（第434・435図、PL. 79・162）

調査区南側M16～17グリッド内にあり、標高74.5m付近の平坦面に立地する。調査区内で最も標高の高い場所にある。東側にSI106などがある。

遺存状態は比較的よく、平面は方形を呈する。規模は、長軸6.55m、短軸6.26m、床面積は35.2㎡を測る。残存壁高は南側で最大28cmを測る。当遺構は、北東から南西にかけて床面をＬ字状に区画したベッド状遺構を持つ。幅約0.8～1.04mで、高さは最も残りのよい南側で約10cmあり、地山を削り出して作られている。



第434図　笠見第３遺跡SI108遺構図



第435図　笠見第３遺跡SI108出土遺物実測図

表139　笠見第３遺跡SI108ピット規模一覧表　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	50×46－80	主柱穴	P７	42×35－57△	
P２	55×36－71	主柱穴	P８	30×30－38	
P３	46×40－52△	主柱穴	P９	82×53－30	
P４	47×36－91	主柱穴	P10	38×28－41	
P５	48×45－46	特殊ピットか？	P11	35×34－41	

壁溝は、一部攪乱により破壊されているが全周すると考えられる。幅約16～33cmで、深さ約10cm、断面はＵ字状を呈する。また、ベッド状遺構の内側にも溝がめぐっており、幅12～27cm、深さおよび断面は壁溝と同様である。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に1.95m、2.12m、1.8m、1.65mを測る。中央ピットと考えられるものは認められなかった。P5とP6は、壁際に近く、両端を溝に囲まれていることなどから特殊ピットの可能性がある。その他のピットに関しては用途不明である。

床面およびベッド上の４辺それぞれの壁溝から、長さ１m前後の直線的な溝が、中央部に向かって伸びている。溝は幅約16～35cm、深さ約８～14cmである。これらは向かい合う両辺それぞれで相対せず、互いに関連するものではないと考えられる。また主柱の軸線からも外れていることなどから建物構造に関わるとも考えにくい。特殊ピットと考えられるP5・６の両端にあること、床面上で出土した甕Po1280や高杯Po1281の東側に位置することなどから、おそらく当床面において、間取りを意識した空間領域が設定されており、この溝はそれに伴う間仕切りに関わるものと推察される。

埋土は自然堆積であると考えられる。南側床面上では、炭化材が少量出土しており、中央部に向かって倒れこんでいることから、垂木材が焼失したものと考えられる。当遺構は、床面上で被熱による焼土面および埋土内でも炭化物等焼失を示す層は見られなかったが、炭化材の遺存から廃絶後焼失したものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から土師器甕Po1279、床面直上から上述した甕Po1280や高杯Po1281が出土している。

出土遺物と形態的特徴から、天神川Ｖ期、古墳時代中期前葉に相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

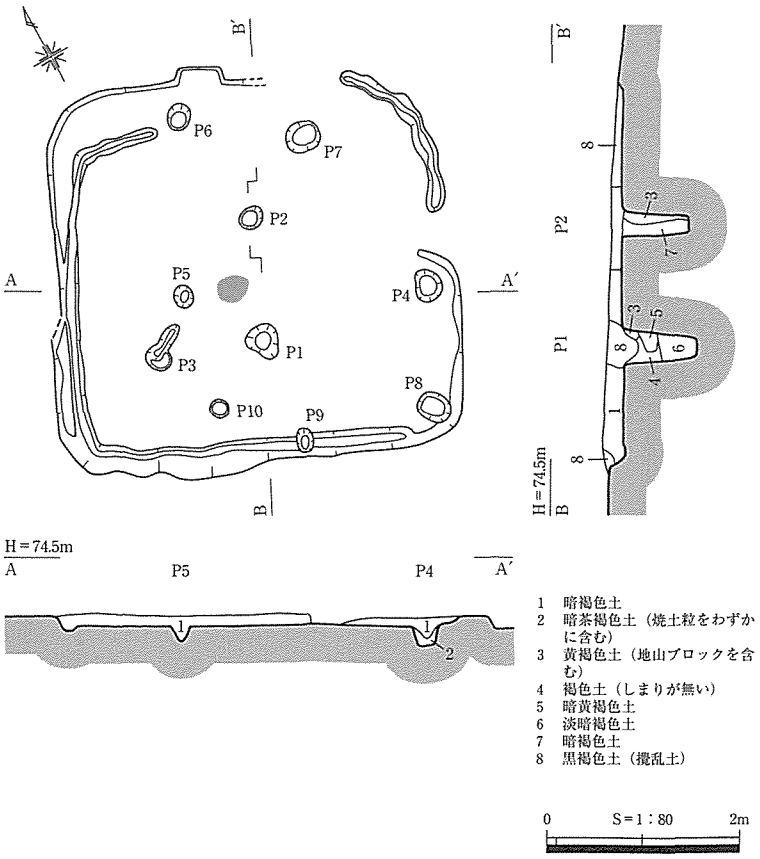
SI110（第436図、PL. 79）

調査区南側K17・L17グリッド内にあり、標高74.0～73.8mのほぼ平坦な場所に立地する。東側は試

掘７トレンチにかかる。

遺存状態はあまりよくない。平面は方形を呈すと考えられる。規模は、長軸4.3m、短軸4.07m、床面積は推定13㎡である。残存壁高は、南西側で最大15cmを測る。壁溝は、北西から南東までと、北東側に見られる。幅は11～25cmで、深さは２～５cm、断面はＵ字状である。この２箇所に位置する溝は、両者のめぐり方からすると連結せず、別遺構のものと考えられ、当遺構は北東側の壁溝を持つ遺構を掘り込むと推察される。ただし、その遺構はプランおよび性格は不明である。

ピットは10基検出した。主柱穴はP1・P2の２本柱と考えられ、主柱間距離は1.3mになる。中央ピットはなく、床面中央には被熱硬化した焼土面が見られた。その他のピットについてであるが、比較的浅いピットが多く、埋土にもあまり差異は見られず性格は不明である。P6・P7・P8は埋土がやや異なり、当遺構のプランから外れて位置していることから、掘り込まれている遺構のものと考えられる。



第436図　笠見第３遺跡SI110遺構図

表140　笠見第３遺跡SI110ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	37×34－82	主柱穴	P６	28×25－27	
P２	25×23－70	主柱穴	P７	37×35－14	
P３	28×20－19		P８	35×28－38	
P４	35×28－23		P９	25×18－12	
P５	23×20－15		P10	20×20－７	

埋土は、ほぼ単層で自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、土師器等が見られたが図化に耐えうるものはなかったが、形態的特徴から、古墳時代の竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

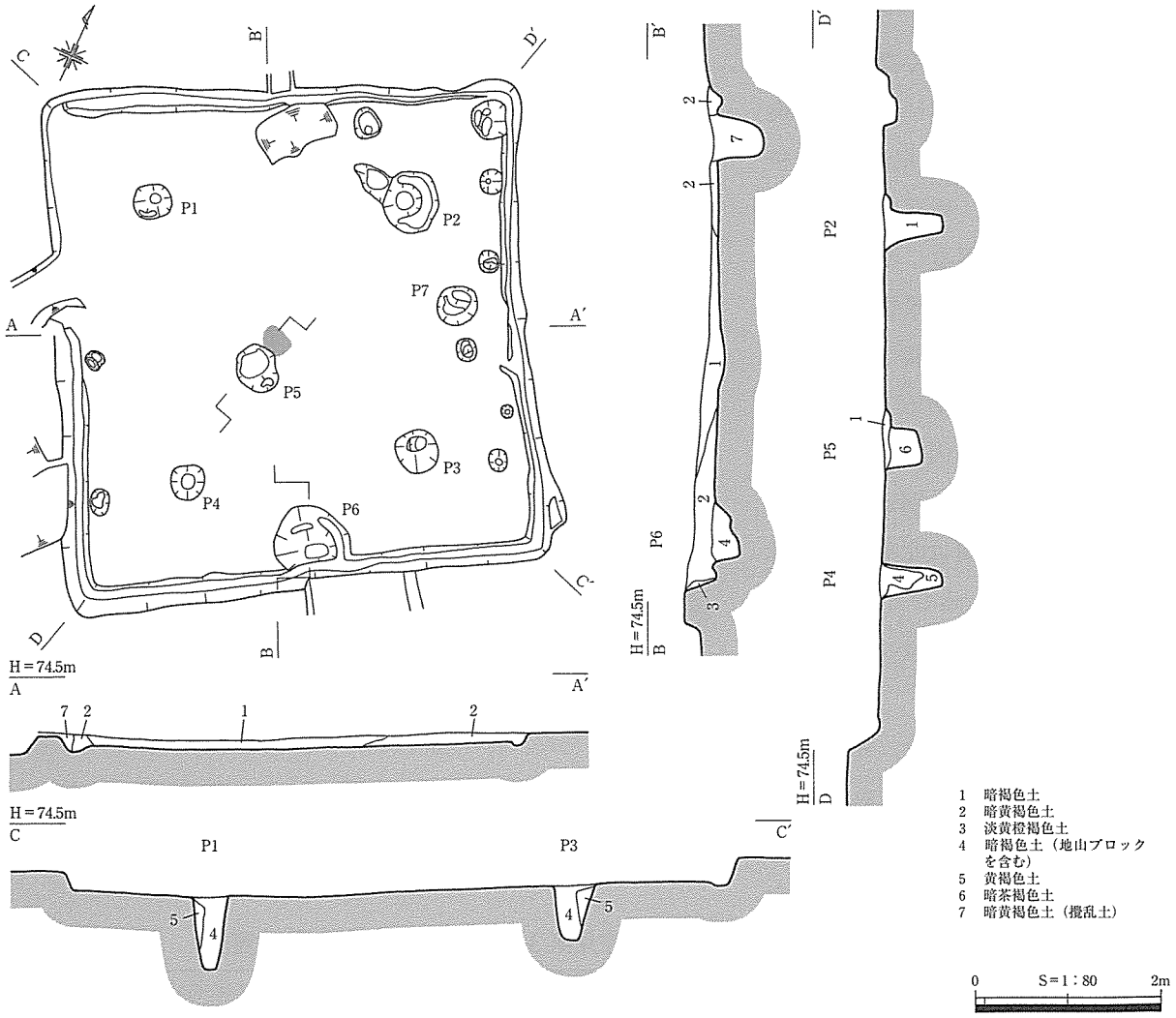
SI111（第437・438図、PL. 80・163）

調査区南西側のL16グリッド、標高73.9～74.1mのほぼ平坦面に立地する。東側にSI112が隣接する。

平面方形を呈し、長軸5.6m、短軸5.2m、床面積は23.3㎡を測る。全体に削平・攪乱を受けており、遺存状況は悪い。壁高は最高で30cm残存する。壁溝はない。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2から時計回りに2.7m、2.5m、3.1m、2.7mである。P5は中央ピットで、周辺に被熱面をとどめる。ピットの位置はやや南側に偏る。P6は特殊ピットである。ピットの両側に仕切り溝は伴わない。P7は性格不明である。

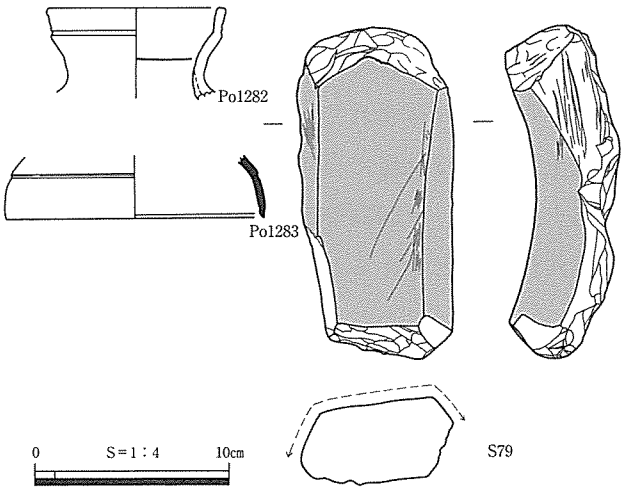
埋土は暗褐色土と淡黄褐色土に分かれる。



第437図　笠見第３遺跡SI111遺構図

表141　笠見第３遺跡SI111ピット規模一覧表

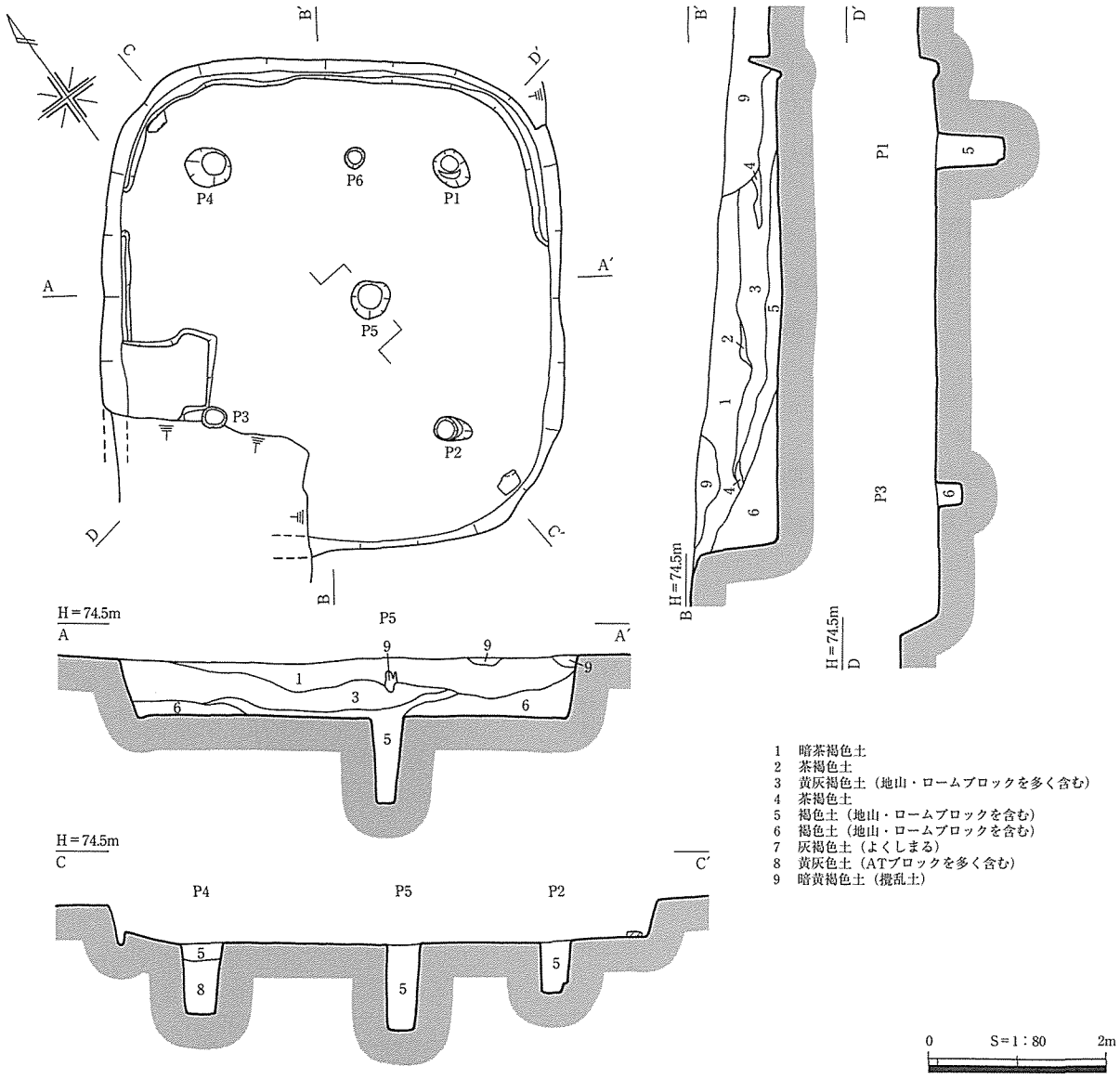
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	42×36－80	主柱穴
P２	68×60－62	主柱穴
P３	48×46－60	主柱穴
P４	38×37－70	主柱穴
P５	54×46－40	中央ピット
P６	84×63－30	特殊ピット
P７	44×42－20	不明



第438図　笠見第３遺跡SI111出土遺物実測図

出土遺物には、埋土中から土師器甕Po1282・1283がある。また、床面からは砥石S79が出土している。

出土遺物等から、天神川Ｘ期、古墳時代後期初頭ごろの竪穴住居跡と考えられる。（西川）



第439図　笠見第３遺跡SI113遺構図

SI113（第439・440図、PL．80・148・163）

調査区中央南側のＬ・M15グリッド、標高74.0～74.3mのほぼ平坦面に立地する。東側にはSI114・115が隣接する。

表142　笠見第３遺跡SI113ピット規模一覧表

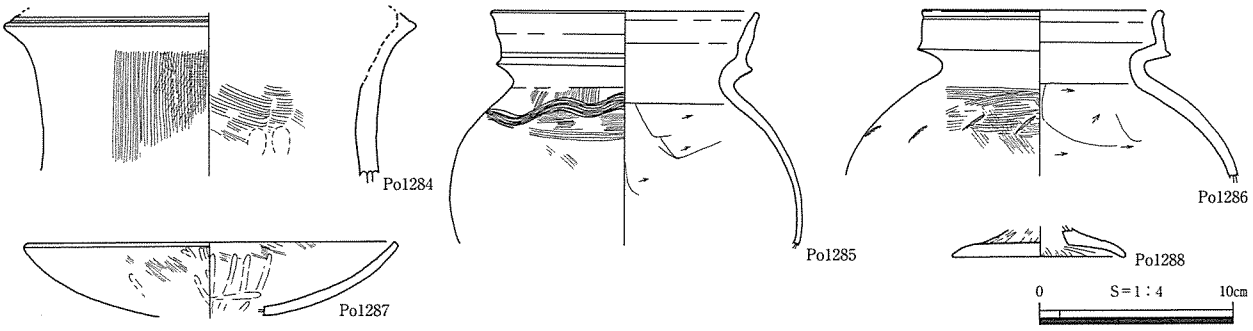
ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	44×36－78	主柱穴	Ｐ４	50×44－80	主柱穴
Ｐ２	43×26－60	主柱穴	Ｐ５	46×42－100	中央ピット
Ｐ３	28×24－30	主柱穴	Ｐ６	23×22－22	不明

平面隅丸方形を呈し、長軸5.6m、短軸5.2m、床面積は22.5㎡を測る。西隅は大きく攪乱を受ける。壁高は最高で48.0cm残存する。壁溝は、幅10～20cm、深さ６cmで、北・西側周壁際のみに認められた。

主柱穴はP1～P4で、柱間距離はP1-P2から時計回りに3.0m、2.7m、2.9m、2.7mである。P5は中央ピットで、深さ100cmにもおよぶ。周辺の床面からは炭化材が出土した。P6は性格不明である。

埋土は褐色土を主体とした４層にわかれ、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、埋土中からの土師器甕Po1285・1286、低脚杯Po1287、高杯Po1288、弥生土器壺Po



第440図　笠見第３遺跡SI113出土遺物実測図

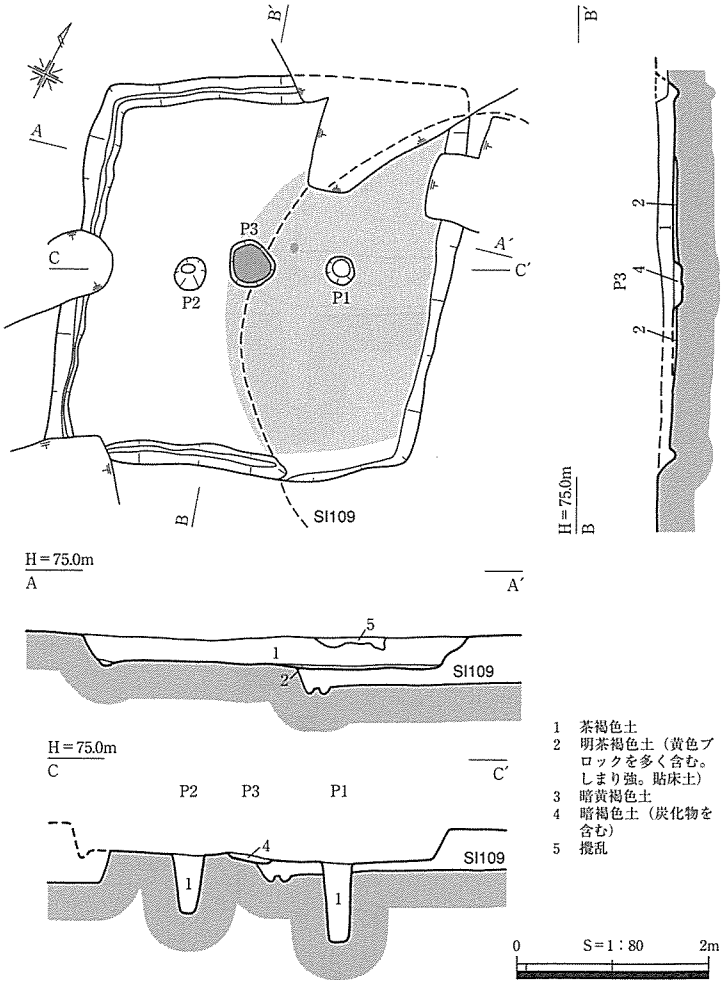
1284を図化した。

出土遺物等から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭ごろの竪穴住居跡と考えられる。（西川）

SI116（第441・442図、PL. 80・163）

調査区南側、L17グリッドの標高74.2～74.3mの緩斜面に立地する。東側ではSI109を掘り込む。平面は方形を呈し、長軸4.2m、短軸4.0m、床面積は11.8m²を測る。全体に後世の攪乱をうけ、遺存状態はよくない。壁高は最高で35cm残存する。壁溝は幅12cm、深さ６cmで断面U字状である。ただし、貼床部では平面・断面のいずれでも壁溝を確認することができなかった。

主柱穴はP1とP2で、柱間距離は約1.6mである。P3は中央ピットで、深さ10cm前後と非常に浅い。埋土には炭化物が含まれ、底面は被熱により硬化していた。



第441図　笠見第３遺跡SI116遺構図

SI109と重複する床面部分では、若干SI109の埋土を掘り込んだ上に、貼床土が付加されていた。

埋土は茶褐色土が、ほぼ１層堆積している。

出土遺物には、埋土中からの土師器甕Po1289、床面上からの甕Po1290を図化した。

出土遺物等から、天神川Ⅹ期以降、古墳時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（西川）

表143　笠見第３遺跡SI116ピット一覧表

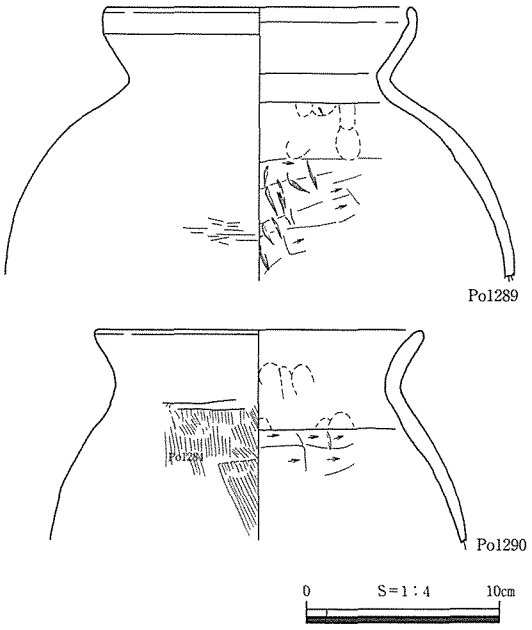
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	30×30－82	主柱穴
P２	34×30－61	主柱穴
P３	50×48－８	中央ピット

SI117（第443・444図、PL. 81・149・163）

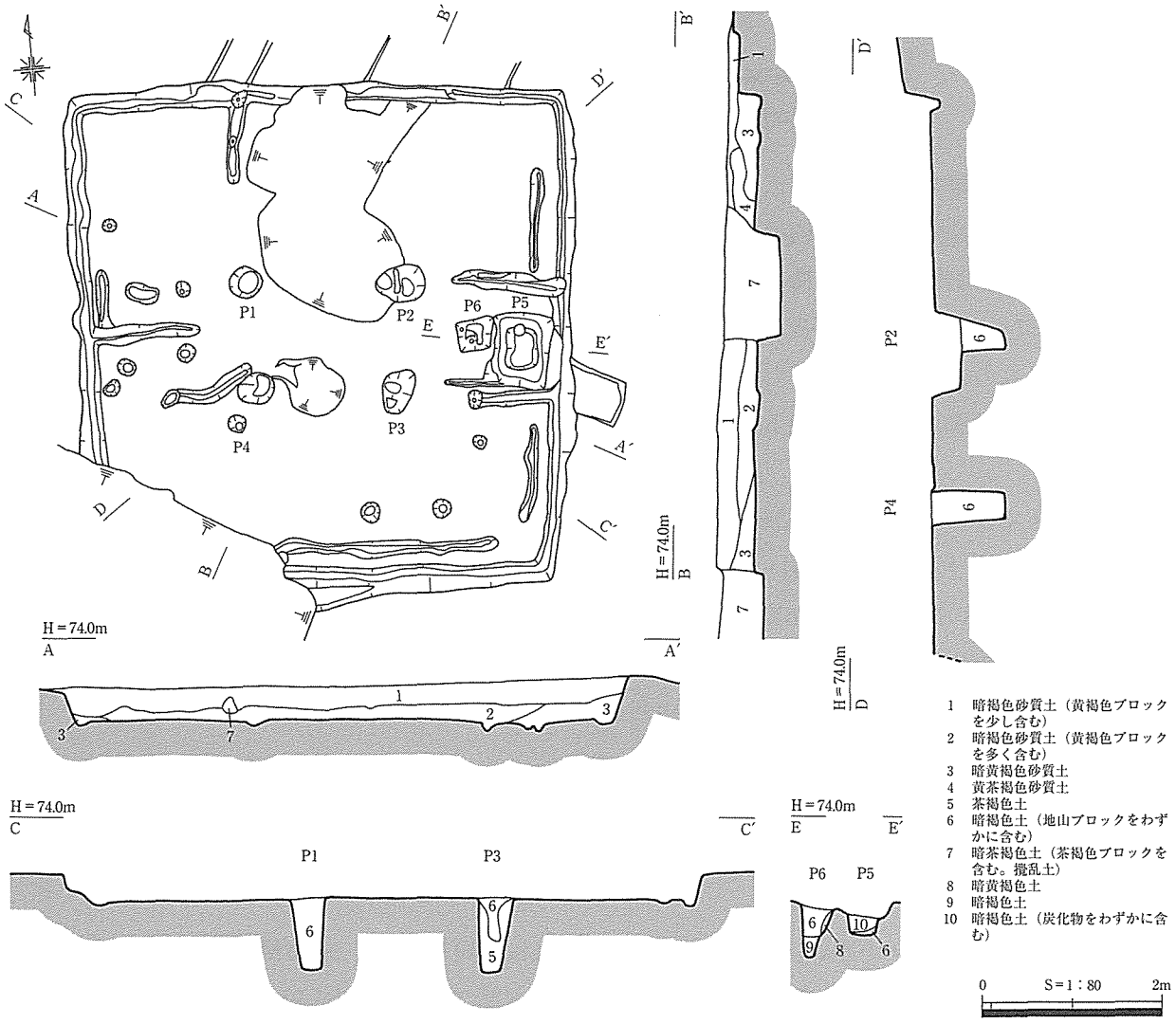
調査区南西側のK17グリッド、標高73.4～73.6mの緩斜面に位置する。東側でSI126を掘り込む。

平面方形を呈し、床面の拡張が認められる。一辺5.2m、床面積は26.2㎡以上を測る。壁高は最高で56㎝残存する。壁溝は幅15～20㎝、深さ５～10㎝、断面Ｕ字状を呈する。

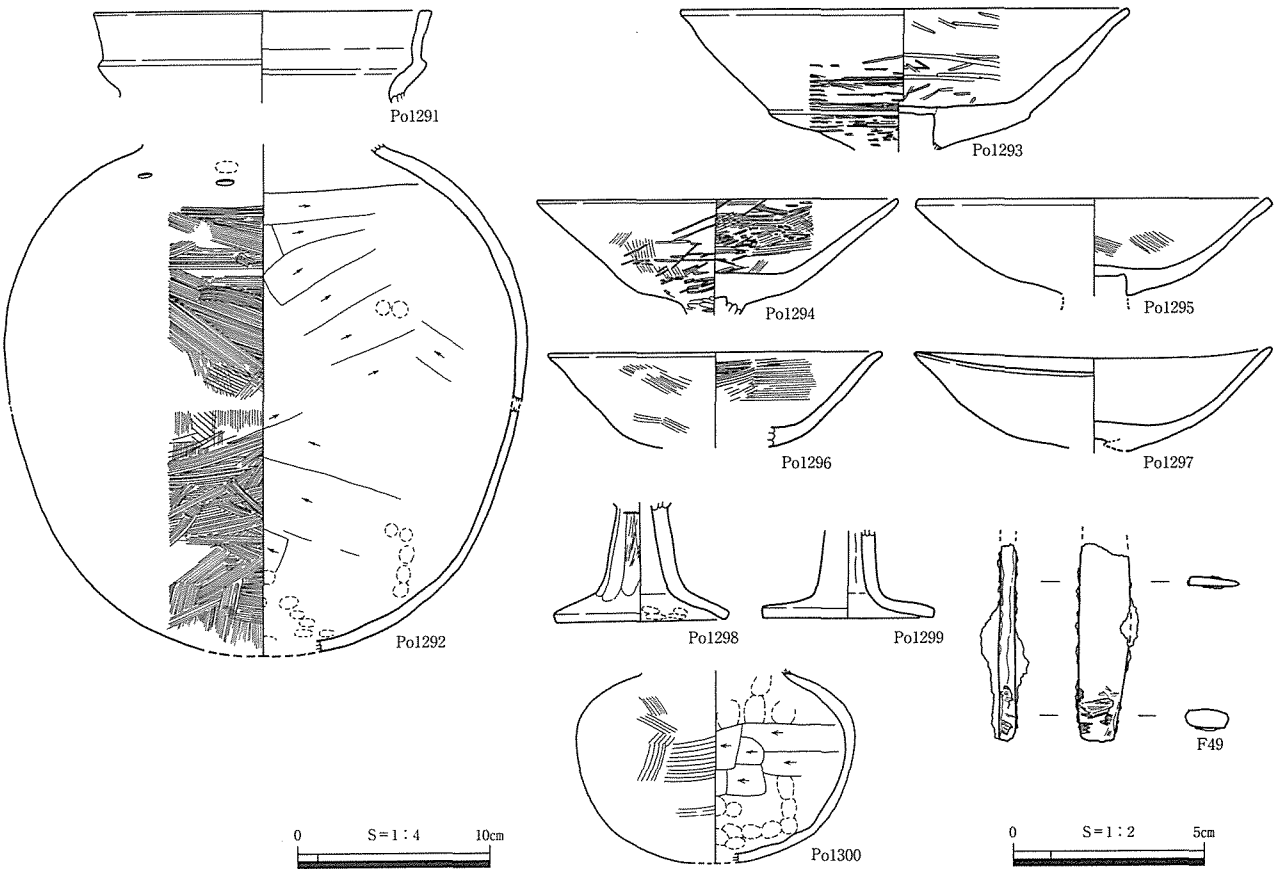
主柱穴はP1～P4で、中央寄りに集中する。柱間距離はP1-P2から時計回りに3.0m、1.2m、3.0m、1.2mである。断面観察では柱痕跡を確認できなかった。いずれも深さ60㎝をこえる深い柱穴である。P5・P6は特殊ピットで、前者が拡張前、後者が拡張後のものである。仕切り溝は両者にあり、北側は同じ溝を踏襲して壁側に拡張している。床面北辺西寄りと西辺中央部にも床面仕切り溝がある。



第442図　笠見第３遺跡SI116出土遺物実測図



第443図　笠見第３遺跡SI117遺構図



第444図　笠見第３遺跡SI117出土遺物実測図

建物の拡張は北辺を軸にして、三方向に行なわれ、特殊ピットも同様に対応しており、北側の仕切り溝とピットの北辺を軸にして、拡張に伴った新しいものにつくり替えている。拡張前の周壁溝は部分的に残る。幅10～20cm、深さ５cm前後である。拡張前の床面積は22.8m²以上である。

表144　笠見第３遺跡SI117ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	38×34－82	主柱穴	P４	20×19－81	主柱穴
P２	55×41－80	主柱穴	P５	86×60－56	特殊ピット
P３	49×36－84	主柱穴	P６	38×34－22	特殊ピット

埋土は大きく３層にわかれ、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、土師器甕Po1291・1292、高杯Po1293～1299、直口壺胴部Po1300、刀子F49がある。このうち、北東隅の床面からはPo1293～1296が、西南寄りの床面からはPo1297が出土している。その他は、埋土中での出土である。

出土遺物等から、天神川Ⅴ期、古墳時代中期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（西川）

SI121（第445・446図、PL. 82・164）

調査区南側L13～14グリッド内にあり、標高73.8mのほぼ平坦面に立地する。SI122の南西側を掘り込んでいる。

遺存状態は東側の残りが悪い。平面は方形で長軸4.0m、短軸3.5m、床面積は推定11.2m²を測る。残存壁高は南側で最大56cmである。壁溝は東側を除きめぐっている。幅約10～15cm、深さ６cm、断面Ｕ字状を呈する。

主柱穴はP1とP2の２基で、主柱間距離は1.0mを測る。中央ピットは認められず、主柱間に焼土面を検出した。P3は、埋土から当遺構に伴うものであるが、用途は不明である。

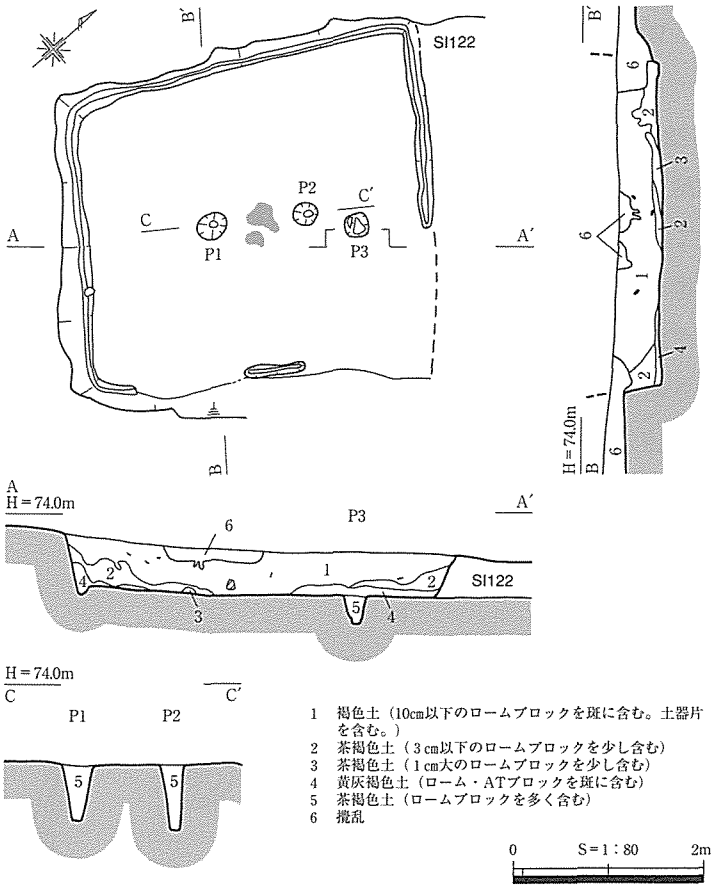
埋土は、地山ブロックを多く含んだ土による自然堆積と考えられる。

遺物はすべて埋土中からの出土である。甕Po1301～1305、小型丸底壺Po1306・1307、高杯Po1308～1311、小型平底壺Po1312、鉄器茎部F50、敲石S80・81がある。

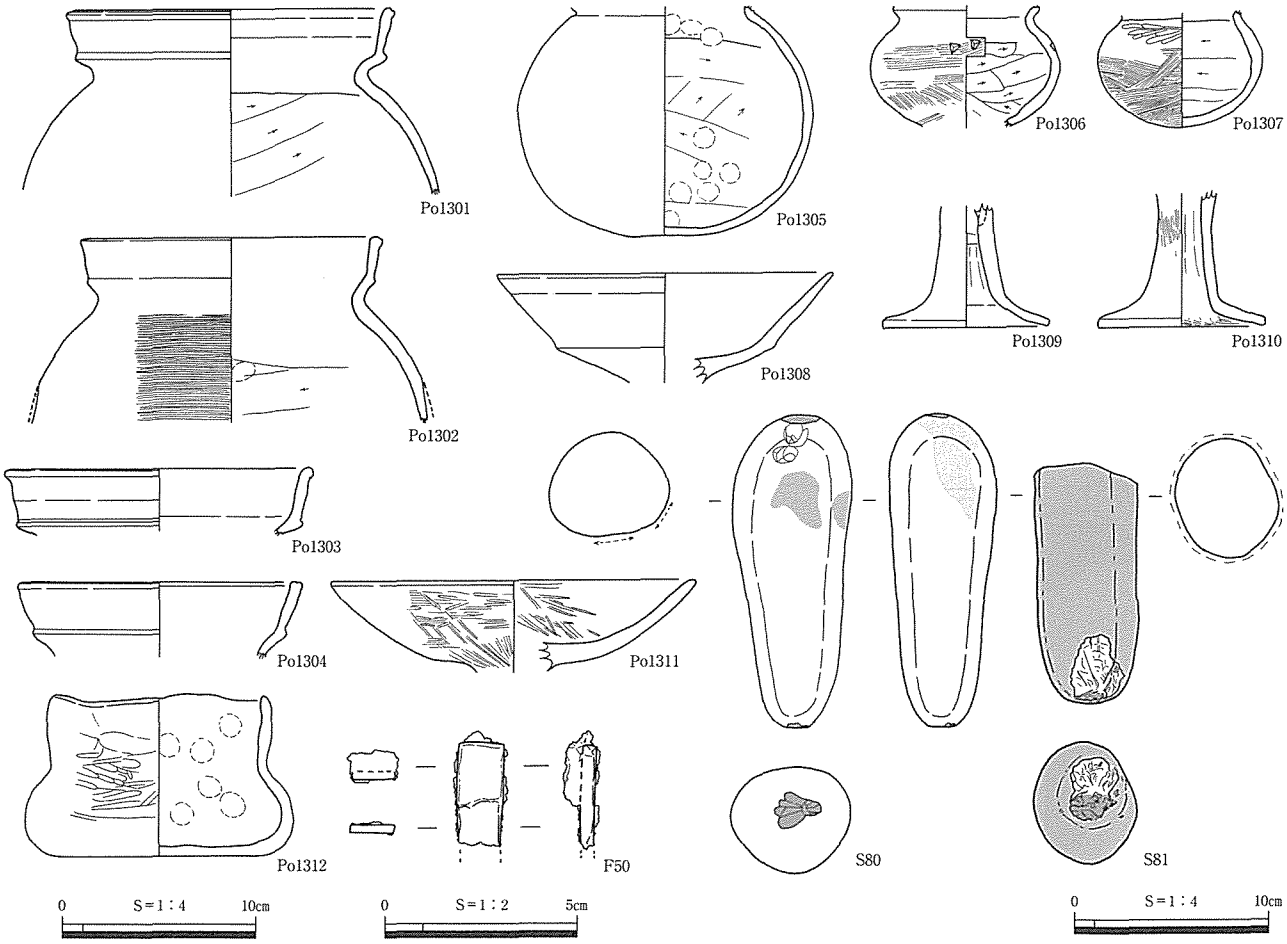
出土遺物と形態的特徴から、天神川

表145　笠見第３遺跡SI121ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	32×24－63	主柱穴
P２	25×22－69	主柱穴
P３	25×24－30	



第445図　笠見第３遺跡SI121遺構図



第446図　笠見第３遺跡SI121出土遺物実測図

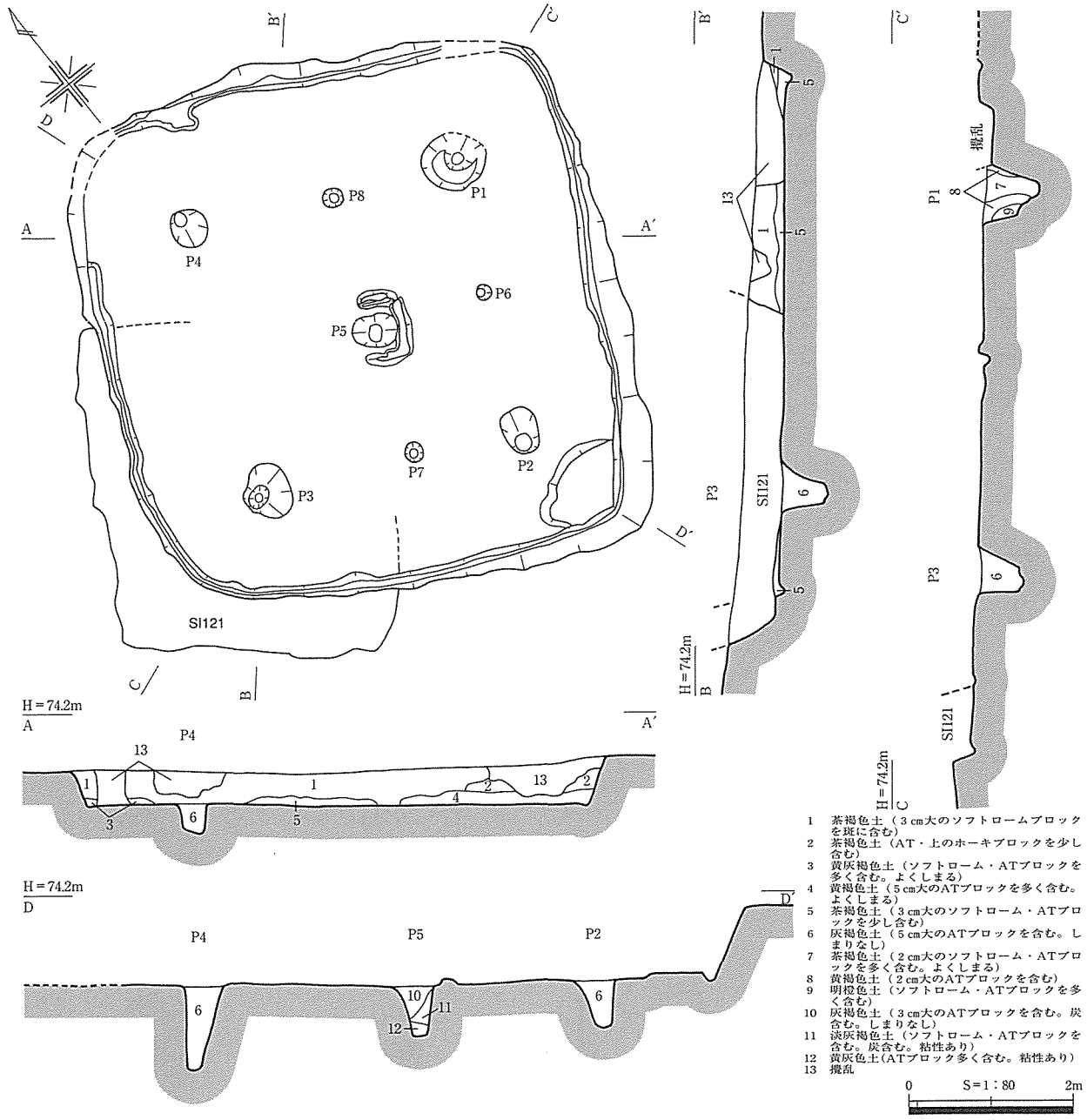
Ⅴ～Ⅵ期、古墳時代中期前葉～中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI122（第447・448図、PL. 82・166）

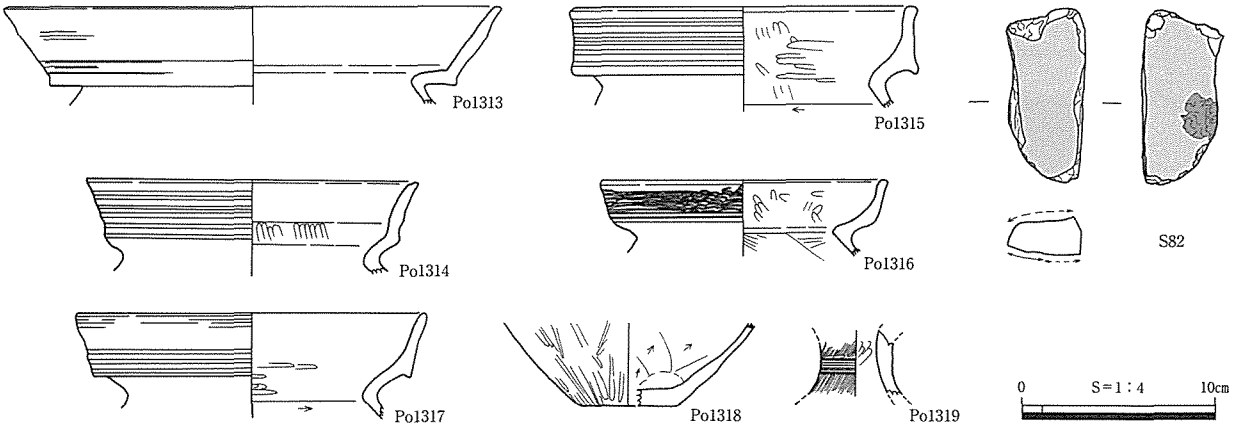
調査区南側L13グリッド内にあり、標高74.0mのほぼ平坦面に立地する。南西側をSI121に掘り込まれている。

遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈し、長軸6.6m、短軸6.5m、床面積32.8㎡を測る。残存壁高は南西側で最大80㎝である。壁溝は北西側で一部途切れるが、壁下をほぼ全周する。幅約10～20㎝、深さ約５㎝、断面Ｕ字状である。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に、3.55m、3.25m、3.5m、3.5mを測る。P5は中央ピットと考えられ、平面形は楕円形で、埋土中に炭化物を含む。西側で口が開く「コ」の字状



第447図　笠見第３遺跡SI122遺構図



第448図　笠見第３遺跡SI122出土遺物実測図

表146　笠見第３遺跡SI122ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	75×70－68	主柱穴	P５	55×40－65	中央ピット
P２	55×35－50	主柱穴	P６	19×15－51	
P３	60×55－56	主柱穴	P７	27×24－35	
P４	50×37－100	主柱穴	P８	25×22－46	

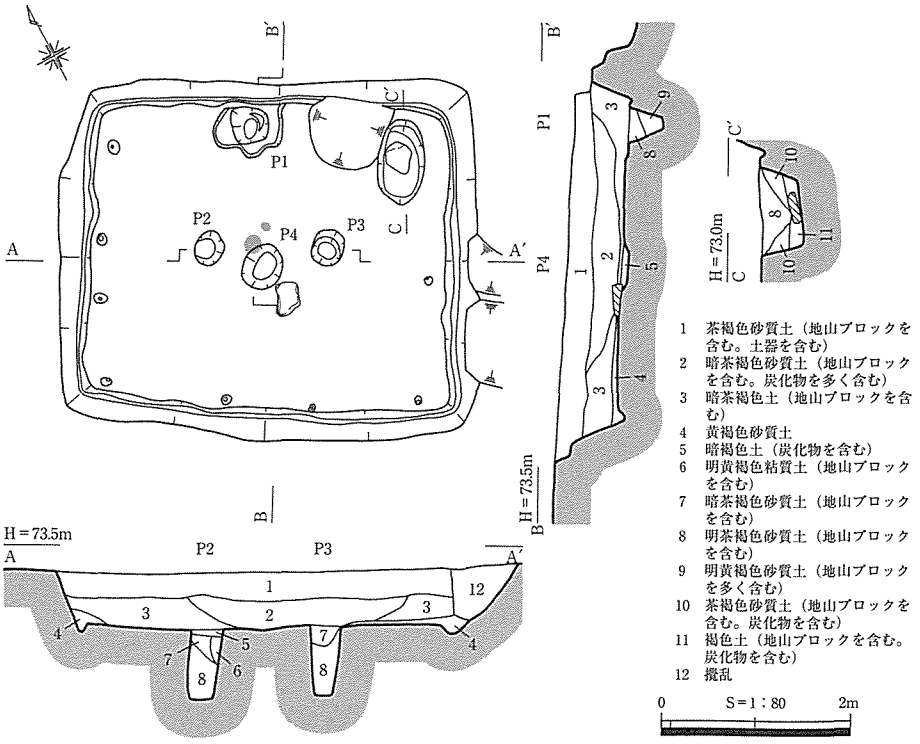
の地山削り出しの土手が周囲をめぐる。土手は幅約７～10cm、高さ約５cmを測る。内側に被熱痕跡は認められなかった。P6～P8は主柱軸線上の中間に配されていることから、補助柱であると考えられる。

床面南西隅では、平坦な段状の高まりを検出した。最大幅80cm、高さ７cmで、地山を削り出して作られている。用途は不明である。

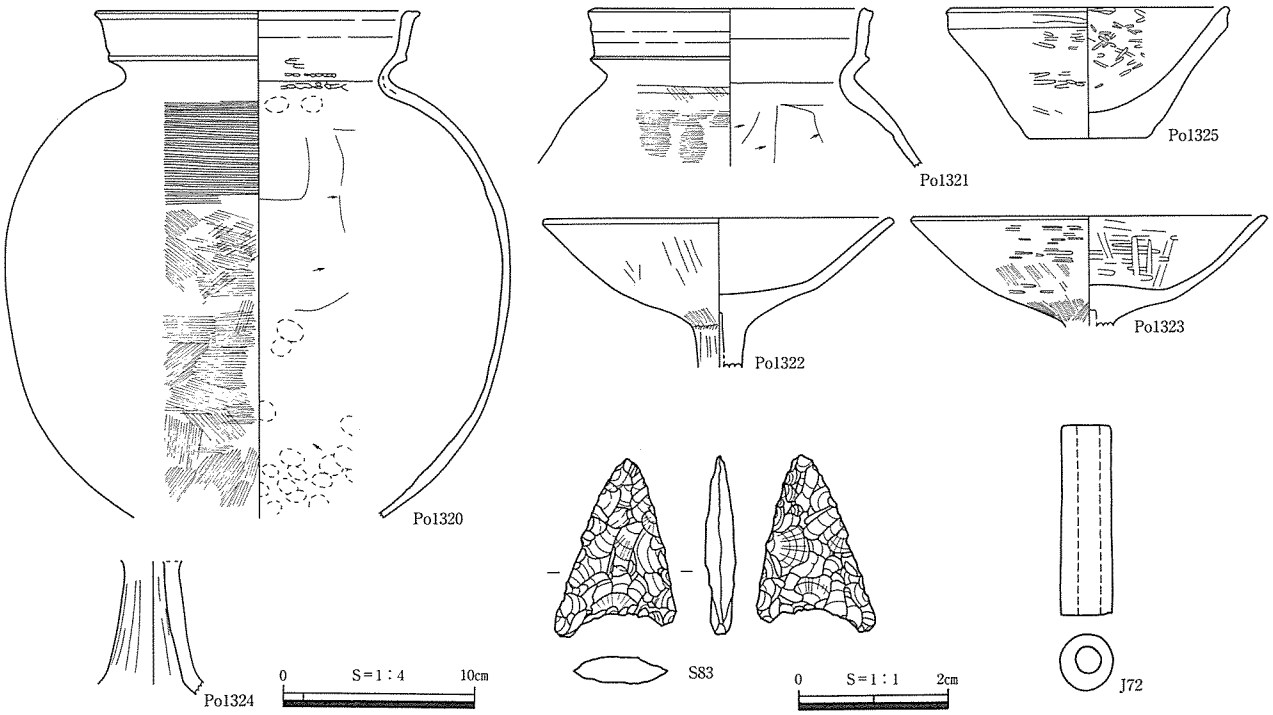
埋土は、床面直上で地山ブロックをかなり多く含む第３・４層が堆積していたが、故意に埋めた様子ではなく自然堆積の範疇に入るものと考えられる。

遺物はすべて埋土中からの出土である。土師器甕Po1313・1314、弥生土器甕Po1315～1317、底部Po1318、筒部Po1319、砥石S82がある。遺物の中には赤色塗彩されたものが含まれる。

出土遺物と形態的特徴から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）



第449図　笠見第３遺跡SI124遺構図



第450図　笠見第３遺跡SI124出土遺物実測図

SI124（第449・450図、PL. 82・164）

調査区南西側のJ18グリッド、標高72.9～73.3mのほぼ平坦面に位置する。SI125の北側に隣接する。平面長方形を呈し、長軸4.4m、短軸3.8m、床面積11.6㎡を測る。壁高は最高で68cm残存する。壁際には、幅10cm前後、深さ８cm程度の壁溝が全周する。

表147　笠見第３遺跡SI124ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	36×32－74	主柱穴
P２	36×30－74	主柱穴
P３	50×41－７	中央ピット
P４	74×56－40	特殊ピット
P５	90×50－41	不明

主柱穴はP1とP2で、柱間距離は1.3m。P3は中央ピットで、深さ７cmと浅く、底面は平坦である。周辺には被熱箇所がみられる。P4は特殊ピットで、周囲に低い平坦面を持ち、その中央に隅丸方形のピットを設ける。特殊ピットの両側に仕切り溝は無い。P5は長楕円形をなし、底面には平石が残存していたが性格不明である。

その他、北面を除いた三面の壁溝内側に、直径10cm前後、深さ10～15cmの小ピットを合計８基検出した。堰板を留める親杭又は壁を構築するためのものの可能性が考えられる。

埋土は茶褐色～黄褐色のものが主体となり、上下二層に大別される。自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、埋土上層から管玉J72が、埋土下層からは土師器甕Po1320・1321、高杯Po1322～1324、鉢Po1325がある。

出土遺物等から、天神川Ⅴ期、古墳時代中期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（西川）

SI127（第451・452図、PL. 83・165）

調査区南西端のI21グリッドにあり、北東方向に傾斜する標高72.4～72.8mの斜面に立地する。南東側約10mにSB13が位置する。

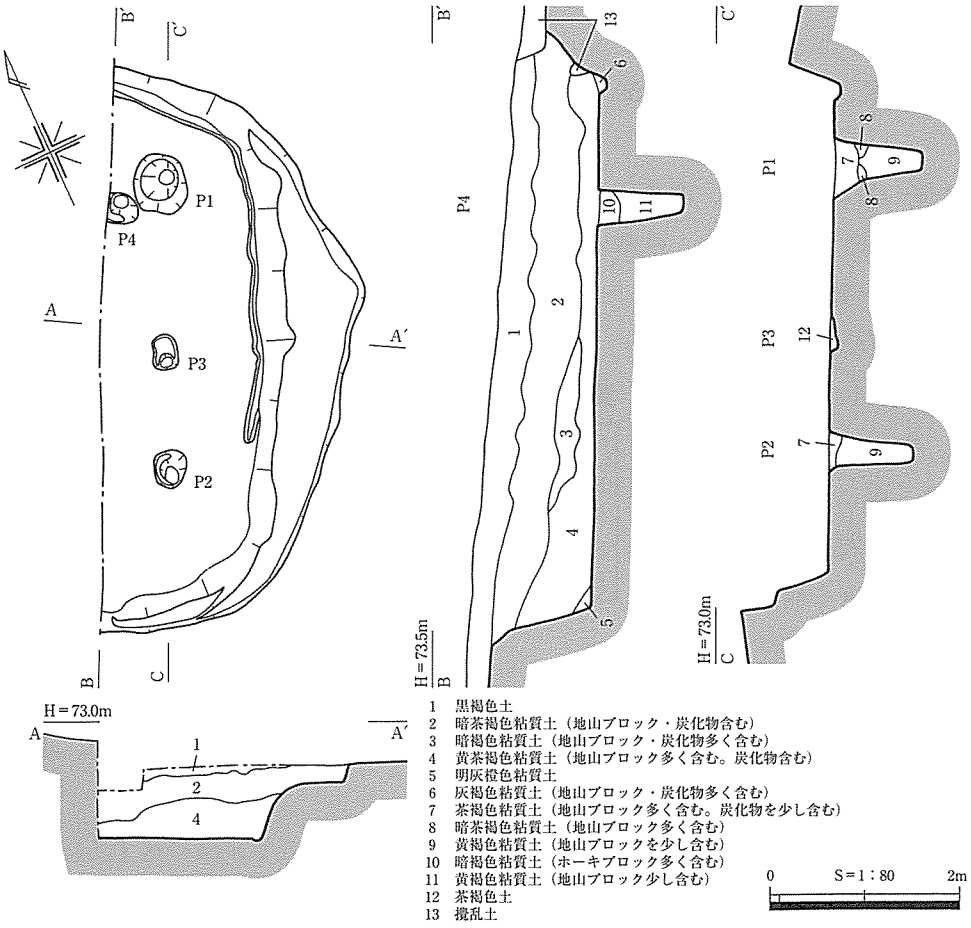
住居の南側が調査区外にあるため全容を窺うことはできないが、住居東側に遺存する周壁や壁溝から、平面は隅丸方形を呈すると思われる。規模は南北5.95m、東西2.65m以上、床面積7.3㎡以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい南西壁で最大1.03mを測る。北側から南東側にかけての壁際に

は、幅６～18cm、深さ８cm前後、断面Ｕ字状を呈する壁溝がめぐる。

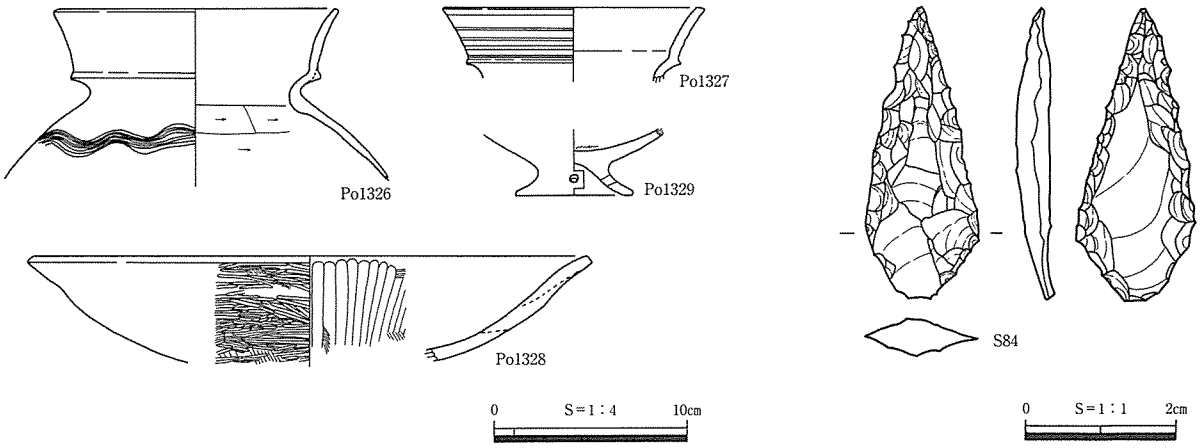
床面から４個のピットを検出した。これらのうち、P1・P2はともに壁溝から70cmの距離をおくことから当住居跡の主柱穴と考えられる。両者の主柱穴間距離は2.9mを測る。P1南西側に近接するP4は、その位置関係から建て替え前の柱穴である可能性が考えられる。ともなう柱穴は調査区外に存在すると思われる。

表148　笠見第３遺跡SI127ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	66×56－92	主柱穴
P２	40×33－88	主柱穴
P３	35×26－８	
P４	31×21－90	主柱穴か



第451図　笠見第３遺跡SI127遺構図

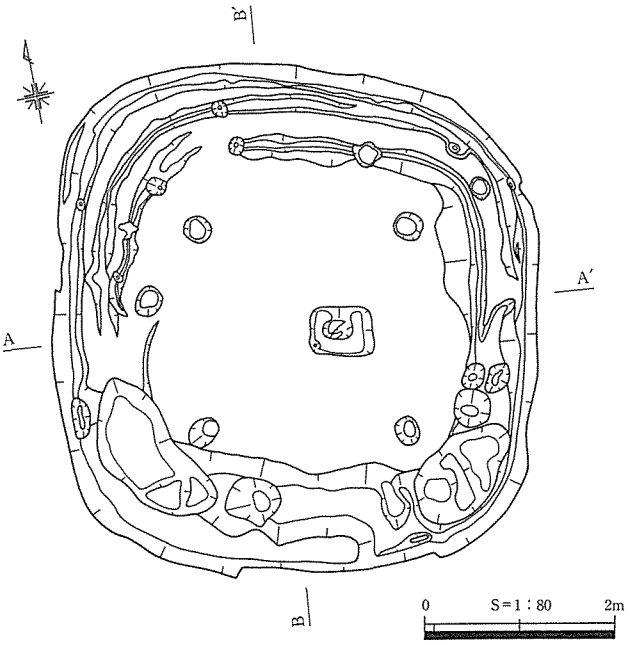


第452図　笠見第３遺跡SI127出土遺物実測図

埋土は褐色系を主体とし、自然堆積の状況を示す。

出土遺物は、埋土中より出土した土師器甕Po1326・1327、高杯Po1328、低脚杯Po1329、石鏃S84を図化した。

出土遺物等から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期前葉ごろの竪穴住居跡と思われる。（前島）



第453図　笠見第３遺跡SI128貼床除去後状況

SI128（第453～455図、PL. 83・84・150・165）

調査区南西側のJ17グリッド、標高72.9～73.2mのほぼ平坦面に立地する。西側にSK65、東側にSI134が隣接する。

平面隅丸方形を呈す竪穴住居跡で、南北5.0m、東西4.6m、床面積20.0m²を測る。壁高は最大で70cm残存する。壁溝は、南に向って浅くなり、南西隅付近では途切れるが幅10～14cm、深さ６cm程度を測る。

表149　笠見第３遺跡SI128ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	32×30－65	主柱穴	P５	66×54－48	中央ピット
P２	30×25－50	主柱穴	P６	34×26－10	不明
P３	34×27－66	主柱穴	P７	26×20－７	不明
P４	30×30－53	主柱穴	P８	10×９－５	不明

主柱穴はP1～P4で、柱間距離はP1-P2間から順に2.1m、2.1m、2.1m、2.2mである。P1～P3では柱痕が認められ、柱径は16cm前後に復元できる。いずれの主柱穴も、掘方の深さは50cmをこえる。P5は中央ピットで、周囲に浅い平坦面がめぐる。ピットの位置はやや東に偏る。

床面には、壁溝に沿って貼床土を付加している。最も厚いところで８cmに達する。床面を掘削する際、掘り過ぎた部分を補填したものと考えられる。

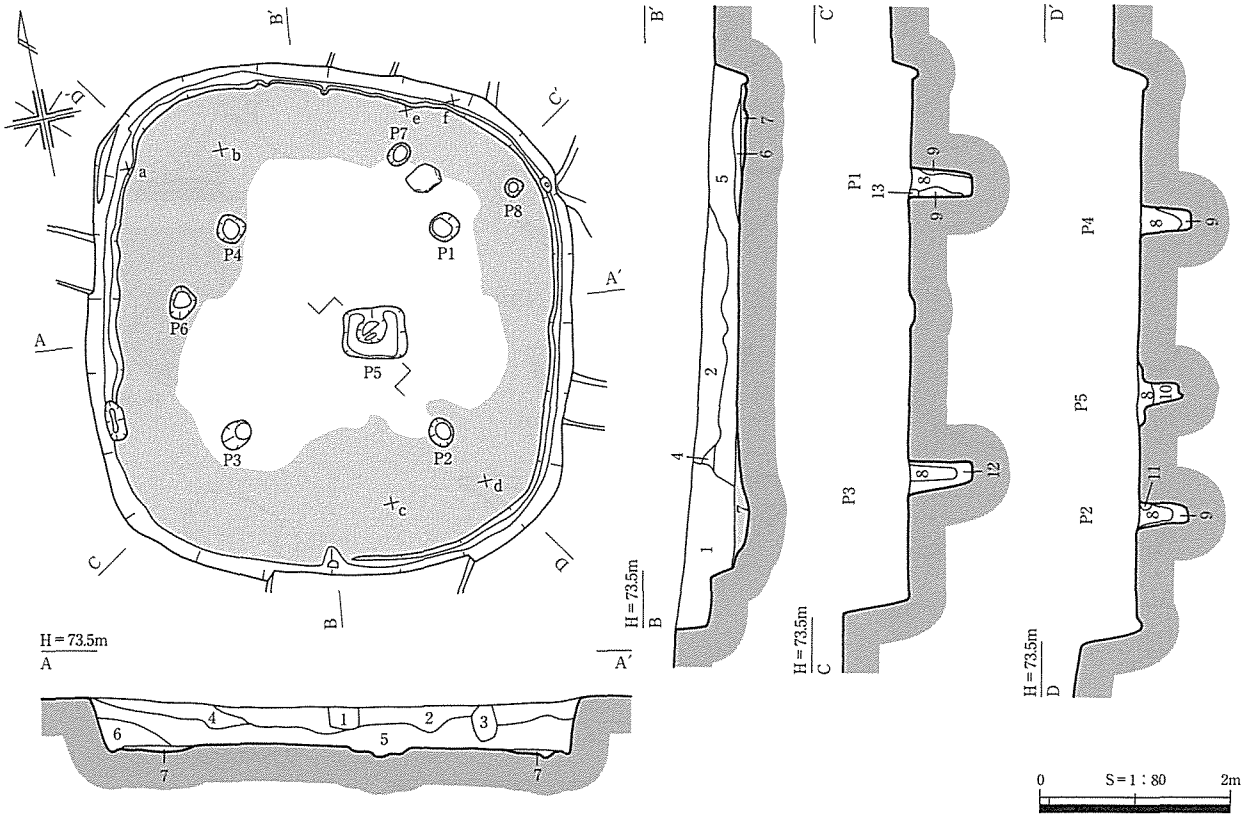
埋土は大きく暗褐色系の二層にわかれ、皿状堆積を示すことから、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、土師器甕Po1330・1331、壺Po1332、低脚杯Po1333・1334、高杯Po1335・1336、小型丸底鉢Po1337、鼓形器台Po1338・1339、小型高杯型器台Po1341・1342、弥生土器高杯Po1340、不明鉄器F51が出土している。このうち、床面南東側でPo1330が倒立した状態で、Po1337は正立した状態で完形で出土している。また、北西隅付近ではPo1335の上にPo1334が被さるように出土し、中央北側ではPo1342が伏せた状態で出土している。さらには、北東隅付近でPo1333が伏せた状態で出土している。その他のものは、埋土中からの出土である。

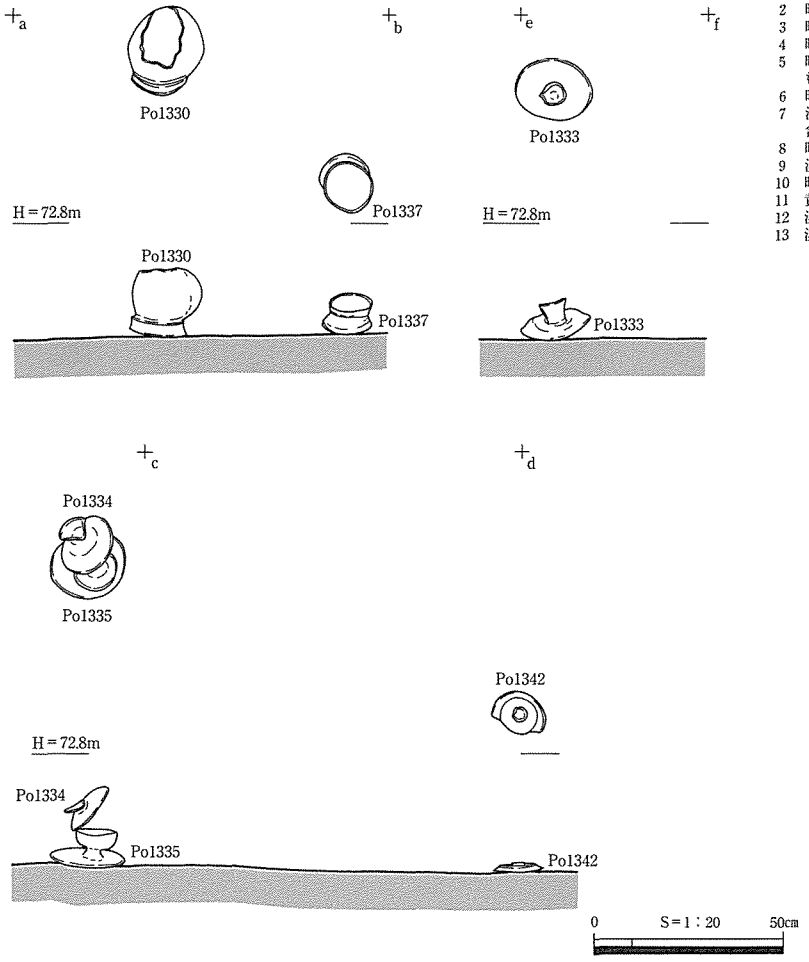
床面出土遺物から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろのものと考えられる。（西川・牧本）

SI131（第456・457図、PL. 85・151・165）

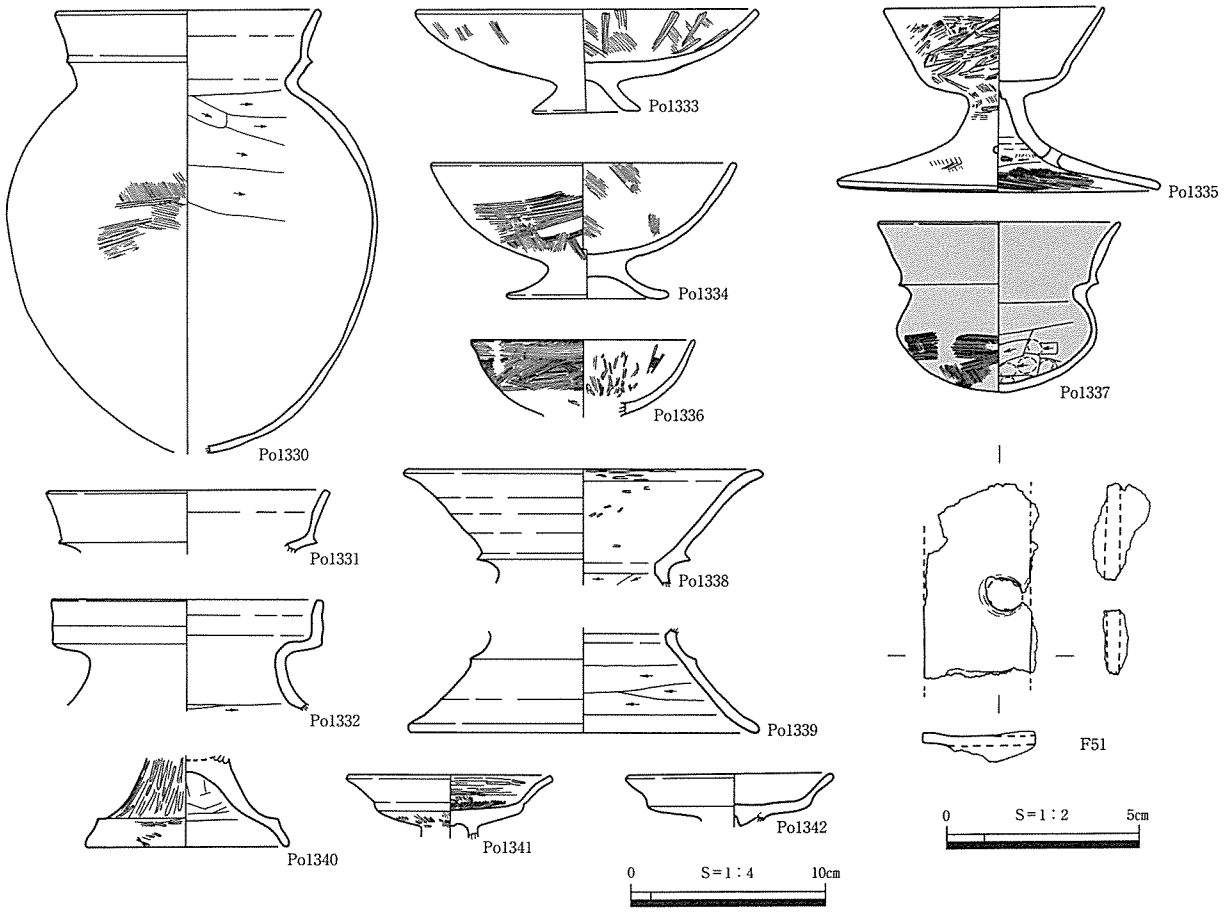
調査区南西側のJ18グリッド、標高73.2～73.3mのほぼ平坦面に立地する。西側にSI124、北東側にSK65が隣接する。



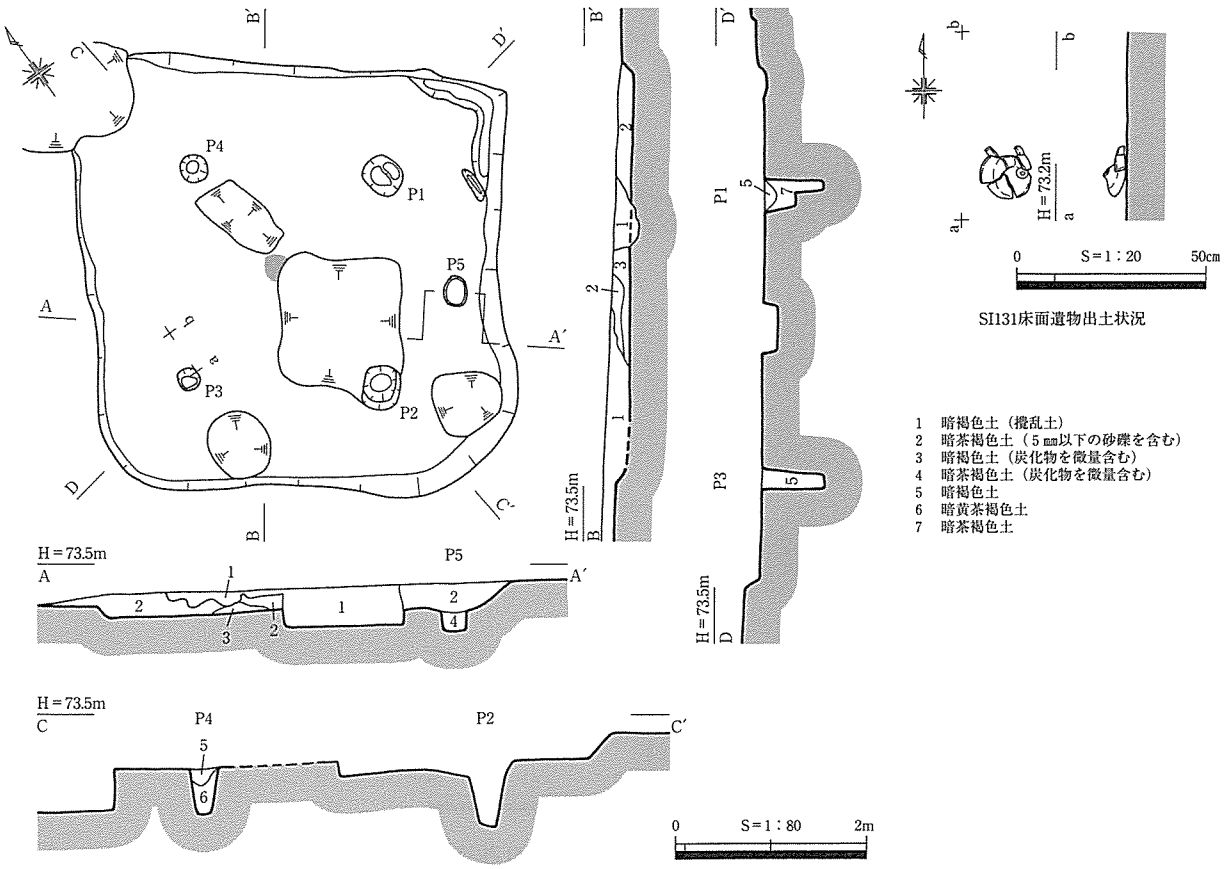
1　暗褐色土（攪乱土）
2　暗褐色土（２～５㎜大の砂礫を含む）
3　暗灰褐色土
4　暗灰茶褐色土
5　暗茶褐色土（地山ブロックを含む。焼土粒・炭化物をわずかに含む）
6　暗灰茶褐色土（地山ブロックをわずかに含む）
7　淡黄灰褐色砂質土（貼床土。ホーキ層にハードロームブロックを含む）
8　暗褐色土
9　淡褐色土（しまりなし）
10　暗灰褐色土（地山ブロックを含む）
11　黄褐色土（地山ブロック層）
12　淡茶褐色土（しまりなし）
13　淡黄橙色粘質土（地山ブロック層）



第454図　笠見第３遺跡SI128遺構図

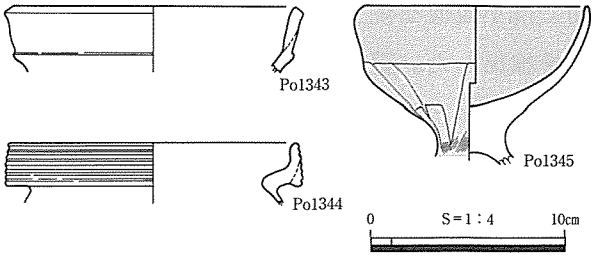


第455図　笠見第３遺跡SI128出土遺物実測図



第456図　笠見第３遺跡SI131遺構図

平面隅丸方形を呈す竪穴住居跡で、一辺南北4.2m、東西4.2m、床面積17.2㎡を測る。全体に削平・攪乱を受け、床面まで攪乱が及んでおり、遺存状況は悪い。壁高は最高で30㎝残存する。壁溝は、北東側隅付近にのみ確認できた。規模は幅20㎝前後、深さ６㎝を測る。



第457図　笠見第３遺跡SI131出土遺物実測図

主柱穴はP1～P4で、柱間距離はP1-P2から時計回りに2.2m、2.0m、2.2m、2.0mである。P5はほぼ垂直に掘りこんでいる。P5は、南東辺のほぼ中央に位置していることから、特殊ピットの可能性がある。

埋土はほとんど攪乱を受けているが、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、土師器甕Po1343、高杯Po1345、弥生土器甕Po1344を図化した。このうち、Po1345はP3付近の床面上で伏せた状態で出土している。その他は、埋土中からの出土である。

床面出土遺物から、天神川Ⅹ期、古墳時代後期初頭ごろのものと考えられる。（西川）

表150　笠見第３遺跡SI131ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P１	43×36－64	主柱穴
P２	46×39－70	主柱穴
P３	24×23－66	主柱穴
P４	30×29－48	主柱穴
P５	32×25－10	特殊ピットか

SI 136 （第 458 ・ 459 図 、PL. 85・165）

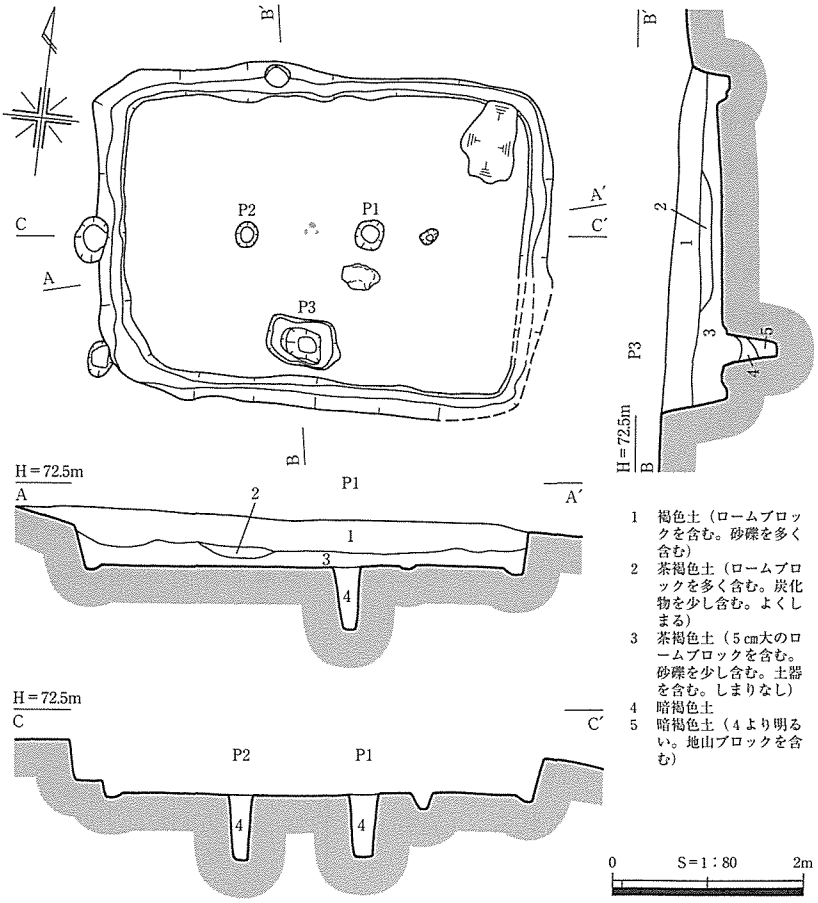
調査区中央I14グリッド内にあり、標高72.2mのほぼ平坦面に立地する。北側にSI155・156が隣接する。

遺存状態はよい。平面は隅丸長方形を呈し、長軸4.8m、短軸3.5m、床面積12.3㎡を測る。残存壁高は南側で最大65㎝である。壁溝は全周する。幅約20㎝、深さ約７㎝、断面は逆台形状を呈する。

主柱穴はP1とP2で、主柱間距離は1.3mである。主柱の

表151　笠見第３遺跡SI136ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸-深さ(㎝)	備　　考
P１	30×30－66	主柱穴
P２	25×24－73	主柱穴
P３	75×50－59	特殊ピット
P４	20×13－24	

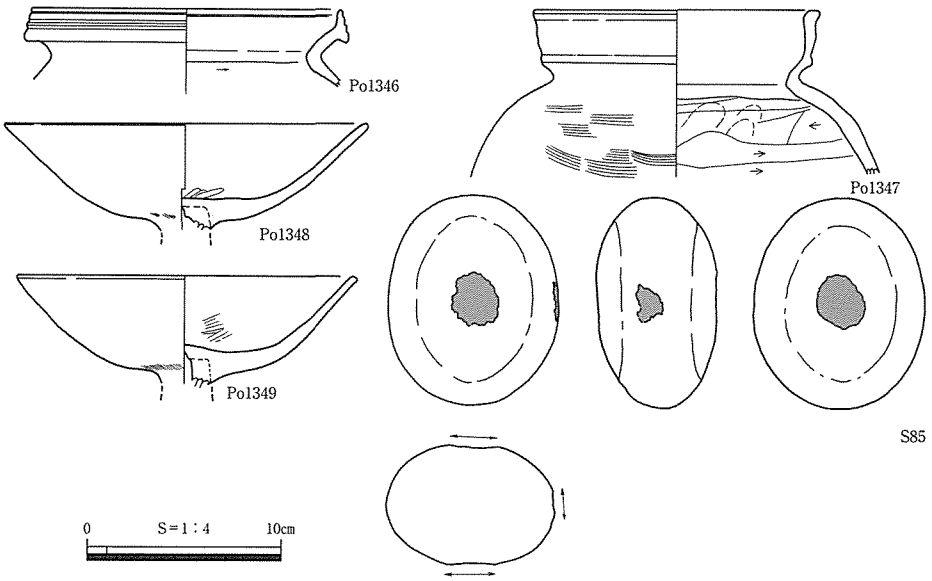


第458図　笠見第３遺跡SI136遺構図

間では小規模な焼土面を検出した。壁際にあるP3は、配置から特殊ピットと考えられ、両側に溝を伴わないタイプである。

埋土は、地山ブロックを多く含む土による自然堆積であると考えられる。

遺物は、すべて埋土中からの出土である。弥生土器甕Po1346、土師器甕Po1347、高杯Po1348・1349、敲石S85がある。



第459図　笠見第３遺跡SI136出土遺物実測図

出土遺物と形態的特徴から天神川Ⅴ～Ⅵ期、古墳時代中期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI137（第460・461図、PL. 85・86・151）

調査区中央J14・15グリッド内にあり、標高73.0mのほぼ平坦面に立地する。西側でSK93、東西をSD5に掘り込まれている。

遺存状態は比較的よい。平面は隅丸長方形を呈し、長軸5.3m、短軸4.6m、床面積21.1㎡を測る。残存壁高は南側で最大47㎝である。壁溝は北東側で途切れるが壁下をめぐる。幅約７～20㎝、深さ約５㎝、断面Ｕ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.5m、1.7m、2.4m、2.1mを測る。断面から柱痕跡がすべてで確認でき、柱径は25㎝前後であったと推定される。P8は中央ピットと考えられる。内底面に被熱硬化した焼土面が認められた。また、東壁際にあるP5は配置から特殊ピットと考えられる。P6・P7は浅く皿状を呈し、建物構造柱とは認め難く用途は不明である。P9～P11は形態から杭状のものが立っていたと考えられる。

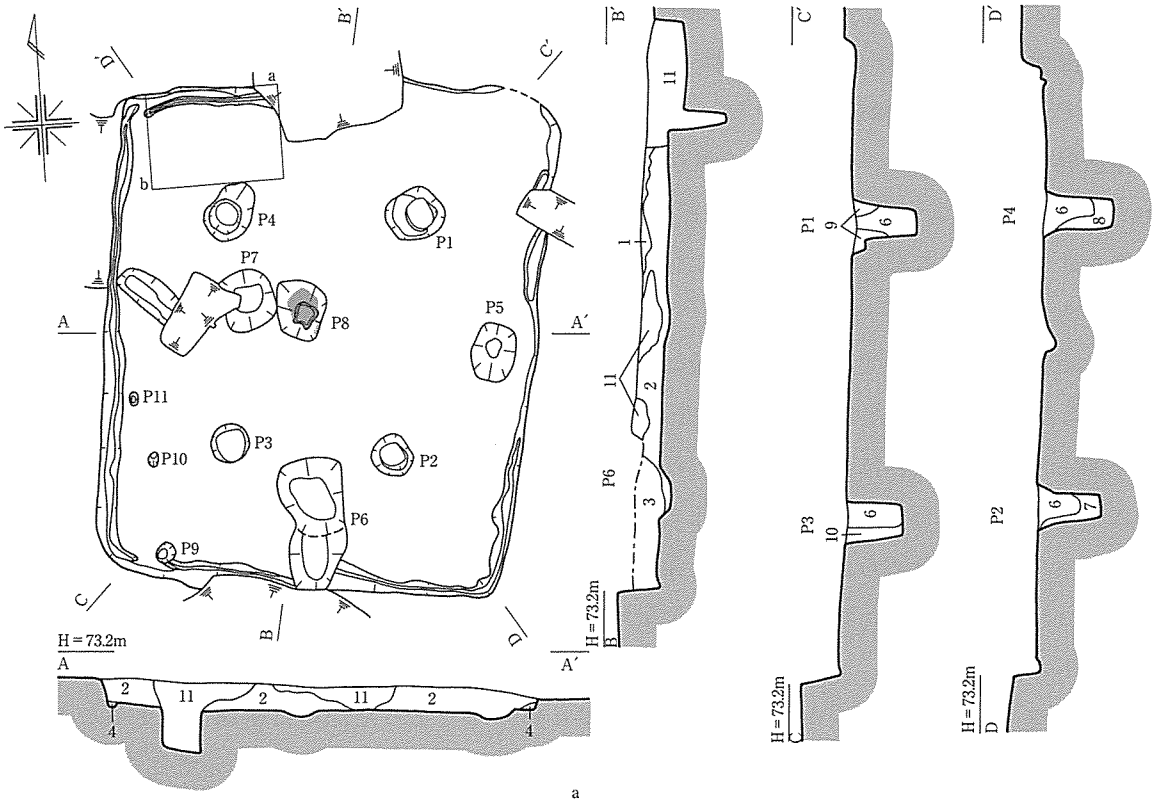
埋土は、地山ブロックを多く含む土による自然堆積であると考えられる。

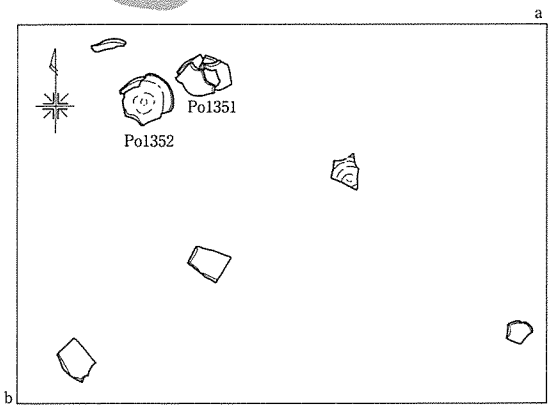
遺物は床面上と埋土中から出土した。床面上から土師器椀Po1351、須恵器杯蓋Po1352、埋土中から、外面わずかに赤色塗彩のある土師器甕Po1350、敲石S86がある。

出土遺物と形態的特徴から、古墳時代中期中葉ごろ（TK10併行期）の竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

表152　笠見第３遺跡SI137ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸-深さ(㎝)	備　　考
Ｐ１	65×55－64	主柱穴	Ｐ７	62×55－18	
Ｐ２	45×45－67	主柱穴	Ｐ８	60×52－16	中央ピット？
Ｐ３	42×40－57	主柱穴	Ｐ９	20×20－15	
Ｐ４	65×46－72	主柱穴	P10	16×10－20	
Ｐ５	60×45－31	特殊ピット？	P11	14×８－24	
Ｐ６	140×67－20				



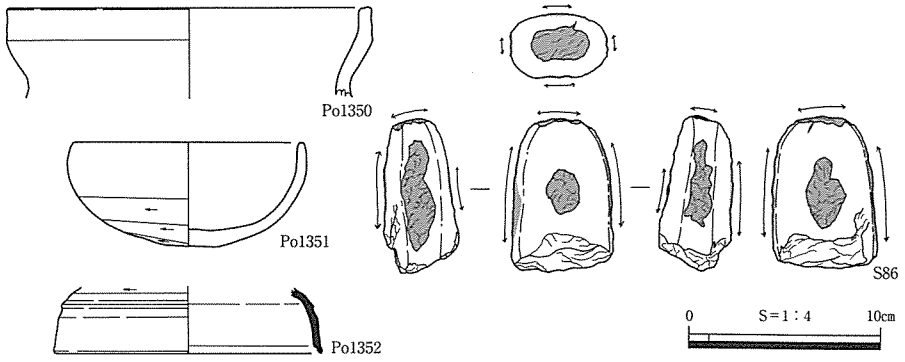


SI137床面　遺物出土状況

1　褐色土（地山ブロック・礫を多く含む。ロームブロックを少し含む。よくしまる）
2　茶褐色土（４cm以下のロームブロックを少し含む。よくしまる）
3　茶褐色土（10cm以下のロームブロックを少し含む。土器を含む。よくしまる）
4　黄灰褐色土（ロームブロックを多く含む）
5　黄灰褐色土（ATブロックを多く含む。よくしまる）
6　暗褐色土（地山ブロックを含む）
7　暗黄橙褐色土
8　暗黄褐色土
9　黄灰褐色土（地山ブロックを含む）
10　黄橙褐色土
11　攪乱

0　S＝1：80　2m

第460図　笠見第３遺跡SI137遺構図



第461図　笠見第３遺跡SI137出土遺物実測図

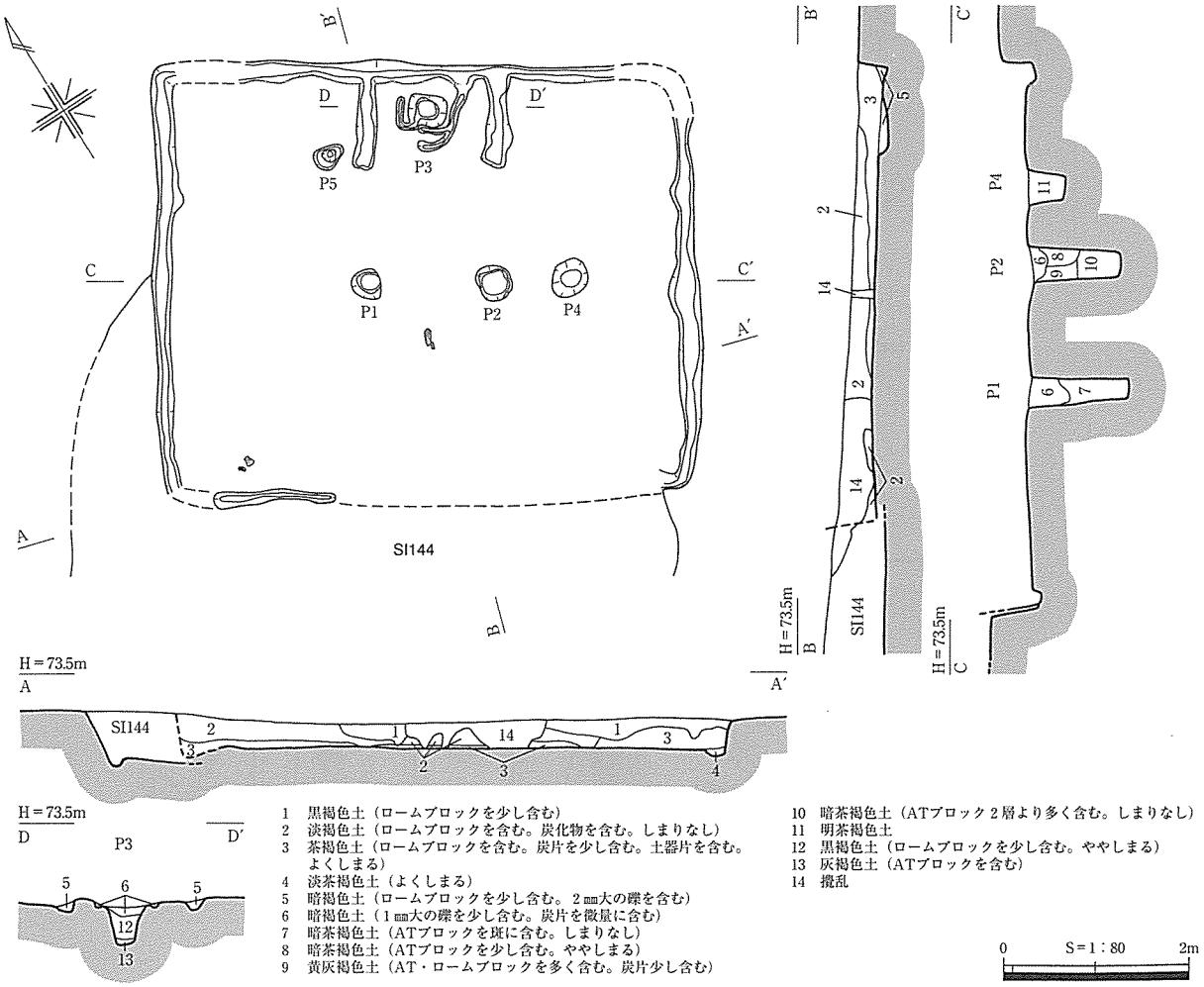
SI142（第462・463図、PL. 86・151・166）

調査区南側K13グリッド内にあり、標高73.0mのほぼ平坦面に立地する。南西側でSI144を切っている。南側でSI121、122が隣接している。

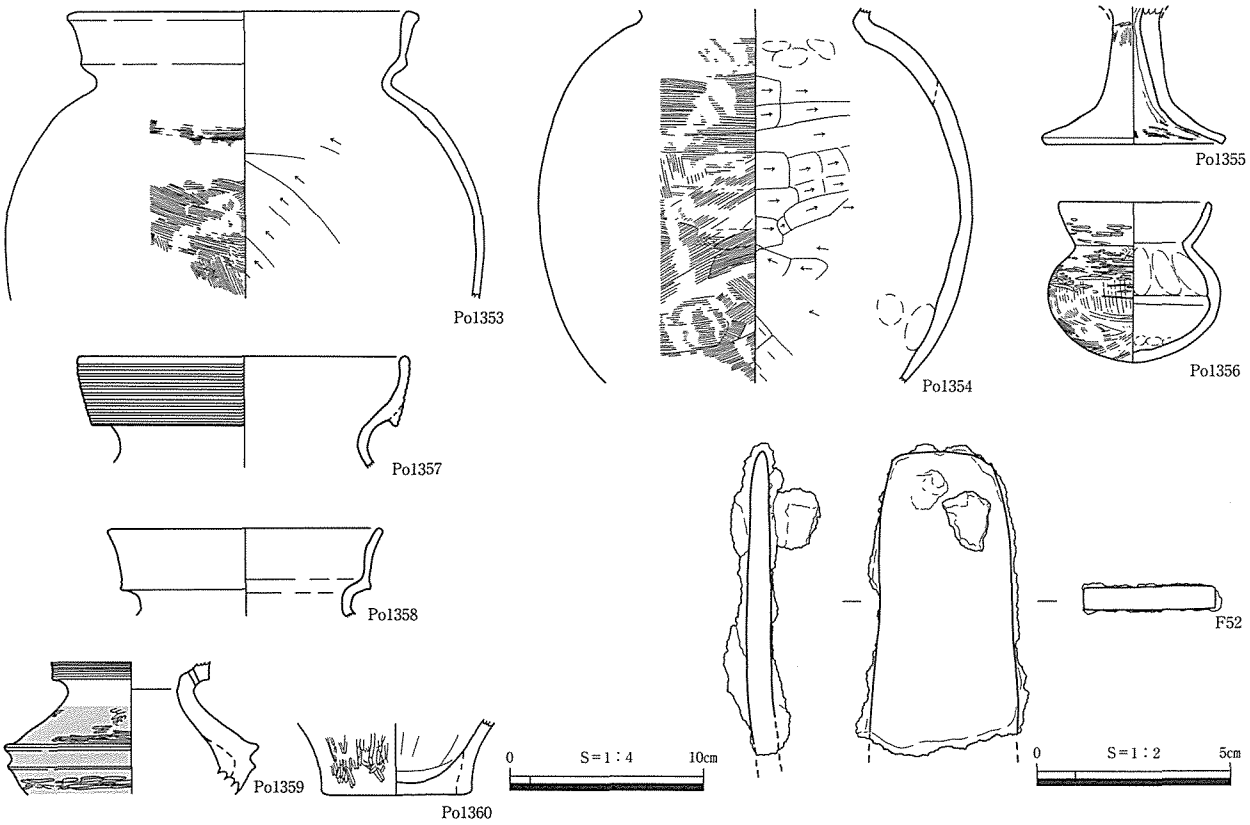
遺存状態は南側が悪く、一部壁溝の遺存により南側の床際を推定した。平面形は方形を呈し、長軸5.9m、短軸4.7m、床面積推定23.6㎡を測る。残存壁高は南側で最大35cmである。壁溝は南側のみ検出できなかったが、本来は全周していたものと考えられる。幅約15～30cm、深さ約７cm、断面逆台形状を呈する。

主柱穴はP1とP2の２基で、主柱間距離は1.35mを測る。主柱穴の掘方は、径が平均36cmと狭く、深さ１mもある。これは掘方を広くし、柱を据えた後地山ブロックを多く含む土で裏込めを行い、柱の固定を図る建物の工法とは異なると考えられる。２本柱で上屋を支えるには、柱にかなりの荷重がかかることから、これほど深い掘方を要したと推測される。P3は、配置と両脇に溝を伴うことから、特殊ピットであると考えられる。ピット周囲にも細い溝がめぐっている。両脇の溝は幅約15～27cm、深さ約14cm、断面は逆三角形～逆台形状を呈する。ピット周囲の溝は、幅約５～７cm、深さ約５～14cm、断面Ｕ字状を呈する。

床面は調査中部分的に貼床が認められたが、掘り過ぎてしまったために範囲を捉えることができなかった。おそらく貼床は、当遺構が弥生時代の竪穴住居SI144の埋土を掘り込んで作られているため、



第462図　笠見第３遺跡SI142遺構図



第463図　笠見第３遺跡SI142出土遺物実測図

重なる範囲に施されていたと考えられる。また床面上で少量の炭化材片を検出した。焼土面は認められなかった。

埋土は、炭化物を少量含む層が認められるが自然堆積によるものと考えられる。

遺物は床面上と埋土中から出土した。床面上からの土師器甕Po1358、弥生土器底部Po1360、埋土中からの土師器甕Po1354、高杯Po1355、小型丸底壺Po1356、弥生土器甕Po1357、外面に赤色塗彩された脚付壺Po1359、板状鉄斧F52を図化した。

表153　笠見第３遺跡SI142ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	33×30－109	主柱穴
P２	40×35－96	主柱穴
P３	42×33－40	特殊ピット
P４	40×36－40	
P５	32×28－48	

床面上で出土した弥生土器は、下位に位置するSI144からの混入物と考えられる。出土遺物と形態的特徴から、天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。

（岩井）

SI146（第464図、PL. 86・87）

調査区中央I13グリッド内にあり、標高71.9mのほぼ平坦面に立地する。南西側にSI161、162が隣接する。SI147を掘り込んでいる。当遺構は１回の建て替えがある。

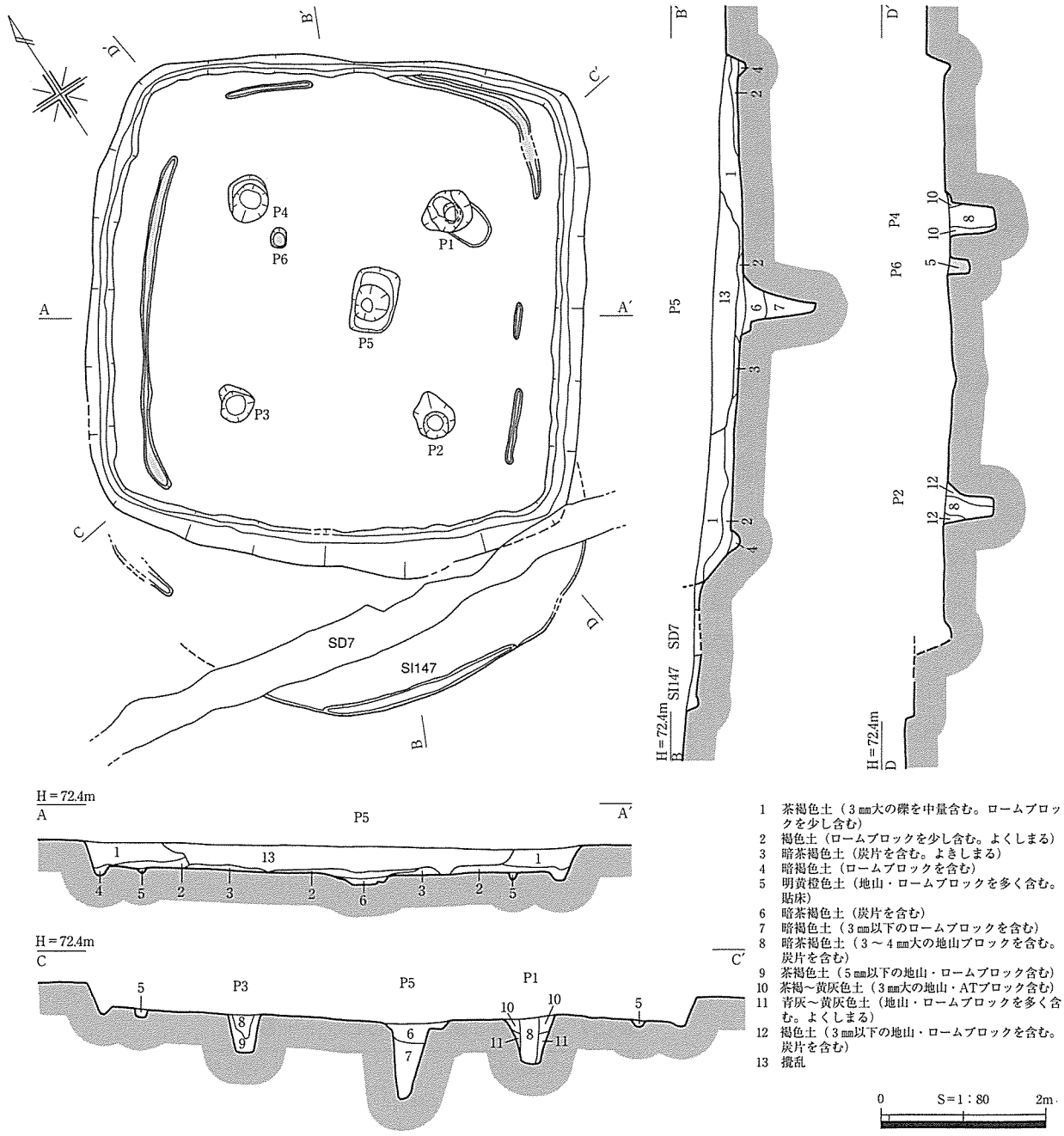
遺存状態はよい。平面は方形を呈する。長軸6.3m、短軸6.1m、床面積28.2m²を測る。残存壁高は南側で

表154　笠見第３遺跡SI146ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	65×55－52	主柱穴	P４	56×50－58	主柱穴
P２	50×48－57	主柱穴	P５	80×54－97	中央ピット
P３	42×40－44	主柱穴	P６	25×20－21	建て替え前

最大39㎝である。壁溝は全周する。幅約10～25㎝、深さ約10㎝、断面逆台形状を呈する。内側でも溝を検出した。幅約５～20㎝、深さ約８㎝、断面Ｕ字状を呈する。埋土は地山ブロックを多く含む土でよくしまっており、貼床土と考えられ、建て替え前の壁溝であると考えられる。貼床土はこの溝と、後述するP6内のみを埋めていた。

ピットは６基検出した。貼床で覆われたものは、P6のみであったが、形態から主柱穴にはなり得ない。主柱穴と考えられるのはP1～P4の４基で、主柱間距離は４辺とも2.5mの等間隔であった。建て替えは、この主柱穴を再利用し行われたものと考えられる。P1、P2、P4の断面観察で柱痕跡が認められた。推定される柱径は約20㎝である。P5は中央ピットと考えられる。平面形は上方楕円形、下方円形で二段掘りされている。掘方の深さは１m近くある。



第464図　笠見第３遺跡SI146遺構図

埋土は、地山ブロックを含んだ土による自然堆積と考えられる。

上述したように当遺構は、壁溝と貼床土で充填されたピットの存在から、床面積の拡大を目的とし、同主柱を再利用した建て替えがあったと判断される。建て替え前の平面形は方形を呈し、規模は、長軸5.6m、短軸4.6m、床面積推定22.4㎡を測る。

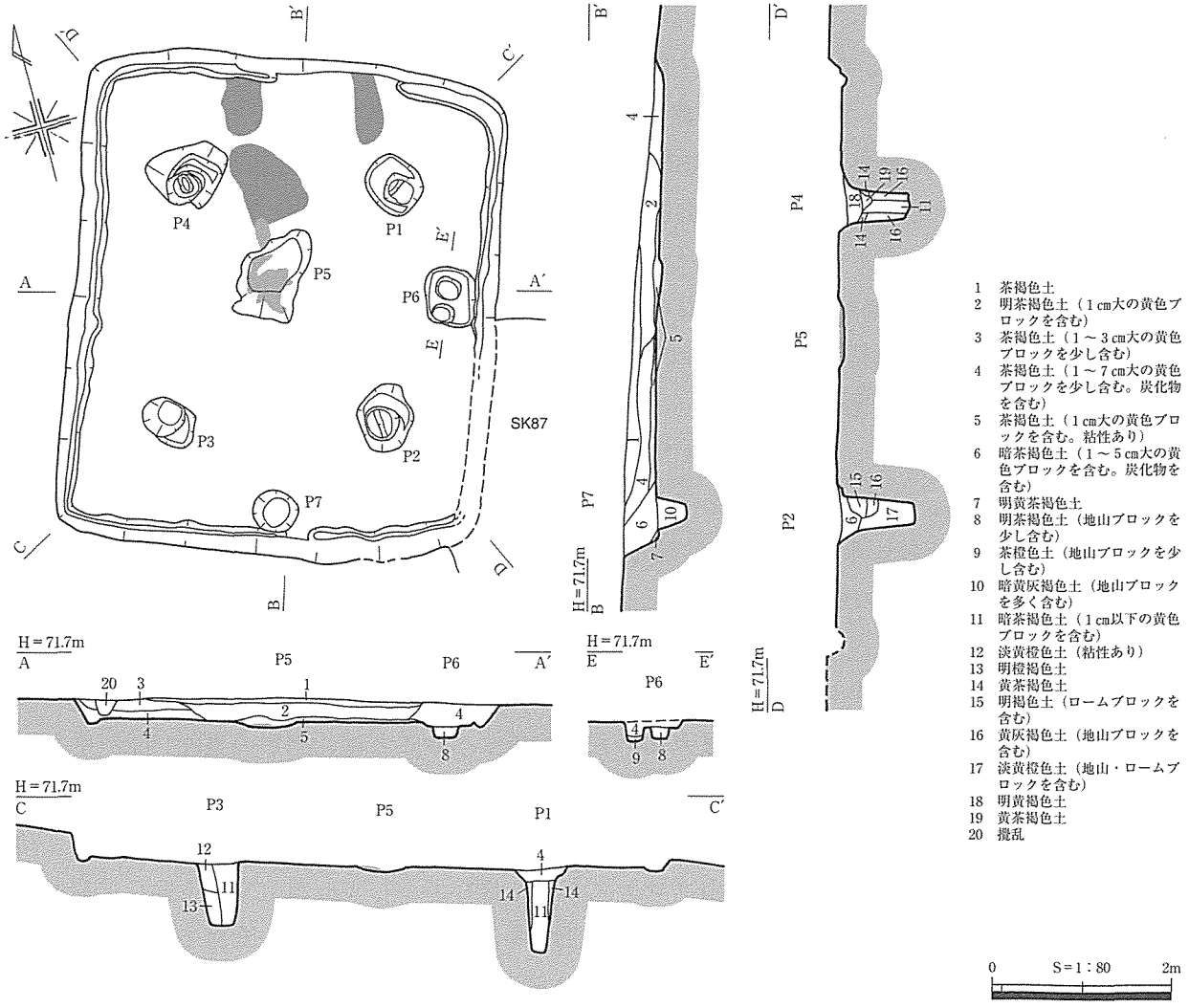
遺物は、細片のみで図化に耐えうるものはなかったが、形態的特徴から古墳時代前期に属する竪穴住居跡と考えられる。また、建て替えは埋土の状況から時間差が認められず、この時期内で行われたと考えられる。（岩井）

SI150（第465・466図、PL. 87・166）

調査区中央北側G14グリッド内にあり、標高71.4～70.9mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。南東側でSB20西側柱列およびSK87を切っている。

遺存状態はよい。平面は長方形で、長軸5.5m、短軸4.6m、床面積20.3㎡を測る。残存壁高は南側で最大41㎝である。壁溝は北側で一部途切れるが壁際をめぐる。幅約10～17㎝、深さ約５㎝、断面Ｕ字状を呈する。

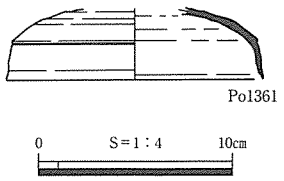
主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.5m、2.4m、2.5m、2.4mを測る。P1、



第465図　笠見第３遺跡SI150遺構図

表155　笠見第３遺跡SI150ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	64×55－93	主柱穴
Ｐ２	74×55－84	主柱穴
Ｐ３	60×45－69	主柱穴
Ｐ４	80×80－79	主柱穴
Ｐ５	103×65－８	中央ピット
Ｐ６	65×53－８	特殊ピット
P6内北側	28×24－12	
P6内南側	25×20－16	
Ｐ７	48×45－33	



第466図　笠見第３遺跡SI150出土遺物実測

P3、P4の埋土第11層は柱痕跡と考えられ、推定される柱径は約16～20cmになる。P5は、平面は不整形で浅い皿状を呈し、内底面に被熱硬化した焼土面を検出した。P6は位置から特殊ピットと考えられ、両脇に溝を伴わないタイプのものである。底面に２基のピットを検出した。

埋土は、基本的に自然堆積と考えられるが、その堆積を示す第３～５層を掘りこむ第１、２層が認められる。断面から重複する遺構があった可能性が考えられるが、検出には至らなかった。床面上では、炭化物を少量含む第４層が堆積しており、特に北側が厚い。その直下北側床面上では薄い炭層の広がりが３箇所で認められた。

遺物は埋土から出土した。図化できたものは須恵器杯蓋Po1361のみである。

出土遺物と形態的特徴から、天神川Ｘ期、古墳時代後期初頭ごろに相当する竪穴住居跡であると考えられる。（岩井）

SI161・162（第467～470図、PL. 88・151・166・167・174）

調査区中央J12～13グリッド内にあり、標高72.4mのほぼ平坦面に立地する。東側にSI163、南西にSI141、北西にSI146が隣接する。当遺構はSI162、SI149を掘りこんでおり、SI162は当遺構を縮小したような形態で、埋土や遺物の状況から、SI162→SI161への床面積拡張を目的とした建て替えと考えられる。

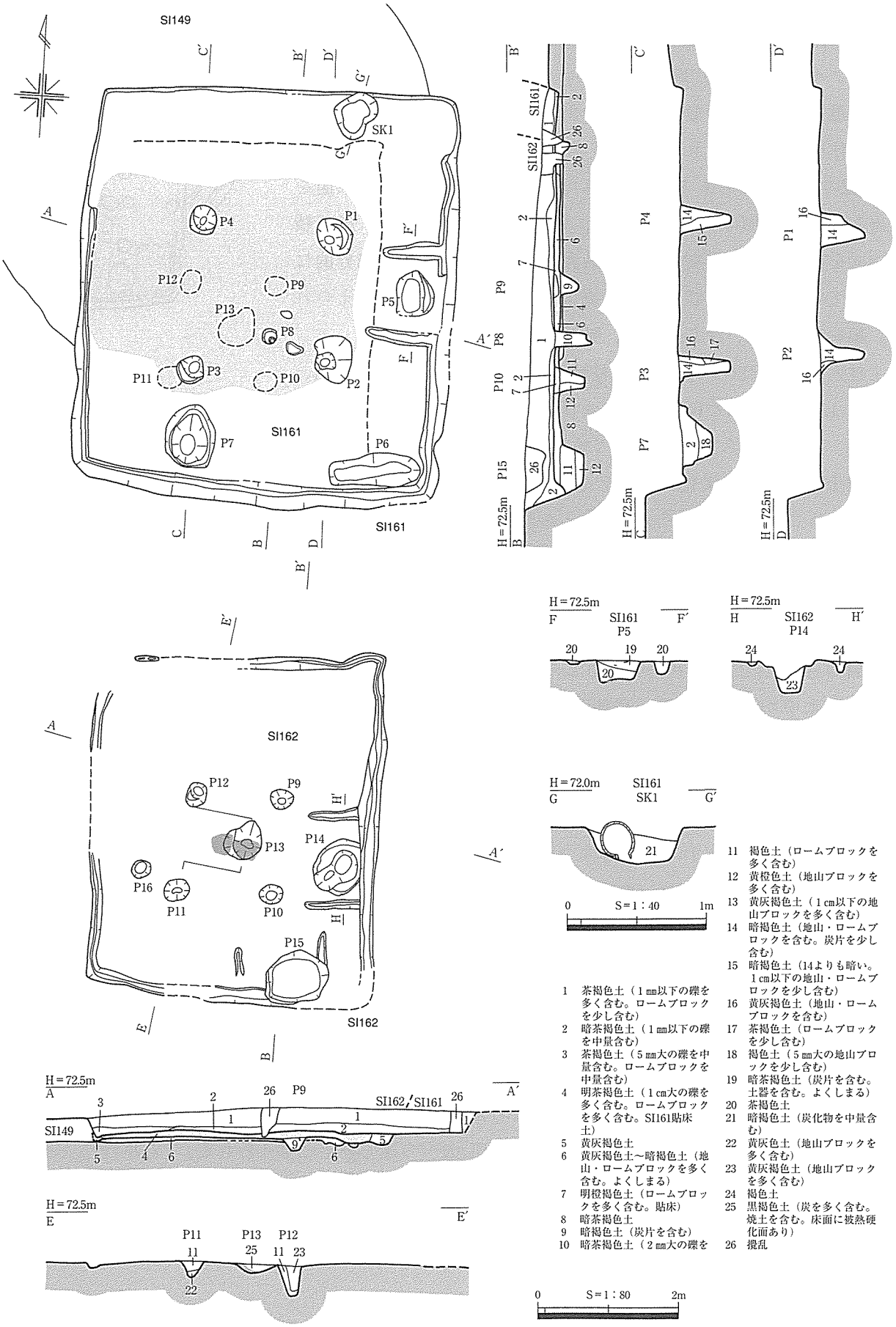
SI161の遺存状態は、北側があまりよくない。平面は長方形を呈し、長軸6.0m、短軸5.4m、床面積27.2㎡を測る。残存壁高は南側で最大55cmである。壁溝は北側以外の壁下をめぐっていた。幅約７～20cm、深さ約７cm、断面Ｕ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に1.8m、1.9m、2.1m、1.8mとほぼ等間隔に近い値を測る。P5は、位置と両脇に溝を伴うことから特殊ピットと考えられる。ピット埋土上層では炭片や土器片を含んでいる。両脇の溝は幅約15～25cm、深さ約６～15cm、断面逆台形状を呈し、北側の溝のほうがやや深い。P6、P7は土坑状を呈し形態から柱穴ではなく、他の用途が充てられると考えられる。

SK1は床面北壁東寄りで検出した。平面は不整形で、断面逆台形状を呈する。底面は南から北側へやや傾斜する。埋土内には炭化物が含まれていた。特筆すべきことは、完形の甕Po1362が逆さまに立った状態で出土したことである。内部は空洞であった。このことから、SK1は貯蔵施設としての機能が考えられる。

床面中央では貼床が認められた。地山ブロックを多く含むよくしまった土で、下位に位置するSI162の範囲とほぼ重なり、特に162の主柱穴を含む範囲を中心に広がっていた。全面ではなく、部分的に施されたものと考えられる。埋土は、自然堆積によると考えられる。

遺物は、床面上や埋土中から出土した。上述したようにSK1からは甕の出土が多く、土坑底面上か



第467図　笠見第３遺跡SI161・162遺構図

ら甕Po1362、埋土中からPo1364・1365が出土した。他に床面上から高杯Po1367、小型丸底壺Po1368が出土している。埋土中からは、壺Po1366、小型丸底壺Po1369がある。

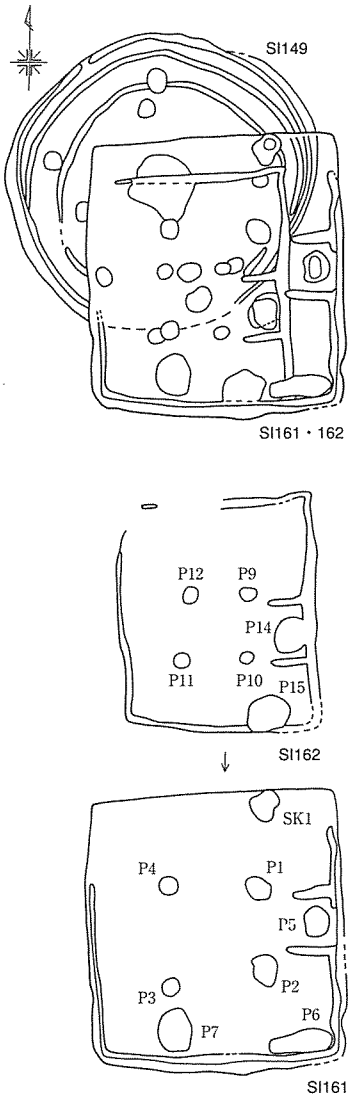
出土遺物と形態的特徴から、天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。

SI162の遺存状態もあまりよくない。SI161の貼床を除去し床面を検出した。平面形は長方形を呈し、長軸5.0m、短軸4.2m、床面積17.3㎡を測る。残存壁高は南側で最大20㎝である。壁溝は部分的に途切れているが、遺存状態から本来は全周していたものと考えられる。幅約10～20㎝、深さ約12㎝、断面Ｕ字状を呈する。

主柱穴はP9～P12の４基で、主柱間距離はP9-P10から順に1.4m、1.4m、1.5m、1.3mとほぼ等間隔を測る。P13は中央ピットと考えられる。内底面から上端にかけて被熱硬化した焼土面が認められた。埋土には多くの炭化物や焼土を含んでいた。P14は位置と両脇に溝を伴うことから特殊ピットと考えられる。溝は幅約10～18㎝、深さ約６～10㎝、断面逆台形状を呈する。この特殊ピットは、SI161のものと形態が同じで、両脇の溝の間の距離がほぼ同じになることから、同じ規格性を持って作られたものと判断される。

遺物は床面上や埋土中から出土した。床面上から高杯Po1372・1375、埋土中から甕Po1370、高杯Po1371が、P14から高杯Po1373、1374、鉄鋌F53などが出土している。

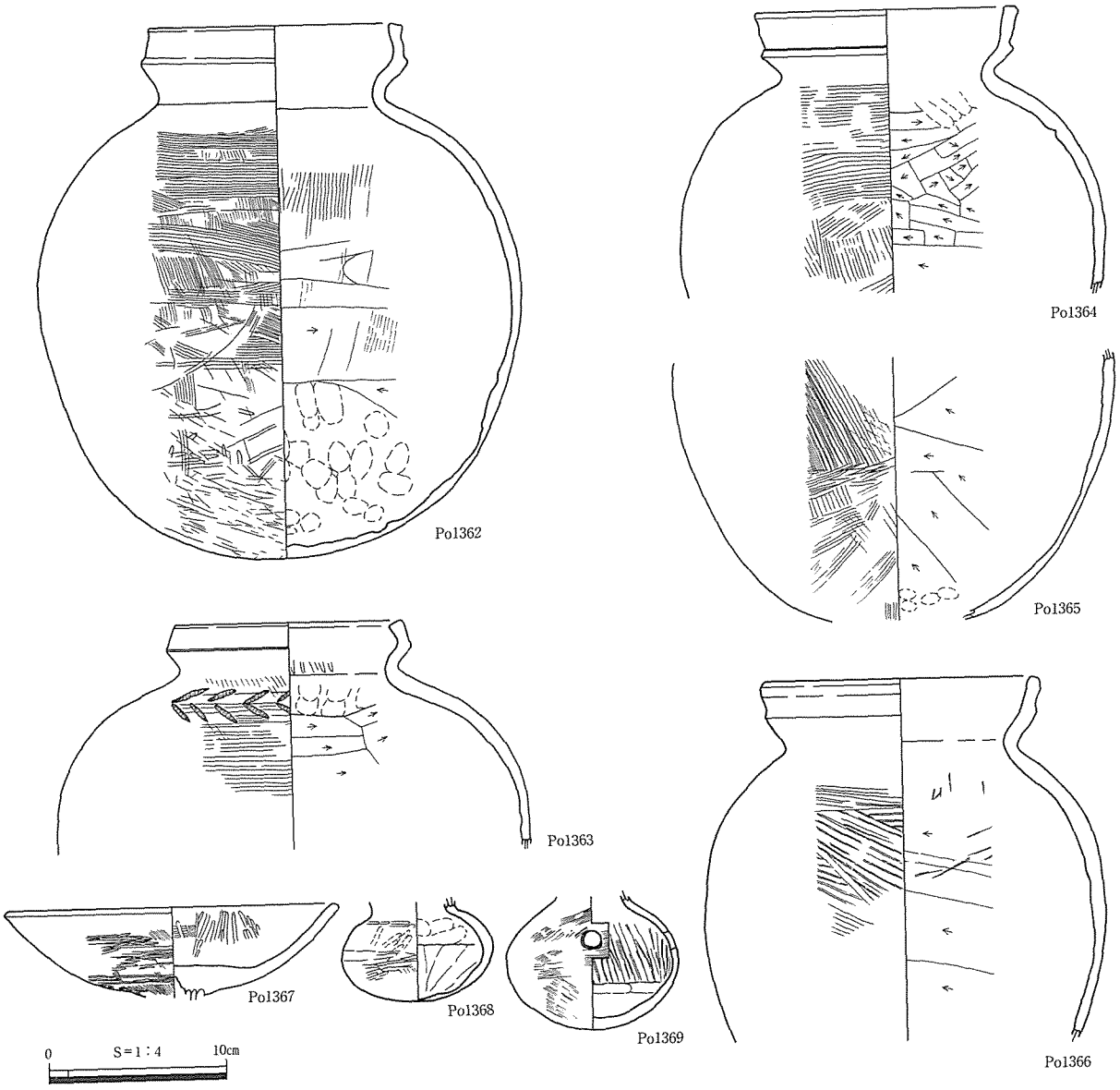
鉄素材と考えられる鉄鋌が出土したことで、鍛冶工房の可能性などが考えられるが、鍛冶に関わる遺物や遺構が見られないことから工房ではないと判断される。遺跡内では、当遺構以外の竪穴住居跡からも鉄器が出土しており、当時の鉄製品の普及率の高さを窺わせる。なお、住居跡からの鉄鋌の出土は、県内では南谷大山遺跡BSI13に次ぎ、２例目である。



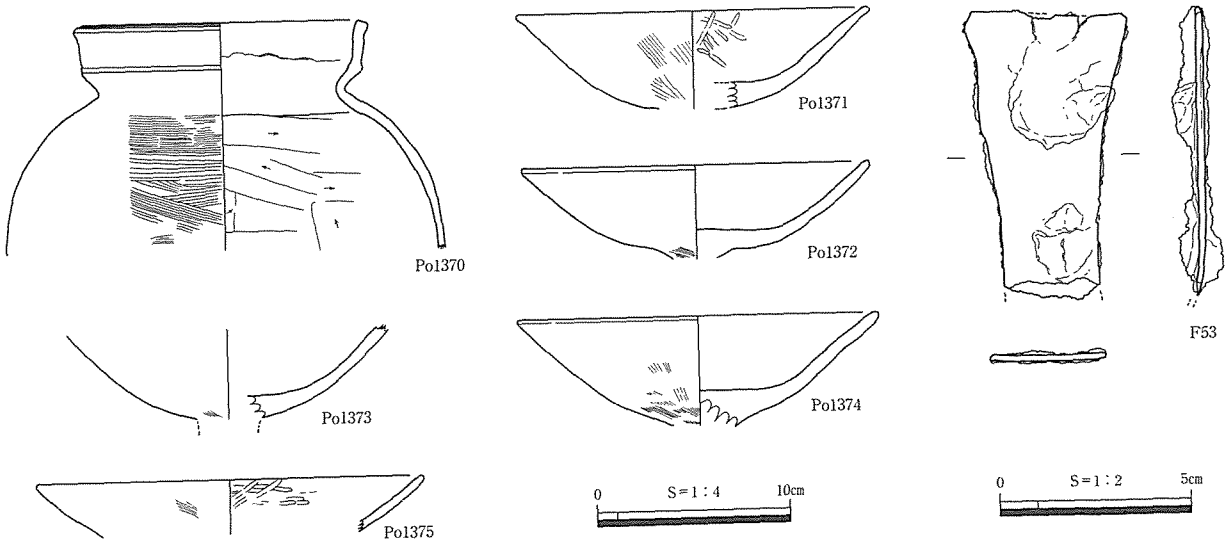
第468図　笠見第３遺跡SI161・162変遷図

出土遺物等から、SI162もSI161同様天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。

また、SI161、162とも平面形が同じであること、主柱間距離がほぼ等間隔であることから、両者は同規格性を持っていると判断される。埋土の状況からも建て替えにさほどの時期差は認められない。よって、SI162を廃棄しすぐに建て替えを行ったと考えられる。出土遺物からも、SI161と162に時期差は見られないことから、同時期内でのSI162→SI161への建て替えと考えられる。（岩井）



第469図　笠見第３遺跡SI161出土遺物実測図



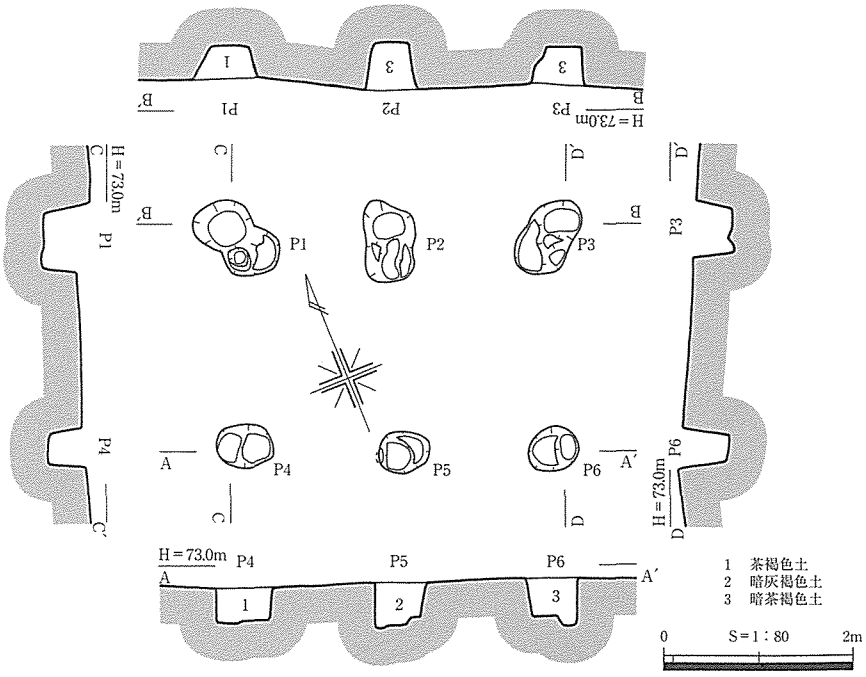
第470図　笠見第３遺跡SI162出土遺物実測図

第３節　掘立柱建物跡

SB13（第471図、PL. 90）

調査区南西際のJ20グリッドにあり、標高72.8mのほぼ平坦面に立地する。

規模は、桁行２間（3.6m）、梁行１間（2.35m）で、N-68°-Wに主軸をとる掘立柱建物跡である。柱間距離はP1-P2から順に1.7m、1.8m、2.35m、1.85m、1.8m、2.3mである。桁行の心々距離はほぼ等間隔で並んでいる。各柱穴の平面形は、北側柱列は楕円および不整形で、南側はほぼ円形を呈する。ピットは、北側柱列のみ平面が不整形な上に、掘方が広がっている。埋土からは判断できないが、建て替えによるものと考えられ、さほどの時間が経たないうちに建て替えが行われたものと考える。



第471図　笠見第３遺跡SB13遺構図

埋土はいずれも単層で柱痕跡は認められなかった。

掘方埋土中で、図化できなかったが土師器片が出土している。また、当遺跡の弥生時代の掘立柱建物跡とは主軸方向が異なっていることから、正確な時期は特定できないが古墳時代前期ごろのものと考えられる。（西川・牧本）

表156　笠見第３遺跡SB13ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	100×55－35	主柱穴
P２	82×55－47	主柱穴
P３	82×50－40	主柱穴
P４	58×37－38	主柱穴
P５	54×43－45	主柱穴
P６	50×46－49	主柱穴

SB15（第472図、PL. 90）

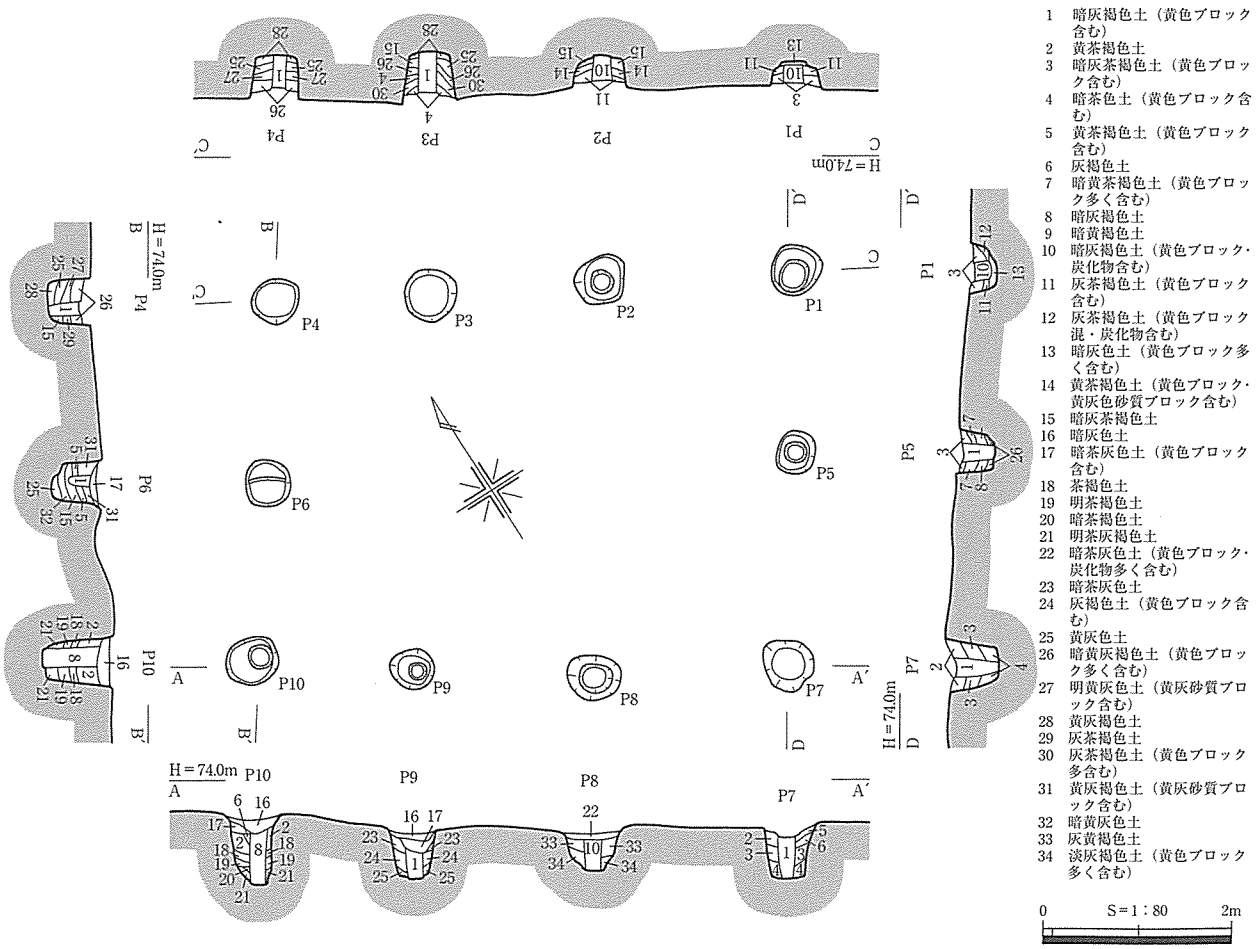
調査区中央南側のL12グリッドにあり、標高73.2～73.5mのほぼ平坦面に立地する。

桁行３間（5.6m）、梁行２間（4.1m）の掘立柱建物である。N-60°-Wに主軸をとる。P3はSK119の埋土を掘り込む。柱間寸法は桁行が1.7～2.1m、梁行が1.8～2.3mとそれぞれ幅があるが、対応する柱列どうしでの桁行・梁行方向の柱間はほぼ同寸法である。柱掘方は平面楕円形で、深さ60.0cm前後である。埋土は地山を含んだ茶褐色系のものが主体となる。断面観察で確認した柱痕跡から、柱径は18.0cm前後に復元できる。

図示していないが、ピット掘方埋土から、古墳時代前期の土器

表157　笠見第３遺跡SB15ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	50×49－48	主柱穴(柱痕有)
P２	56×55－55	主柱穴(柱痕有)
P３	52×50－35	主柱穴(柱痕有)
P４	54×53－32	主柱穴(柱痕有)
P５	50×49－57	主柱穴(柱痕有)
P６	47×41－42	主柱穴(柱痕有)
P７	55×51－79	主柱穴(柱痕有)
P８	48×44－55	主柱穴(柱痕有)
P９	57×48－46	主柱穴(柱痕有)
P10	55×54－60	主柱穴(柱痕有)



第472図　笠見第３遺跡SB15遺構図

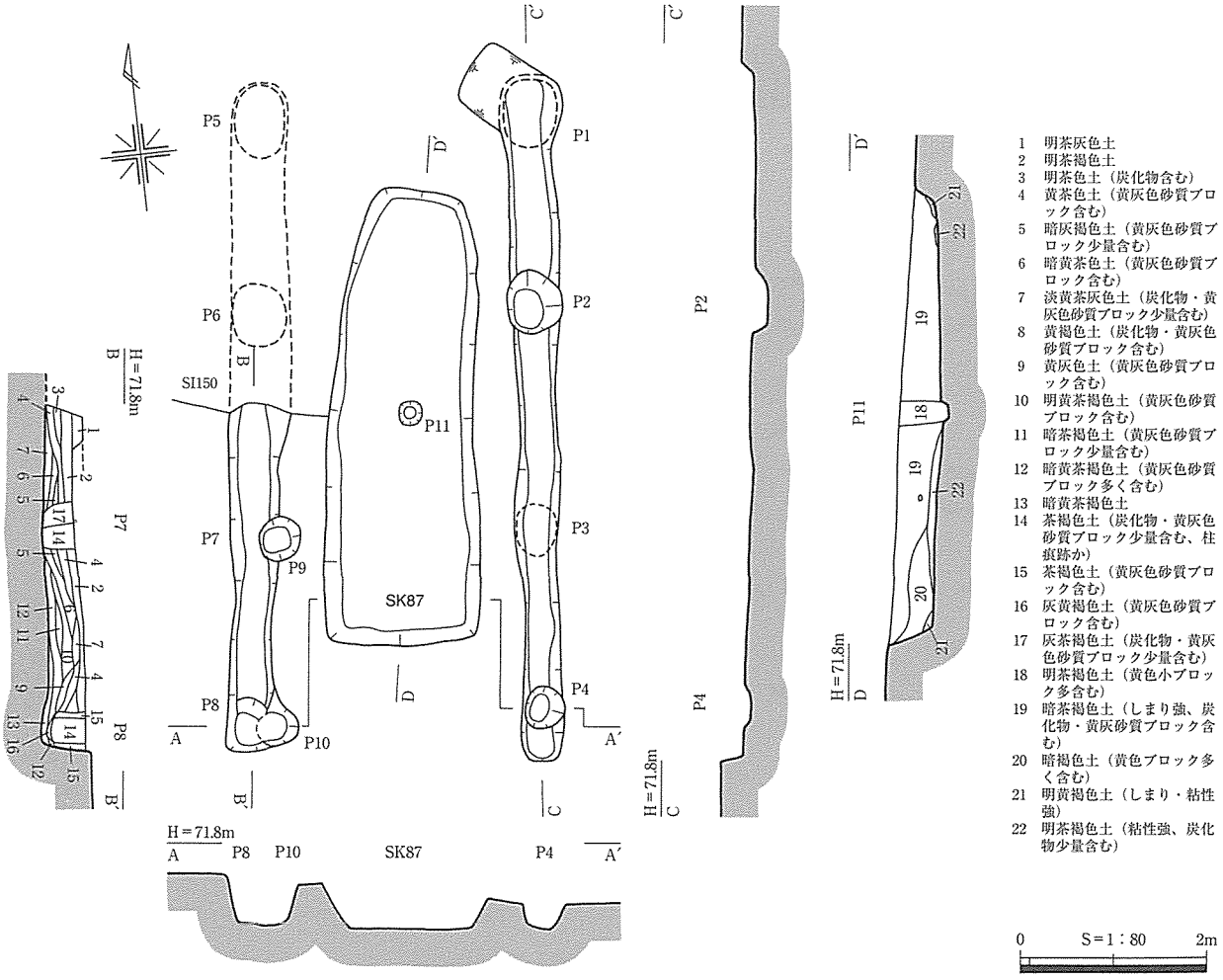
が出土しており、造営時期の一端を示すものと考えられる。（西川）

SB20・SK87（第473・474図、PL. 90）

調査区中央やや西側、G・H14グリッドの標高71.1～71.5mのほぼ平坦面に立地する。

SB20は、桁行方向の掘方を溝状に開削する布掘り掘立柱建物跡である。柱間は桁行推定３間、梁行１間で、N－5°－E方向に主軸をとる。柱穴は推定位置を含め９基（P1～P8・P11）、それ以外のピットが２基（P9・10）である。東側柱列の掘方がSI151の上に重複し、西側柱列の掘方がSI150の下に重複する。溝掘方の規模は、東側柱列で全長7.3m、幅45cm前後、深さ20～50cm。西側で残存長3.7m、幅45cm前後、深さ40～55cmである。東側柱列は柱掘方と認識せずに完掘してしまったため、柱位置や埋土の堆積状況を把握することができなかった。西側柱列ではP7・P8で柱を立てた後、地山を含んだ茶褐色系の埋土が10cm前後の厚さで互層状に埋め立てられている状況を確認した。しかし、柱想定位置では明瞭な柱痕跡が見出せず、幅40～50cmの穴と認識するにとどまった。これはP9・P10がそれぞれP7・P8に対応する柱抜取穴であり、柱抜取時にその周辺の埋土が攪乱を受けたため、柱痕跡を確認することができなかったものと判断した。

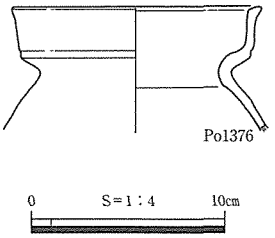
P7-P8の心々距離は2.2mである。その数値を桁行柱間と仮定し、東側柱列にあてはめてみると、それぞれの桁行柱間は2.3m前後。一方、梁行柱間は掘方幅の心々距離から約3.1mに復元できる。これにより、推定できる建物規模は桁行全長6.8m、梁行全長3.1mとなる。



第473図　笠見第３遺跡SB20・SK87遺構図

表158　笠見第３遺跡SB20ピット一覧表　※は復元値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	不明	主柱穴
P２	68×59－16	主柱穴
P３	不明	主柱穴
P４	43×42－８	主柱穴
P５	不明	主柱穴
P６	不明	主柱穴
P７	36×？－？	主柱穴
P８	54×50※－10	主柱穴
P９	49×44－30	抜取穴
P10	50※×45－43	抜取穴
P11	26×26－50	柱穴か(SK87内)

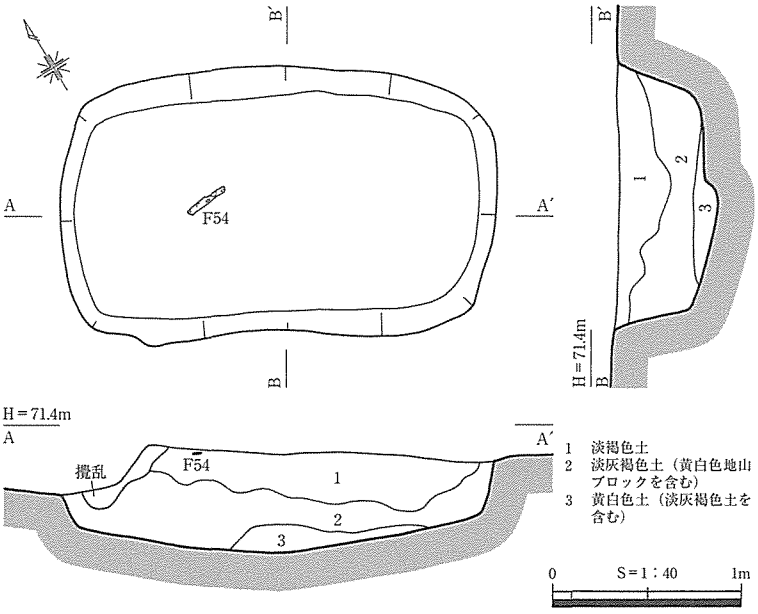


第474図　笠見第３遺跡SB20出土遺物実測図

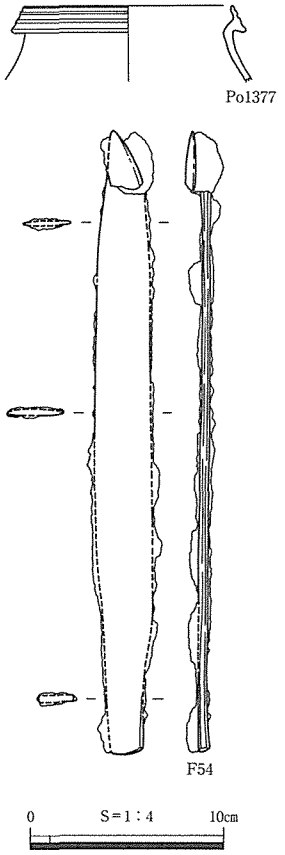
SK87は、長軸4.8m、短軸1.0～1.6m、深さ20～50cmの長方形の土坑である。SB20の両側柱列の間にあり、軸も揃っていることから、SB20に伴う遺構であると考える。中央には直径18cm前後の柱痕跡がある。断面観察からは両側の埋土が柱を埋め立てたような状況とは理解し難いが、柱痕跡部分の埋土が後世に掘りこまれたピットの埋土とは異なること、底面に柱径と対応する凹みがあることを考慮すれば、柱が立っていたものとみてよいだろう。その際、床束のような役割を果たしていたのであろうか。

西側柱列の埋土からは、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろの土師器甕Po1370が出土しており、造営開始期の一端を示すものであると考えられる。（西川）

第4節　土坑・土壙



第475図　笠見第3遺跡SK35遺構図



第476図　笠見第3遺跡SK35出土遺物実測図

SK35（第475・476図、PL. 91・174）

調査区中央やや西寄りのG15グリッドにあり、北方向に向かう標高71.0～71.2mの緩斜面に立地する。

平面は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.3m、短軸1.88m、底面で長軸2.13m、短軸1.13mを測る。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さ52cmを測る。底面は凹凸がある。

埋土は褐色系を主体とした3層にわかれ、自然堆積した状態を示す。

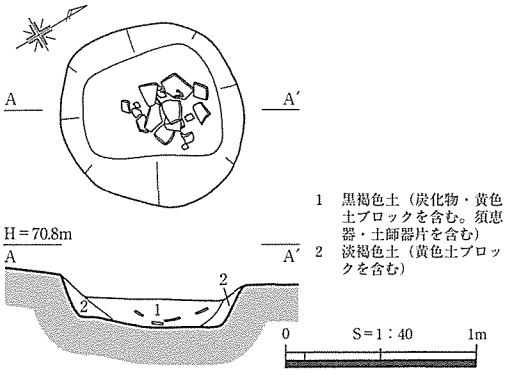
遺物は、埋土中より出土した弥生土器の甕Po1377、鉄剣F54を図化した。F54は、埋土上層で切先を南東方向に向けて出土している。Po1377は、弥生時代後期前葉ごろを示すが、後述するSK95と同時期の古墳時代前期初頭ごろと思われる。出土遺物から土壙墓の可能性もあるが、埋土上層中での出土であり、詳細は不明である。（前島・牧本）

SK36（第477・478図、PL. 91）

調査区西側のF17グリッドにあり、北西方向にむかう標高70.6mの緩斜面に立地する。平面円形を呈し、上面で長軸0.97m、短軸0.96m、底面で長軸0.73m、短軸0.55mを測る。断面スリバチ型を呈し、検出面からの深さ37cmを測る。底面は平坦である。

埋土は褐色系を主体とした2層に分かれ、自然堆積を示すと考えられる。

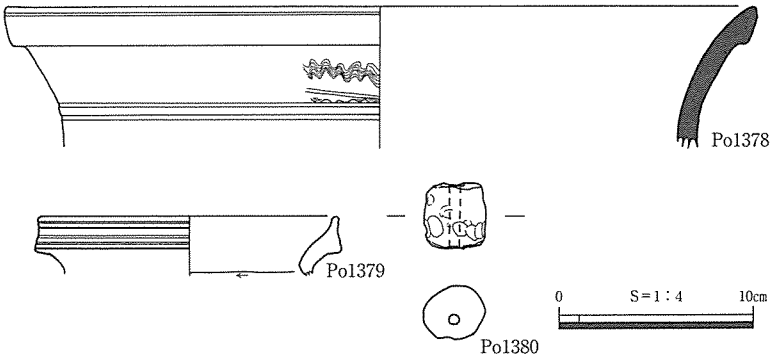
遺物は、底面から出土した須恵器甕Po1378、弥生土器



第477図　笠見第3遺跡SK36遺構図

甕Po1379、土錘Po1380を図化した。このうち、須恵器甕Po1378は体部を敷き詰めた状態で出土している。

出土遺物から、須恵器はTK43併行期以降、古墳時代後期後葉ごろと思われる。詳細な性格は不明であるが、土壙墓の可能性がある。（前島・牧本）



第478図　笠見第３遺跡SK36出土遺物実測図

SK95（第479～481図、PL. 91・168・174）

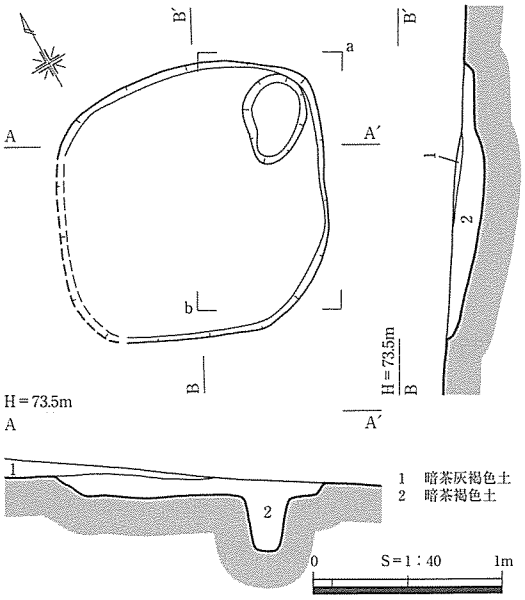
調査区中央やや南寄りのL12グリッドにあり、標高73.1m前後のほぼ平坦面に立地する。

平面隅丸方形で、一辺1.5m、深さ30cmの浅い土坑である。削平を受けており、遺存状態は悪い。南側でSK119を掘り込む。この土坑の東北隅には長辺45cm×短辺30cm、深さ25.0cmの楕円形ピットがあり、その中からほぼ完形の土師器甕Po1281が出土した。甕は横向きで出土しており、上面は埋土の土圧により、細片化していた。

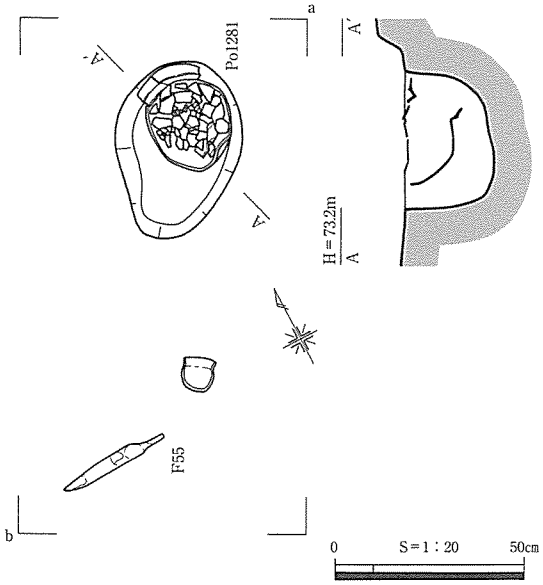
埋土は暗茶褐色土の単層で、土坑とピット内の埋土に差がないことから、一度に埋められたものと考えられる。

その他、南東隅の底面から鉄剣F55と小型丸底壺が出土している。

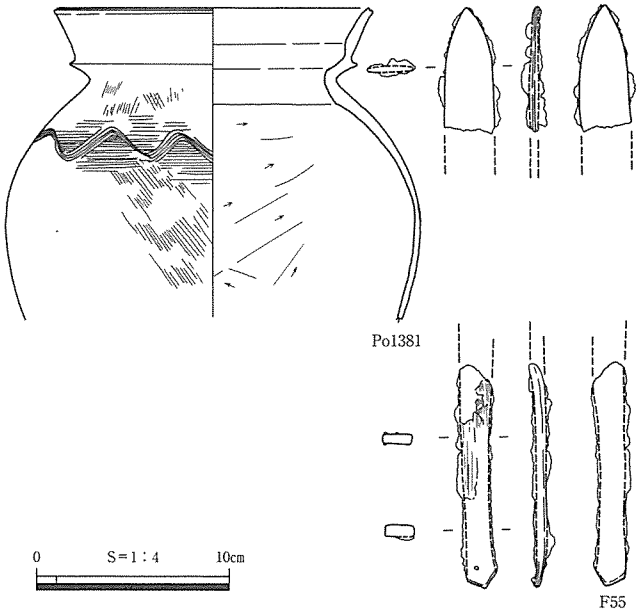
出土遺物から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期前葉ごろの



第479図　笠見第３遺跡SK95遺構図



第480図　笠見第３遺跡SK95遺物出土状況図



第481図　笠見第３遺跡SK95出土遺物実測図

土壙墓と考えられる。（西川）

SK124（第482・483図、PL. 91）

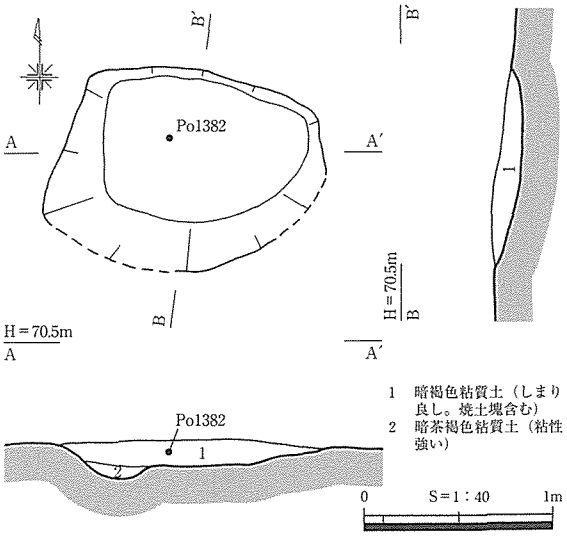
調査区北側のE14グリッドにあり、北東方向にむかう標高70.1mの緩斜面に立地する。北側約30cmにSI81が隣接する。

平面は歪んだ長方形を呈し、長軸1.38m、短軸1.05m、底面で長軸1.07m、短軸0.73mを測る。検出面からの深さ20cmを測り、底面は凹凸がある。

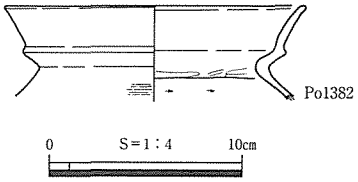
埋土は褐色系を主体とする２層に分かれる。下層は焼土塊を多く含む暗褐色粘質土である。

遺物は埋土中より出土した土師器甕Po1382を図化した。また、土器細片とともに炭化桃核、焼成粘土塊が出土していることから、廃棄されたものと考えられる。

出土遺物等から、天神川Ⅰ期、古墳時代前期前葉ごろの廃棄土坑と考えられる。（前島）



第482図　笠見第３遺跡SK124遺構図



第483図　笠見第３遺跡SK124出土遺物実測図

第５節　段状遺構

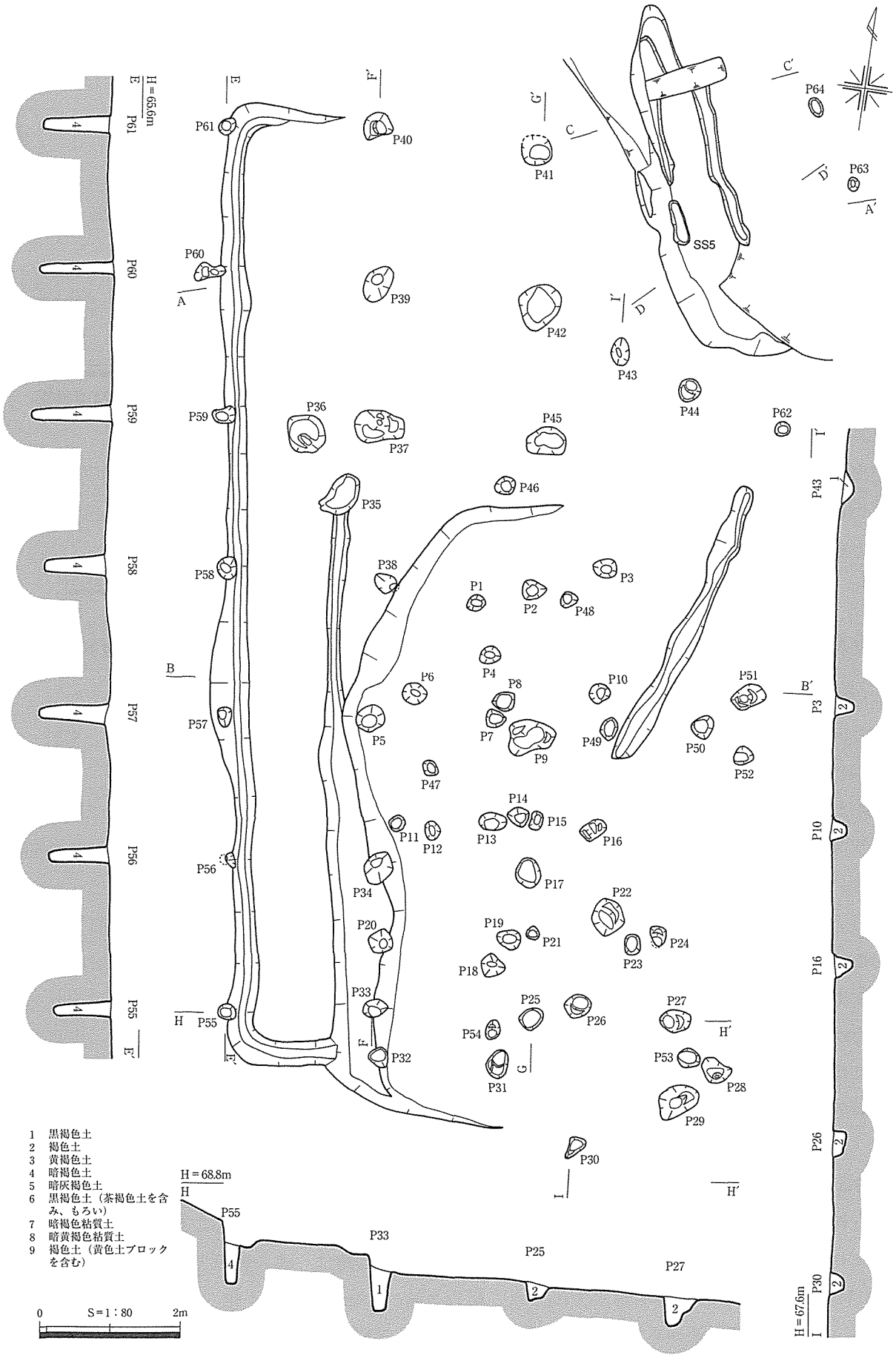
SS1・SB8・SB11（第484～486図、PL. 89）

調査区東際、J3・K3・L3グリッドの標高66.5～68.2mの東側斜面部に立地する。SI49、SI57、SI58の東側に位置し、斜面を段状に整地して平坦面を作り出している。

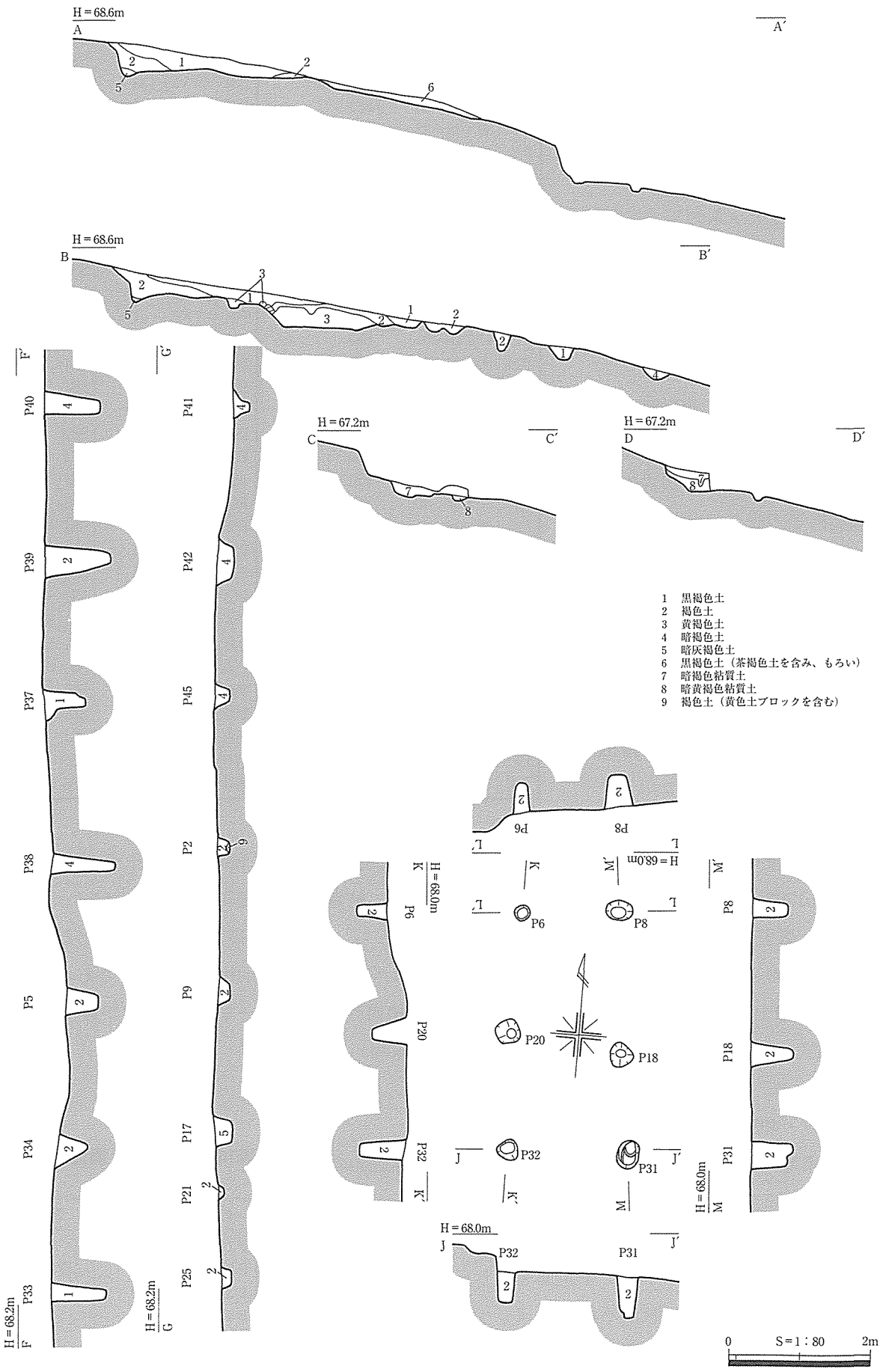
SS1は、上下に２段あり、埋土の堆積状況と遺物の出土状況から、同時存在したものではなく、下段テラスの埋没後に上段テラスが整地されたことがわかる。60基近くのピットを検出し、その配列状況から、２間×６間と１間×２間の掘立柱建物跡を１棟ずつ（SB8、SB11）と、５間のピット列を復元した。その他に溝を２本検出した。SS1上段テラスは、検出面から約50cmの深さに掘削し、壁際に鋏形の溝をめぐらせて、長さ約13m、幅約1.3mの平坦面を作り出す。実際の平坦面は土層断面観察から、検出し得た地山面を含め、下段テラスの埋土上にも広がっていたことがわかる。下段テラスは、検出面から約30cmの深さを掘削し、幅約8.7m、奥行き約1.5～2.5mの平坦面を作り出す。平坦面は緩やかに傾斜しているため、地山斜面との明瞭な境界はない。埋土中及び床面付近から弥生土器のほか、碧玉及び緑色凝灰岩管玉未成品及び剥片が多数出土していることから、玉作工房跡の可能性がある。

SB8は、桁行６間（12.4m）、梁行２間（4.4m）の総柱の大型掘立柱建物跡である。上段テラスの掘り方の幅と、桁行長をほぼ同じくする。西側の桁列は掘方の肩上に、中心と東側の２列はテラス平坦面より下方に並ぶ。その配置から上段テラスと掘立柱建物跡は一連の施設であると考えられる。

SB11は、下段テラスの南半側で検出した、桁行２間（3.4m）、梁行１間（1.8m）の掘立柱建物跡である。埋土の堆積状況から判断して、掘立柱建物跡は下段の平坦面に伴うものといえるが、柱穴P32が下段テラスの焼土面を掘り込むことから、テラス造成と建物の構築には時期差があると考える。



第484図　笠見第３遺跡SS1・SB8・11遺構図



第485図　笠見第３遺跡SS1・SB8・11土層断面図

ピット列は、下段の平坦面の下方に、傾斜と直交する方向にピットが６基直線上に並ぶ。掘立柱建物跡の向きと並行することから、SB8に伴う庇か、あるいは柵状の施設であると考える。

溝１は、下段テラスの下方に位置し、傾斜に対して斜に掘られた、長さ4.3m、幅0.3mの溝１は、埋土が下段テラスのものと類似するが、性格不明である。

溝２は、下段テラスの西側で、傾斜に直交する、幅0.2mの溝２を検出した。この溝は下段テラスの掘り方の幅と同等の長さに、つまりは南側方向に延長して約８mの長さに復元される。埋土の切りあいでは、下段テラスの埋没後に掘削されているため、上段テラスに伴うものと考えられる。溝２の北端を切るP35は浅く、底面も歪であり、後世の攪乱とも考えられる。

表159　笠見第３遺跡SS1ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	28×26－51	SS1	P33	37×26－55	SS1
P２	35×28－19	SS1-SB8	P34	50×39－33	SS1-SB8
P３	36×28－28	SS1	P35	64×43－26	SS1
P４	30×25－22	SS1	P36	62×54－18	SS1
P５	43×36－42	SS1-SB8	P37	72×48－58	SS1-SB8
P６	34×32－26	SS1	P38	35×28－91	
P７	27×26－27	SS1	P39	53×35－93	SS1-SB8
P８	29×28－25	SS1	P40	43×36－79	SS1-SB8
P９	70×47－19	SS1-SB8	P41	44×44－27	SS1-SB8
P10	29×28－21	SS1	P42	68×60－37	SS1-SB8
P11	21×20－43	SS1	P43	39×27－20	SS1
P12	28×22－15	SS1	P44	41×32－41	SS1
P13	41×28－51	SS1	P45	56×40－28	SS1-SB8
P14	30×27－28	SS1	P46	30×26－35	SS1
P15	27×17－18	SS1	P47	22×20－９	SS1
P16	38×27－39	SS1	P48	25×21－29	SS1
P17	45×35－24	SS1-SB8	P49	43×26－26	SS1
P18	33×30－67	SS1	P50	33×31－21	SS1
P19	35×28－28	SS1	P51	46×33－42	SS1
P20	35×32－40	SS1	P52	28×25－30	SS1
P21	19×19－９	SS1	P53	33×28－19	SS1-SB8
P22	48×48－17	SS1	P54	28×19－15	SS1-SB8
P23	31×23－40	SS1	P55	26×23－51	SS1-SB8
P24	30×24－35	SS1	P56	22×16－55	SS1-SB8
P25	32×30－20	SS1-SB8	P57	27×23－68	SS1-SB8
P26	36×35－19	SS1	P58	31×30－62	SS1-SB8
P27	45×34－40	SS1	P59	35×20－76	SS1-SB8
P28		SS1	P60	47×15－69	SS1-SB8
P29	63×48－34	SS1	P61	26×19－78	SS1-SB8
P30	37×25－19	SS1	P62	23×20－21	SS1
P31	43×31－61	SS1	P63	17×15－17	SS5
P32	29×28－47	SS1	P64	26×18－19	SS5

出土遺物には、SS1からは弥生土器壺Po1383、甕Po1384～1387、底部Po1388、短頸壺Po1389・1390、肩部Po1391、土師器低脚杯Po1392、甕Po1393・1394、須恵器杯蓋Po1395、杯身Po1396、紡錘車S87、砥石S88、鉄器F56・57、ガラス小玉J73、碧玉製管玉未成品J74～78を図化した。このうち、土師器・須恵器は上述したとおり上段テラス埋土中からの出土で、弥生土器及び管玉未成品は下段テラス埋土中からの出土である。

時期は、SS1上段テラス・SB8が天神川Ⅷ～Ⅸ期、古墳時代中期後葉～末ごろ、SS1下段テラスが清水Ⅴ－１様式、弥生時代後期前葉ごろと考えられる。（家塚）

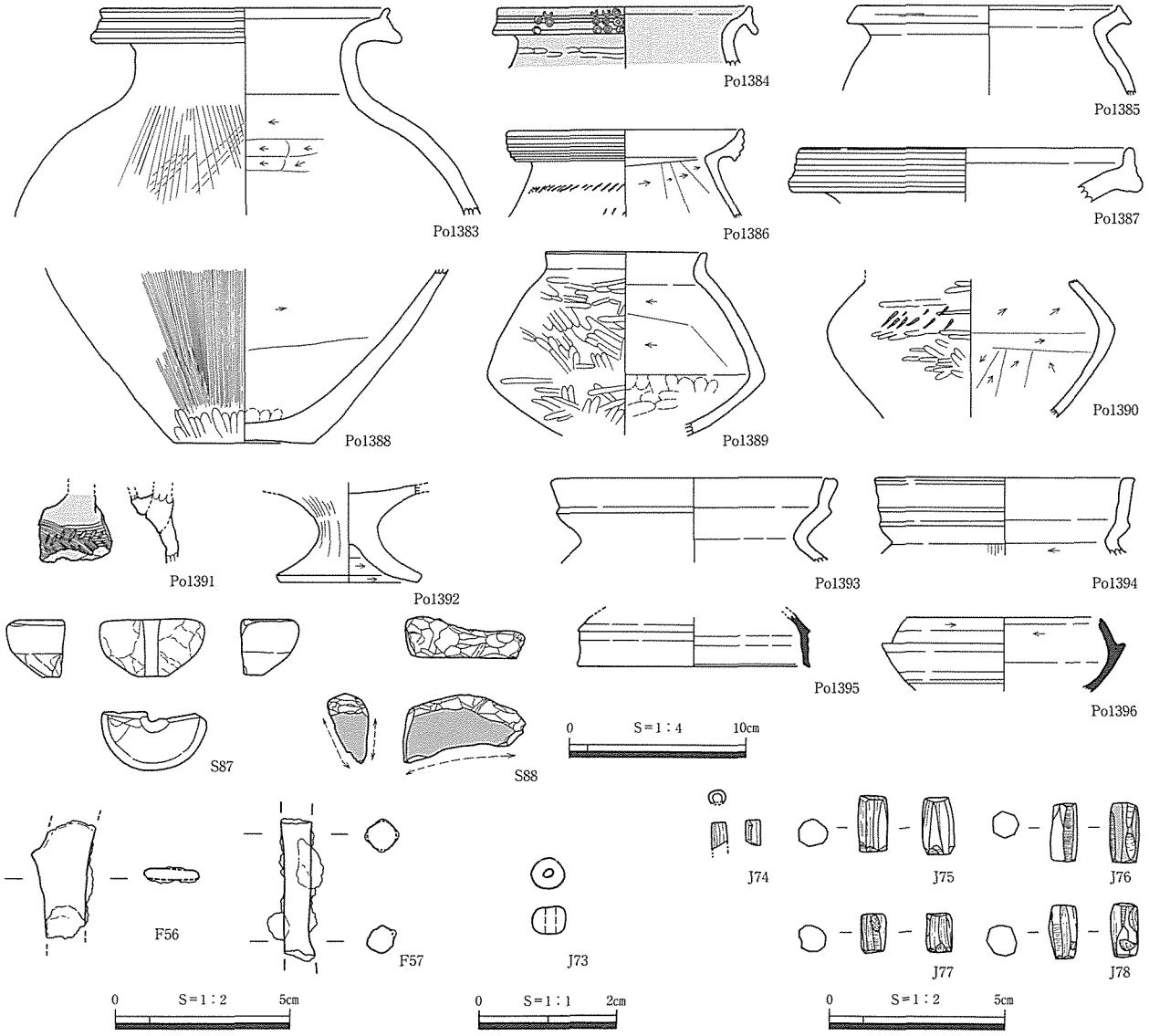
SS4（第487・488図、PL. 90）

調査区東際のL4・M5グリッドにあり、標高67.7～69.6mの緩やかに南東側に傾斜する斜面部に立地する。北側約２mにはSI48がある。

斜面を高さ20～36cmカットして平坦面を作り出している。南側は調査区外にあるため全形は不明である。長さ16.6m以上、幅3.2m以上を測る。北東側壁際には、幅15～50cm、深さ10cm前後の溝がある。底面にはP1～P７の浅いピットがあるが、用途は不

表160　笠見第３遺跡SS4ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	32×26－12	
P２	70×64－44	二段掘り
P３	37×28－12	
P４	20×19－38	
P５	24×21－19	
P６	36×30－35	
P７	83×73－34	



第486図　笠見第３遺跡SS1出土遺物実測図

明である。

埋土は、５層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

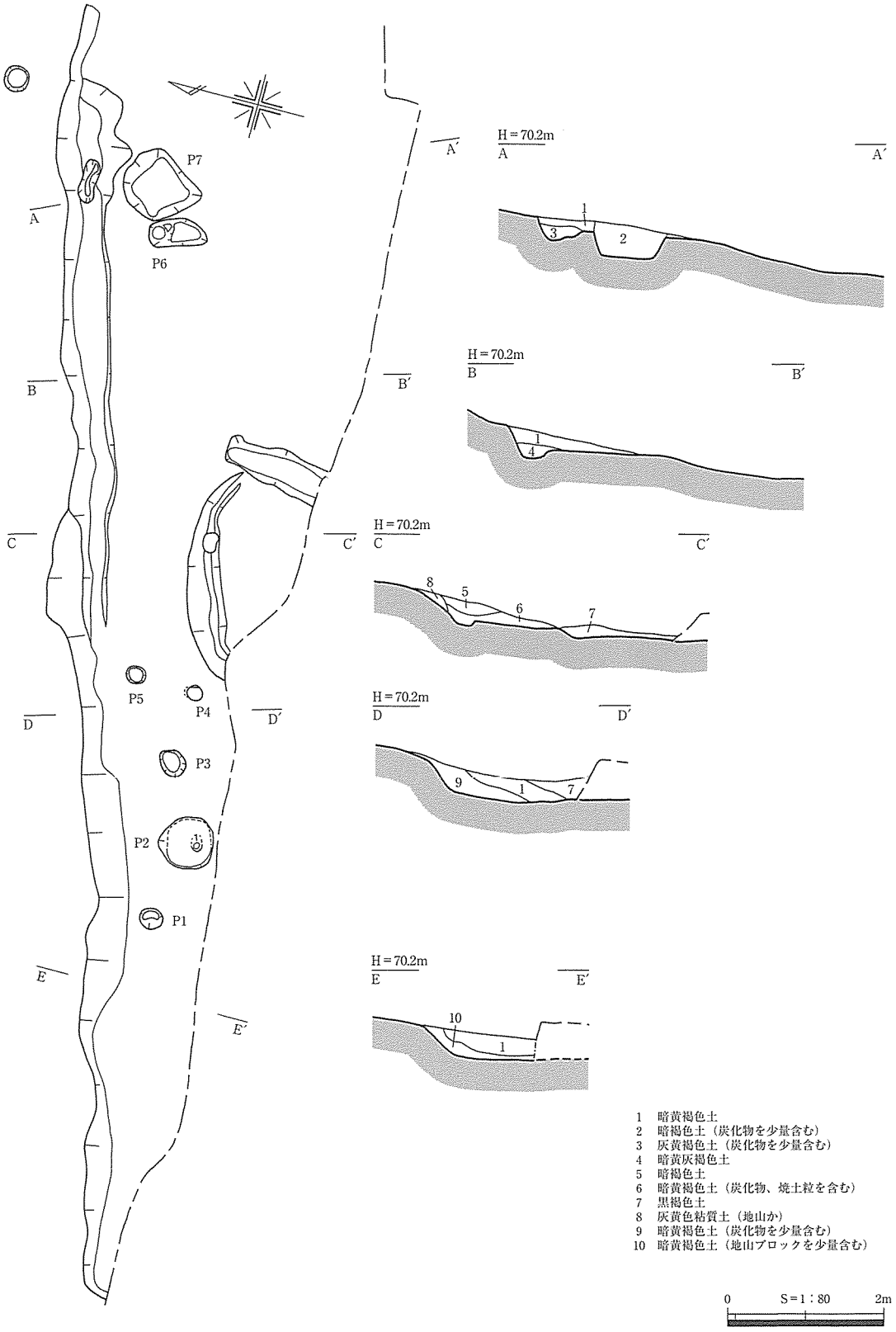
出土遺物のうち、埋土中で出土した土師器壺Po1397、甕Po1398、弥生土器甕Po1399～1405、底部Po1406、緑色凝灰岩管玉素材片J79・80、管玉未成品J81、水晶石核J82を図化した。

出土遺物には弥生土器も含まれるが、最も新しい時期を示す土師器が当遺構の時期を示すと思われ、天神川Ⅷ期、古墳時代中期後葉ごろのものと考えられる。性格は不明である。（牧本）

第６節　古墳時代ピット（第４・５・489図）

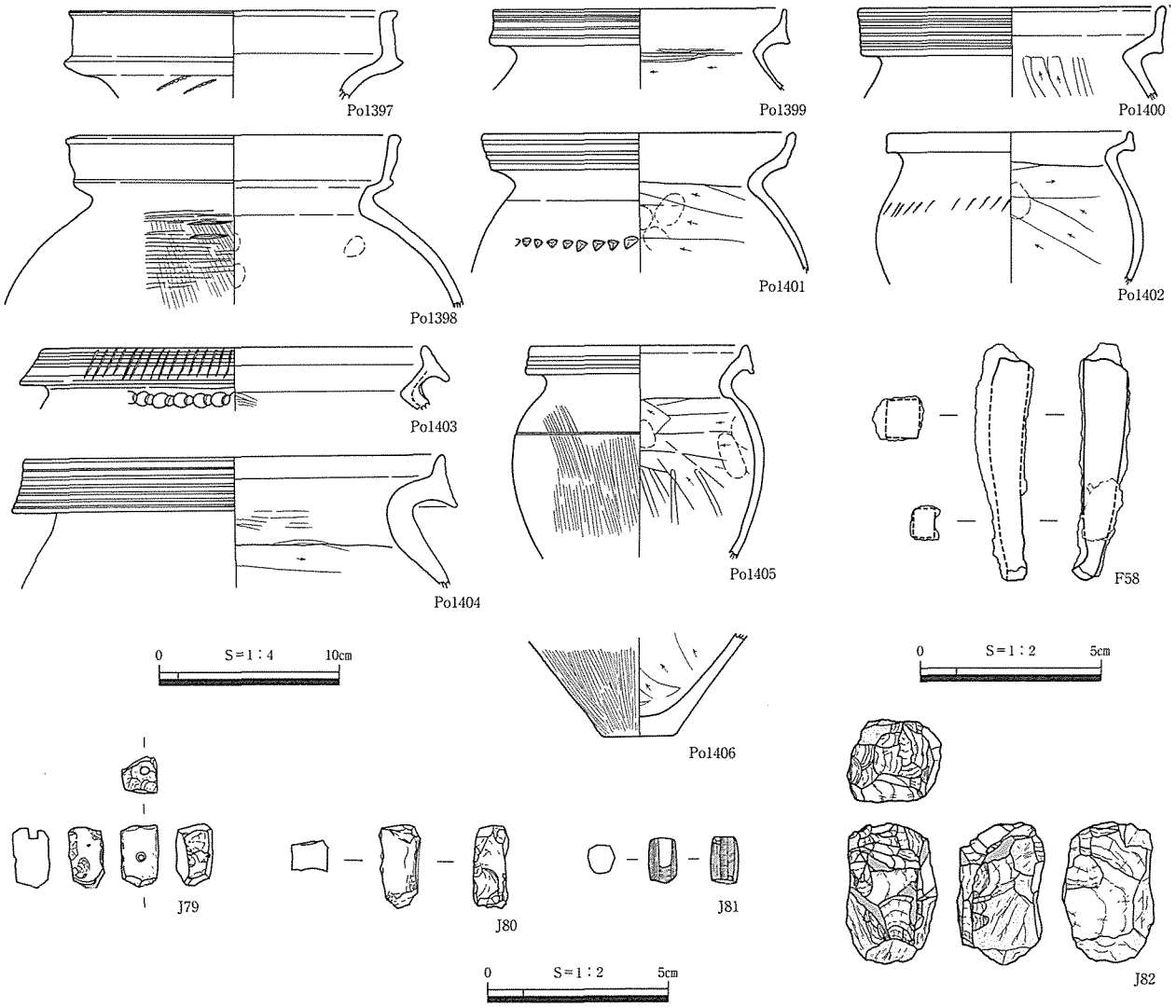
調査区内に1,400基弱のピットを検出しているが、このうち古墳時代遺物を含むピットが検出されている。

P60は調査区南東側のM9グリッドにあり、（21×19－26）cmを測る。須恵器杯蓋Po1414が出土している。P124は、調査区南東側のM6グリッドにあり、（24×20－17）cmを測る。土師器甕Po1409が出土



第487図　笠見第３遺跡SS4遺構図

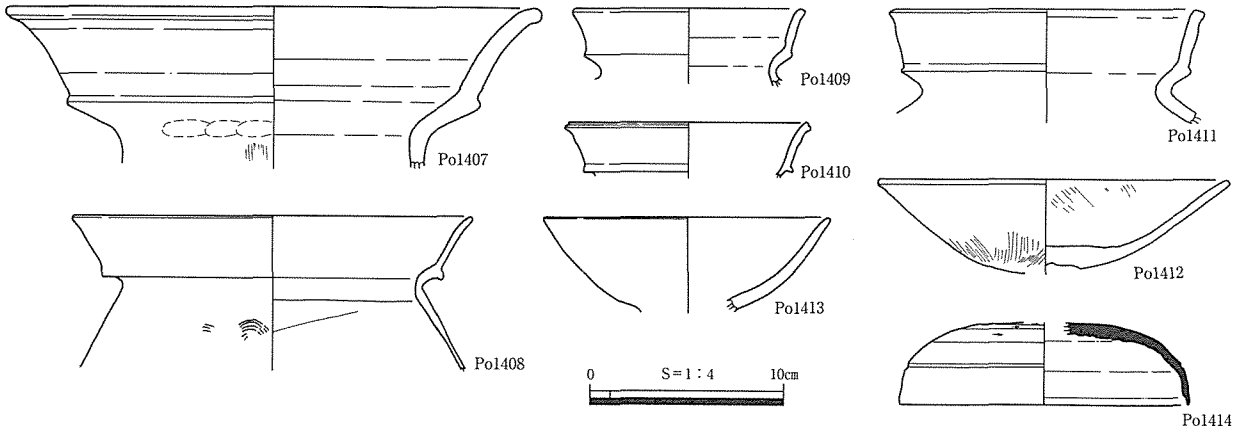
している。P155は、調査区南東側のN8グリッドにあり、(30×27－58) cmを測る。土師器壺Po1407が出土している。P250は、調査区北東側のJ4グリッドにあり、(41×33－53) cmを測る。土師器甕Po1410が出土している。P336は、調査区北東側のI6グリッドにあり、(26×22－40) cmを測る。土師器高杯Po1413が出土している。P550は、調査区北東際のE4グリッドにあり、(34×24－24) cmを測る。土師器



第488図　笠見第３遺跡SS4出土遺物実測図

甕Po1408が出土している。P913は、調査区南西側J16グリッドにあり、（57↑×37↑－７）cmを測る。土師器甕Po1411、高杯Po1412が出土している。

時期は、Po1407は天神川Ⅲ期、Po1408～1410は天神川Ⅰ期、Po1411～1413は天神川Ⅴ期、Po1411は天神川Ⅹ期ごろと考えられ、古墳時代前期前葉から後期初頭にかけてのもので、古墳時代集落と同じ存続期間を示す。（牧本）



第489図　笠見第３遺跡古墳時代ピット内出土遺物実測図

第７節　笠見３号墳（第490～500図、PL. 92・93・169～172・177）

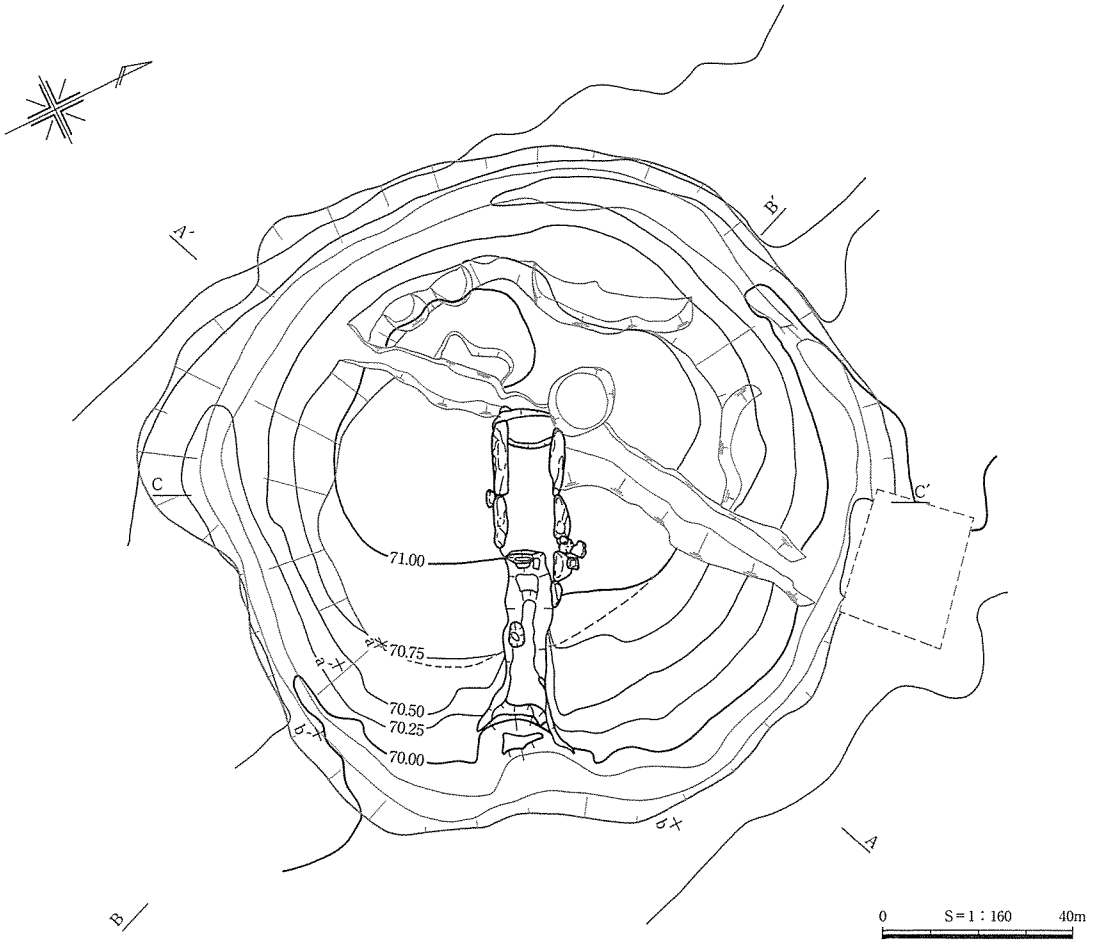
調査区中央東側のK5・６、L5・６グリッドにあり、東側に緩やかに傾斜する標高69.7～70.8mの斜面部に築造されている。墳丘は梨耕作等により削平されており、特に北西側は大きく掘削を受けていた。

当古墳は、平成14年度の調査によって確認された新発見の古墳で、現状では単独で存在するものである。同丘陵上にある笠見２号墳は、約200m北西に存在する。現状では群集墳の様相は見受けられないが、同丘陵上は後世の耕作等によりかなりな削平を受けているものと考えられ、その他に古墳が存在する可能性は否定できない。

墳丘は、南北12.5m、東西12.7mを測る円墳である。高さは、現状では西側周溝底から0.75m、東側周溝底から1.1mを測る。盛土は、最大35cmとわずかに確認できた。掘り下げ時に、旧表土と盛土下の竪穴建物（SI100～102）埋土の区別ができなかったため、旧表土を掘りとばしてしまった部分もあるが、墳丘築造時には、地山を約50cm程度削り出して墳丘基壇を作り、盛土を行っていることが判明した。なお、旧表土は墳丘南側にだけ確認されている。

周溝は幅0.5～1.8mを測り、全周している。斜面地に立地するために、墳丘西側の丘陵頂部側を特に深く掘り込み、東側はあまり深くない。深さは、西側で最大95cm、東側で10cm前後となる。

盛土を除去したところ、周溝の内側、つまり墳丘内部に幅0.6m前後の溝が検出された。南・西側は明瞭であったが、北・東側段状になる。この部分の覆土は、盛土下層と同質のローム層を多量に含



第490図　笠見３号墳墳丘測量図

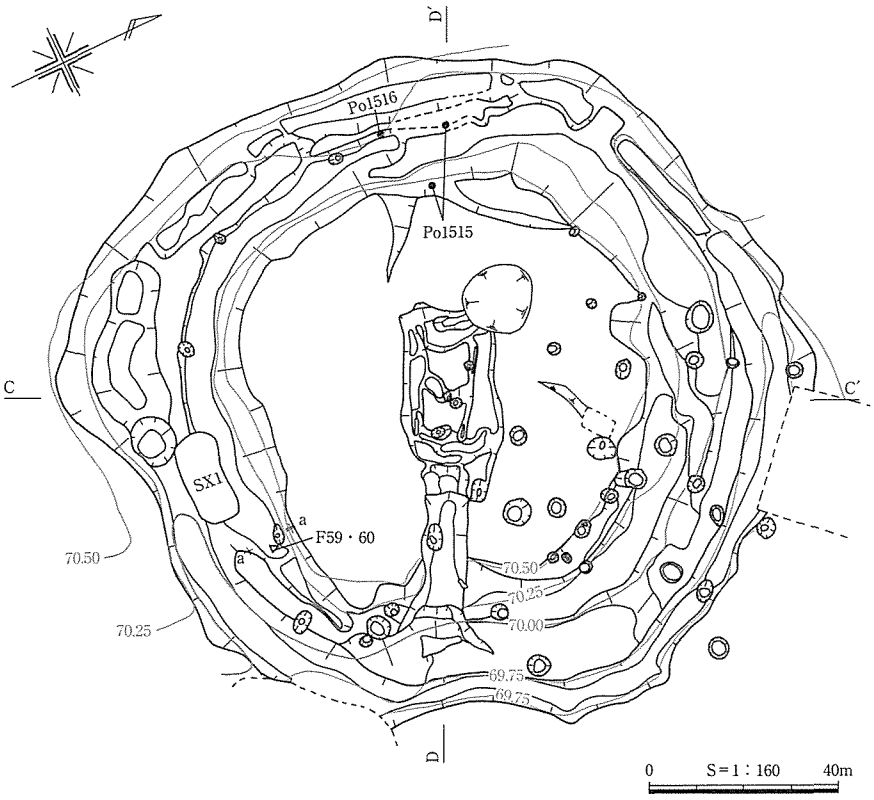
む淡黄橙色土層で放置された状況がないこと、墳丘に対して同心円状に巡ることから、墳丘築造時に計画的に掘り込まれた、区画溝と推定される。

南側区画溝内で、二段掘りの埋葬施設**SX1**が掘り込まれている。規模は、上面で長軸1.95m、短軸0.85m、深さ0.31～0.46mを測り、さらに、底面中央を長さ1.4m、幅0.28～0.4m、深さ５～８㎝掘り込んでいる。埋土は、４層に分層できた。棺痕跡は認められなかったが、中央部は落ち込んだ堆積となっており、木棺が埋置されたものと考えられる。遺物は出土していない。

また、周溝底部も地山ブロックを多量に含む暗褐色土によって整形されており、区画溝の存在と併せ墳丘築造過程を考える上で興味深い。墳丘基壇上面及び区画溝内で、ピットが多数検出されたが、これらは古墳以前のものと考えられる。

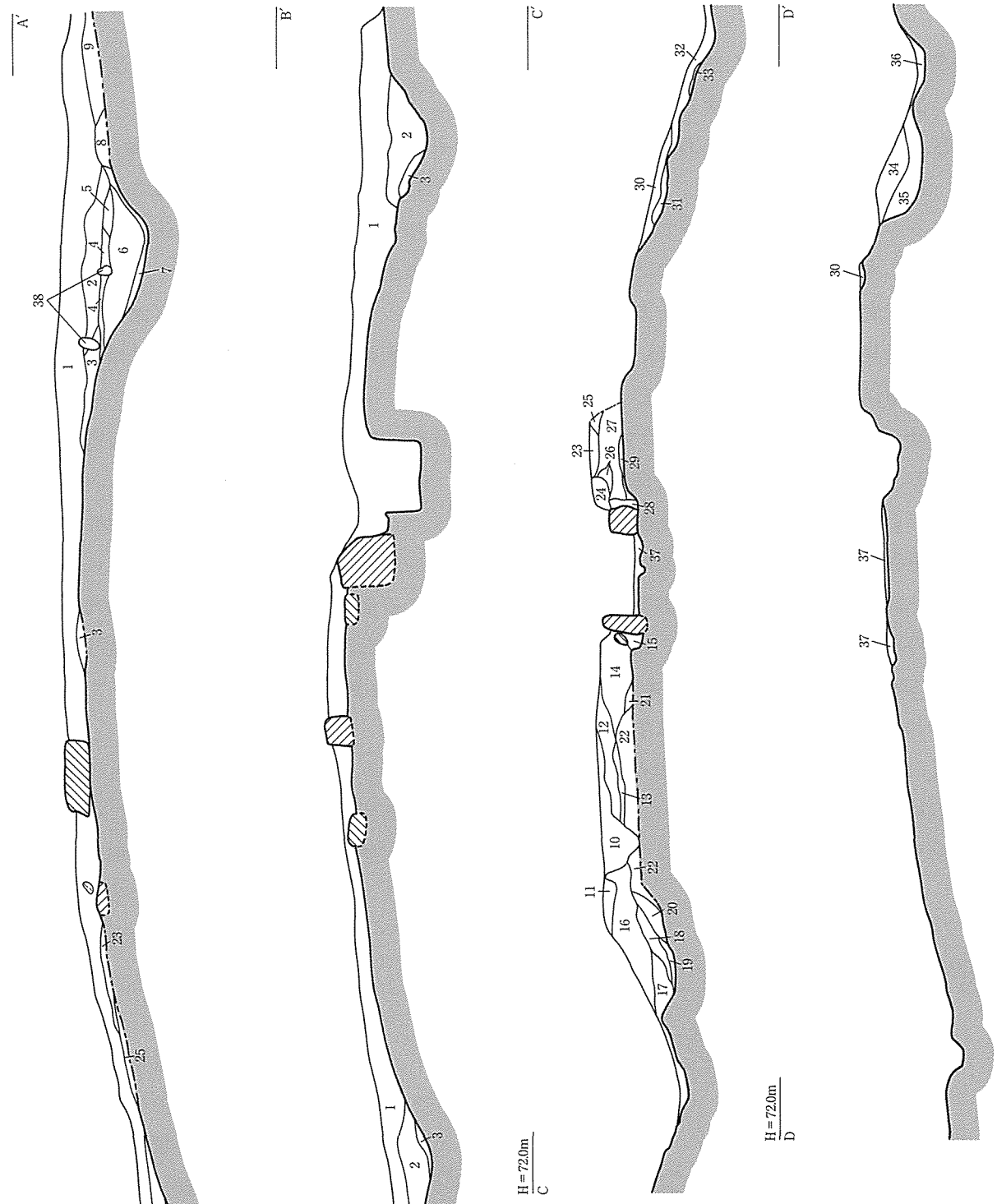
主体部は、S-64°-Eと南東に開口する無袖の横穴式石室である。石材は、天井石、玄室奥壁が既に移動もしくは抜き取られており、玄室両側壁基底石が一段２列遺存していたのみである。検出時に石室天井石と思われたものも、原位置を保つものではなく、二次的に移動されたものと判断された。閉塞石は遺存していなかったが、玄室と前庭部との境に浅い溝が掘り込まれており、さらに、北側前庭側壁の一部が凹み、石材の積み方が異なる部分があり、この部分で板石または木板で閉塞が行われていたものと考えられる。規模は、玄室長2.13m、幅1.0～1.1m、高さ0.75m以上、前庭部長3.95m、幅0.8～0.95mを測る。玄室床面には、径３～５㎝大の円礫が敷き詰められて礫床となっていたものと考えられるが、遺存していたのは中央部分だけであった。

石室入口にあたる部分は、側壁基底部に石材を据える掘り込みがなく、また、天井石と考えられるような石材も周辺からは出土していないことから、所謂前庭側壁と呼べる構造である。この部分の石材も原位置を保つものはほとんどなく、前庭部に落ち込んだ状態で出土している。前庭部は、玄門側が高く開口部に向かって緩やかに傾斜し、床面には段状のステップが認められる。



第491図　笠見３号墳墳丘除去後測量図

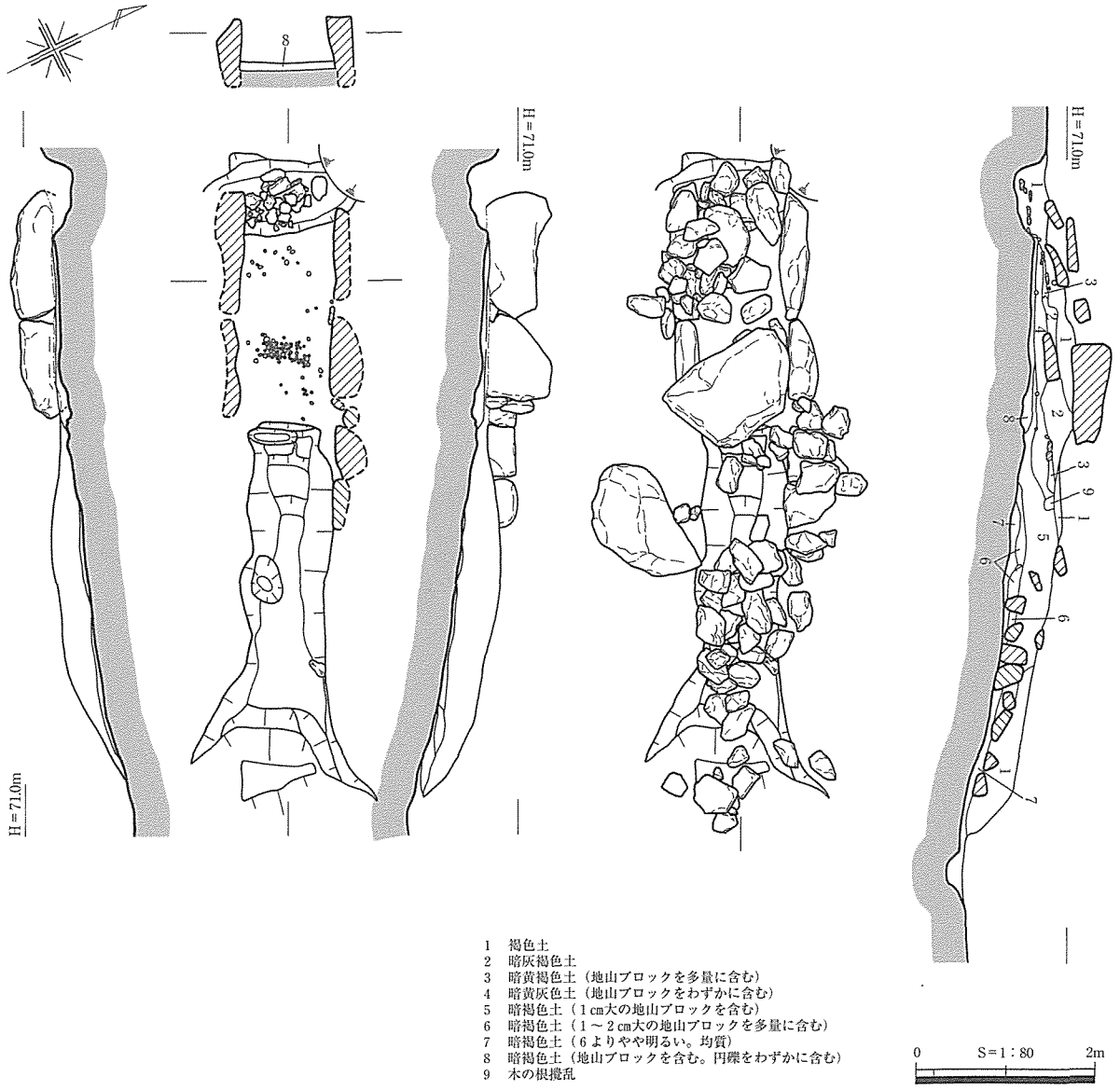
出土遺物には、東側周溝内を中心にして多量の須恵器類、盛土内で土師器、鉄器が出土した。図化できたものには、須恵器杯蓋Po1415～1448、杯身Po1449～1495、高杯Po1496～1499、直口壺Po1500、瓿Po1501、椀Po1502・1503、短頸壺Po1504、長胴壺と思われるPo1505、提瓶Po1506～1511、平瓶Po1512、横瓶Po1513がある。これらは、一部蓋杯



1 暗褐色土（表土・耕作土）
2 黒褐色土
3 暗灰褐色土
4 暗灰赤褐色土
5 暗灰褐色土
6 淡黒褐色土
7 暗黄灰褐色粘質土
8 暗灰色土
9 淡暗褐色土（SI32埋土）
10 暗褐色土（2～5㎝大の地山ブロックを含む）
11 淡灰褐色土
12 暗灰褐色土
13 黒褐色土（旧表土）
14 暗褐色土（1㎝大の地山ブロックを含む）
15 暗茶褐色土
16 淡茶褐色土（3㎝大の地山ブロックを含む）
17 淡黄橙色土
18 暗黄灰褐色土（地山ブロックを多量に含む）
19 暗褐色土（地山ブロックを多量に含む）
20 暗灰褐色土
21 暗茶褐色土
22 暗灰褐色土（SI101埋土）
23 暗橙灰褐色土
24 淡褐色土
25 灰褐色土
26 暗灰褐色土
27 黒褐色土（2～3㎝大の地山ブロックを含む）
28 暗茶褐色土（地山ブロックを多量に含む）
29 暗橙褐色土（地山ブロックを多量に含む）
30 黒褐色土
31 淡黄褐色土
32 暗茶褐色土
33 明黄橙色土
34 暗黄褐色土（地山ブロックを多量に含む）
35 暗黄褐色土（地山ブロックを多量に含む。34より暗い）
36 暗褐色粘質土
37 暗褐色土（地山ブロックを含む。円礫をわずかに含む）
38 木の根撹乱

0 S=1：80 2m

第492図　笠見3号墳墳丘土層断面図

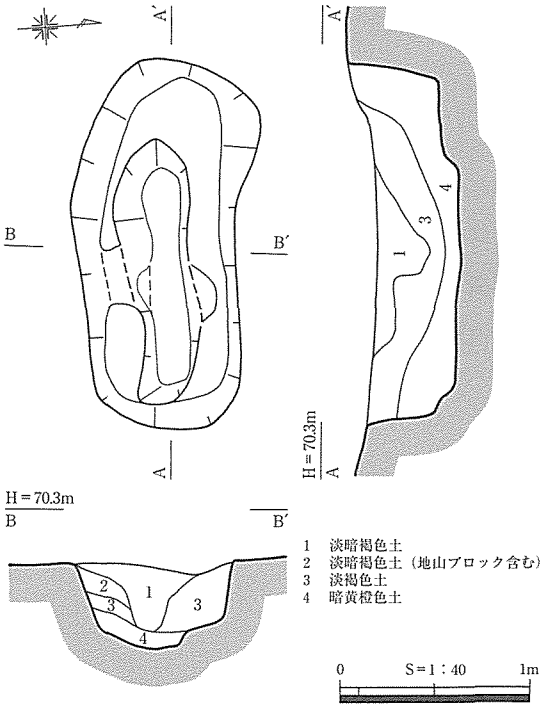


第493図　笠見３号墳横穴式石室実測図

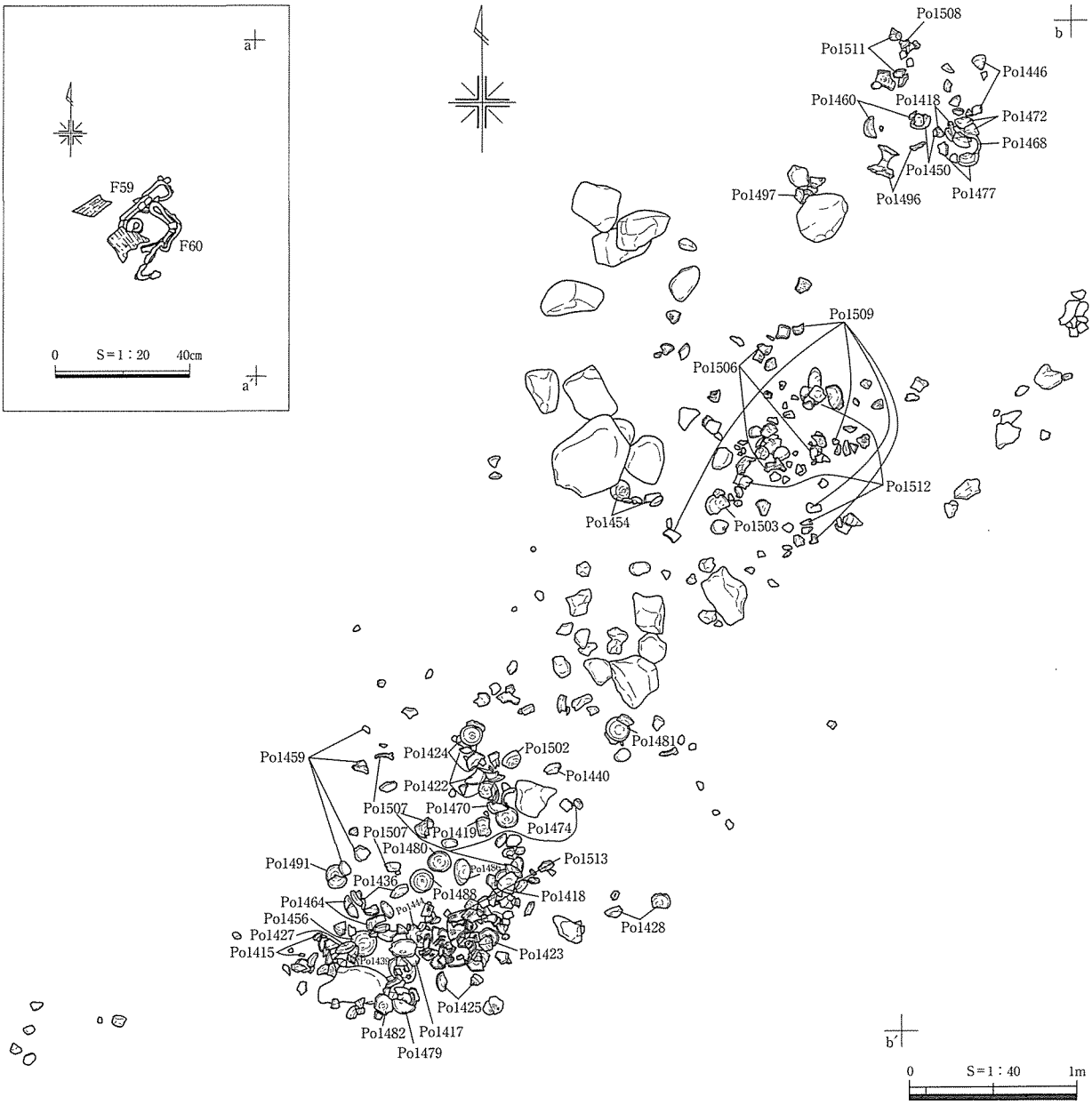
が重なって出土しているものがあるが、いずれも原位置を保つものではなく、石室内から二次的に廃棄されたものと考えられる。石室内では伴う遺物は無く、わずかに礫床内で弥生土器片が出土しているのみである。

その他には、墳丘盛土内で土師器甑Po1514、高杯Po1517～1520、甕Po1521～1522・1524、弥生土器甕Po1523、無頸壺Po1525、器台Po1526、磨石S89、敲石S90などが出土している。盛土中及び周溝埋土中に古墳築造時期以前の遺物が出土しているが、これらは、周囲の竪穴建物等に伴うものが混入したものと考えられる。

南側盛土中では炭化物とともに鐙金具１対分（F59・60）、また、西側盛土内では竈と思われるPo



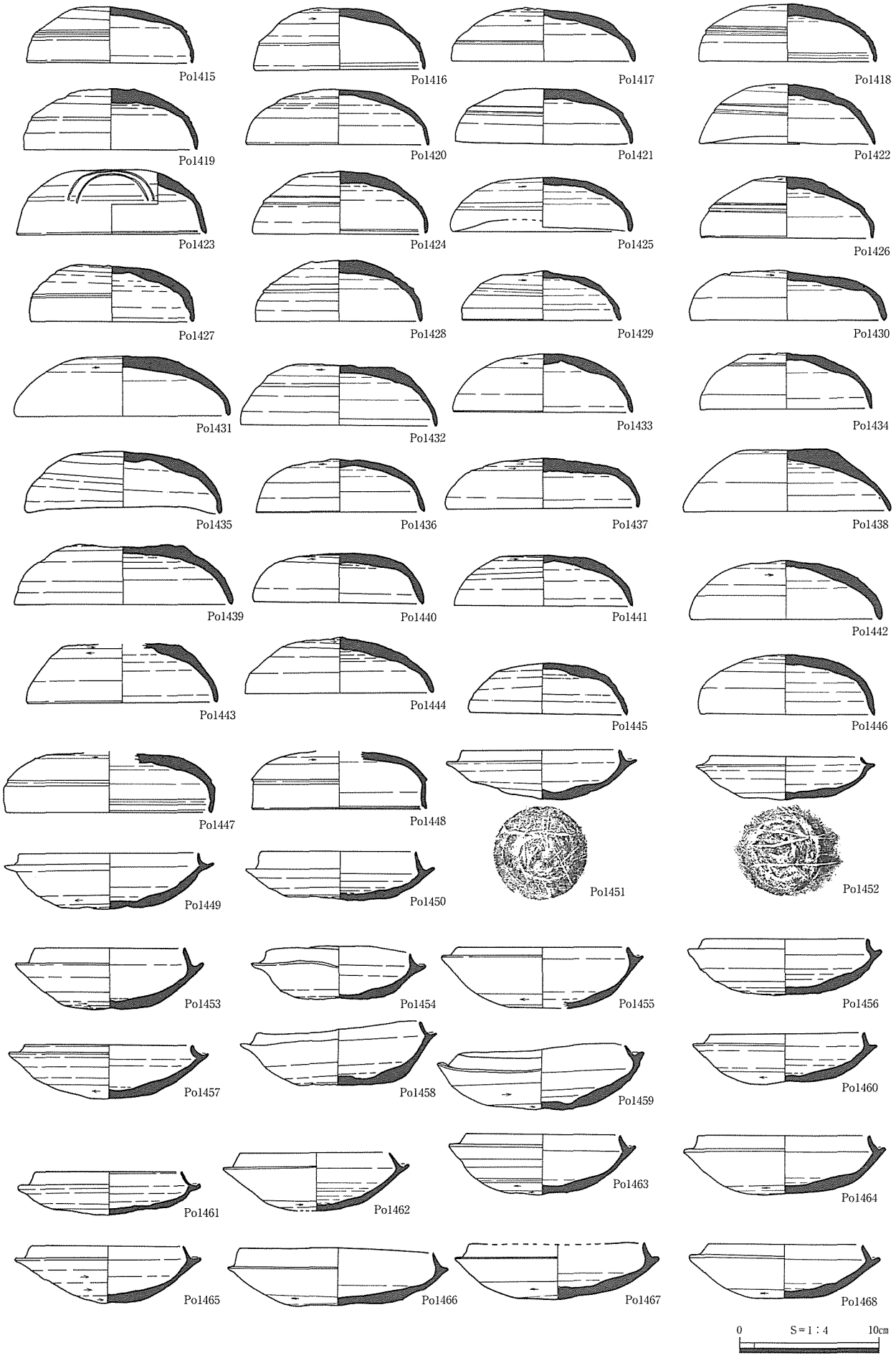
第494図　笠見３号墳SX1遺構図



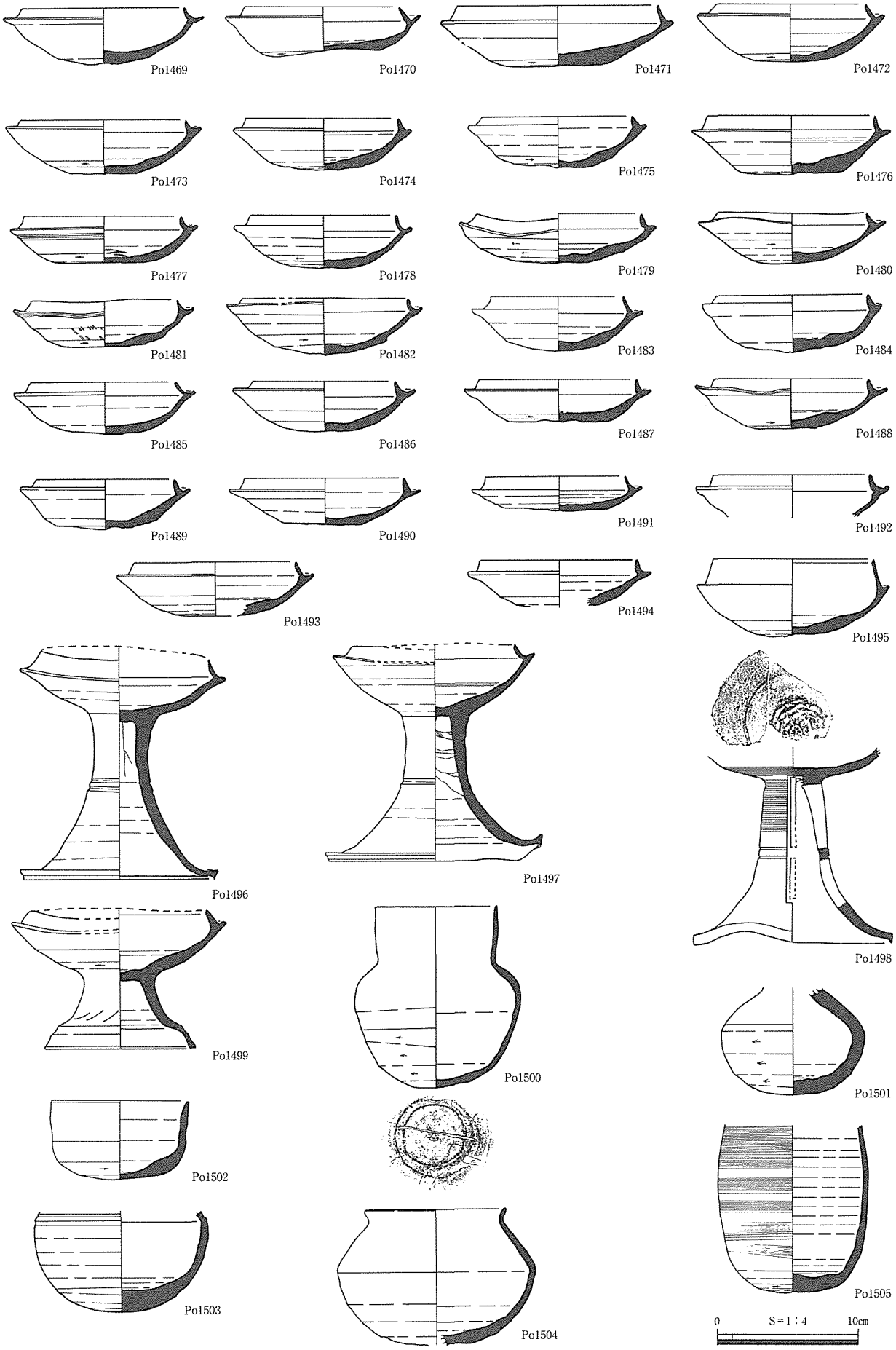
第495図　笠見３号墳周溝内遺物出土状況図

1515、移動式竈Po1516が区画溝より内側で出土しており、これらは、墳丘築造時に行われた何らかの祭祀に伴う遺物と考えられる。

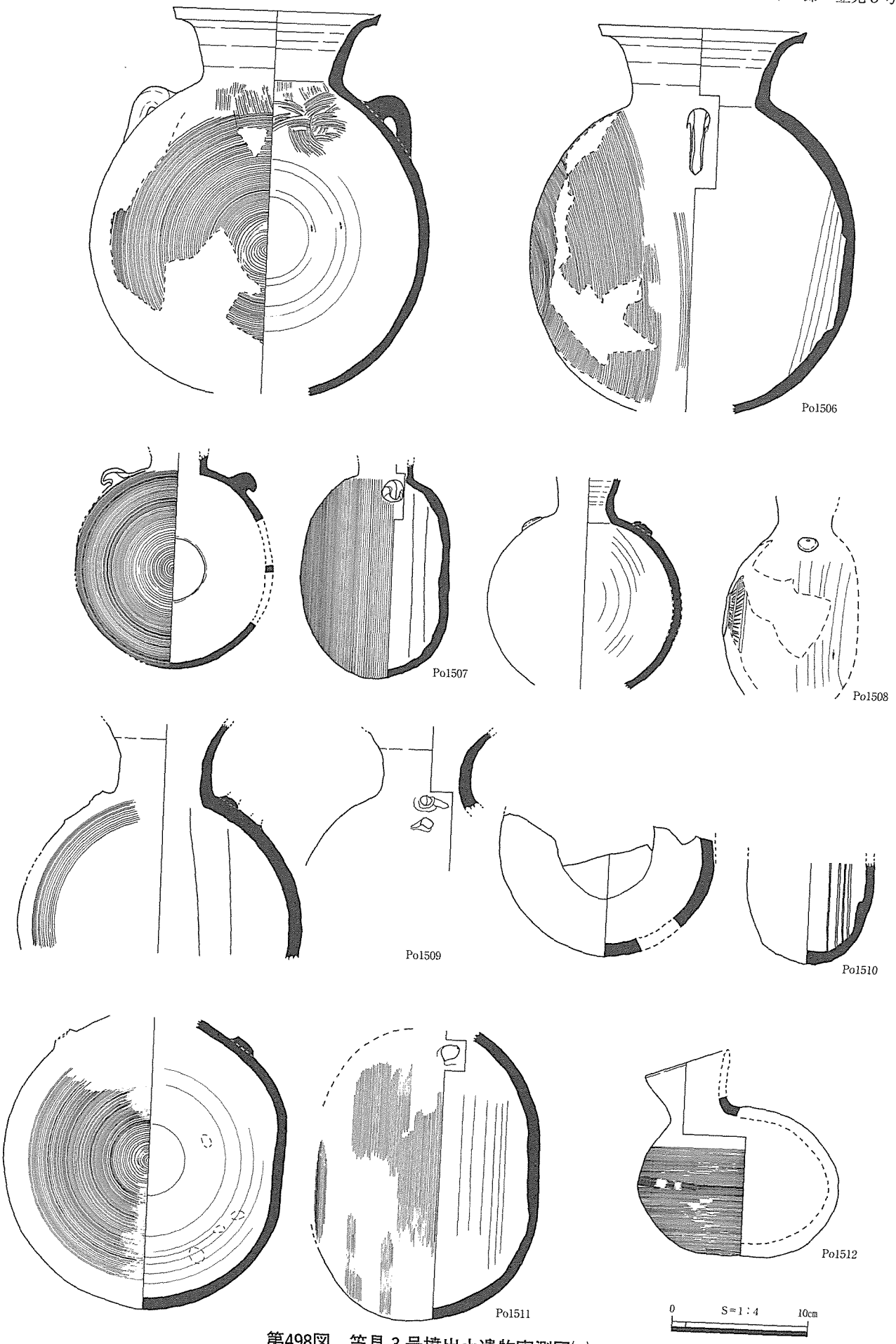
周溝内で出土している須恵器類が古墳築造時に近い遺物と考えられ、およそTK209～TK217併行期、古墳時代終末期に当るものと考えられる。（牧本）



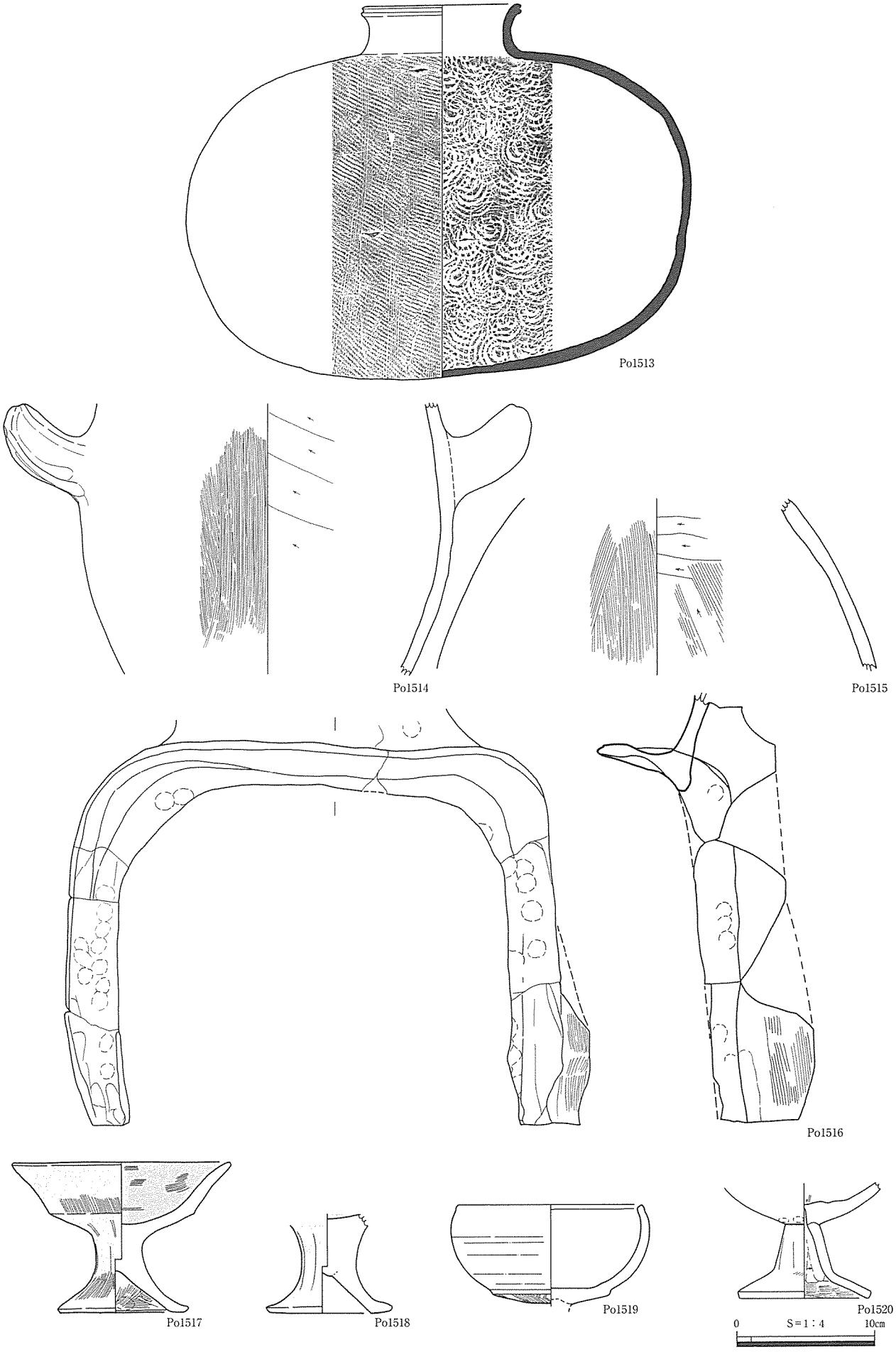
第496図　笠見３号墳出土遺物実測図(1)



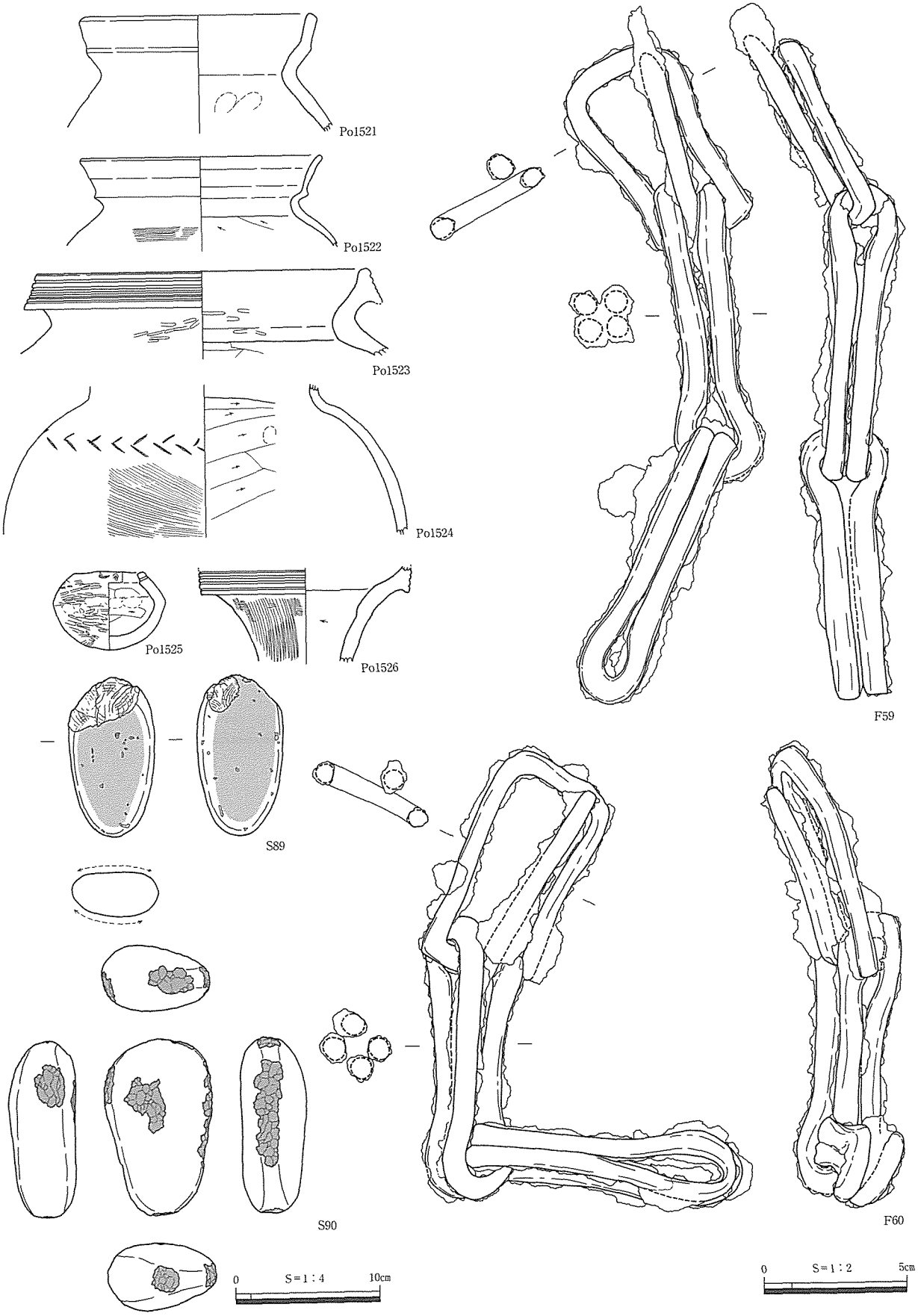
第497図　笠見３号墳出土遺物実測図(2)



第498図　笠見３号墳出土遺物実測図(3)



第499図　笠見３号墳出土遺物実測図(4)



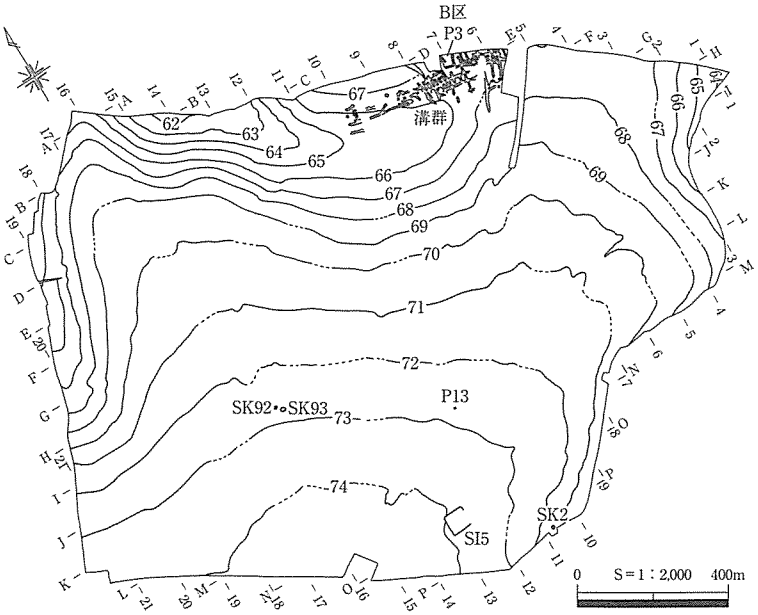
第500図　笠見３号墳出土遺物実測図(5)

第６章　奈良時代以降の調査成果

第１節　奈良時代以降調査の概要

奈良時代以降では、遺構数は限られ、奈良時代ごろの竪穴建物跡SI5、平安時代ごろの火葬墓SK2、平安時代以降のＢ区溝群、中世末から近世の仔牛を埋葬したSK93があるに過ぎない。また、ピット内に平安時代ごろの遺物を含むものが２基、遺構外でもわずかに遺物が出土するに過ぎない。

歴史時代では、当地は前時代までのように集落が積極的に形成されることはなく、墓地や耕作地として利用された可能性がある。（牧本）



第501図　奈良時代以降遺構配置図

第２節　竪穴建物

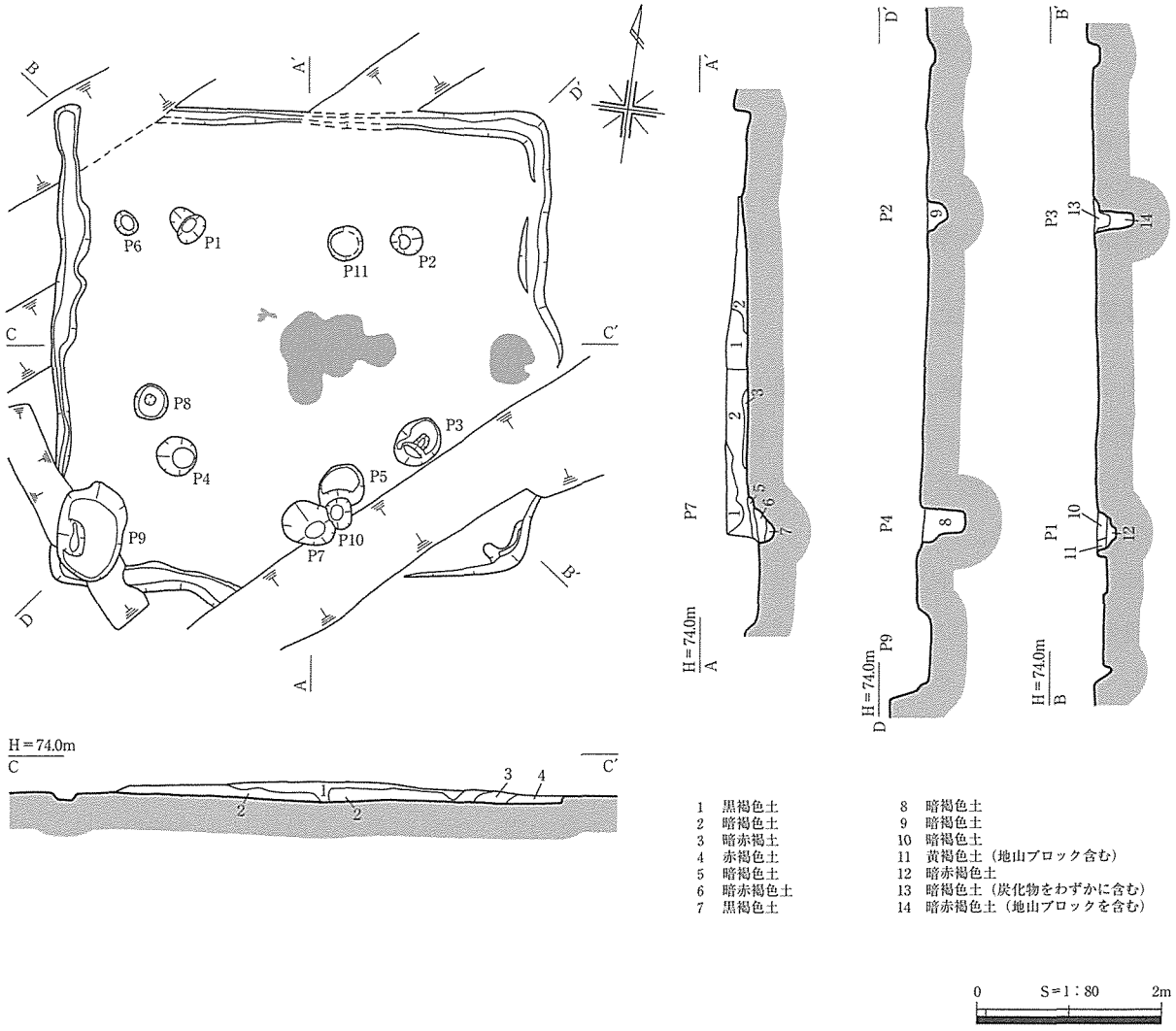
SI5（第502・503図、PL. 94・168）

調査区南東側のO13グリッド周辺で検出した竪穴住居跡である。標高73.8mの比較的平坦面に立地する。

攪乱坑が縦横に走り、遺存状況は良好とは言い難い。一辺5.3m四方のほぼ正方形の竪穴建物跡である。床面積は23.8m²を測る。建物の軸は南北方向に一致する。壁高は、最も遺存良好な南西隅で29

表161　笠見第３遺跡SI5ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	42×34－44	主柱穴	P7	58×45－29	
P2	37×32－22	主柱穴	P8	38×38－31	
P3	57×44－25	主柱穴	P9	110×69－19	
P4	44×42－49	主柱穴	P10	34×27－20	
P5	50×45－12		P11	38×38－ 5	
P6	28×23－11				



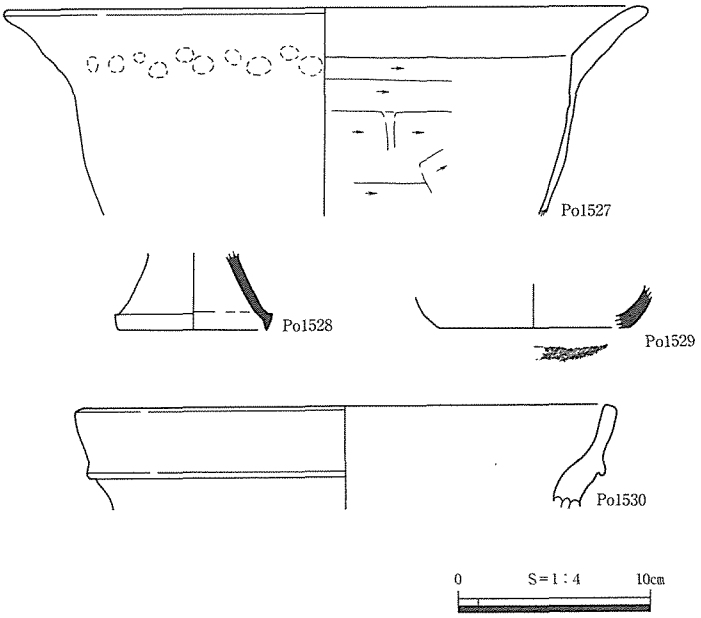
第502図　笠見第３遺跡SI5遺構図

cmを測る。溝は幅15～34cm、平均して20cm前後、深さ２～６cmの溝である。残りは悪いが当初は全周していたものとみられる。

床面でピットを11基検出した。このうちP1～P4が主柱穴とみられ、４本柱の構造とみられる。柱間はP1-P2間から以下順に2.35m、2.2m、2.55m、2.6mである。

その他のピットは深いものでも30cmほどと比較的浅いことから、柱穴とは考え難く、用途不明である。壁また床面には３箇所にわたり焼土面が認められた。

埋土は遺存良好な箇所で厚さ22cm



第503図　笠見第３遺跡SI5出土遺物実測図

あり、４層に分層可能である。建物東側の壁際から徐々に埋没していく状況がうかがえ、自然堆積によるものとみられる。

出土遺物は、床面に近い埋土中から土師器甕Po1527が出土した他、床面から浮いた状態で須恵器高杯Po1528、回転糸切り底の杯Po1529、弥生土器大型甕Po1530が出土した。

当遺跡では唯一の奈良時代ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

第３節　土坑・土壙

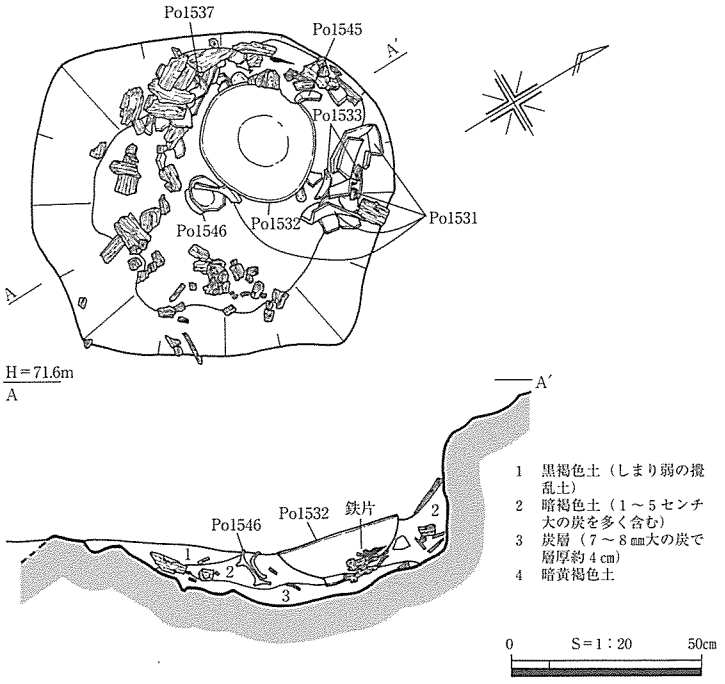
SK2（第504・505図、PL. 94・95・173）

調査区南東際のＣ区P9グリッドで検出した火葬墓である。標高約71.5mの東南方向斜面に立地する。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸94cm、短軸80cm、深さは最深部で50cmを測る。掘方短軸は座標北に対し60度西に振る。

埋葬の当初は、埋土の上面が大ぶりの炭で被覆されていたとみられるが、その炭の直上は、厚い表土で覆われていた。このため調査当初は表土を除去する最中、出土した炭は耕作土中のものと考え、除去してしまった。その後、後述する大型杯の口縁部の一部が出土し、さらに骨片が認められるに及び、火葬墓と判明した。そこで急遽精査に切り替えたため、炭による火葬墓上面の明確な被覆状況は不明である。

埋土は大別３層に分かれ、上層は前述の10cm大の炭の層、中層が拳大の炭混じりの暗褐色土、下層が７～８mm大の炭層である。下層の上面は平坦で、その上に大型の土師器杯が納められていた。杯の中には火葬骨とみられる骨片が多量に入っていたことから骨蔵器であると判明した。骨蔵器を囲む埋土は中層にあたるが、杯の周囲は特に炭が多くしまりがない土であった。またこの層から鉄釘が出土した。釘は木質が付着し、火を受けた形跡は認められない。また釘の出土位置や方向に規則性はなく、ばらばらである。おそらくは骨蔵器は木櫃状の容器に納められ、木櫃の腐朽にともない釘が２次

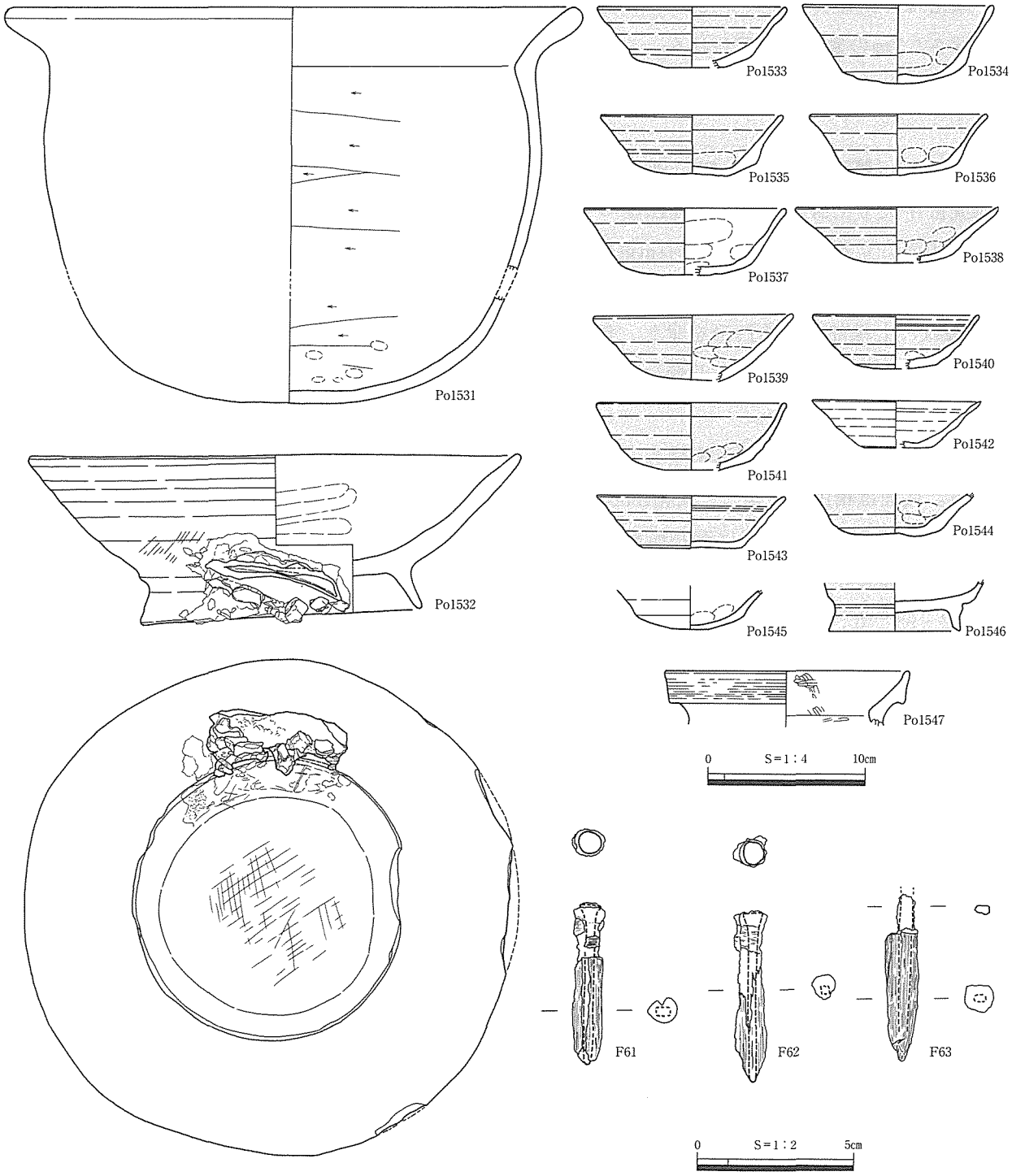


第504図　笠見第３遺跡SK2遺構図

的に移動したものと考えられる。またこの中層からは土師器の甕や杯、皿などがすべて破片となって出土した。いずれも被熱の痕跡は認められない。また杯高台の外側には鉄器破片が錆びついていた。

以上のことを踏まえ埋納の過程を復元すると、台地の東南斜面に長方形の掘方を掘削し、底に７～８㎜大の細かな炭を敷く。埋土下層の炭層に該当するが、北西側に薄く、東南側に厚い。最大で厚さ５㎝である。これは掘方の底の高低差を解消し、上面を平坦にするためのものと考えられる。

次にこの上に大型の杯が納められる。釘が出土したことから、おそらくは木櫃状の容器に入れられ埋納されたと考えられる。釘は火葬した時の木棺の釘である可能性もないわけではないが、釘に木質



第505図　笠見第３遺跡SK2出土遺物実測図

が付着し、被熱の痕跡が無いことから、前説を支持したい。

鉄器は、杯の高台に密着して出土したことから、杯とともに木櫃に納められたものと推定される。その後木櫃と掘方の間にコブシ大の炭を充填するが、この際破砕した土師器をともに埋納する。

次にこの上面を大きめの炭を用いて被覆したものとみられるが、詳しい被覆の状況は不明である。またさらにこの上の盛土の有無についても不明であるが、周辺には区画溝などは認められなかった。

出土した土器はすべて土師器で、骨蔵器に使用された大型杯Po1532の他、杯Po1533～1545、高台杯Po1546、甕Po1531、弥生土器甕Po1547、鉄釘F61～63などである。このうち骨蔵器に使用された杯は口径約32.5㎝、器高9.8㎝、底径18.3㎝と大型で類例を見出し難い。杯類は、底部押圧技法が見られる。鉄器は骨蔵器に錆びついているため、表面の詳しい観察は困難であるが、長さ約8.5㎝、幅約２㎝、厚さ2.5㎜の鋤先かと思われる。

出土遺物から、伯耆国庁２期、平安時代半ばごろ（10世紀ごろ）のものと考えられる。（小山）

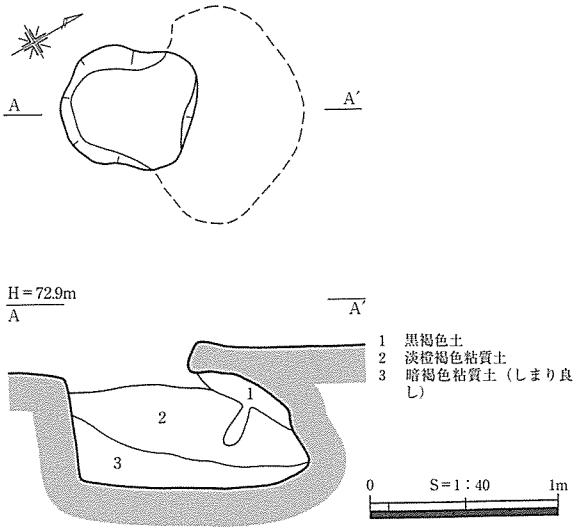
SK92・93（第506・507図、PL. 95）

調査区中央やや西寄り、SK92はI15グリッド、SK93はJ15グリッドにあり、標高72.5～72.8m前後のほぼ平坦面に立地する。SK92の約1m東側にSK93がある。周辺は、耕作等の攪乱及びSD5によって掘り込まれている。

SK92は、上縁部不整楕円形を呈し、長軸65㎝、短軸59㎝、深さ50㎝を測る。底面は長楕円形で、長軸114㎝、短軸75㎝を測り、北側に大きくくびれる。埋土は、埋め戻したような橙褐色土系の土層である。出土遺物はない。

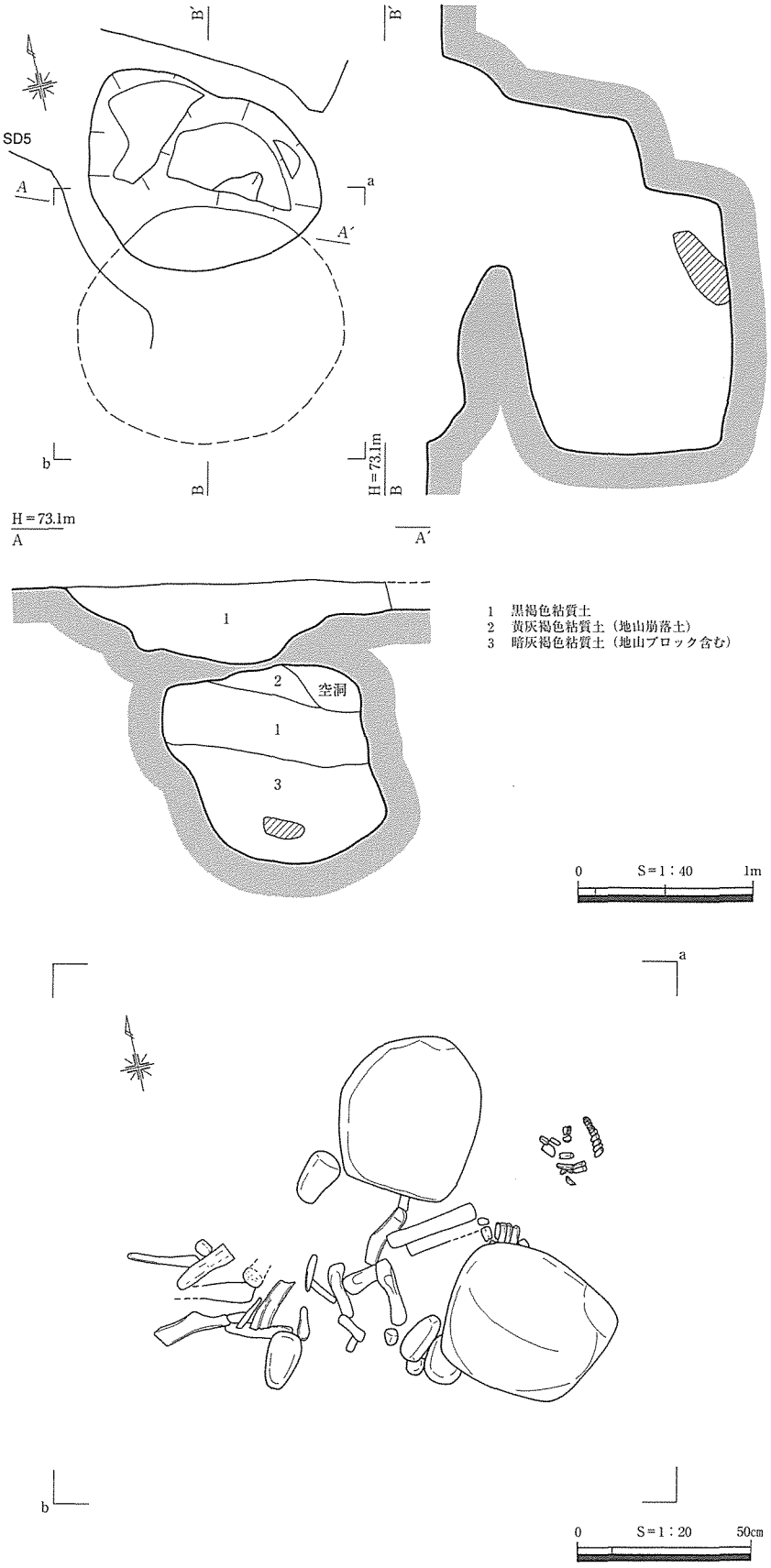
SK93は、上縁部不整楕円形を呈し、長軸140㎝、短軸112㎝を測る。入口は段状に深さ160㎝掘り込まれる。底面は楕円形を呈し、長軸155㎝、短軸135㎝を測り、南側に大きくくびれる。埋土は上層から中層は黒褐色土系、下層は天井崩落土が堆積していた。底面には、表面を加工した大型石材の下に、上・下顎骨の形状から仔牛と判断された非常に遺存状態の悪い骨が検出された。

SK92・93とも、形態的には地下式横穴といえるが、SK92は使用された痕跡がなく、未完成のものと考えられる。SK93も、再利用で動物が埋葬されていた可能性はあるが、丁重な埋葬行為が窺われ

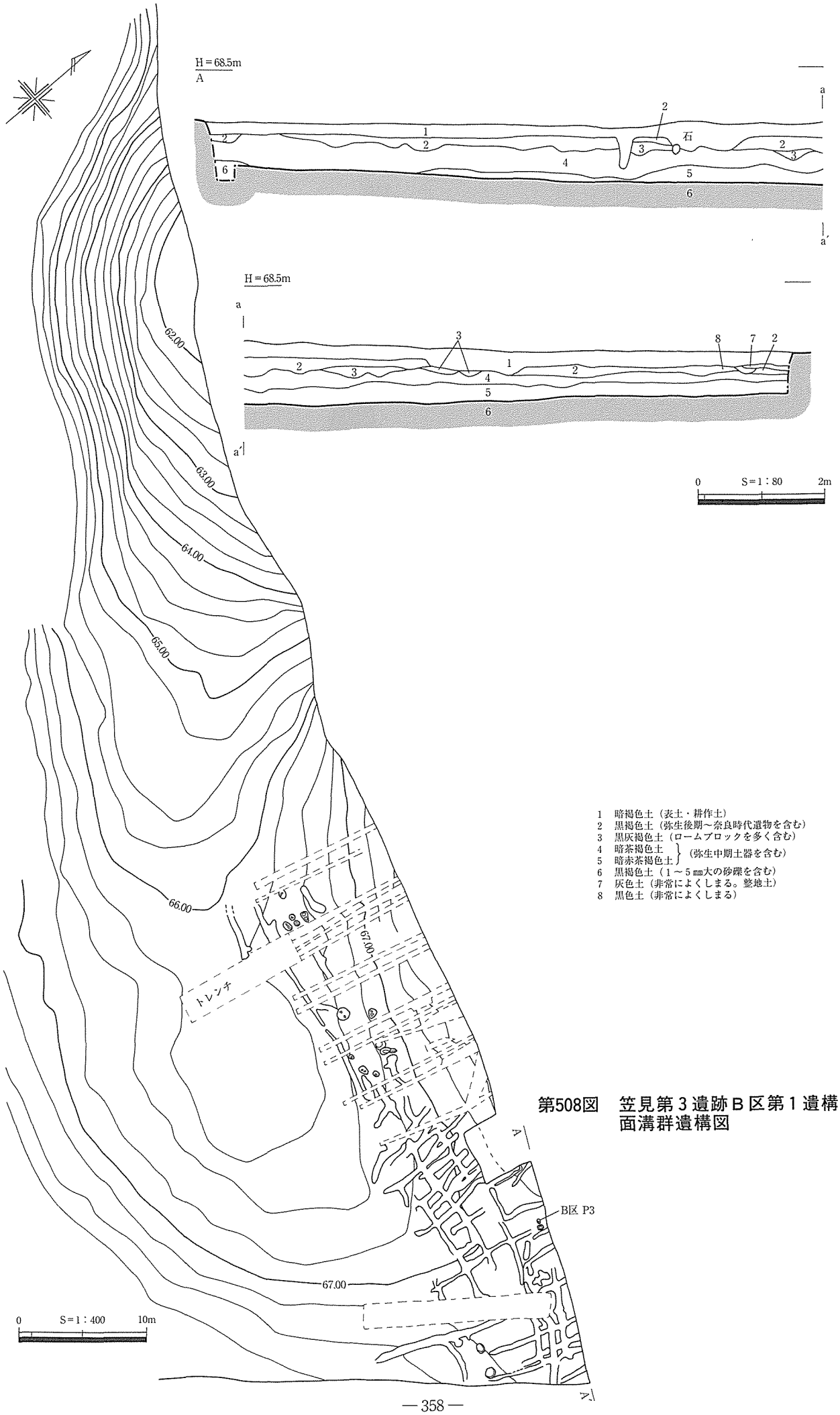


第506図　笠見第３遺跡SK92遺構図

る。出土遺物はなく時期は不明であるが、骨の^{14}C年代測定の結果、350±40B.P、16～17世紀ごろのものと判定された。（牧本）



第507図　笠見第３遺跡SK93遺構図・牛骨出土状況図



第508図　笠見第3遺跡B区第1遺構
面溝群遺構図

第４節　溝状遺構

Ｂ区第１遺構面溝群（第508図、PL. 95）

調査区北側のＢ区北東側にあり、表土及び耕作土の除去後に検出した。検出面は、弥生時代中期～後期の遺物包含層（第４層）上面である。標高66.0～67.4mの、南側に傾斜する斜面部に立地する。

遺存状態は悪く、特に西側は部分的な検出のみにとどまった。溝は、東西46m以上、南北17m以上の範囲にあり、幅25～45cm、深さ10cm前後を測り、東西南北方向に縦横に走っている。

溝埋土は、暗灰褐色土が入り込んでいる。

出土遺物はないが、後述するＢ区P3と同一検出面上にあることから、平安時代以降と考えられる。何かを区画するようには見えず、性格は不明であるが、耕作に伴う溝の可能性がある。（牧本）

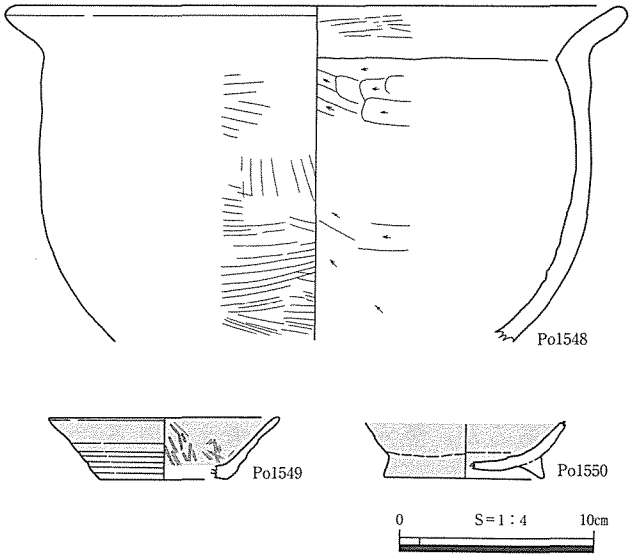
第５節　ピット内遺物について

Ｂ区P3（第509図）

調査区北側に当たるＢ区の北東側にあり、溝群と同じく表土及び耕作土を除去した後に検出した。検出面は、弥生時代中期～後期の遺物包含層（第４層）上面である。

P3は、標高67.2m付近にあり、（50×45－44）cmを測る。埋土中で土師器甕Po1548、回転台土師器杯Po1549、高台杯Po1550が出土している。Po1548は、大きく外傾する口縁部をもち、体部は球形を呈す。器壁が厚く外面粗いハケ目調整が施される。Po1549・1550とも内外面赤色塗彩が施される。

出土遺物の形態的特徴から、伯耆国庁第２様式SD35形式、平安時代ごろ（９世紀）のものと考えられる。（牧本）



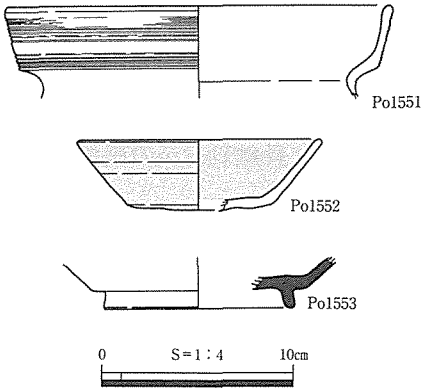
第509図　笠見第３遺跡Ｂ区P3内出土遺物実測図

P13（第510図）

調査区中央やや南東側にあり、L11グリッドの標高72.7m付近のほぼ平坦面に立地する。

規模は（40×28－30）cmを測る。埋土中から弥生土器Po1551、回転台土師器Po1552、須恵器高台杯Po1553が出土している。Po1552は、内外面赤色塗彩が施され、底部押圧される。

出土遺物の形態的特徴から、伯耆国庁第２様式SK05形式、平安時代ごろ（９世紀後半から10世紀）のものと考えられる。（牧本）



第510図　笠見第３遺跡P13内出土遺物実測図